金 武 4

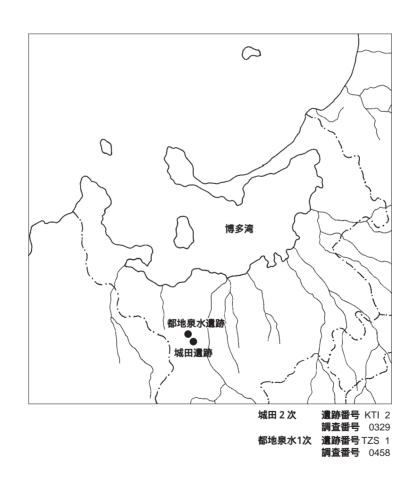
一金武地区農村振興総合整備統合補助事業関係調査報告4一 城田遺跡第2次調査3·都地泉水遺跡第1次調査

2 0 0 7

福岡市教育委員会

金 武 4

金武地区農村振興総合整備統合補助事業関係調査報告 4 城田遺跡第 2 次調査 3・都地泉水遺跡第 1 次調査



2 0 0 7

福岡市教育委員会







都地泉水遺跡 木棺墓73 遺物出土状況



都地泉水遺跡 木棺墓73

巻頭図版 4



都地泉水遺跡 H区製鉄遺構群



序

早良平野の霊峰飯盛山は、古代の人々も朝な夕なに仰ぎ見ていたことでしょう。その麓には国史跡 吉武高木遺跡、野方遺跡をはじめとした遺跡が残されており、我々の祖先の足跡をうかがい見ること ができます。これらの文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは私たちの重要な責務です。

本書は飯盛山の南麓に広がる遺跡のうち、農村振興総合整備統合事業に伴って調査を行った城田遺跡第2次調査、都地泉水遺跡第1次調査についての報告です。今回調査では奈良時代の製鉄遺跡と集落、中世集落と墓など貴重な資料が数多く検出されました。これら資料が地域の歴史を理解する上で重要な手がかりとなることは間違いありません。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くのご協力を賜りました金武地区土地 改良区をはじめとする関係者の皆様に対し、心よりお礼申し上げます。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会 教育長 植木 とみ子

- 例 言 -

- 1. 本書は福岡市教育委員会が金武地区農村振興総合整備統合補助事業における圃場整備事業、区画整理事業に伴い福岡市西区大字吉武、金武地内において実施した城田遺跡第2次調査、都地泉水遺跡第1次調査の報告書である。
- 2. 本書で使用した遺構実測図は調査担当者のほか 名取さつき、矢野幸子、宮元香織、山田ヤス子、宮原邦江、瀬戸啓治、(株)写測エンジニアリングが作成した。製図は調査担当者のほか牛尾功 仁子が行った
- 3. 本書で使用した遺物実測図は調査担当者のほか西拓巳が作成した。製図は担当者のほか本田浩二郎、成清直子が行った。
- 4. 本著で掲載した写真は各担当者が撮影した。
- 5. 本書で使用した方位は真北である。
- 6. 本書に関わる記録、遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。
- 7. 金属器の取り上げ、処理、分析等については埋蔵文化財センターの協力を仰ぎ、同職員比佐陽 一郎氏には多くの重要な教示をいただいた。
- 8. 本書の執筆は各担当者が行い、その分担は目次に示した。また編集は各担当者協議の上、宮井善朗(埋蔵文化財第2課)が総括した。

本文目次

第1章	はじめに(宮井)	1
第2章	城田遺跡 2 次調査 3	5
5 🛭	区の調査(吉留)	
	1 . 位置と環境	7
	2.調査の経過	7
	3.層序	8
	4.遺構面と発掘調査	10
	5.遺構	12
	6.遺物	46
	7.小結	86
18∑	区の調査(阿部)	
	1.調査概要	97
	2.遺構と遺物	97
第3章	都地泉水遺跡1次調査(宮井)	103
	1.調査の概要	105
	2.調査の記録	
	(1)A区の調査	107
	(2)B区の調査	118
	(3)C区の調査	137
	(4)D区の調査	151
	(5)E区の調査	158
	(6)F区の調査	169
	(7)G区の調査	175
	(8)H区の調査	181
	(9)その他の出土遺物 (宮井、吉留、田上)	198

挿 図 目 次

Fig. 1	調査区周辺の遺跡(1/25,000)	4
(城田遺跡	第2次調査5)	
Fig. 2	5 区調査前地形図 (1/1,000)	8
Fig. 3	5 区土層断面図 (1/80)	9
Fig. 4	第 1 面遺構全体図(1/200)	11
Fig. 5	第 2 面遺構全体図(1/250)	13
Fig. 6	第 3 面遺構全体図(1/250)	15
Fig. 7	第 4 面遺構全体図(1/250)	17
Fig. 8	遺構配置合成図(1/500)	19
Fig. 9	溝土層断面図(1/40)	21
Fig.10	土器埋納遺構 1(1/10)	22
Fig.11	土器埋納遺構 2(1/20)	23
Fig.12	土坑 1 (1/40)	24
Fig.13	土坑 2 (1/40)	25
Fig.14	土坑 3 (1/40)	26
Fig.15	製鉄関連遺構(1/40)	27
Fig,16	廃棄土壙(1/20・1/40)	29
Fig.17	竪穴式住居 (1/40)	31
Fig.18	基壇状施設1(1/80)	33
Fig.19	基壇状施設 2 (1/80)	34
Fig.20	礎石SX03 (1/20)	35
Fig,21	掘立柱建物1(1/80)	37
Fig,22	掘立柱建物 2 (1/80)	38
Fig,23	掘立柱建物 3(1/80)	
Fig,24	掘立柱建物 4(1/80)	40
Fig,25	掘立柱建物 5(1/80)	41
Fig,26	掘立柱建物 6 (1/80)	42
Fig.27	出土遺物1- 土師器・須恵器1- (1/3)	
Fig.28	出土遺物 2 - 土師器・須恵器 2 - (1/3・1/6)	
Fig.29	出土遺物 3 - 土師器・須恵器 3 - (1/3)	45
Fig.30	出土遺物 4 - 土師器・須恵器 4 - (1/3)	46
Fig.31	出土遺物 5 - 土師器・須恵器 5 - (1/3)	47
Fig.32	出土遺物 6 - 土師器・須恵器 6 - (1/3)	
Fig.33	出土遺物7-土師器・須恵器7-(1/3)	
Fig.34	出土遺物 8 - 土師器・須恵器 8 - (1/3)	
Fig.35	出土遺物 9 - 土師器・須恵器 9 - (1/3)	
Fig.36	出土遺物10 - 土師器・須恵器10 - (1/3)	
Fig.37	出土遺物11 - 土師器・須恵器11 - (1/3)	
Fig.38	出土遺物12 - 土師器・須恵器12 - (1/3)	
Fig.39	出土遺物13 - 土師器・須恵器13 - (1/3)	
Fig.40	出土遺物14 - 土師器・須恵器14 - (1/3)	
Fig.41	出土遺物15 - 土師器・須恵器15 - (1/3)	
Fig.42	出土遺物16 - 土師器・須恵器16 - (1/3)	
Fig.43	出土遺物17 - 土師器・須恵器17 - (1/3)	
Fig.44	出土遺物18 - 土師器・須恵器18 - (1/3)	61

Fig.45	出土遺物19 - 土師器・須恵器19 - (1/3)	62
Fig.46	出土遺物20 - 土師器・須恵器20 - (1/3)	63
Fig.47	出土遺物21 - 土師器・須恵器21 - (1/3)	64
Fig.48	出土遺物22 - 土師器・須恵器22 - (1/3)	65
Fig.49	出土遺物23 - 土師器・須恵器23 - (1/3)	66
Fig.50	出土遺物24 - 土師器・須恵器24 - (1/3)	67
Fig.51	出土遺物25 - 土師器・須恵器25 - (1/3)	68
Fig.52	出土遺物26 - 土師器・須恵器26 - (1/3)	69
Fig.53	出土遺物27 - 土師器・須恵器27 - (1/3)	70
Fig.54	出土遺物28 - 青磁1 - (1/3)	71
Fig.55	出土遺物29 - 青磁2・緑釉陶器 - (1/3)	72
Fig.56	出土遺物30 - 白磁 - (1/3)	73
Fig.57	出土遺物31 - 硯 - (1/3)	74
Fig.58	出土遺物32 - 鉄器 1 - (1/2)	75
Fig.59	出土遺物33-鉄器2-(1/2)	76
Fig.60	出土遺物34-鉄器3-(1/2)	77
Fig.61	出土遺物35 - 石器 1 - (2/3)	79
Fig.62	出土遺物36 - 石器 2 - (1/2)	80
Fig.63	出土遺物37 - 石器 3 - (1/2・1/3)	81
Fig.64	出土遺物38 - 石器4・石製品 - (1/2)	82
Fig.65	出土遺物39 - 土製品 1 - (1/2)	83
Fig.66	出土遺物40 - 土製品 2 - (1/2)	84
Fig.67	出土遺物41 - その他 - (1/3)	85
Fig.68	5 区の古代官衙遺構変遷 (1/800)	86
Fig.69	城田遺跡周辺の古代官衙遺構群(1/12,000)	87
Fig.70	5 区古代「神社」遺構復元図 (1/500)	88
Fig.71	18区全体図(1/400)	97
Fig.72	SC28・30実測図 (1/60)	98
Fig.73	竪穴住居・溝出土遺物実測図(1/3)	98
Fig.74	SD34実測図 (1/80・1/40)	99
Fig.75	その他の遺物実測図(1/3)	. 100
Fig.76	3 区SO001出土鉄製品実測図 (1/3)	.100
(都地泉水	遺跡1次調査)	
Fig.77	調査区位置図(1/4000)	. 106
Fig.78	A 2 区遺構配置図(1/400)	. 108
Fig.79	A 1 区遺構配置図(1/400)	. 110
Fig.80	住居跡91実測図(1/60)	. 111
Fig.81	住居跡91出土遺物実測図(1/3)	. 112
Fig.82	石積遺構80(1/30) 出土遺物(1/3)実測図	. 113
Fig.83	土壙墓81、82実測図(1/30)、出土遺物(1/2、1/3)実測図	. 115
Fig.84	土壙104~107実測図(1/60)	. 116
Fig.85	土壙104~106出土遺物実測図(1/3)	. 117
Fig.86	B1区遺構配置図(1/400)	. 119
Fig.87	土壙67出土遺物実測図(1/3)	. 120
Fig.88	B1区土層図(1/40)出土遺物実測図(1/3)	. 121
Fig.89	B 2 区 1 面遺構配置図(1/400)	
Fig.90	遺構83と周辺遺構配置図(1/80) 土壙89出土遺物実測図(1/3)	. 124
Fig.91	遺構83土層(1/80) 遺物出土状況(1/20)実測図	. 125
=		

Fig.92	遺構83出土遺物 (1/3) 実測図	126
Fig.93	土壙69、70、72 (1/40)、出土遺物 (1/3) 実測図	127
Fig.94	B2区2面遺構配置図(1/400)	
Fig.95	土壙119、120 (1/30) 出土遺物 (1/2、1/3) 実測図	131
Fig.96	B3区遺構配置図 (1/400)	
Fig.97	掘立柱建物 2、3 実測図 (1/60)	136
Fig.98	C1区遺構配置図(1/400)	
Fig.99	掘立柱建物 4、5(1/100) 土壙38、43(1/40) 出土遺物(1/3)実測図	
Fig.100	C 2 区遺構配置図 (1/400)	
Fig.101	土壙52、53、54実測図(1/40)	
Fig.102	製鉄遺構44~48実測図(1/40)	
Fig.103	土壙59 (1/30) 出土遺物 (1/3) 実測図	
Fig.104	C 3 区遺構配置図 (1/400)	
Fig.105	C 4 区遺構配置図(1/400)	
Fig.106	溝60出土遺物実測図(1/3)	
Fig.107	住居跡61、62(1/60) 出土遺物(1/3)	
Fig.108	C 5 区掘立柱建物実測図 (1/60)	
Fig.109	C 5 区遺構配置図(1/400)	
•	D 区遺構配置図 (1/400)	
Fig.110		
Fig.111	土壙33、34実測図(1/40)	
Fig.112	土壙33出土遺物実測図(1/2、1/3)	
Fig.113	土壙34出土遺物実測図(1/3)	
Fig.114	掘立柱建物 6、7 実測図 (1/60)	
Fig.115	E1区遺構配置図 (1/400)	
Fig.116	E2区遺構配置図 (1/400)	
Fig.117	E3区遺構配置図(1/400)	
Fig.118	住居跡24(1/60) 出土遺物(1/3)実測図	
Fig.119	製鉄遺構14、溝15(1/80) 溝15土層(1/40) 溝15出土遺物(1/3)実測図	
Fig.120	製鉄遺構14 (1/40) 出土遺物 (1/3) 実測図	
Fig.121	掘立柱建物1実測図(1/60)	
Fig.122	焼土壙6、7、11、16、17実測図(1/40)	167
Fig.123	F 区遺構配置図 (1/400)	170
Fig.124	木棺墓73 (1/30) 出土遺物 (1/3) 実測図	172
Fig.125	土壙95~99(1/80) 出土遺物(1/3)実測図	173
Fig.126	土壙93(1/40) 出土遺物(1/3)実測図	174
Fig.127	G 区遺構配置図 (1/400)	176
Fig.128	G 区鍛冶関連遺構群 (1/80)	177
Fig.129	炉140、土壙142(1/30)、土壙141、143、145、147、焼土壙139(1/40)実測図	178
Fig.130	製鉄遺構169 (1/40) 実測図	179
Fig.131	土壙165(1/40) 出土遺物(1/3)実測図	180
Fig.132	G 区出土遺物実測図 (1/3)	
Fig.133	H 区遺構配置図 1 (1/400)	
Fig.134	H 区遺構配置図 2 (1/400)	
Fig.135	H 区遺構配置図 3 (1/400)	
Fig.136	製鉄遺構171実測図(1/60)	
Fig.137	H 区製鉄遺構群 (1/100)	
Fig.138	製鉄遺構178、179実測図(1/40)	
Fig.139	製鉄遺構181、182実測図(1/40)	
J		

Fig.140	0 製鉄遺構178~182出土遺物実測図(1/3)	190
Fig.14		
Fig.142		
Fig.143		
Fig.14	· · · · ·	
Fig.14	· · · · ·	
Fig.14		
Fig.147		
Fig.148		
Fig.149		
Fig.150		
Fig.15		
	図 版 目 次	
(都地原	泉水遺跡第1次調査)	
巻頭図	版 1 調査区遠景	
巻頭図	版 2 調査区全景	
巻頭図	版 3 1.木棺墓73遺物出土状況	
	2 . 土壙墓73	
巻頭図		
	2.土壙119出土湖州鏡	
-	遺跡第2次調査)	
PL 1	1.第1面遺構完掘状況(南から)	
	2. 溝SD01土層断面 (北から)	
PL 2	1. 溝SD02土層断面(東から)	
5	2. 溝SD16完掘状況(北から)	
PL 3	1.第2面遺構完掘状況(西から)	
DI 4	2. 礎石SX03検出状況(東から)	
PL 4	1. 基壇状施設検出状況(東から)	
DI -	2. 基壇状施設内SB30、SD32検出状況(南から)	
PL 5	1. 敷石遺構内土器埋納遺構群(南西から)	
	2 . SK10 (東から)	
	3 . SK11 (東から)	
	4 . SK12 (西から)	
	5 . SK13 (西から)	
	7 . SK51 (西から)	
PL 6	7 . SK31 (四から)	
PLO		
	2. SK45 (北から)	
	3 · SX32 · SP333 (四から)	
	4 · 3 ^ 44 (宋から)	
	5 . SK21 (れから)	
	7 . SR39 (西から)	
	8.竪穴式住居SC54(北から)	
	- · · · · · · · · · · · · · · · · ·	

PL 7	1.	. 第3・4面遺構完掘状況(西から)	. 95
	2 .	. 掘立柱建物SB66検出状況(西から)	. 95
PL 8	1.	. 5区拡張区(I・J-17~19グリッド)調査状況(南から)	. 96
	2 .	. 金武公民館に移築された礎石	. 96
PL 9	1.	. 18区全景(北から)	101
	2 .	. 18区調査状況(南から)	101
	3 .	竪穴住居SC28(東から)	101
PL 10	1.	. 竪穴住居SC28竈(西から)	102
	2 .	竪穴住居SC30(西から)	102
	3 .	満SD34(北東から)	102
(都地	泉水	K遺跡1次調査)	
PL 11	1.	調査区遠景	213
	2 .	. A区全景	213
PL 12	1.	. B 2 区 1 面全景	215
	2 .	. B 2 区 2 面、B 1 区全景	215
PL 13	1.	. C区全景	217
	2 .	D区全景	217
PL 14	1.	. E区全景	219
	2 .	. F区全景	219
PL 15	1.	. G区全景	221
	2 .	. H区全景	221
PL 16	1.	. A 1 区 土壙墓81,82(東から)	223
	2 .	. A 1 区 石積遺構80(西から)	223
PL 17	1.	.B2区1面遺構83遺物出土状況(西から)	225
	2 .	.B2区2面土壙119(東から)	225
PL 18	1.	. C 2 区土壙群	227
	2 .	. C3区製鉄遺構44(南から)	227
PL 19	1.	. C 5 区住居跡、掘立柱建物	229
	2 .	D区掘立柱建物	229
PL 20	1.	. D区土壙33(北から)	231
	2 .	D区土壙34(北から)	231
PL 21	1.	. E区製鉄遺構14(東から)	233
	2 .	. E区住居跡24(東から)	233
PL 22	1.	. G区鍛冶遺構群(北から)	235
	2 .	. G区炉140断面(北から)	235
PL 23	1.	H区掘立柱建物13,14	237
	2 .	H区製鉄炉179(北から)	237
PL 24	1.	. H区土壙173(南から)	239
	2 .	H区出土刻書須恵器	239

第1章 はじめに

1.調査に至る経緯

平成10(1998)年に福岡市農林水産局より本市教育委員会埋蔵文化財課に、西区金武地区における集落基盤整備事業に伴う埋蔵文化財の有無について事前調査の依頼があった。これを受けて埋文課は平成11年以降対象地の遺跡の確認を行った。その結果事業対象地では濃密に遺構・遺物が分布することが確認された。この結果を基に遺跡の保存について両者で協議を行った結果、工事によってやむを得ず破壊される個所については発掘調査を行い、記録保存を図ることとした。調査は平成13(2001)年度から開始され、平成17(2005)年度に圃場整備の範囲については調査を終了した。引き続き区画整理部分(田園居住区)の調査に入ったが、平成18(2006)年度に令達事業としてはいったん終了することとなっている。今回は平成15年度調査の城田遺跡2次調査の続篇と、平成16年~18年にかけて行った都地泉水遺跡についての報告である。当該年には都地泉水遺跡のほか都地遺跡第6次調査、乙石遺跡第3次調査を行っている(来年度報告予定)。都地泉水遺跡調査着手以来今日に至る経緯を、日誌を元に略述しておく。

平成16(2004)年9月末、乙石遺跡第2次調査が終了し、担当者が池田から宮井に交代した。本年度下半期より吉武地区の調査にかかる予定であったが、対象地は未試掘であり、稲刈りを待って10月中旬より試掘を開始した。対象地のほぼ中央部に、周知の埋蔵文化財包蔵地として小規模な都地泉水遺跡が登録されていたが、ほとんどの範囲は包蔵地外となっていた。試掘の結果広い範囲で遺構、遺物が確認されたため、都地泉水遺跡の範囲を拡大した。こうして遺跡の範囲を確認し、設計図から破壊される範囲を確定して調査区を決定した。11月下旬より表土剥ぎを開始し、12月から本格的に調査を開始した。16年度は全体の約5分の1を調査した(以下調査内容の概略については第3章に譲る)。

17年度は引き続き都地泉水遺跡1次調査を行った。面積は広大であるが遺構の密度は濃くなく、写真 測量に適した状況であったため、本年度は全体図の大半をこれによって作成した。そのため担当者 1 名の体制だったが、効率よく調査を行うことができた。なお、7月には区画整理部分の試掘が行われ、 都地遺跡、乙石遺跡の範囲がそれぞれ拡張されている。この試掘により、平成18年度の調査範囲を確 定した。

2.調査組織

(城田2次)

調查委託:福岡市農林水産局

調查主体:福岡市教育委員会埋蔵文化財課(現埋蔵文化財第2課)調查総括:山崎純男(前任)山口譲治(前任)力武卓治(現任)

同課調査第1係長 力武卓治(前任) 山崎龍雄(前任) 池崎譲二(現任)

調查庶務:文化財整備課(現文化財管理課)後藤泰子

調查担当:埋蔵文化財課第1係(現埋蔵文化財第2課調査第1係)吉留秀敏 池田祐司 藏冨士寛

阿部泰之

調査補助、発掘調査、整理補助担当者については既刊の金武 2 (福岡市埋蔵文化財報告書第866集 2005) および金武 3 (福岡市埋蔵文化財報告書第874集 2006)を参照されたい。

(都地泉水1次)

調查委託:福岡市農林水産局

調查主体:福岡市教育委員会埋蔵文化財課(現埋蔵文化財第2課)

調查総括:山口譲治(前任) 力武卓治(現任)

同課調查第1係長 山崎龍雄(前任) 池崎譲二(現任)

調查庶務:文化財整備課(現文化財管理課)後藤泰子

調查担当: 埋蔵文化財課第1係(現埋蔵文化財第2課調查第1係)

宮井善朗 田上勇一郎 木下博文

調査補助:瀬戸啓治

発掘作業: 伊藤ミドリ 中園登美子 土生ヨシ子 満田雅子 山西人美 平野義光 阿比留治 川

岡涼子 倉光政彦 牛尾與志輔 安山僚一 吉田一寛 細川雅代 富永遵義 横溝恵美子 中園輝夫 柳井順子 細川友喜 大塩皓 山田ヤス子 岩見敏子 和田裕見子 倉 光京子 井上紀世子 倉光アヤ子 鍋山千鶴子 小柳和子 平田政子 森山早苗 吉鹿 裕隆 細川虎男 中村宏 網田美代野 高橋茂子 一宮義幸 鹿島定次郎 西嶋ムラ子 西嶋洋子 井上忠久 宮原邦江 西嶋マツ子 脇坂ミサヲ 平田千鶴子 児島勇次 吉

田勝善 平山栄一郎 高瀬孝二郎 西拓巳

整理作業:和田富美子 倉光恵美子 牛尾功仁子 尾崎京子 迫田裕子 川嶋千鶴

本書で報告する調査の細目は以下の通りである。

遺	遺 跡		名	城田遺跡第	₹2次調査 					
調	查	番	号	0329	遺	跡	略	号	KTI2	
調	查	面	積	16,927 m²	調	查	期	間	2003.5.1 ~ 2004.1.30	
	調査区地番						岡市	西[区大字金武字城田地内	
	分布地図番号							武		

遺	跡		名	都地泉水遺	跡	1 次	調같	ì	
調	查	番	号	0 4 5 8	遺	跡	略	号	TZS 1
調	查	面	積	43,000 m²	調	查	期	間	2004.11.25 ~ 2006.7.31
調査区地番							岡市	西[
				分布地図番号		93	者	ß地	

3.調査区周辺の歴史的環境

城田遺跡、都地泉水遺跡が位置する金武地区は早良平野の西部に位置する。早良平野の中央には室見川が南から北へ貫流し、室見川に流れ込む大小の支流が開析した段丘上に多くの遺跡が営まれている。早良平野の西側は長垂、叶岳、飯盛山から背振山系にいたる山塊で糸島平野と画される。東側は油山から北に延びる丘陵により福岡平野と画される。早良平野と糸島平野は高崎、広石の峠を越えるルートがメインルートで、古代官道もこのルートに設定されているが、金武から日向峠を越えるルートも重要な交通路であったと思われ、弥生時代ではむしろこちらが主であったとも考えられる。

飯盛山麓では旧石器時代から遺物が確認され、羽根戸原遺跡、吉武遺跡群などでナイフ形石器、細石器が確認されている。また事業地内でも浦江遺跡、乙石遺跡、都地泉水遺跡などで旧石器の出土が確認されている。縄文時代で対岸の四箇遺跡、重留遺跡、田村遺跡など規模の大きな集落が見られるが、飯盛山麓でも吉武遺跡群で貯蔵穴群が検出されている。事業地でも浦江遺跡、城田遺跡で貯蔵穴などの遺構、遺物が見られる。また各遺跡で広く見られる落とし穴状遺構も該期のものとされている。弥生時代になると遺跡は急増する。吉武遺跡群では多量の甕棺墓群が形成され、高木遺跡の首長層の墓、大石遺跡の副葬墓等階層性を持って墓地が展開する。これを核に周囲にも野方久保遺跡、東入部遺跡など各小地域のまとまりが明らかになってくる。事業地内でも浦江遺跡より区画墓が検出されている。この他にも浦江遺跡では竪穴住居など集落関連の遺構も検出されており、拠点集落の一つと考えることができる。

古墳時代前期には鏡などを副葬する墳丘墓が小地域単位に分布する。海岸部では藤崎遺跡(方形周溝墓)、五島山古墳、重留箱式石棺墓、有田遺跡等である。飯盛山麓では羽根戸南古墳群で前方後円墳が造営されるが、きわめて小規模である。早良平野を広範囲に統括する首長は拝塚古墳の被葬者の出現まで待たねばならないようである。集落遺跡も前代にまして広範囲に分布する。前半期の主要な集落遺跡としては西新町遺跡、野方遺跡、有田遺跡など、中下流域に顕著である。後半期には中、上流域にも集落が広がる。事業地内でも城田遺跡、都地泉水遺跡で古墳時代後期の集落が検出されている。後期群集墳は山麓部を中心に密に分布する。飯盛山麓では北側に羽根戸古墳群、南側に金武古墳群という大規模な古墳群が営まれる。ただし東斜面には古墳は少なく、神奈備としての飯盛山の位置に関係があるのかもしれない。またやや低地の段丘部にも浦江古墳群や吉武古墳群が形成されている。この地域では、玄界灘沿岸では数少ない装飾古墳も2基見つかっている。都地泉水遺跡に隣接する吉武熊山古墳と、浦江古墳群に属する浦江1号墳である。いずれも蕨手状の渦文を主文様としている。また乙石遺跡に隣接する夫婦塚古墳は2基のみ単独で築造された方墳で、その規模や副葬品から見て、この小地域の首長層の墳墓と考えられる。

飯盛山麓の古墳時代後期の群集墳には鉄滓が供献される例が見られるが、古墳時代の製鉄についてはいまだ不明の点が多い。しかし、古代になると各遺跡で製鉄遺構が検出されている。乙石遺跡、都地遺跡、都地泉水遺跡、城田遺跡等で製鉄炉や鍛冶炉が検出されている。該期の製鉄工房として著名な元岡遺跡と比べると遺構の分布が散漫であるが、それでもこれだけ集中する遺跡は福岡、早良平野では他に見られない。元岡遺跡は大宰府管轄の官営工房の可能性が指摘されているが、金武でも都地遺跡の官衙的配置の建物、城田遺跡の大形建物群や新羅土器、硯、銅鋺等の特殊な遺物、都地泉水遺跡の刻書須恵器、都地遺跡の「大殿」と記された墨書土器など、何らかの公的施設があった可能性を示唆している。



Fig.1 調査区周辺の遺跡(1/25,000)

第 2 章 城田遺跡 第 2 次調査3

1,5区の調査

(1)位置と環境

城田遺跡は室見川中流域西岸の西山から飯盛山の山麓から発達する小規模な扇状地~段丘上にある。この城田扇状地は塔ノ尾川を挟んで北側に拡がる乙石扇状地より約10m低く、その基盤礫層の形成は更新世後半以降のより新しい時期に下るものである。この城田扇状地は室見川の支流である竜谷川と塔ノ尾川に挟まれた狭長な丘陵地となっている。扇状地の側縁は両川により浸食され、切り立った崖状を呈している。遺跡付近での扇状地の幅は100m前後であり、南西側が高く、北東側に下がる地形となっている。現在、丘陵上は灌漑されほぼ全域が棚田状の水田に開発されている。

5区は圃場整備事業地内の中央東側にあたり、丘陵幅が約80mと最も狭くなる部分である。調査前の標高は約41~38mを測る。調査以前は隣接する4・6区から一段低い比較的平坦な土地であり、この地区のみ水田内に正方位に近い地割りが残されていた。この面が扇状地側縁に形成された低位段丘面であるのか、あるいは人為的な造成によるものかは、調査開始段階には不明であった。調査後に6世紀後半段階に6区との間の斜面の腐植土壌中に遺物包含層や廃棄遺構SK07・08が形成されていることから、基本的に完新世段階の自然地形であることが判明した。しかし、斜面の一部や平坦面東側に基盤礫層が露出している部分があり、部分的に平坦面を拡大するように人為的造成も加えられていたと推定された。なお5区の南東側の崖部は竜谷川に沿って複数の円弧状の侵食崖が深く食い込んでいる。その崖下部の試掘では水田床土以下に近世陶磁器片を含む厚い洪水砂礫層が認められた。竜谷川の洪水による氾濫などによる丘陵の浸食は近世にも発生し、遺跡を含む丘陵部の側縁は相当浸食され、流失したことが想定される。

(2)調査の経過

5区の調査は5月10日から重機による耕作土など遺構上部被覆土の除去作業を開始し、5月12日から作業員を投入し、遺構検出と調査を始めた。なお、調査担当は当初松浦一之介が担当し、職員異動により5月末から吉留秀敏が引き継いだ。

5 区では調査後すぐに礎石を検出し、古代の白磁、越州窯系青磁、緑釉陶器など一般集落とは異なる様相の遺物群が多く出土した。また遺構面が複数に及び、遺構・遺物量も多く、期間的に厳しい調査となることが予測された。5 月27日に中世の溝を中心とした第1面調査が終了し、すぐに第2面調査を開始する。この時点で基壇状の土地造成が判明し、大型掘立柱建物群が確認できた。6 月17日に徳島文理大学大久保徹也助教授・奈良女子大大学院宮元香織氏の見学があった。7 月28日から一部第3面の調査を開始する。9月3日に福岡県教育委員会重藤輝行・辻田淳一郎氏の見学がある。9 月18日に福岡大学小田富士雄教授に大型建物群、基壇状施設についての視察を依頼した。9 月29日から基壇状施設内下部の調査を開始した。10月9日から基壇状施設内下部の調査を開始した。10月9日から基壇状施設内下部の調査を開始した。10月10日に宮崎大学柳沢一男教授、10月16日に九州大学溝口孝司助教授の見学があった。10月22日に「礎石」の移築保存について地元の協力を受け、金武公民館敷地内に移設保存することになった。10月23日に徳島文理大学石野博信教授、千葉市文化財協会穴澤義功氏の見学があった。10月25日に5 区発掘調査が終了する。12月14日に東京国立博物館白井克也氏が5 区出土新羅土器の見学を行った。

なお、1月5日に当初の工事計画に対し設計変更が生じ、新たに影響のでる3地点の保存地区についての緊急調査が必要となった。5区については基壇状施設の東側部分の約260㎡について追加調査が必要であることが判明した。1月6~7日に設計変更分(5区拡張区)調査についての内部調整と現地協議を

行い、掘削による削平部分のみを調査することで妥結した。1月8日に設計変更分の調査を開始し、1 月15日に終了した。なお、その間の1月9日に橿原考古学研究所青柳泰介氏の見学があった。

(3)**層序**(Fig.3)

城田地域の基本的堆積状況は、扇状地形成期の礫層を基盤とし、その上部に更新世末以降に形成さ れた厚さ1m以下のレス、シルト風化土壌と腐植土壌が被覆するものである。しかしこの状況が確認で きるのは今回の圃場整備事業範囲外の水田に隣接する竹林部であり、範囲内にある水田域は地表部に 水田土壌が形成されている。5区は西側が高く、東側に下がる地形であり、4段の水田面に造成されて いた。西側の二面目の水田部では水田土壌下に比較的厚い堆積層と遺構面が検出されたが、東側の低 い水田面は耕作土直下ですぐに基盤礫層が現れ、水田造成に伴い上部堆積土が大きく削平されている。 ここで観察作成した土層図は、基壇状施設の横軸(A-A'、B-B'断面図)と縦軸(C-C'断面 図)と、さらに基壇状施設西側の低地部(D-D'断面図)東側の溝SD36横断面(E-E'断面図)で ある。

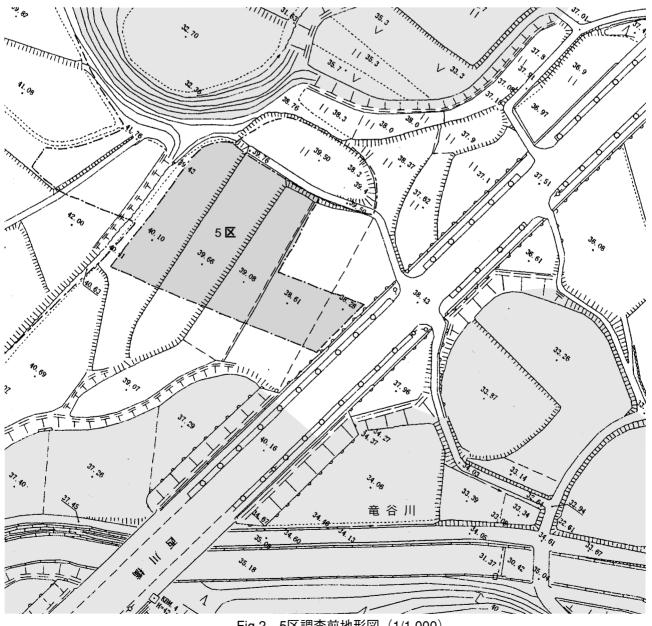


Fig.2 5区調査前地形図(1/1,000)

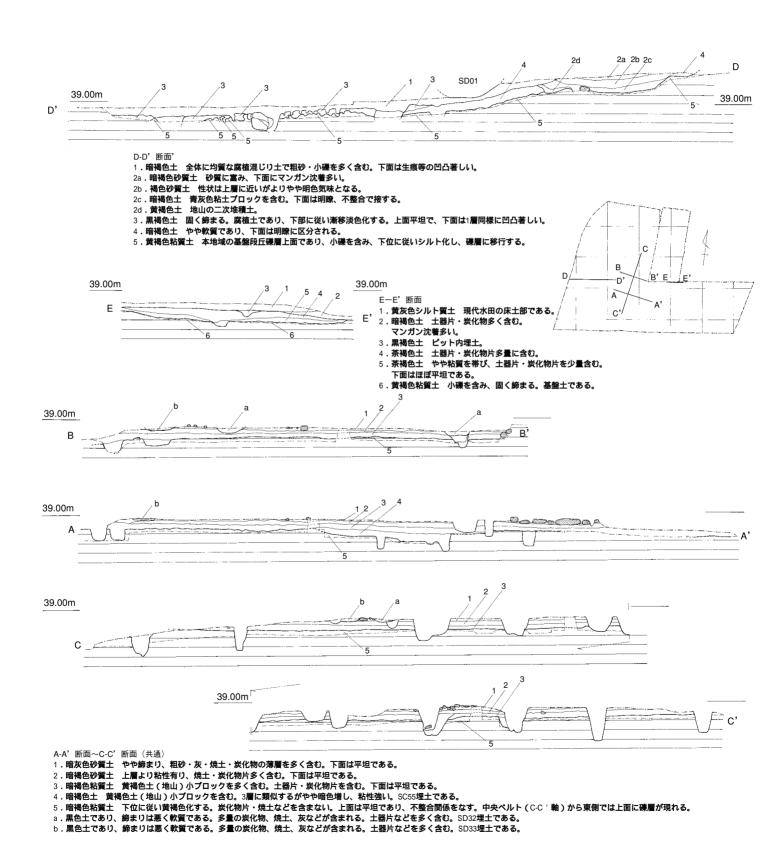


Fig.3 5区土層断面図(1/80)

基壇状施設の堆積状況は地山(5層)を造成・削平した後、1~3層の炭化物混じり土が堅く堆積している。その周辺にあたる西~北側では一端地山(5層)上面まで削平されるが、後は自然堆積に任せている。下位層は茶褐色土(4層)上層は黒褐色土(3層)のいずれも腐植土壌であり、基壇状施設に対して軟質である。

(4)遺構面と発掘調査

5区の調査前は南北に細長い水田が東に向かって四段に下がる棚田状になっていた。各水田面ごとに造成面標高が異なり、表層堆積物の残存状況も異なっていた。最西側の水田面と最東側の水田面は造成が深く及び基盤礫層に達していて、遺構もほとんど失われていた。中間の二面の水田の下部は基盤礫層上の土壌が残されているが、東側の田面は相当の削平が行われている。このように、後世の水田造成により遺跡は大きく削られ、遺構の遺存状況は必ずしも良好といえない。しかし、西側二面目の水田下を中心に最大四面の遺構面を確認した。以下では遺構面ごとの検出状況と個別遺構について報告する。調査は城田遺跡2次調査全体で工事計画に合わせ共通の10m方形のグリット設定を行い、東西方向にA、B、C…、南北方向に01、02、03…と設定した。公共座標点の測量は各区毎に実施している。5区はG~M、15~19グリットの範囲に入る。調査面積は1,845㎡である。

1.第1面(Fig.4、PL.1-1)

主に水田面、床土直下で検出した溝などを主とした遺構群である。第2面以下のほとんどの遺構を切っており、遺構の被覆土が砂礫、シルトなど水成作用を受けたものが多く、下位遺構群に対し大きく土壌形成、堆積環境が変わった後の時期の形成と判断した。中心となる遺構は溝SD01であり、上流であるL15グリットからK19グリットまで北方向に延び、既報告の4区SD01に接続したあと東へ大きく迂回し、I19グリット付近に現れ、5区の東側調査区外に続いている。その流走方向から9区SD13、8区SD97や1次調査2区SD03に接続する可能性がある。SD02・05はSD01に接続し、L16グリット付近で分かれる水路である。一見するとSD01が3つに分岐したように見えるが、覆土の断面観察から同時期に存在したのではなく切り合い関係にあると見られる。埋没の順序はSD05 SD02 SD01の順である。3つの溝は全て幹線水路であり、それらから分岐するSD06・49などは支線水路と見られる。溝底は基盤礫層に達している部分が多く、分岐点に見られる井堰遺構は確認できなかった。しかし、I18グリットのSD02では溝の一部が大きく膨らみ、土坑状に深くなっていた。井堰下部に形成される水溜状の遺構と見られる。またSX28・29はSD01とSD05の分岐点南側に掘られた水溜状の遺構である。以上の遺構は形態や水利の状況から水田灌漑に関わる遺構群と見られる。しかし同時期の水田面は発見できなかった。当時の耕作面などは近世以降の新たな水田造成によって大きく削平され、失われたものと考えられる。第1面は出土遺物や周辺調査区の成果などから見て10世紀前半前後の遺構群と見られた。

2. **第**2**面**(Fig.5、PL3 - 1)

第2面遺構群の検出段階に確認された基壇状施設上面と、その周辺の包含層中位から下部(Fig.3 D-D'断面3~4層中位)で検出された遺構群を一括している。柱穴を中心とした遺構の切り合いが著しく、さらに複数期に区分されると思われる。検出面は黒~暗色土であり、遺構の探索は極めて困難であり、そのため個別遺構の切り合い関係をすべて把握できなかった。また包含層が失われているJ15・16グリットより東側で検出された遺構のなかには、より古い形成期の可能性がある遺構も含めた。遺構の主体は柱穴であり、確認できた掘立柱建物は10棟を数えたが、それでも第2面で検出した柱穴の2割にも満たず、さらに多くの建物が未確認である可能性が高い。



Fig.4 第 1 面遺構全体図(1/200)

第2面遺構群は検出レベルを違えておおきく古段階と新段階に区分される。まずJ・K16・17グリットを中心とした基壇状遺構の盛り土上に配置される総柱建物SB30とそれを二重に囲む溝SD32・33、隣接する建物SB27、南側前面の敷石内にある土器埋納遺構SK09~13・40・51、SP555、土器配置遺構SX52等は第2面最上部(新段階)の遺構群である。次ぎに包含層中~下部で検出したSB23・25~27・62・64・68・69は第2面下部の古段階遺構群である。建物構成は基壇状遺構を中心に北側に東西棟(SB68・69)、南側に東西棟(SB23)、そして東西に南北棟(SB25~27・64)を配置して「コ」字形配列を見せる。製鉄関連遺構として鍛冶炉SR17~19・38・39と焼土坑SR50がある。

包含層内遺物のほとんどはこの第2面検出時に出土したものである。第2面の形成時期は上部の新段階の遺構群が9世紀後半頃、下部の古段階が8世紀後半から9世紀前半にかけての時期とみられた。

3.第3面(Fig.6、PL.7-1)

基壇状遺構の西~北側でD-D'断面4層上面、基壇状遺構の下部で4層上面において検出した遺構群である。基壇状遺構の下部となるJ17グリットに3間6間の東西棟SB66があり、これを中心に北と東西の三方に南北棟SB24・61・65・67を配置している。第2面古段階に先行してこの段階にも「コ」字形配列を見せている。またK17グリットで鍛冶炉SR53を検出した。第3面の形成時期は7世紀後半から8世紀前半頃と見られた。

4 **. 第** 4 **面** (Fig.7)

基壇状遺構の西~北側でD-D"断面5層上面、基壇状遺構の下部では5層上面において検出した 遺構群である。両5層は基盤層であり、最終検出面となった。遺構はJ15グリットからI17グリットに 掘られた溝SD16を東限として、竪穴式住居SC54・55とそれを囲むように配置する土坑SK08・15・20~ 22・31・35・43・45・47・48・60、廃棄土坑SX07・44からなる。第4面の形成時期は6世紀末~7世紀 前半頃と見られた。

(5)遺構

1. 濭

SD01 (Fig.9, PL1 - 1 • 2)

第1面で検出した幅1.0~2,2m、最大深さ0.5mの溝である。L15グリットから発しK19グリットまで蛇行しながら延び、既報告の4区SD01に接続したあと東へ大きく迂回し、I19グリット付近に現れ、5区の東側調査区外に続いている。B-B'断面でみると、3つの切り合いがあり、中央3層が古く、1・2層は新しい埋積である。SD01は2層に対応する。こうした点から見ると、最も西側にあるSD01は最後に埋没した溝の可能性がある。埋土は下部に砂礫層、中~上部は砂礫、粗砂、砂の互層である。埋没は洪水などにより短期間に行われ、再掘削はなかったと見られる。溝内から出土した遺物は多いが、周辺包含層からの混入遺物が多く、埋没時期を示すものは少ない。溝内からは須恵器、土師器、白磁、青磁、緑釉陶器、鉄器など古墳時代から古代に及ぶ多くの遺物が出土した。その中で最新の遺物としては少量の黒色土器片がある。注目されるのは新羅系土器(Fig.27 - 26)であり、後で基壇状施設内3層中から出土した数点の破片と接合した。

SD02 (Fig.9, PL2 - 1)

第1面のL16グリットでSD01・05から分岐し、K17、J・I18グリットに抜ける溝であり、分岐点付近では幅1m前後であるが、支線水路SD06との分岐後幅約0.5mとなる。B-B'断面とC-C'、D-D'断面を見ると、B-B'断面の1層がSD02に対応し、本来SD01から直線的な水路があったことが分かる。溝の2カ所に分岐する支線水路があり、I18グリット付近では溝が膨らみ水溜状の遺構となる。



Fig.5 第 2 面遺構全体図(1/250)

SD05

第1面で検出した。L16グリット付近でSD01からほぼ直角に東に流路を変えて接続する溝である。幅1m前後、深さ0.2mほどである。J16グリットより東側では削平のため失われている。SD01(B-B'断面)の1層に対応し、一連の溝群のなかで切り合いから最も古く位置づけられる。溝群はL15グリット付近のSD01から当初はSD05、次にSD02、最後にSD01へと流路を変えて造られたと推定される。

SD06

第1面で検出した。K17グリットでSD02から分岐した支線水路である。ちょうど基壇状施設の上に設けられている。分岐して約4mで東方向に折れている。幅約0.3m、深さ10cm以下であり、長さ約7mで途切れ、失われている。

SD16 (Fig.7, PL2 - 2)

J15グリットからI17グリットに向かって直線的に延びる溝である。現代水田の床土直下での検出であるが、周辺の検出面は削平によって基盤礫層となっている。幅1.2~2.2m、深さ30cmを測る。遺構の覆土は暗~黒褐色砂質土であり、上部に須恵器、土師器などが多く出土した。6世紀後半代の遺物が主体であり、少量の8世紀代遺物を含んでいる。後者は混入遺物と考えている。

SD32

第2面で検出した。基壇状施設の上部で検出した溝状遺構である。基壇状施設の中央にある建物 SB30のすぐ外周に沿って長方形に掘られている。削平のためか北東端が僅かに途切れているが、他は 連続している。SB30との切り合いは、最終の掘方が溝内埋土を切っていたことが確かめられた。溝幅 は0.3~0.8m、深さは20cm以下であり、北側では5cm以下となっている。溝で囲まれた内法は南北7.0m、東西4.2mである。溝内は漆黒色土が充満しているが、黒色成分は多量の炭化物・灰などであり、焼土・粘土塊が含まれている。この溝内には須恵器、土師器が含まれ、南西隅部では鉄製U字鋤先 (Fig.59-19)が完形で出土した。遺物から9世紀前半代の埋没と見られた。

SD33

第2面で検出した。SD32と同様に基壇状施設の上部で検出した溝状遺構である。基壇状施設の中央にある建物SB30を巡り、SD32のさらに外側に掘られている。ただしSD32と異なり、完周せず、南側に開いている。この南側では東西の溝が並行してSD32から4mほど直線に延びている。また溝の北西隅部には外方に浅い溝が1.8mほど延びている。北東隅はSD32と同様に削平のためか途切れている。なお、この北東側はちょうど当初調査対象外であり、当時一段低い水田であったが、その後設計変更が生じ拡張区として調査した。しかし、この溝の延長は失われており、その構造は不明である。溝幅は平均で0.3~0.5m、深さは20cm以下であり、北側では5cm以下となっている。SD32とは北側で0.5m前後、東西に1.2~1.4m程度離れて設けられている。溝で囲まれた範囲は東西7.6mである。溝内はSD32と同様に漆黒色土が充満しているが、黒色成分は多量の炭化物・灰などであり、焼土・粘土塊が含まれている。この溝内には土師器等の遺物が多く含まれていた。

SD36

J16グリットからIJ17グリットに直線的に掘られた溝状遺構である。第2面掘り下げ後に検出した。幅4~3m、深さ0.2mの浅い溝状遺構である。土層断面はFig.3のE-E 断面で示している。4層上面が第2面遺構検出面であり、6層が地山面である。遺構内埋土には水成作用が認められず、用水目的ではないものと考えられる。覆土内からは須恵器、土師器等が出土した。埋没時期は8世紀前半と見られる。



SD46

第2面で検出した。K16グリットにおいてSD05、SX29に切られて検出した溝状遺構である。両端は途切れ、長さ約2mを確認した。保存の良い中央部で幅約0.3m、深さ約0.1mを測る。およそ南北方向に設けられ、SD33東側線の延長線に近い。覆土内はシルト質の暗色土であり、敷石の流入と見られる礫が多く出土した。

SD49

第1面で検出した。K18、L17・18グリットにあり、SD01に並行する小溝である。途切れているが幅約0.4m、深さ0.1mで長さ5.5mを確認した。覆土は砂質土であり、SD01埋土と共通する。

2. 埋納遺構 (Fig.10·11、PL.5·6)

SK09

第2面で検出した。L16グリットでSX28に切られ、その西側壁面で検出した。掘方は検出面で径50~55cm、深さ35cmであり、その中央に土師器甕を据え置き、内部に中位まで埋め土後、土師器坏を正置させている。甕口縁部付近に黄灰色粘土(本来は白色粘土と見られた)が付着していて、本来木蓋など有機質の被覆があったと考えられる。

SK10

第2面のK16グリットでSK28の西側壁に隣接して検出した。調査時には二重の掘方をもつ遺構と考えたが、その後の検出例や本遺跡の遺構密度からみて、柱穴との切り合い関係である可能性が高い。外側の掘方(柱穴?)は略円形で径約1.0m、深さ15cmである。その南側に偏って楕円形の掘方があり、平面で径65×50cm、深さ23cmを測る。掘方のほぼ中央に口縁を打ち欠いた須恵器壺を正置している。須恵器の周囲には小礫が多く含まれている。壺内の上部は空洞となっており、埋置後に土砂の流入を避ける有機質の被覆があったと考えられる。

SK11

第2面で検出した。K16グリットでSD05に切られており、その底面下から検出した。掘方は平面楕円形で径60×55cm、深さ20cmを測る。掘方のほぼ中央にさらに径15cm、深さ5cm程度の掘り込みを設け、口縁を打ち欠いた須恵器壺を正置している。須恵器の周囲には小礫が多く含まれている。壺内の上部は空洞となっており、埋置後に土砂の流入を避ける有機質の被覆があったと考えられる。

SK12

第2面のK16グリットの敷石群の間で検出した。掘方は平面楕円形で径60×50cm、深さ10cmを測る。掘方のほぼ中央にさらに径20cm、深さ5cm程度の掘り込みを設け、口縁を打ち欠いた須恵器壺を正置している。壺内の上部は空洞となっており、埋置後に土砂の流入を避ける有機質の被覆があったと考えられる。

SK13

第2面で検出した。K16グリットでSX29に切られており、その東壁面から検出した。掘方の遺存状況は悪いが、平面円形で径30cm、深さ20cmを測る。掘方の中央に口縁を打ち欠いた須恵器壺を正置している。壺内の上部は空洞となっており、埋置後に土砂の流入を避ける有機質の被覆があったと考えられる。

SK40

第2面で検出した。K16グリットでSD05に切られており、その底面下から検出した。掘方は平面ほぼ円形であり、径約50cm、深さ25cmを測る。掘方のやや南に偏り口縁を打ち欠いた須恵器壺を正置している。壺内の上部は空洞となっており、埋置後に土砂の流入を避ける有機質の被覆があったと考え

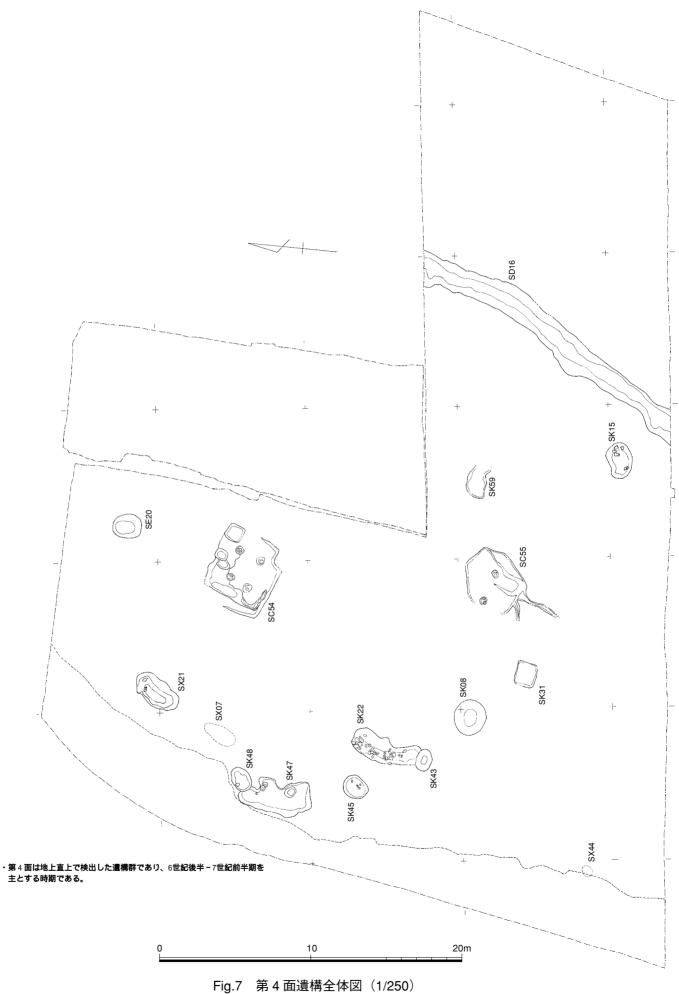


表 1.5区検出遺構一覧表

	• OEAR	出遺構一覧	是又	<u> </u>		1		l		V= 47	I		
遺構番号	遺構名	遺構型式	遺構面	時期	遺構図版	土器	鉄器	白磁	青磁	緑釉 陶器	その他	構(遺物出土柱穴など)	関連遺構(拡張区)
SD01	溝	用水路	1面	10C前葉	4 • 9	0	0	0	0	0	新羅土 器•硯		
SD02	溝	用水路	1面	10C前葉	4 • 9	0							
SX03	礎石堀方	SB30関連施設?	2面	9C前半	20	0	0	0	0	0			
SX04	溝		1面	9C中頃		0				0			
SD05	溝	用水路	1面	10C前葉	4 • 9	0	0	0	0				
SD06	溝	用水路	1面	10C前葉	4 • 9				0				
SX07	廃棄土器群		4面	7C前半	16	0							
SK08	土坑		2面	8C前葉	13	0							
SK09	土器埋納遺構		2面	9C前半	11	0							
SK10	土器埋納遺構		2面	9C後半	11	0							
SK11	土器埋納遺構		2面	9C後半	11	0							
SK12	土器埋納遺構		2面	9C後半	11	0							
SK13	土器埋納遺構		2面	9C後半	11	0							
SK14	廃棄土坑		2面	8C後半	16	0							
SK15	土坑				13	なし							
SD16	溝		4面	6C末~7C初	7•9	0							
SR17	製鉄炉	鍛冶炉	2面		15	なし							
SR18	製鉄炉	鍛冶炉	2面		15	なし							
SR19	製鉄炉	鍛冶炉	2面		15	なし							
SE20	土坑	井戸?			13								
SK21	大型土坑		4面	6C末	13	0							
SK22	大型土坑		4面	6C末	12	0							
SD23	溝											SD01に切られる	
SB24	掘立柱建物	1間3間	3面	8C末	21	0						SP100·107·108·110·111·119	
SB25	掘立柱建物	2間4間	2面		22	なし						SP92·102·107·111·115·126·441	
SB26	掘立柱建物	2間6間	2面	9C前半	22	0						SP28·37·49·53·55·65·77·81·331·333·335·341·413	
SB27	掘立柱建物	2間3間	2面	9C中頃	21	0						SP101·113·141·417·442·430·435·439·461·474	
SX28	大型土坑	水溜遺構	1面	9C前半~中頃	9	0						SX70	
SX29	大型土坑	水溜遺構	1面	9C前半~中頃	9	0						SX71	
SB30	掘立柱建物	2間3間総柱 ・棟持柱有	2面	9C前半	18 • 19	0	0					SP349 • 350 • 354 • 355 • 357 • 358 • 359 • 366 • 370 • 390 • 391 • 393 • 401 • 500	
SK31	方形土坑	IX TO THE			13								
SD32	溝	内区画溝	2面	9C前半	18 • 19	0	0		0				
SD33	溝	外区画溝	2面	9C前半	18 • 19		0		0				
SD34	溝		2面			0							
SB35	掘立柱建物	2間6間以上	2面	9C前半		0						SP122·123·128·130·133·134·135·137·156·473	
SD36	溝		3面	8C前葉	6 • 9	0			0?				
SR38	製鉄炉	鍛冶炉	2面		15	なし							
SR39	製鉄炉	鍛冶炉	2面		15	なし							
SK40	土器埋納遺構		2面	9C後半	11	0							
SK41	土坑					なし							
SK43	土坑				14								
SX44	廃棄土坑		4面	7C中頃	16	0							
SX45	廃棄土坑		2面		16	0							
SK46	土坑				13	Ė							
	不明大型土坑		4面	7C前半	12	0							
SK48	土坑				13								
SD49	溝												
SR50	焼土坑	炭燒窯			15	なし							
	土器埋納遺構		2面	9C後半	11	0							
	土器配置遺構		2面	9C後半	10	0						SP555	
SR53	製鉄炉	鍛冶炉	3面		15	なし							
SC54	竪穴式住居	電付	4面	6C後半一7C初		なし							
SC55	竪穴式住居		4面	6C後半一7C初	17								
SK60	土坑				14								
B61	掘立柱建物	2間4間	3面		24							SP29·32·34·50·59·89·334·340·343	
B62	掘立柱建物	2間2間総柱	2面	9C前半	24	0						SP67·75·79·91·448	
B63	掘立柱建物	2間2間総柱	3面	7C	24	Ť						SP42·44·45	
	掘立柱建物	2間4間間	2面		23	0						SP286·291·295·302·303·305·307·309·310·311	
		2間3間	2面		23	0						SP289·306·308	
SB64	掘立柱建物				–	Ť							
SB64 SB65	掘立柱建物 掘立柱建物	3間6間	3面	7C	25								
SB64 SB65 SB66	掘立柱建物	3間6間										SP02·16	
SB64 SB65 SB66 SB67	掘立柱建物掘立柱建物	3間6間 2間3間	3面	7C	25	0						SP02·16 SP01·07·11·41·47	SP194+232+322+328 + 330
SB64 SB65 SB66 SB67 SB68 SB69	掘立柱建物	3間6間				0						SP02·16 SP01·07·11·41·47 SP05·39·40·345	SP194·232·322·328·330 SP254·276

られる。

SK51

第2面のK16グリットの敷石群の間で、敷石を除去した後に検出した。掘方は平面卵形であり、長さ70cm、幅60cm、深さ15cmを測る。掘方のほぼ中央に口縁を打ち欠いた須恵器壺を置いている。壺内の上部は空洞となっており、埋置後に土砂の流入を避ける有機質の被覆があったと考えられる。

SK52

第2面のK16グリットで検出した。土師器坏2点を隣接させ東西に並べて埋め置いた遺構である。標高38.95m付近で確認した。いずれの坏も径15cm、深さ5cmの掘方に正置されていた。掘方内の埋土は両者共に基底層と明確に異なる灰白色の砂質土であった。坏はヒビ割れていたが、破片は現位置を保っており、埋没時は完形であったとみられる。両方の坏に共通して口縁部に煤の付着があり、その位置はいずれも北側1ヵ所にあった。検出時点で相互の口縁部や掘方底面に約3cmの段差があったが、以上の要件から同時期の遺構と判断した。現位置で灯明皿として利用し、そのまま埋めたものと考えられる。

SP555

第2面のK16グリットで検出した。掘立柱建物SB27の主柱穴SP461に切られる柱穴状の土坑である。 SK52の南西約30㎝に位置する。SB30南側の敷石面除去後、不明瞭な掘方は認められたが、標高38.9m付近で明確に検出できた。掘方は円形であり、径55㎝、深さ30㎝を測る。中央に土師器甕を正置し、内部に4点、甕と周囲の土坑壁の間に15~16点の土師器坏を入れ込んだ後、埋めている。坏は甕内下部や甕周囲の南側では完形のものが多かったが、甕内上部や周囲北側では破砕したものが多く、個体識別困難な細片となっているものもあった。甕の口縁部破片が土坑底部付近に出土したことから、甕



Fig.8 遺構配置合成図(1/500)

は完全体として埋められたものではないことがわかる。また、甕内部と周囲の坏に型式的な差異は見出せなかった。なお、甕周囲に埋められた土師器坏のなかにSK52の坏と同様に口縁部に煤が付着したもの(Fig.38 - 13)が1点あった。

3. 土坑 (Fig.13·14)

SK08 (PL.6 - 6)

第4面KL16・17グリットにまたがって検出した。東西に主軸をもつ不整円形の土坑である。東西 1.55m、南北1.55m、深さ20cmを測る。床面は曲線を描いている。覆土は黒色土である。少量の須恵器、土師器が出土した。

SK15

第4面J15グリットで検出した。東西主軸の不整楕円形の土坑である。東西2.4m、南北1.7m、深さ40 cmを測る。床面は東側に緩い傾斜で下がっている。覆土中に20~30cm大の花崗岩角礫が数点含まれていたが、土器類の出土は少ない。

SE20

第4面J19グリットで検出した。南北主軸の楕円形の土坑である。南北2.1m、東西1.8m、深さ80cm を測る。床面はほぼ平坦であり、基盤礫層に達している。覆土中からは遺物はほとんど出土していない。井戸の可能性がある。

SK21 (PL.6 - 5)

第4面K18・19グリットで検出した。略南北主軸の長楕円形土坑である。掘方は二段掘りであり、 検出面で南北3.3m、東西2.0m、二段目で南北2.5m、東西1.0mを測る。二段目の壁面は急傾斜であり、 床面は平坦である。覆土は地山ブロック混じりの流入土である。二段目北隅部の床面から40cm上位に 須恵器坏類が一括出土した。埋葬遺構の可能性がある。

SK22

第4面L17グリットでSK43に切られて検出した南北主軸の大型長楕円形土坑である。南北約5m、東西2.1m、深さ70cmを測る。覆土中の上~中位に一辺20cm強の花崗岩角礫を多く含む、特に北端には一辺30cm以上の礫が集中している。他に少量の須恵器、土師器が出土している。

SK31

第4面K16グリットで確認した隅丸方形の土坑である。南北1.4m、東西1.6m、深さ5cmを測る。床面は平坦であり、東側壁面に竈状の焼土、粘土塊がある。あたかもミニチュアの竪穴式住居状を呈していたが、床面に柱穴などはない。遺物の出土もなく性格は不明である。

SK43

第4面L17グリットで検出した東西主軸の楕円形土坑である。SK22を切る。東西1.5m、南北1.0m、深さ1.2mを測る。床面は平坦である。出土遺物は少ない。

SK46

第4面L17グリットで検出した平面楕円形の土坑である。南北1.7m、東西1.4m、深さ20cmを測る。 床面は平坦であり、北側にやや下がっている。床面南側に一辺30cm、深さ15cmの隅丸方形の柱穴掘方が見出されたが、本遺構に伴うのではなく、切り合いと考えられる。覆土中には花崗岩などの礫が多数認められた。

SK47

第4面L18グリットでSK48に切られて検出した大型の不整形土坑である。南北4.9m、東西2.2m、深さ30cmを測る。平面では西側遺構ラインは直線的であるが、東側は不整形をなす。これも遺構の切り

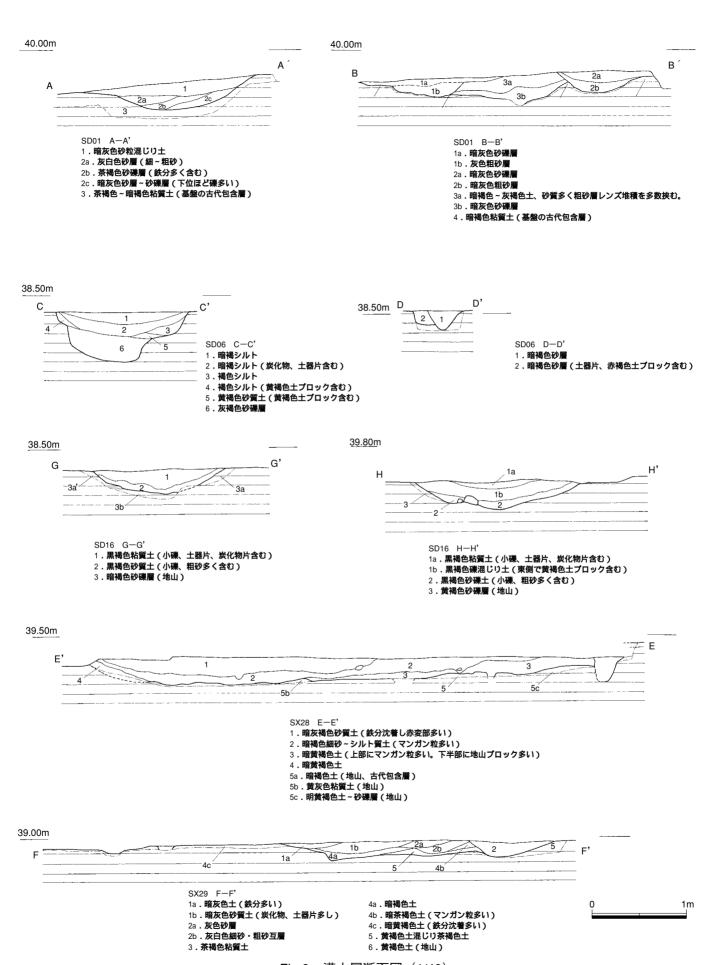


Fig.9 溝土層断面図(1/40)

合いを分離できていないことを考慮せねばならない。床面は平坦であり、東側の3カ所に柱穴を検出 した。覆土中には少量の礫、土師器片が出土した。

SK48

第4面L18グリットで検出した平面卵形の土坑である。南北1.7m、東西1.2m、深さ30cmを測る。床面は平坦であり、覆土上部に少量の礫を出土した。

SK54

第4面J16グリットでSD36に切られて検出した東西主軸の不整形土坑である。東西2.0m以上、南北1.3m、深さ20cmを測る。床面はほぼ平坦であり、覆土中からの遺物の出土はない。

SK60

第2面K19グリットで検出した隅丸方形の土坑である。南北1.5m、東西1.4m、深さ90cmを測る。床面は平坦であり、下部は基盤礫層に達している。床面はほぼ平坦であり、出土遺物は少ない。

SP35

第2面K18グリットで検出した平面卵形の土坑である。本遺構西側壁を掘立柱建物SB26の主柱穴が

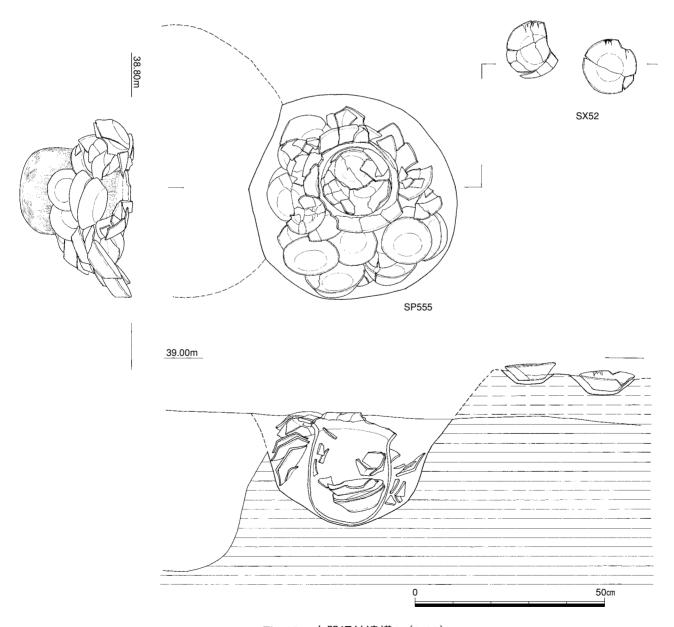


Fig.10 土器埋納遺構1(1/10)

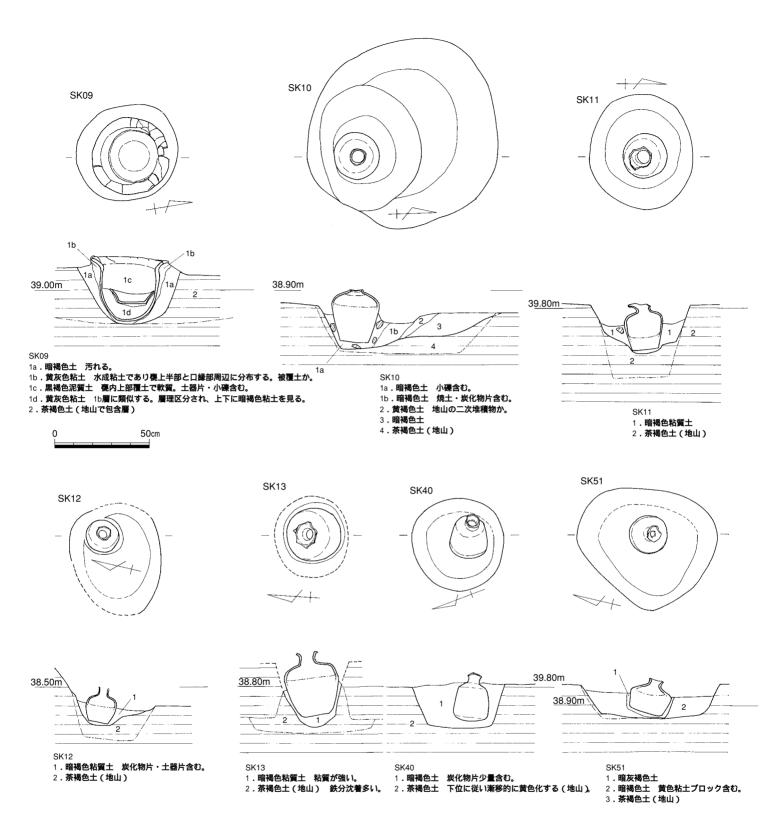


Fig.11 土器埋納遺構2(1/20)

切る。東西1.9m、南北1.4m、深さ1.0mを測る。床面は平坦であり、基盤礫層に達している。覆土上部の南側に礫群が流れ込み状態で出土した。

4. 大型土坑 (Fig.12)

SX28

K・L15・16グリットで検出した南北主軸の隅丸長方形を呈する水溜状の大型遺構である。床面はほぼ平坦であり、K16グリットで溝SD05と接続している。その接続部分の構造はやや不明であるが、2

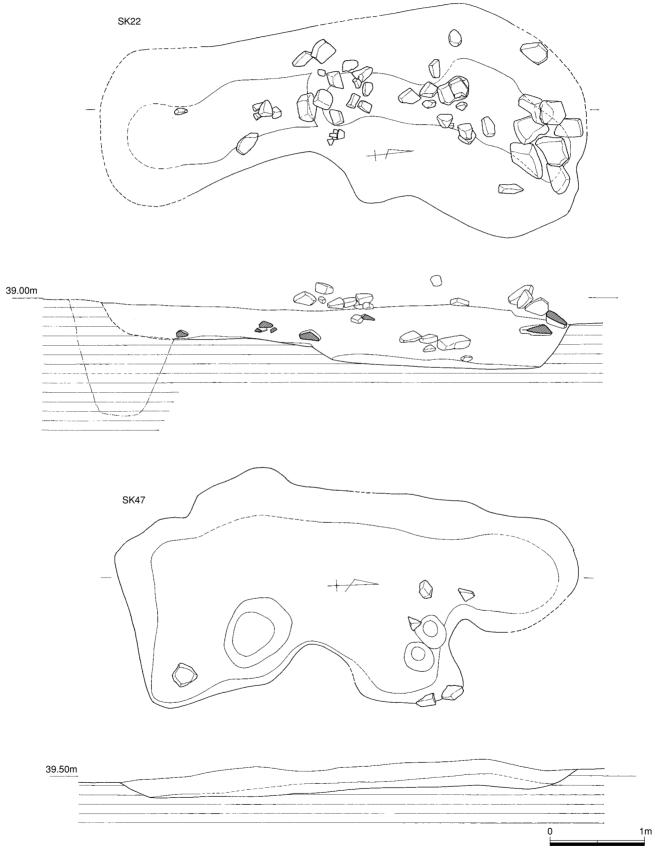


Fig.12 土坑1(1/40)

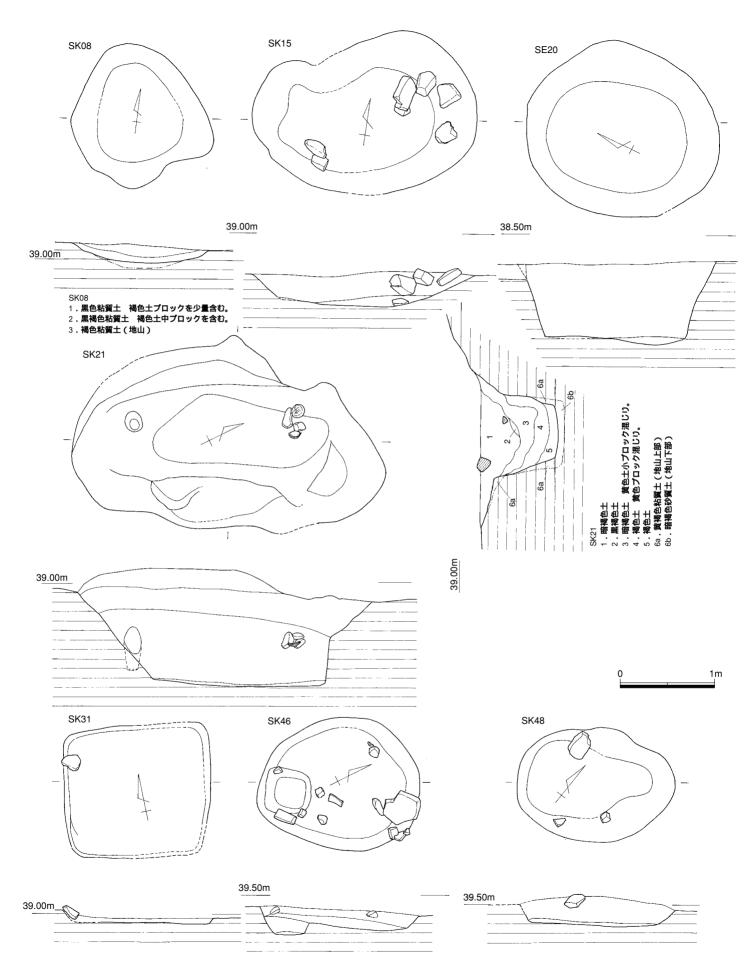


Fig.13 土坑2(1/40)

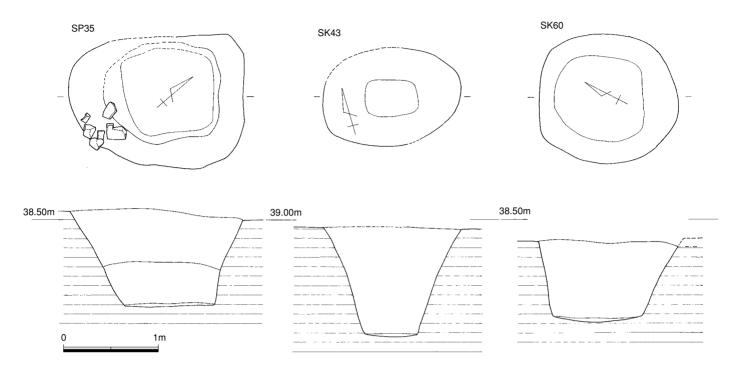


Fig.14 土坑3(1/40)

カ所に取水口状の落ち込みがあった。遺構の規模は南北7.5m、東西4.5m、深さ30cmを測る。覆土は上半部が砂質土、下半部はシルト質土である(Fig.9 E-E'断面)。南側から徐々に埋没したと考えられる。埋土中から須恵器、土師器、瓦片などが出土した。

SX29

JK16グリットで検出した東西主軸の長楕円形を呈する水溜状の大型遺構である。床面には多少凹凸があり、K16グリットで溝SD05と接続している。埋土の観察では南側から次第に埋没しており、最終的にSD05が切っている。本遺構の埋没はSD05の埋没に先立ち、比較的早い段階に行われたと見られる。遺構の規模は南北3.0m、東西6.0m、深さ0.2mを測る。埋土中から須恵器、土師器などが出土した。

5. 製鉄関連遺構 (Fig.15)

本調査では第2面古段階で7基、第3面で1基の製鉄遺構を検出した。全て遺存状況は悪く、炉底がかろうじて残る程度である。不整な円形もしくは楕円形の土坑状の遺構として検出した。ここに取り上げた以外にも焼土面のみや鉄滓・炭化物片の集中する範囲が多数存在したが、遺構として不明確であったので省いた。全ての製鉄遺構はK15~17グリットに集中するが、これは基壇部による盛り土に覆われた範囲を中心とし、その後の開発からも第2面と第3面上部が保存された範囲である。本来の遺構集中域と見ることはできない。

SR17

掘方の平面は不整円形であり、径20~23cm、深さ5cmの断面皿状である。環状に赤色焼土層が巡り、その中央は黒灰~黒褐色の還元焼成による堅く焼き締まった硬化層となっている。検出段階に少量の 鉄滓が出土している。

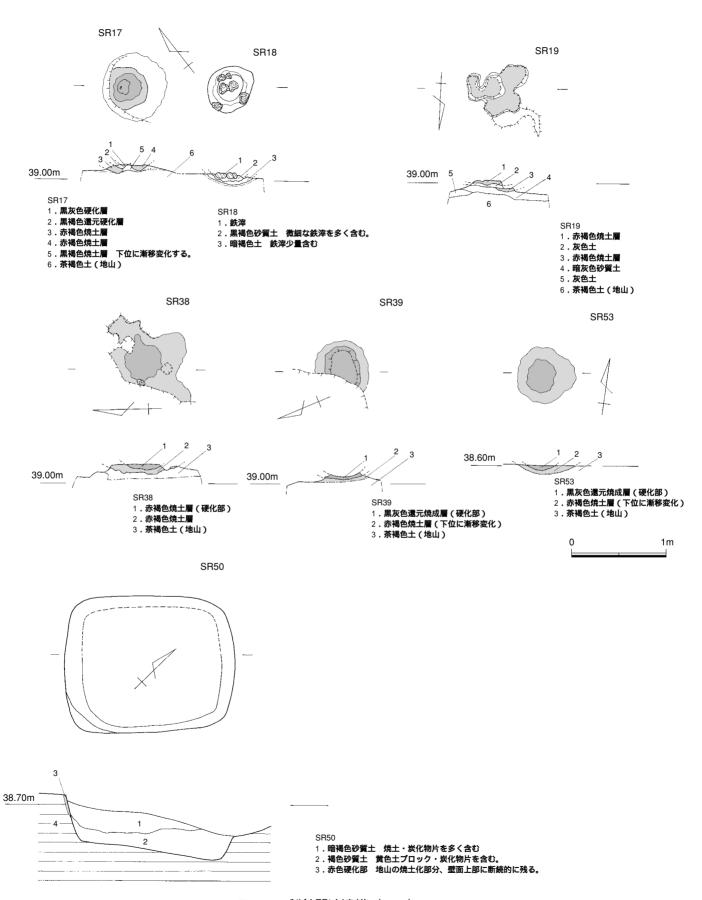


Fig.15 製鉄関連遺構(1/40)

SR18

SR17の南東約30cmに隣接して検出した。掘方の平面は東西方向の楕円形であり、東西28cm、南北23cm、深さ6cmの断面皿状を呈する。覆土上部には炉底塊を含む鉄滓が5~6点あり、その下部は小さな鉄滓・炭化物を含む砂質土となっている。硬化面はない。

SR19

周囲は攪乱などで相当壊されているために本来の原形は不明である。焼土面が二重となり、部分的な残骸として検出した。上部の焼土面は南北約10cm、東西約20cmの範囲に遺存している。上面に硬化面はなく、下部に漸移的に変化する。下位層に厚さ4cmの灰色砂質土を挟んでもう一面の焼土面があり、南北約25cm、東西約20cmの範囲に遺存している。上部の焼土面と同様に硬化面はなく、下部に漸移的に変化する。いずれも検出範囲内では遺物の出土はなかった。

SR38

西側半分は失っている。掘方は未検出であったが、基底部での焼土範囲とその中央部に硬化面を確認した。また二次的に動いているが、鉄滓1点も出土している。焼土の範囲は南北約50cm、東西約30cmである。

SR39 (PL.6 - 7)

北東側を攪乱で失っている。東西方向に楕円形の掘方がある。掘方は東西約25cm、南北約17cmであり、深さ約3cmを測る。土坑内底面には厚さ2cmの還元焼成による硬化面が形成される。硬化面の内面には荒いナデ状の痕跡があり、炉底に粘土を貼り仕上げたものか。

SR50

隅丸長方形の土坑であり、壁面上部に焼土面が形成されている。いわゆる「焼土坑」である。土坑は長さ90cm、幅72cm、深さ約20cmを測る。壁面は約70°の傾斜があり、床面は平坦で北東側に下がっている。覆土中上部には炭化物・焼土が多く含まれている。

SR53

唯一第3面で検出した炉跡である。茶褐色土包含層中であった。掘方の平面は不整円形であり、径約30cmであり、全体に赤褐色の焼土層である。中央が焼成により堅く焼き締まって硬化層となっている。遺物の出土はなかった。

6. 廃棄土坑等 (Fig.16)

SX07

L18グリットで検出した土器類の集中分布域である。西から東に下がる自然地形に沿って、南北約4.7m、東西約1.8mの範囲内に須恵器、土師器、礫、炭化物などが集中して出土した。覆土は包含層下部に近い暗褐色土であり特に掘方などは検出できていない。

SX14

K16グリットで検出した土器類の廃棄土坑である。SB30南側の敷石内にあり、敷石の一部が本遺構を被覆していた。土坑は南北30cm、東西40cm、深さ8cm程度の丸底の土坑内底面に貼りつくように土器、礫などが出土した。土器片間やその上部の覆土は砂礫土であり、土坑床面には鉄分の沈着があり、一部で錆結している。

SX44 (PL.6 - 4)

M16グリットで検出した土器類の廃棄土坑である。SX07と同様に西から東に下がる自然地形状に検出した。およそ南北約60cm、東西約50cmの範囲に須恵器、土師器、礫が集中する。基底部と覆土は暗

褐色土であり、土坑などの掘方は検出できなかった。しかし、断面で見ると中央部がやや下がり、浅 い掘方が存在した可能性がある。

SX45 (PL.6 - 2)

J15グリットの調査区端部で検出した土器類の廃棄土坑である。当初は調査区境界の断面にかかった埋め甕遺構と推定し、30cmほどの小拡張区を設定し、調査を進めた。その結果、ほぼ南北主軸の平面が卵形をなす土坑に廃棄された土器群と判明した。土坑の規模は南北65cm、東西40cm、深さ15cmである。土器は一個体の甕形土器を破砕し、全て内面を上に向けて埋めている。

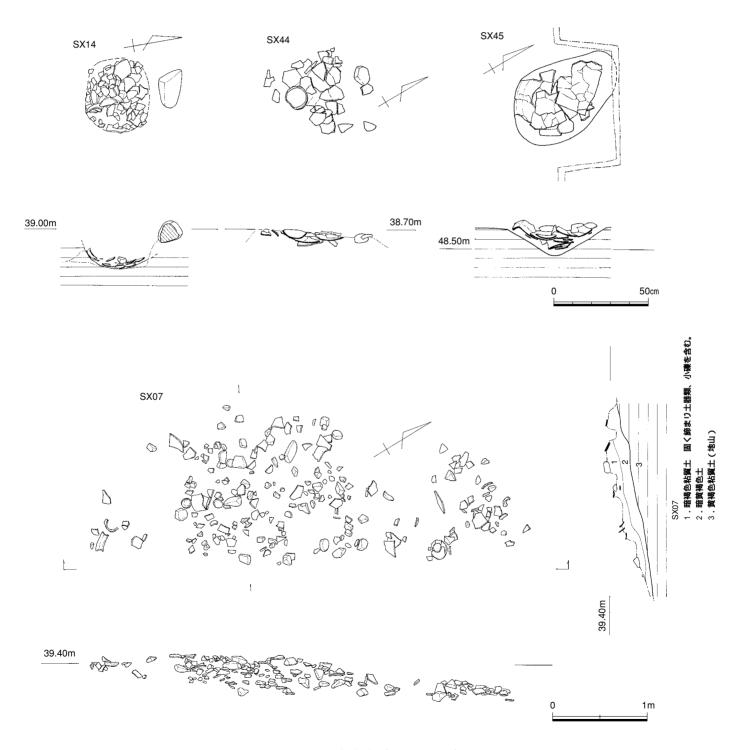


Fig.16 廃棄土坑(1/20・1/40)

7. 竪穴式住居 (Fig.17)

SC54

第4面J・K18グリットで確認した四本支柱隅丸方形を呈する竪穴式住居跡である。基壇盛り土下部にあり、保存状況は悪く、ほとんど住居床面直上での検出であった。床面はほぼ平坦であり、貼り床の痕跡はない。南北4.5m、東西5.2mを測る。北壁中央には浅い土坑SP06があり、焼土・炭化物が多く含まれている。本来竈であったと見られる。南東側隅部はクランク状に狭まっていて、住居内に壇上の削り出しがあったものと見られる。それに対し、北東隅部には一辺約1m、深さは床面から約20cmの方形土坑がある。また、西辺の内側を巡る溝状の遺構があり、壁溝をなしている。その外周に同じ高さの床面が広がっており、建て替えに伴う西側への拡張があったと見られる。主柱穴は床面で径50~60cmであり、深さはほぼ60cmで共通している。柱痕跡はない。主柱間の距離は真芯で南北1.6m、東西2.1mである。

SC55

第4面K16グリットで確認した二本支柱の竪穴式住居と思われる遺構である。平面は不整多角形である。南北約4.2m、東西約3.8cmであり、深さは中央で一段下がり深さ約30cmを測る。貼り床は検出できなかったが、検出面から約15cm以下は地山ブロック混じりの土層となり、本来の床面はその上面であった可能性が高い。南壁から二条の溝状遺構が延びるが、関連遺構かは判断できない。覆土内の遺物は少ないが、中央一段深い部分から赤焼須恵器の坏身片が出土した。整理過程で混在させてしまい、ここに報告できないが、小田編年 a 期に位置づけられる資料であった。

8. 基壇状遺構・囲郭施設(Fig.5・18・19)

基壇状遺構

礎石SX03を中心に周囲の包含層より高い標高で柱穴や敷石遺構が現れた。また、それらは長方形の範囲にまとまり、その範囲では焼土・炭化物などの薄層群を含む硬化層が現れた。このように人工的と見られる盛り土範囲の存在が判明したことから、これを仮に「基壇状遺構」と呼び調査を進めた。検出された基壇状遺構の規模は上面で南北16~18m、東西約10mの範囲である(Fig.5の網部)。黒色~暗褐色土包含層中での検出であり、石材などによる施設の区画などはなく、その境界の判断は不明確であった。また、東側は現代水田造成に伴う削平により失われている。本来の盛り土範囲はさらに東側に拡がる可能性がある。検出面での関連遺構は礎石SX03以外に、中央に掘立柱建物SB30、それを囲むように溝状遺構SD32・33、さらにその周囲に柵列、溝間に石敷き遺構がある。また、基壇状施設上面で多数の柱穴を検出した。以下では基壇状施設の構造と敷石、柵列、礎石について示す。

基壇状施設の構造は、基盤層である黄褐色粘質土上面が、ほぼ平坦に削平された後、その上部に最大厚約50cmの盛り土を行い、基壇状の高まりを造成していると見られる。削平された地山面の標高は南端側で高く38.5m、約15m離れた北端側で38.2mを測り、自然地形に沿って両端で約30cmの高低差がある。盛り土は大きく区分すると3層に分かれ、下部から暗褐色粘質土(3層)暗褐色砂質土(2層)暗灰色砂質土(1層)と明瞭に区分される。これらの層は全体に堅く締まり、調査時の掘削はスコップでは困難であり、鍬などを用いて掘り下げを行った。このうち1層と2層上部には粗砂層、灰層、焼土層、炭化物集中層が薄いレンズ状堆積として多数含まれている。各層厚は地点により若干異なるが、大まかには3層が20~30cm、2層が20cm前後、1層が10cm以下である。周辺の自然堆積では基盤の黄褐色土の上位には暗褐色土、黒褐色土と続き、層間は動植物生痕などによる凹凸が顕著であり、土壌の締まりも比較的に緩く、全体に軟質であった。

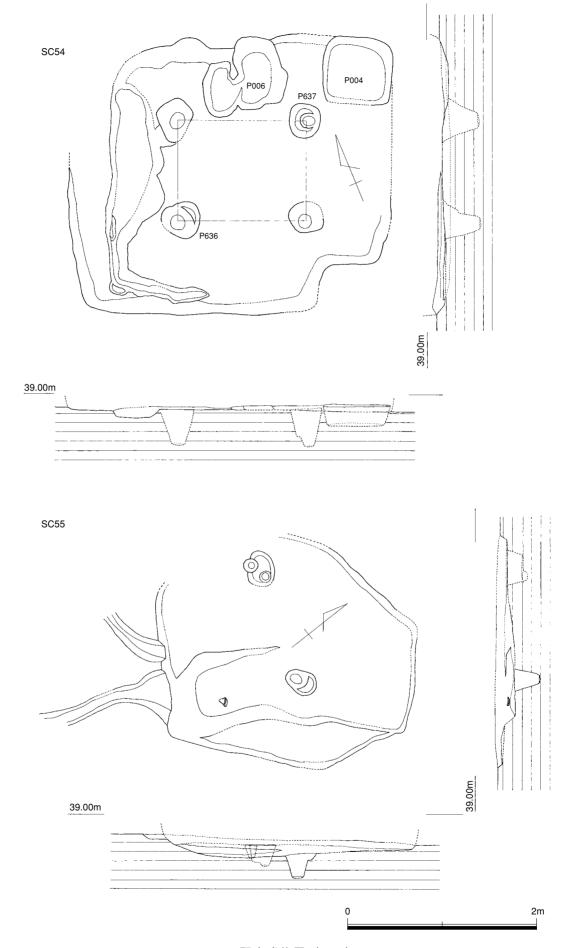


Fig.17 竪穴式住居(1/40)

敷石

敷石は基壇状施設の1層上面で検出した(PL4-1)。全体としては上部からの攪乱によって基壇状施 設上面の広範囲に礫が散在する状況であり、遺存状況としてはあまり良くない。安定して構築遺構と して確認された範囲はSD32とSD33の間、SD33の外側は北側と東側の一部、SD33が途切れる基壇南側 などである(Fig.18)。基壇南側では第1面のSD05、SX29などにより、大きく破壊されている。遊離し た礫を除去し、確実に現位置を残す範囲を主に記録した。その結果、数カ所で部分的に礫間が密着し て構築したと見られる範囲があった。なお、下位の1~3層盛り土中はむしろ礫の混入が少なく、流出 によって下部盛り土中から礫面として露出した可能性は考え難い。つまり、敷石は全て人為的に構築 されたと考えられる。この敷石の素材は花崗岩を主とし、変成岩を含む角礫・亜角礫であり、その給 源は基盤礫層や周辺河川であり、周辺で入手可能な石材であった。敷石は場所により組成や分布状況 が異なる。SB30の外周部となるSD32とSD33の間(K17グリット)は一辺10cm以下のやや小ぶりの石 材が多く使用され、SB30から南側に3m以上離れた範囲(K16グリット)では一辺20cm以上の石材が多 く利用されている。詳細に見ると、K17グリットのSD32とSD33の間は、敷石はほぼ一面であり、礫同 士を組み合わせ、石間をつめてタイル状に構築している。本地域の横穴式石室床面に類似した敷石が 存在する。この敷石の上に一辺20cm以上のやや大きな角礫が点在している。K16グリットの敷石は、 まず一辺20cm前後の礫を比較的粗い密度を保ちながら分布させ、その間を覆うように一辺30cm以上の 大きな礫を二段目としている。その中には一辺40cmを越える礫もあり、一人では運搬が困難な大きさ であった。なお、場所によっては重なりが3段目となる礫群もあり、敷石というより「礫積み」に近 い状況も見られる。これらが同時期の構築であるのかは不明であるが、こうした礫間を区分するよう な堆積層の介入・形成などは認められなかった。まとめると、基壇状施設上面の敷石には二種類が有 り、まず建物SB30を囲む二重の溝SD32とSD33の間を主に幅1m~2mの範囲で玉砂利風に敷き詰め た敷石と、SB30の南側のSD33が途切れた範囲に敷石と一部「礫積み」状に構築された礫群が存在し たことが判明した。これらの敷石の上部や間からは多数の土師器片や鉄器、さらに土錘などの土製品 も出土した。また、敷石の下部に土器埋納遺構なども検出された。

柵列

基壇状施設の西側と北側に柵列状の柱穴列を検出した。緊急で追加調査を実施した東側J17グリットでは上面の調査に留まり、この柱穴列の確認ができなかった。東側にも同様の遺構があるかは未確認である。まず北側には3条の柱穴列がある。南からa列、b列、c列とする。また西側には1条の柱穴列があり、これをd列とする。a列は2間分で柱間は2.0~2.1m、掘方は30cm前後の円~楕円形を呈する。b列は4間分で柱間は2.1m、掘方は40cm前後の円~楕円形を呈する。c列は2間分で柱間は1.9~2.0m、掘方は20cm前後の円形を呈する。d列は6間分であり、柱間は1.9~2.2mであり、掘方は20~30cm前後の円形を呈する。いずれの掘方でも柱痕は未確認であったが、底面の二段目痕跡などから見て多くは径10cm以下の柱が立てられたと推定される。北側のa列~c列は列間に柱間や方位、掘方形態に僅かながら差があり、同時期ではなく、構築に時期差があると考えられる。また、d列はその形態がc列に最も近く、同時に構築された可能性がある。

礎石SX03 (Fig.20)

基壇状施設の上面で検出した礎石とその掘方である。掘立柱建物SB30の中に位置するが、SB30の各主柱と関連するとは考え難い。また、切り合いとしての存在もこの礎石と関連する遺構などは見出せず、この遺構の性格は不明と言わざるを得ない。掘方は平面が不正楕円形で、ほぼ南北主軸である。長さ1.4m、幅1.1m、深さ40cmであり、盛り土を切っている。礎石は長さ95cm、幅75cm、厚さ40cmであ



Fig.18 基壇状施設1(1/80)

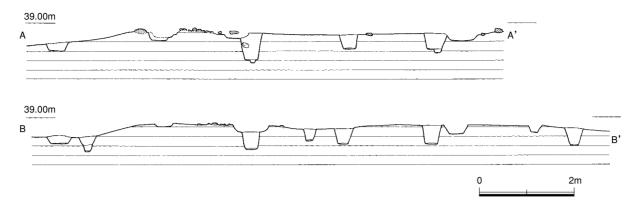


Fig.19 基壇状施設2(1/80)

り、中央で割れている。石材は花崗岩である。掘方内には根締め石などはなく、下部に地山二次堆積土、上部は褐色土である。礎石の東側下部に白灰色の水成粘土があった。礎石の上部は1層の一部である炭化物層が覆っていた。礎石は上面をやや荒くノミ状工具で平坦に加工され、中央に柱穴が掘られている。柱穴は二段掘りであり、一段目は径約30cmの浅い皿状のくぼみであり、その中央に二段目の柱穴を穿っている。柱痕は上部で径18~17cm、下場で径14cmを測る。深さは全体で8cm、二段目は6cmである。掘方内上半部や覆土中に多くの遺物が出土した。須恵器、土師器以外に白磁、青磁、緑釉陶器、鉄器などがあるが、瓦類はない。遺物の年代は9世紀前半~中頃に位置付けられる。

9. 掘立柱建物

SB23 (Fig.5)

第2面K・L15・16グリットで確認した建物であるが、東端は調査区外の調査区外に延びるため建物構造や規模が不明である。1間6間以上、もしくは2間6間以上の東西棟と推定している。建て替えがあり、柱穴の重複が見られる。梁行2間以上なら4.2m以上、桁行9.2m以上であり、梁間約2.1m、桁間約1.8mである。柱穴掘方は径70cm前後の円形か隅丸方形であり、柱痕跡は不明である。柱穴SP130・137・156から須恵器、土師器などが出土している。9世紀前半期に位置つけられる。

SB24 (Fig.21)

第3面L16グリットで確認した1間3間の南北棟である。東側桁の柱穴がSD25柱穴と重複し切られる。 梁行2.4~2.3m、桁行6.0~5.7mであり、桁間1.9~2.4mとばらつきがある。柱穴掘方は径60cm前後の円 形であり、柱痕跡は床面に残り径20cmほどである。柱穴SP110から土師器坏身が出土している。8世紀 後半期か。

SB25 (Fig.22)

第2面L16・17グリットで確認した2間4間の南北棟である。梁行4.8~5.0m、桁行9.3mで、梁間2.4~2.6m、桁間約2.4mである。柱穴掘方は径60cm前後の円形か楕円形であり、柱痕跡は不明である。柱穴SP92から少量の土師器片などが出土している。9世紀前半期か。なお、本建物はSB26と柱筋が揃い、1間分の距離で接している。一連の建物の可能性もあり、その場合11間で桁行約23.7mとなる。

SB26 (Fig.22)

第2面K・L17・18グリットで確認した2間6間の南北棟である。梁行4.8m、桁行12.0mで、梁間2.4m、桁間約2.4mである。柱穴掘方は径60cm前後の円形か楕円形であり、一部に隅丸方形を含んでいる。柱痕跡は不明であるが、柱穴内に根締め石と見られる礫が見られるものが多い。柱穴SP28・53・65・77などから土師器などが出土している。9世紀前半期か。

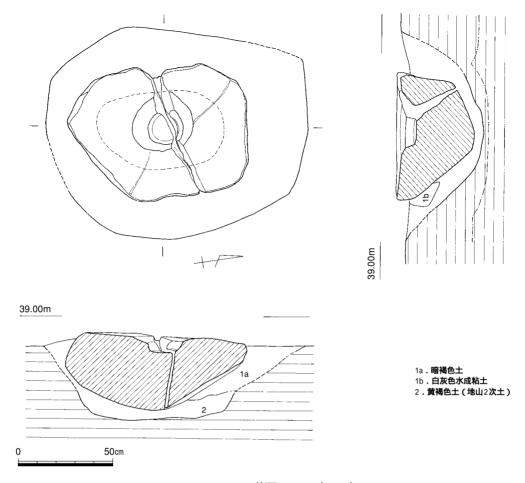


Fig.20 礎石SX03(1/20)

SB27 (Fig.21)

第2面K16グリットで確認した2間3間の南北棟である。梁行4.0m、桁行6.1mで、梁間2.0m、桁間1.8 ~2.3mである。東側の柱筋が隣接するSB30西側の柱筋と一致する。柱穴掘方は径40~60cm前後の円形であり、柱痕跡は不明である。柱穴SP113・430・461・474などから須恵器、土師器などが出土している。9世紀前半期と見られる。

SB30 (Fig.18, PL4 - 2)

第2面K16・17グリットの基壇状施設の中央で確認した2間3間総柱の南北棟である。周囲を巡る 溝SD32を切るが、建て替えや柱抜き取りなども予測され、それが構築時の前後関係を示すかは明らか でない。梁行3.8m、桁行6.0mで、梁間1.8~2.0m、桁間1.8~2.2mとばらつきがある。棟柱軸線の南外 側0.5~0.6mの位置に柱穴があり、棟持ち柱と推定される。北側梁には0.6m離れて庇状の柱穴列がある。 中央の柱穴は棟持ち柱を兼ねていたのであろうか。また同じ軸線上の南側2.0mと、北側2.4mと2.7mの 位置に柱穴がある。棟持ち柱としては距離が離れているが、偶然とは考え難く関連遺構の可能性があ る。柱穴掘方は径40cm前後の円形~楕円形であり、柱痕跡は不明であるが、柱穴床面に二段目落ち込 みが数例あり、それを見ると径15cm以下である。ほとんどの柱穴から須恵器、土師器片が出土してい る。特にSP370からは馬具(轡一式)が投棄状態で出土した(Fig.59 - 26)。

SB61 (Fig.24)

第3面K・L17・18グリットで確認した2間4間以上の南北棟である。SB26との重複があり、より古いと見られた。梁行3.1m、桁行7.6m以上で、梁間1.5m、桁間は1.8mが主であるが一部に1.6~2.0mのばらつきがある。柱穴掘方は径40~60cm前後の不正円形であり、柱痕跡は不明である。柱穴から少量の須恵器、土師器などが出土している。

SB62 (Fig.24)

第2面L16・17グリットで確認した2間2間の総柱棟である。東西3.5m、南北3.2mで、東西柱間約1.8m、南北柱間約1.6mである。柱穴掘方は径60~80cm前後の不正円形~楕円形であり、柱痕跡は不明である。柱穴SP67・79・448などから土師器などが出土している。

SB63 (Fig.24)

第3面K18・19グリットで確認した2間2間の総柱棟である。斜面下方の2柱穴は失われている。 南北4.2m、東西3.9mで、南北柱穴間2.1m、東西柱穴間2.0mである。柱穴掘方は径50cm前後の円形で、 柱痕跡は不明である。柱穴から少量の須恵器、土師器などが出土している。

SB64 (Fig.23)

第4面H・I15・16グリットで確認した2間4間の南北棟である。梁行4.1m、桁行10.8cmで、梁間1.9 ~2.3m、桁間2.4~2.7mである。柱穴掘方は径60cm前後の円形であり、柱痕跡は不明である。柱穴から 須恵器、土師器などが出土している。

SB65 (Fig.23)

第3面H・I16グリットで確認した2間3間の南北棟である。SB64と重複関係にある。梁行3.0m、桁行8.0mであり、梁間1.5m、桁間2.6~3.0mである。柱穴掘方は径40~60cmの不正円形であり、柱痕跡は不明である。柱穴SP308などから須恵器、土師器などが出土している。

SB66 (Fig.25, PL7 - 2)

第3面J・K17グリットの基壇盛り土除去後に確認した3間6間の東西棟である。上部は造成時に削平を受けている。梁行4.1m、桁行8.0mで、梁間、桁間共に1.3~1.4mである。柱穴掘方は一辺0.8~1.4mの隅丸方形や楕円形で、柱痕跡は不明である。柱穴から遺物はほとんど出土してない。

SB67 (Fig.25)

第3面J18グリットで確認した2間3間の南北棟である。SC54、SB68、69と重複がある。梁行4.8m、 桁行6.9~7.0mであり、梁間2.4m、桁間2.3mである。柱穴掘方は一辺60~80cmの隅丸長方形であり、柱 痕跡は不明ある。柱穴からの遺物は少ない。

SB68 (Fig.26)

第3面J・K18グリットで確認した2間5間の東西棟である。梁行4.4m、桁行11.0mで、梁間2.2m、桁間2.2mである。柱穴掘方は径60~70cmの円形もしくは隅丸方形で、柱痕跡は不明である。掘方内に根締めと見られる礫が認められる例がある。柱穴SP01・11から土師器などが出土している。8世紀後半期と見られる。

SB69 (Fig.26)

第3面J18グリットで確認した2間6間の東西棟である。梁行4.0m、桁行12.1mで、梁間2.0m、桁間1.6~2.4mとばらつく。柱穴掘方は径40cm前後の円形が多く、柱痕跡は不明である。柱穴SP345から須恵器、土師器などが出土している。9世紀前半頃と見られる。

SB72 (Fig.24)

第3面J15グリットで確認した1間1間の総柱棟である。南北約1.8m、東西約1.8mである。柱穴掘 方は60~80cm前後の楕円形で、柱痕跡は不明である。柱穴から少量の須恵器、土師器などが出土して いる。

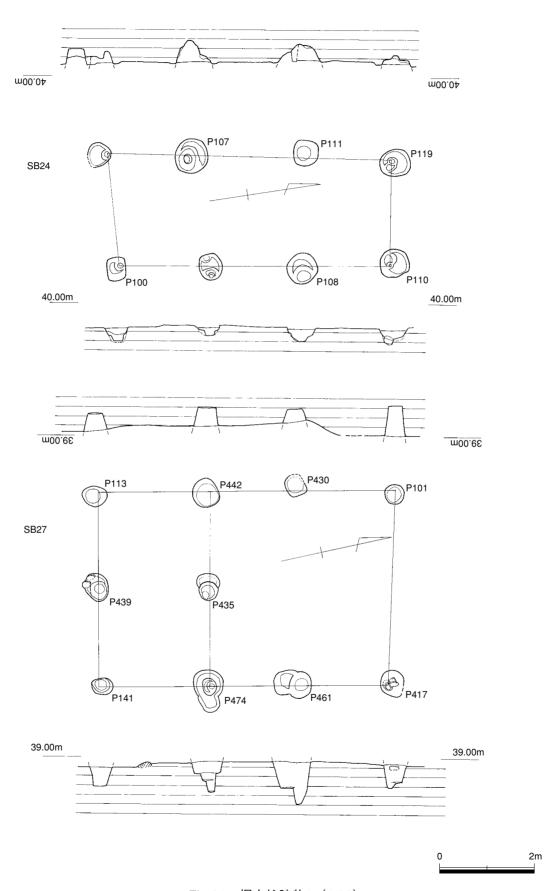


Fig.21 掘立柱建物1(1/80)

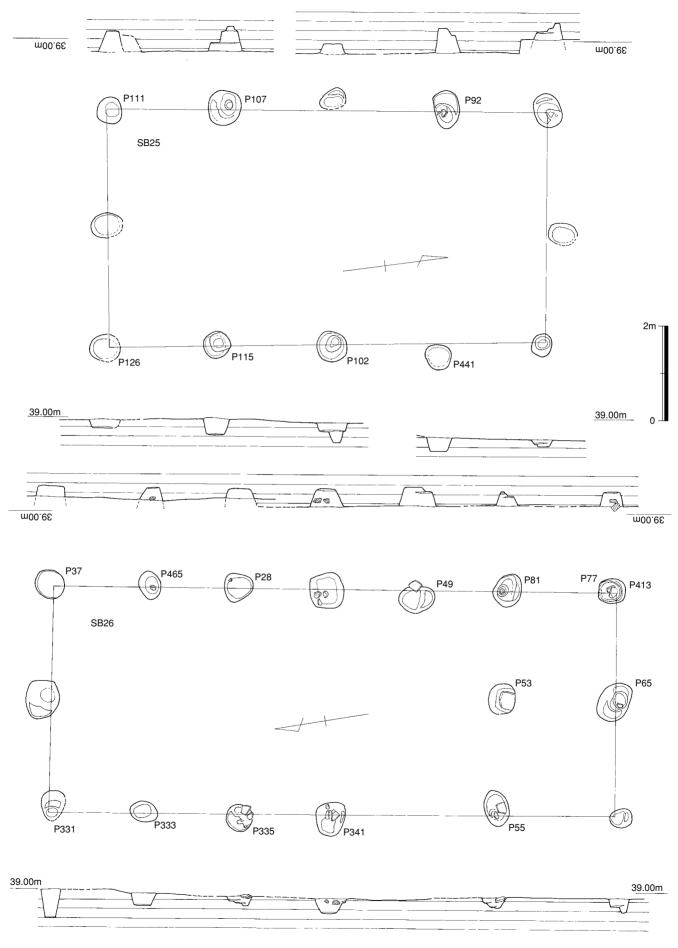


Fig.22 掘立柱建物2(1/80)

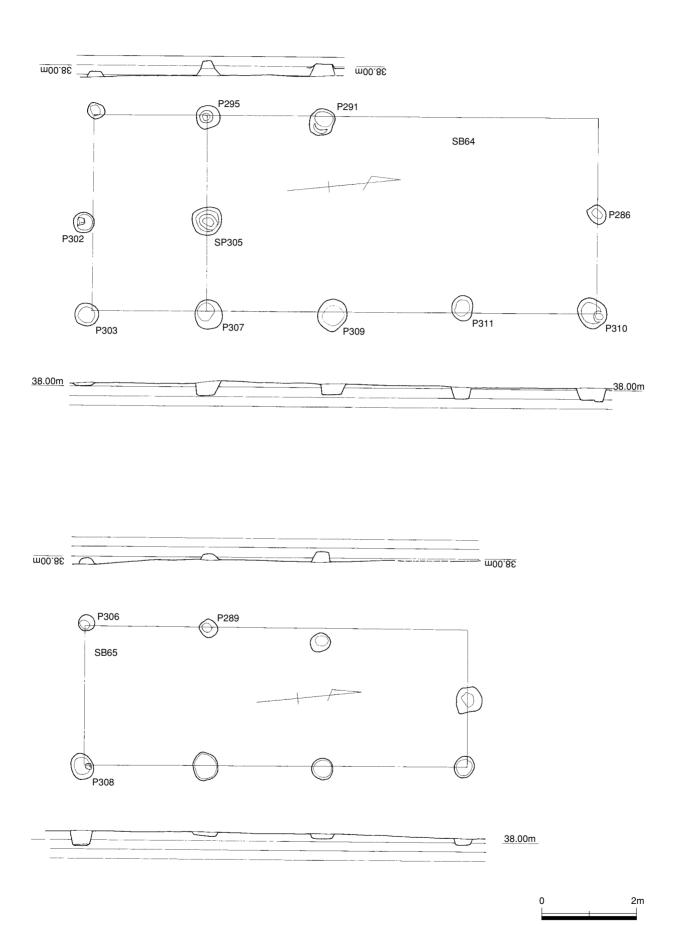


Fig.23 掘立柱建物3(1/80)

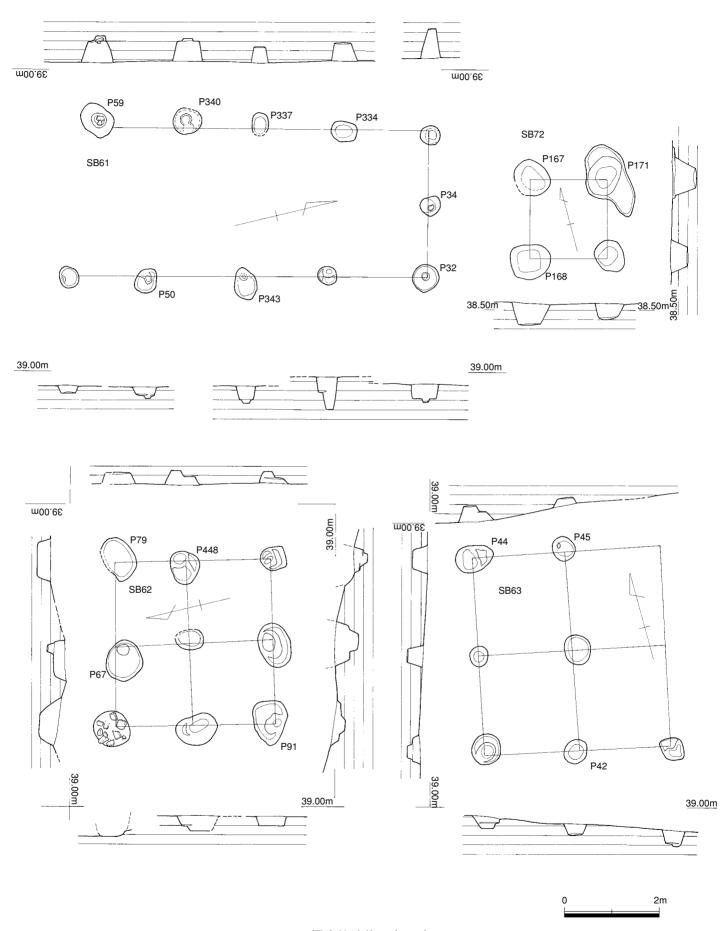


Fig.24 掘立柱建物4(1/80)

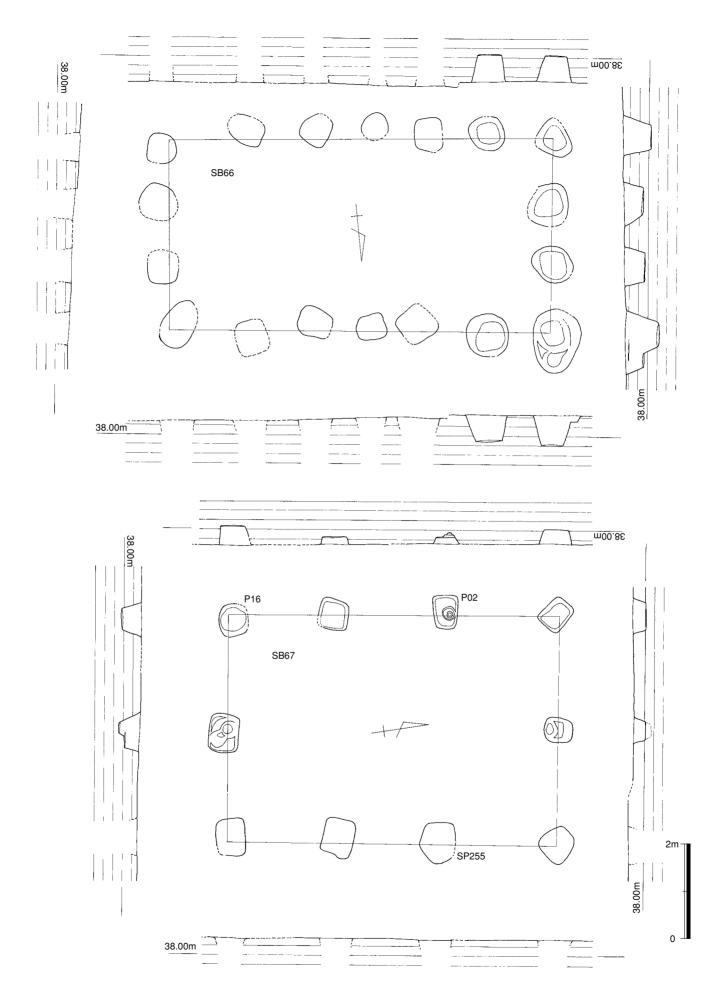


Fig.25 掘立柱建物5(1/80)

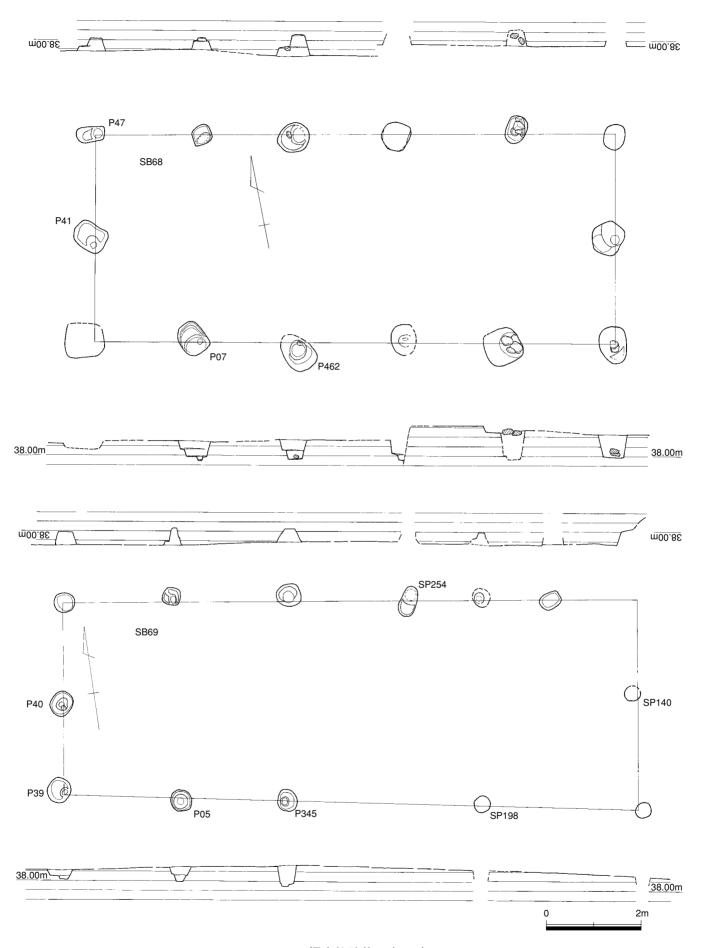


Fig.26 掘立柱建物6(1/80)

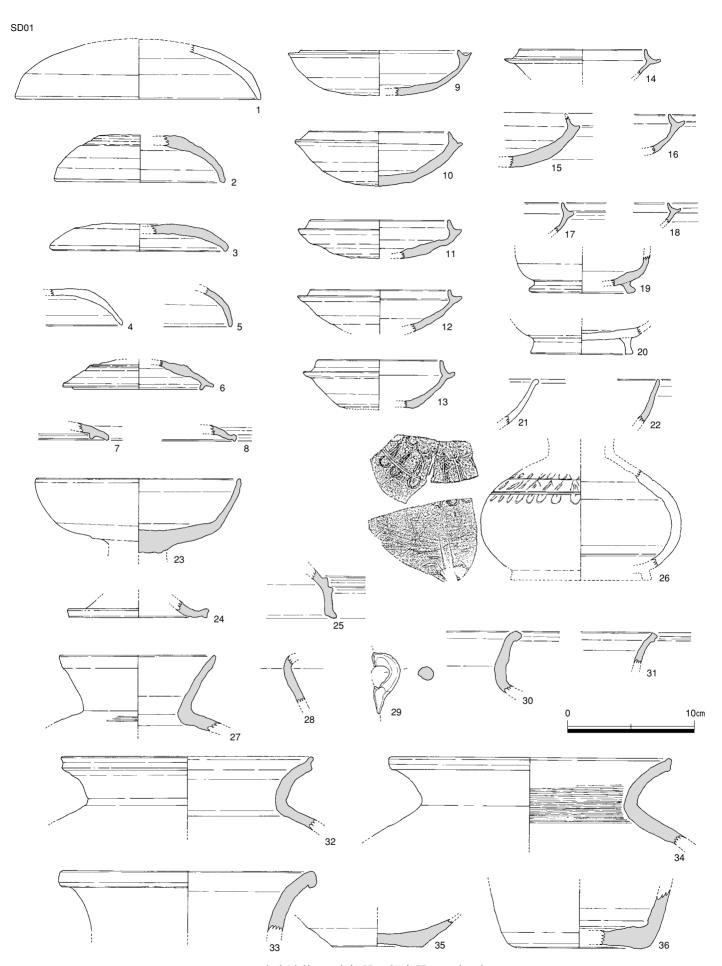


Fig.27 出土遺物1-土師器・須恵器1- (1/3)

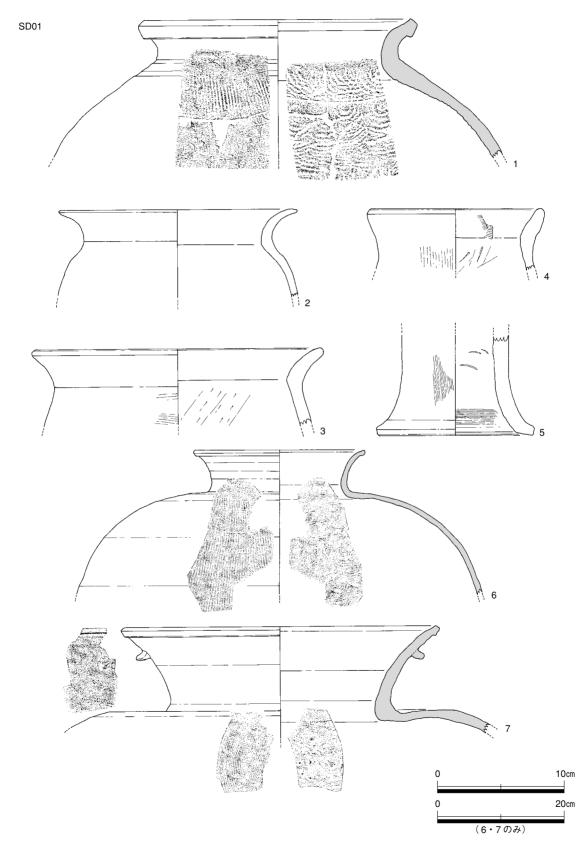
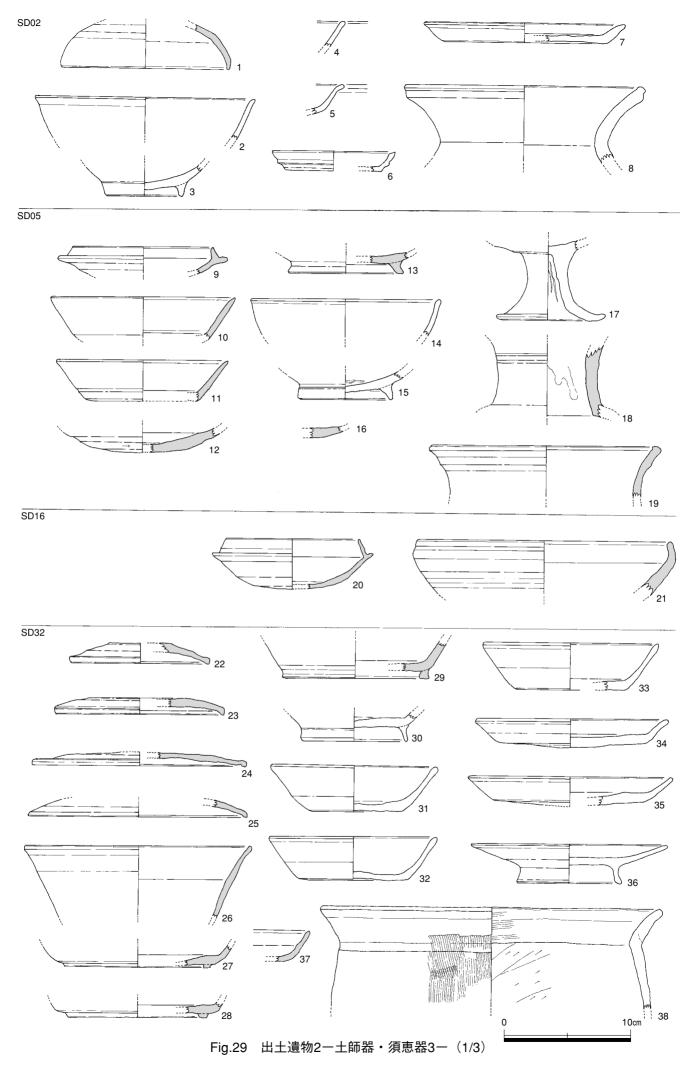


Fig.28 出土遺物3-土師器・須恵器2- (1/3・1/6)



- 45 -

(6)遺物

5 区で出土した遺物は多く、整理箱で112箱分である。出土遺物は古墳時代後期から古代におよび、 須恵器、土師器、陶磁器(白磁・青磁・緑釉陶器)、金属器類、土製品、製鉄関連遺物などがある。ま た先行する時期の遺物として縄文時代・弥生時代の土器、石器類も出土した。以下では、整理作業の 都合上器種別に区分し、その中で個別遺構ごとの出土資料について報告する。

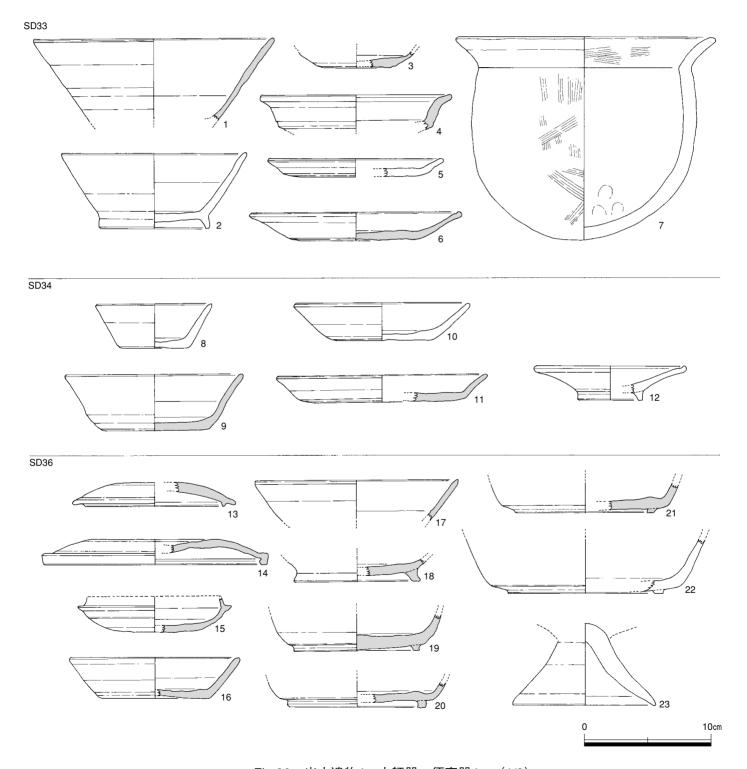


Fig.30 出土遺物4-土師器・須恵器4- (1/3)

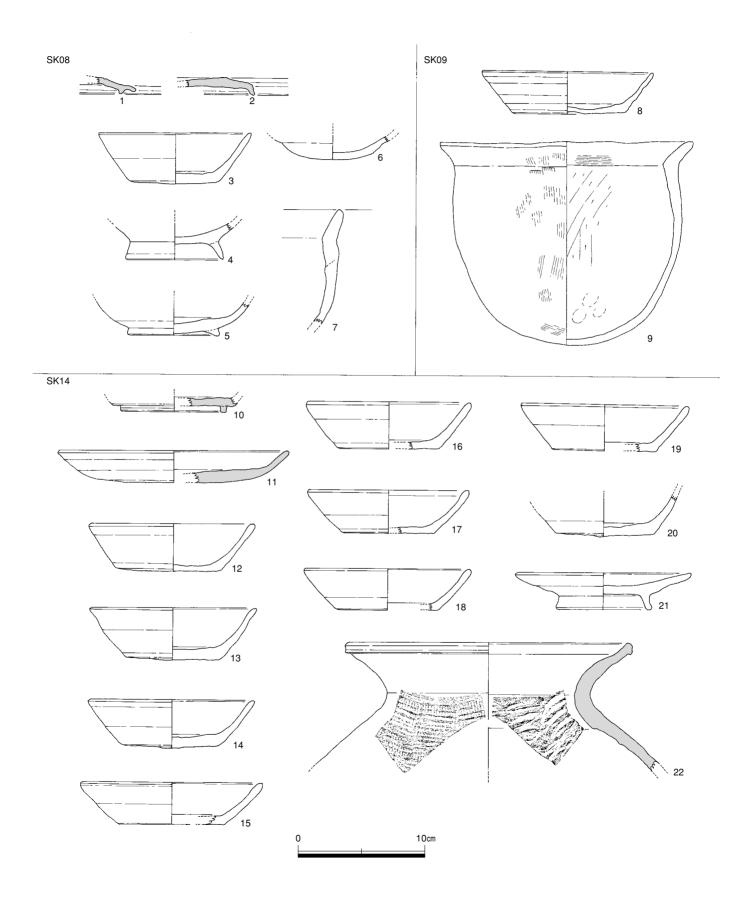


Fig.31 出土遺物5-土師器・須恵器5- (1/3)

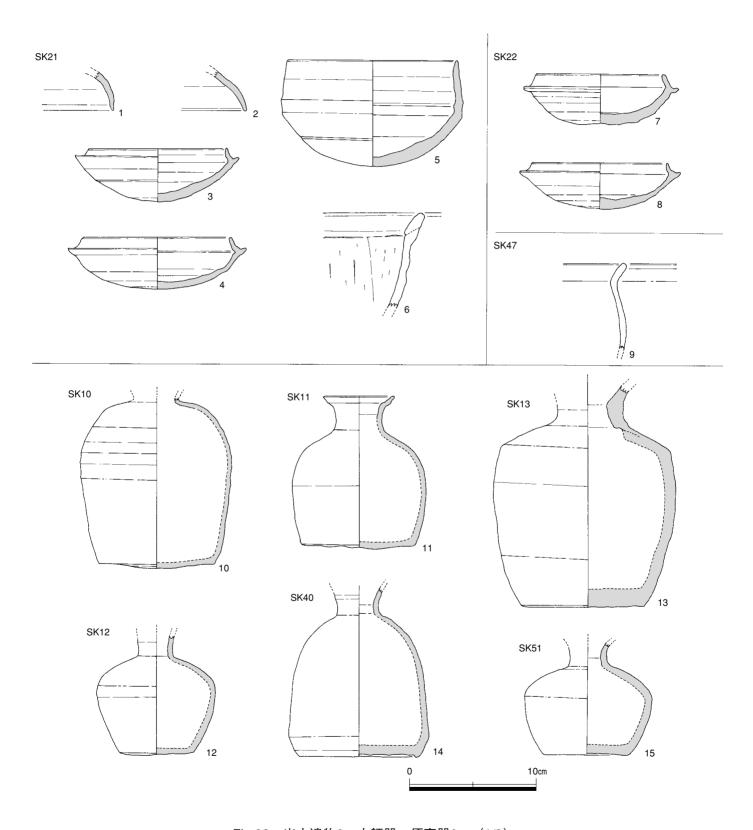


Fig.32 出土遺物6一土師器・須恵器6一(1/3)

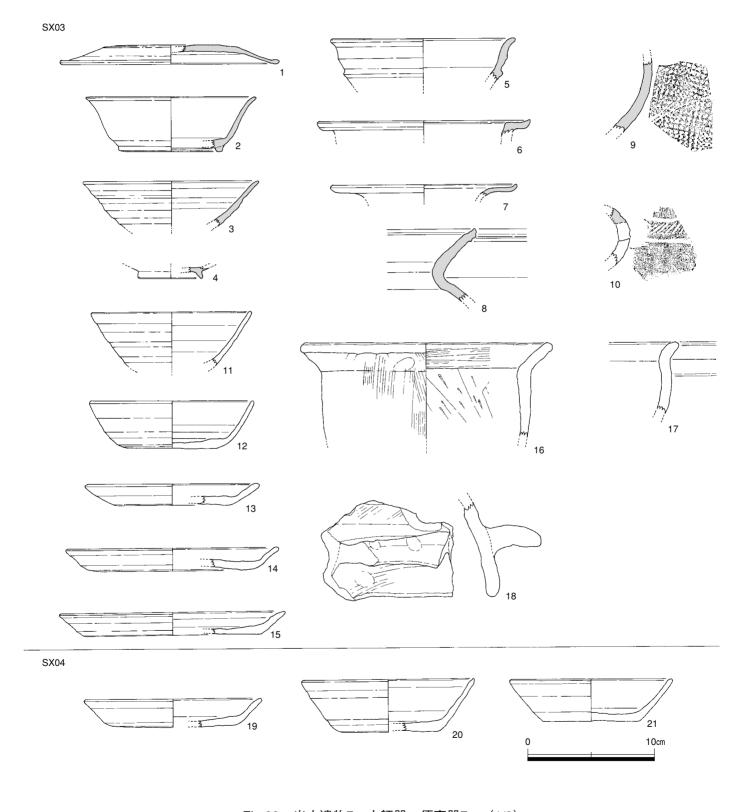


Fig.33 出土遺物7-土師器・須恵器7- (1/3)

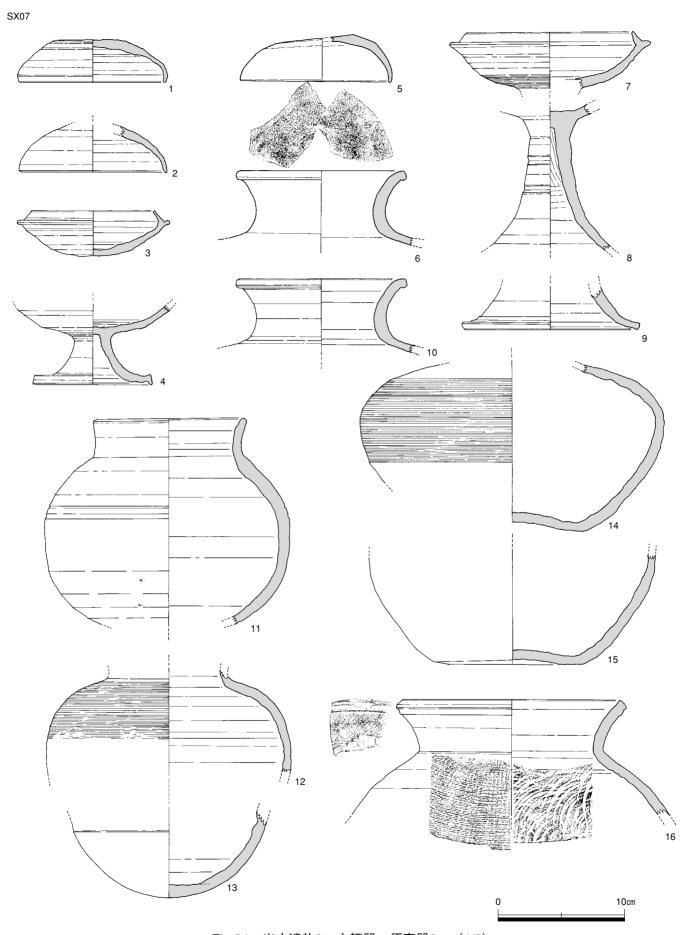


Fig.34 出土遺物8-土師器・須恵器8- (1/3)

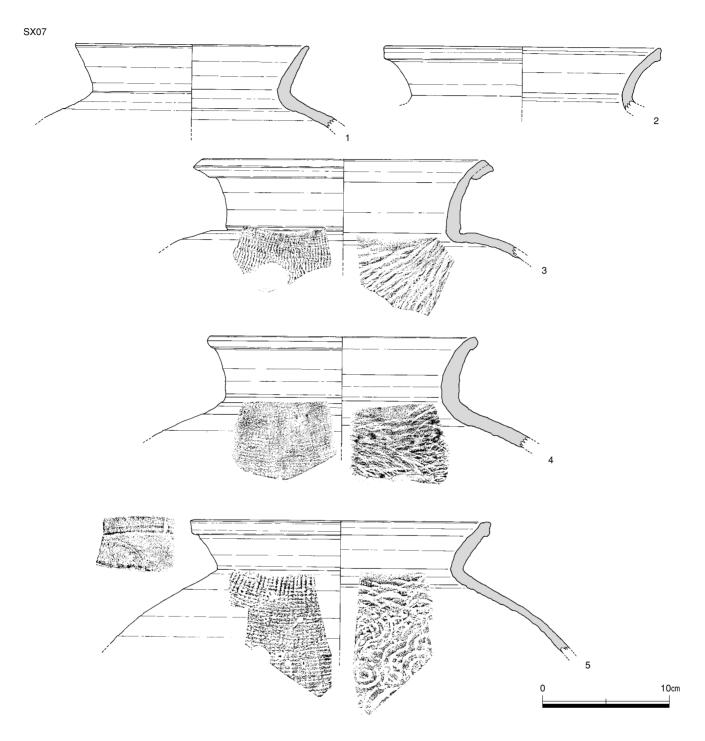


Fig.35 出土遺物9-土師器・須恵器9- (1/3)

1. 土師器・須恵器

Fig.27・28はSD01出土である。Fig.27 - 2~8は須恵器坏蓋、9~19・22は須恵器坏身、20・21は土師器坏身、1は土師器坏か高坏であろう。外面に赤色顔料が残る。23~25は須恵器高坏、26は新羅系土器で印花文壺の肩部片である。27は須恵器壺、28は土師器壺片、29は須恵器壺の取手か。30~34は須恵器甕、35、36は須恵器壺底部である。Fig.28 - 1は須恵器甕、2~4は土師器甕、6、7は須恵器大甕、5は土師器器台であろう。7は器高1mに達すると推定される。坏類で見ると数型式を含み、時期幅が大きい。7世紀代の遺物が多く含まれるが、多くは周辺包含層からの流入であり、連続するSD02・05

出土最新遺物の時期を当てるべきであろう。

Fig.29 - 1~8はSD02出土である。1は須恵器坏蓋、2・3は土師器椀、4~7は土師器皿、8は須恵器 模倣の土師器甕である。土師器椀から見て10世紀前半代の埋没と推定される。

Fig.29 - 9~19はSD05出土である。9~13・16は須恵器坏身、14・15は土師器椀、17は土師器高坏、18は須恵器長頸壺、19は須恵器甕である。土師器椀から見てSD02と同様に10世紀前半代の埋没と推定される。

Fig.29 - 20・21はSD16出土である。いずれも須恵器であり、20は坏身、21は鉢である。遺物は少ないが6世紀末~7世紀初期頃か。

Fig.29 - 22~38はSD32出土である。22~29・37は須恵器坏身である。30~36・38は土師器であり、30は坏身、31~33は坏、34~36は皿、38は甕である。8世紀後半期の遺物が多い。

Fig.30 - 1 ~ 7はSD33出土である。1・3は須恵器坏類、2は土師器坏身、4は須恵器壺口縁か、5は土師器皿、6は須恵器皿、7は土師器甕である。9世紀第1四半期頃か。

Fig.30 - 8~12はSD34出土である。8・10は土師器坏、9は須恵器坏、11は須恵器皿、12は土師器皿 か蓋である。9世紀第2四半期頃か。

Fig.30 - 13~23はSD36出土である。13~22は須恵器で、13・14は坏蓋、15~22は坏身、23は土師器 高坏である。8世紀第一四半期とみられる。

Fig.31 - 1~7はSK08出土である。1・2は須恵器坏蓋、3~7は土師器であり、3は坏、4~6は椀、7は甕である。8世紀前半期か。

Fig.31 - 8・9 はSK09出土である。いずれも土師器であり、8 は坏、9 は甕である。9 世紀前半期か。

Fig.31 - 10~22はSK14出土である。10は須恵器坏身、11は須恵器皿である。12~20は土師器坏、21は土師器皿である。22は須恵器甕である。8世紀後半期か。

Fig.32 - 1~6はSK21出土である。1・2 は 須恵器坏蓋、3・4 は須恵器坏身、5 は須恵器鉢、6 は土師器甕である。6世紀第4四半期と見られる。

Fig.32 - 7・8はSK22出土である。いずれも須恵器坏身である。SK21と同様に6世紀第4四半期と見られる。

Fig.32 - 9はSK47出土である。土師器甕である。時期は不明である。

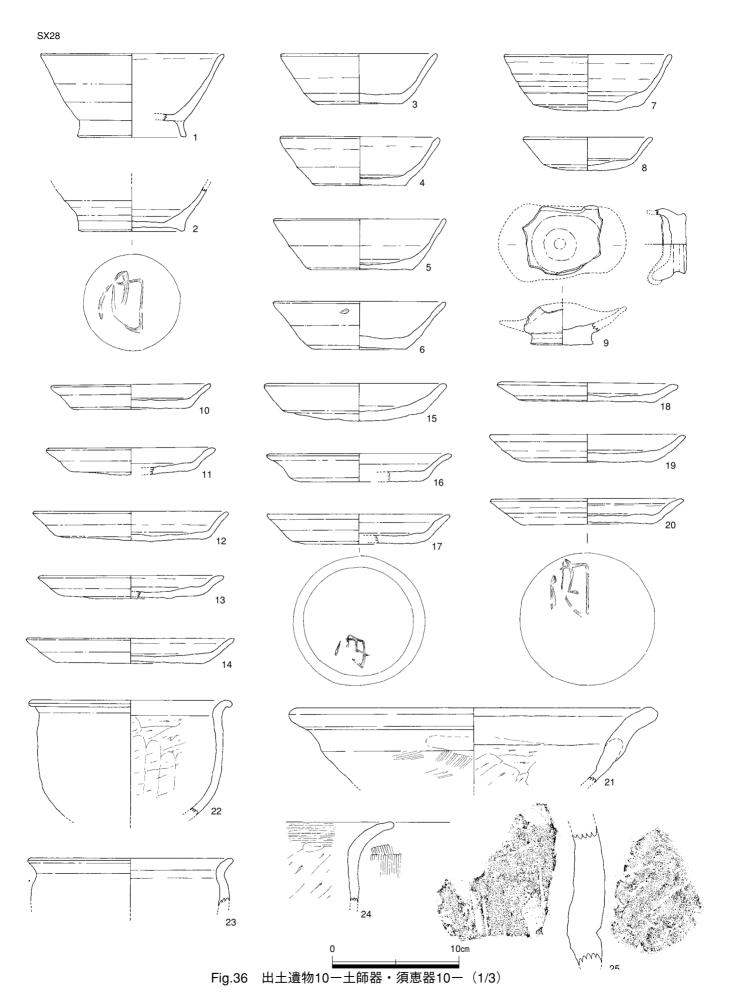
Fig.32 - 10~15は土器埋納遺構SK10~13・40・51出土である。いずれも須恵器瓶形壺で口縁を打ち欠いてある。13は赤焼須恵器である。時期は明確でないがほぼ9世紀後半期と推定される。

Fig.33 - 1~18はSX03出土である。1~10は須恵器で、1は坏蓋、2~4は坏身、5~7は壺口縁部、8、9は甕、10は 聴である。11~18は土師器で、11・12は坏身、13~15は皿、16・17は甕、18は移動式竈の焚き口上部の庇部である。遺物には時期幅があり、7世紀から9世紀前半期を含む。

Fig.33 - 19~21はSX04出土である。いずれも土師器で、19は皿、20、21は坏身である。坏身の器高がやや高く、9世紀中頃か。

Fig. 34・35はSX07出土である。全て須恵器であり、Fig. 34 - 1・2・5 は坏蓋、3 は坏身、4・7~9 は高坏、6・10~15は壺、16・Fig. 34 - 1~5は甕である。坏類は、式、有蓋高坏は長脚無透かしで、7 世紀第1四半期と推定される。

Fig.36はSX28出土である。全て土師器であり、1・2は椀、3~7は坏、8~20は皿である。9はいわゆる「耳皿」である。2・17・20の底面には墨書があり、いずれも一文字で「内」と読める。21は鉢、22・23は小型の甕、24は甕、25は平瓦片である。混入のためか遺構の推定時期と合わず9世紀前半~中頃と見られる。



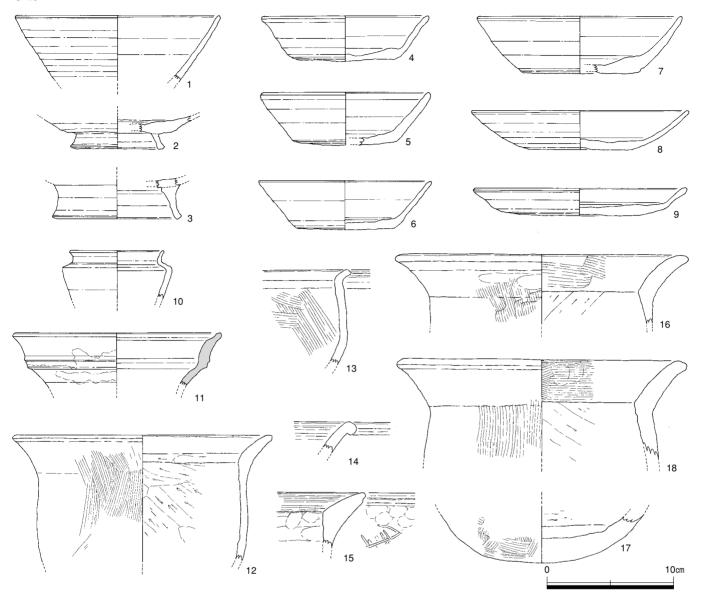


Fig.37 出土遺物11-土師器・須恵器11- (1/3)

Fig.37はSX29出土である。11のみ須恵器で、他は土師器である。1~3は椀、4~7は坏、8・9は皿である。10は小型の短頸壺、11は壺口縁部、12~18は甕である。9世紀後半か。

Fig.38 - 1~14はSP555からの一括出土である。全て土師器で、1~13は坏、14は甕である。13の口唇部に煤が付着しており、灯明皿としての機能が考えられる。坏は器高3.3~4.2cm、口径12.4~13.2cmとややばらつきがある。9世紀後半期か。

Fig.38 - 15・16はSX52出土である。いずれも土師器坏である。いずれも口唇部の一カ所に煤が付着しており、灯明皿としての機能が考えられる。SP555と同一型式である。器高3.6cm、口径12.6~13.0cmである。

- Fig.39 1・2はSX44出土である。1は須恵器坏蓋、2は赤焼須恵器甕である。7世紀前半期か。
- Fig.39 3はSX45出土の土師器甕である。時期は明確でない。
- Fig.40 1はSB24出土の土師器坏身である。8世紀末頃か。
- Fig.40 2~6はSB26出土である。全て土師器であり、2・4・5は坏、3・6は皿である。9世紀前半期か。

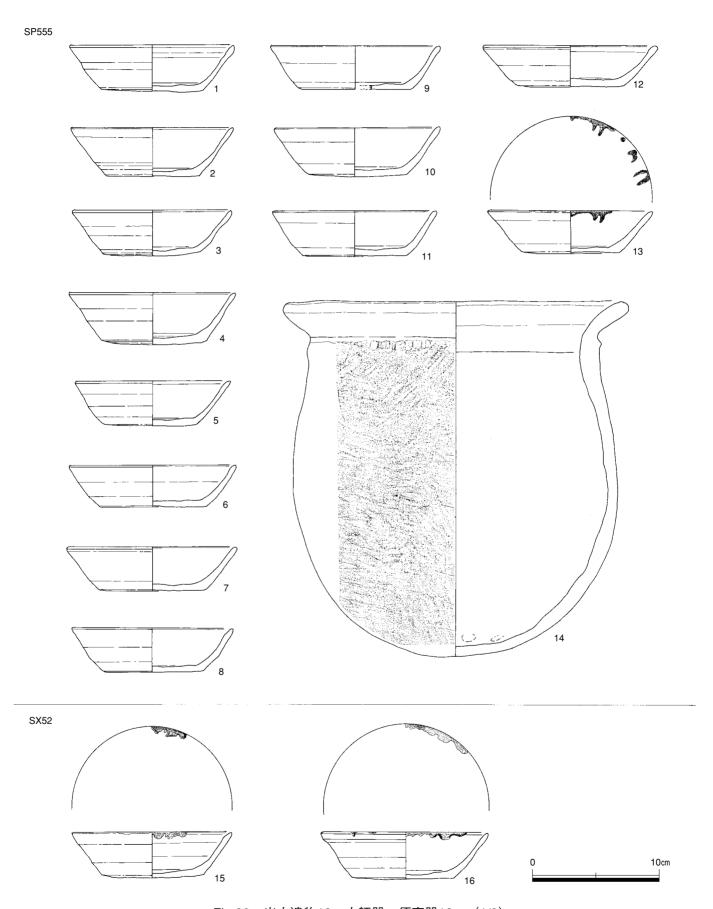


Fig.38 出土遺物12-土師器・須恵器12- (1/3)

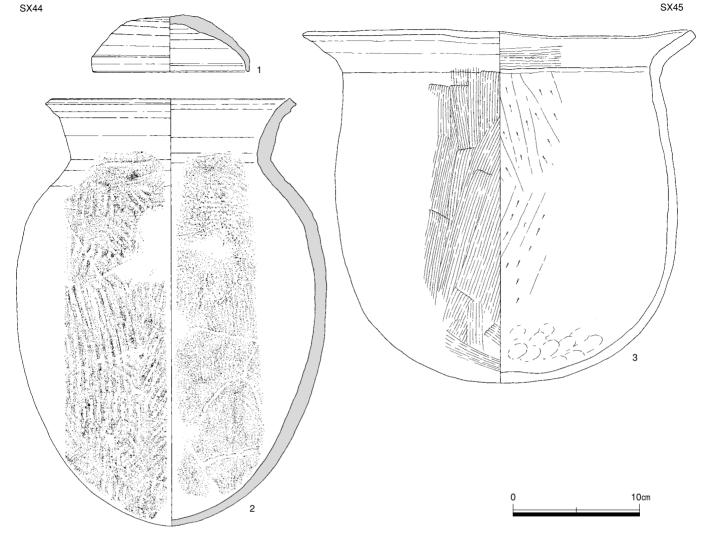


Fig.39 出土遺物13-土師器・須恵器13- (1/3)

Fig.40 - 7~11はSB27出土である。9のみ須恵器で、他は土師器である。7~9は坏、10は皿、11は鉢である。9世紀中頃か。

Fig.40 - 12 ~ 15はSB62出土である。全て土師器で、12・13は坏、14は高坏、15は甑である。9 世紀前半期か。

Fig.40 - 16はSB64出土の須恵器壺胴部片である。時期は明確でない。

Fig.40 - 17はSB65出土の須恵器鉢片である。時期は明確でない。

Fig.40 - 18・19はSB68出土の土師器皿である。8世紀後半期か。

Fig.40 - 20・21はSB69出土である。いずれも土師器で、20は坏、21は甕である。

Fig.41~43は柱穴出土遺物である。Fig.41-1・5・7・11・12は須恵器坏蓋、15・16・19は須恵器皿、9は須恵器甕である。3・4・10は土師器椀、13・14は土師器坏、17・18・21は土師器皿、20は土師器甑、8は土師器甕である。Fig.42-5・8・23・24・34は須恵器坏蓋、9・10・27・30は須恵器坏身、4・32は須恵器壺、15は須恵器甕である。33は土師器椀、2・13・14・17・18・28・31・35は土師器坏、26・30は土師器椀、19・36は土師器鉢、1・1120・24・25・29は土師器皿、7は土師器高坏、3・6・16・21・22・は土師器甕である。Fig.43-9・10・12~14・25・26・29・31・35は須恵器坏身、22・33は須恵器皿、6は須恵器高坏、21は須恵器鉢、28は須恵器壺口縁部、19・30は須恵器甕である。3・27

は土師器椀、4・5・8・11・15・16・24は土師器坏、2・18・20・34は土師器皿、23は土師器鉢、1・7・17・32は土師器甕である。このうち坏24の底面に墨書が認められるものの、判読は不明である。

Fig.44は基壇状施設上面の検出段階に出土したものである。1~4は須恵器坏蓋、7は須恵器壺、8は須恵器坏身、27は須恵器皿、29・32は須恵器甕である。24は土師器椀、5・6・9~16・25・26は土師器坏、17~23は土師器皿、28は土師器小型甕、30・31は土師器鉢である。25・26の坏底部には線刻があるが、判読はできなかった。遺物の時期幅は大きく、8世紀後半期から一部に10世紀前半に及ぶ。まとまっているのは9世紀前半期であるが、限定できない。

Fig.45 - 1~23は基壇状施設上部10cmの深さまでの出土であり、第1層に対応する。全て須恵器で、1

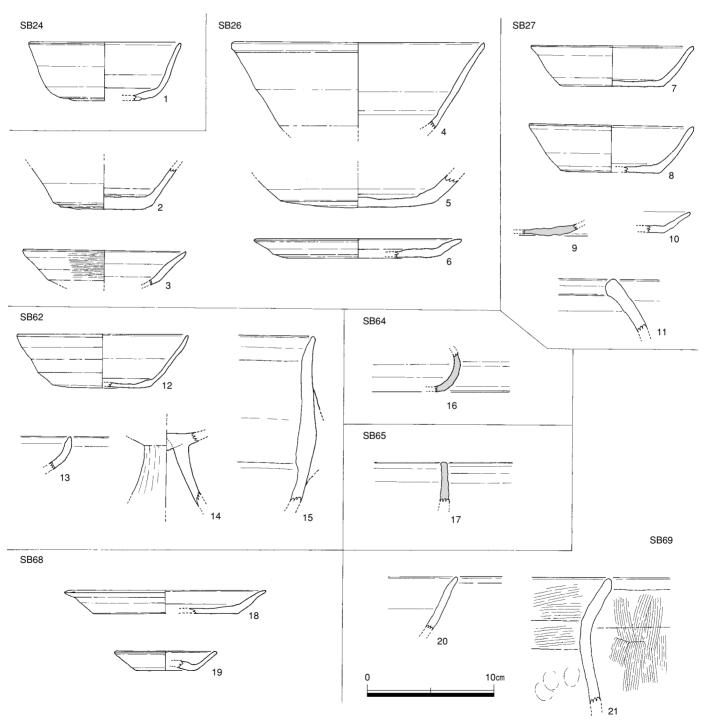


Fig.40 出土遺物14-土師器・須恵器14- (1/3)

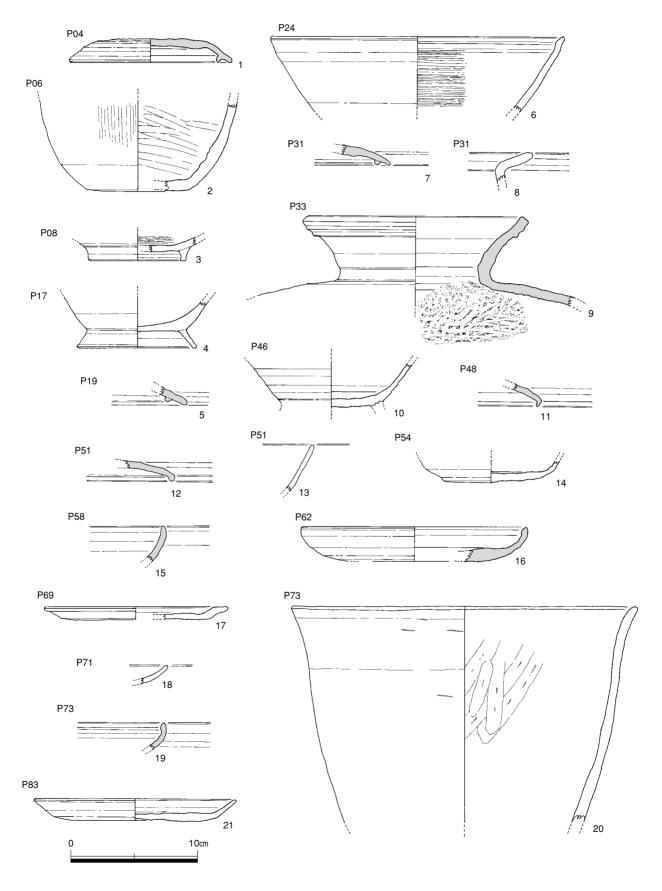


Fig.41 出土遺物15-土師器・須恵器15- (1/3)

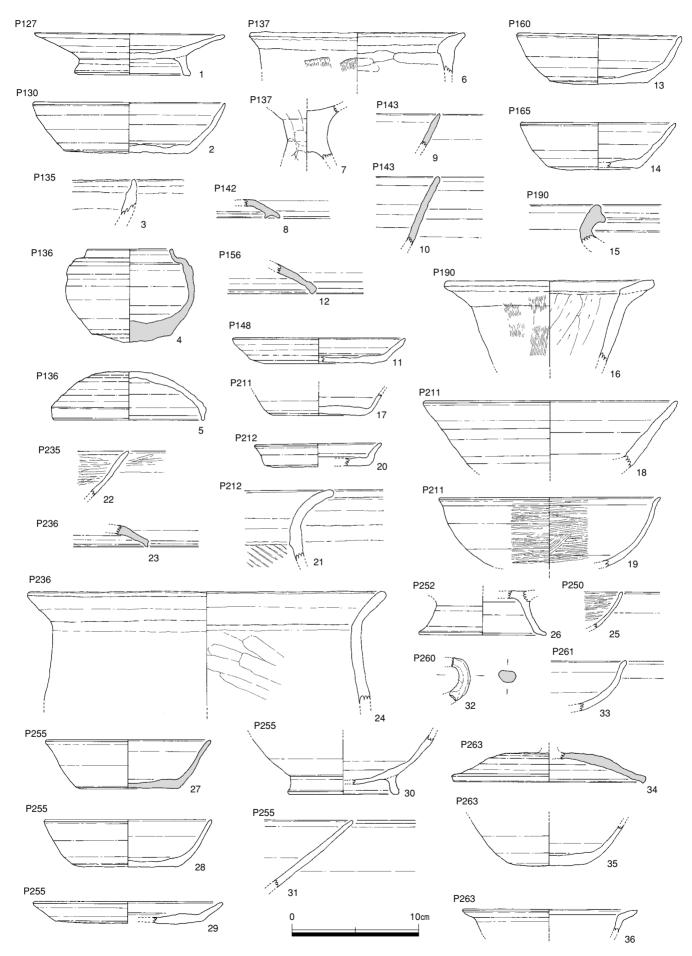


Fig.42 出土遺物16-土師器・須恵器16- (1/3)

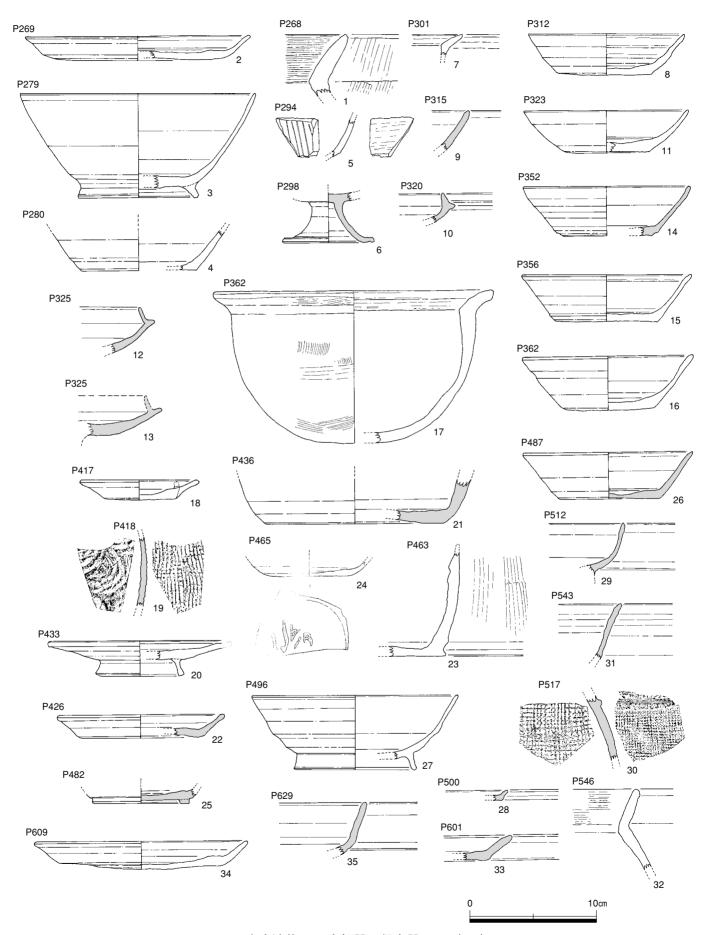


Fig.43 出土遺物17-土師器・須恵器17- (1/3)

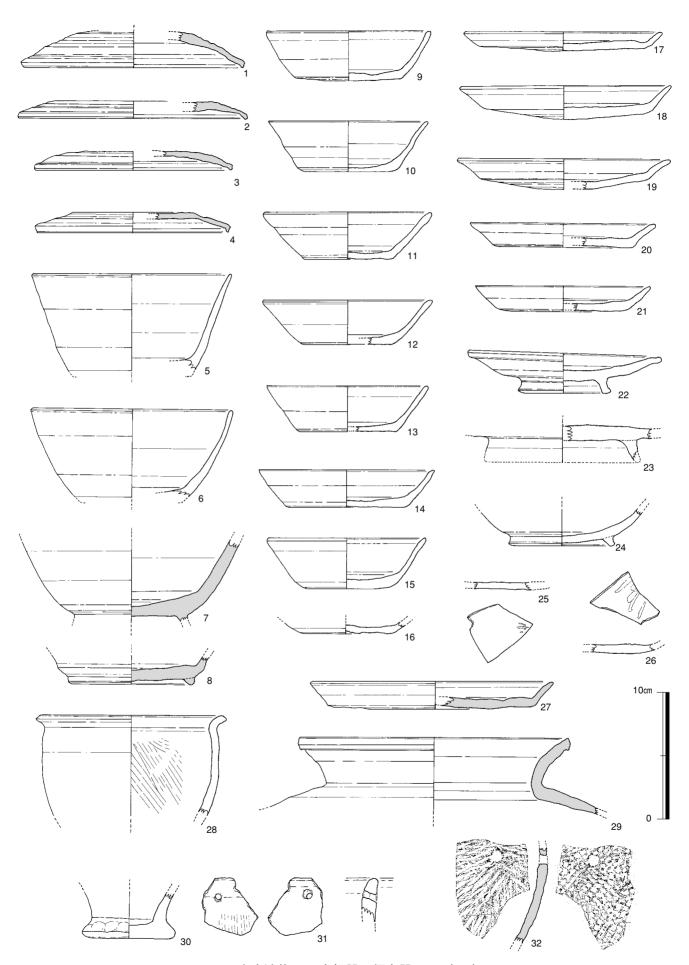
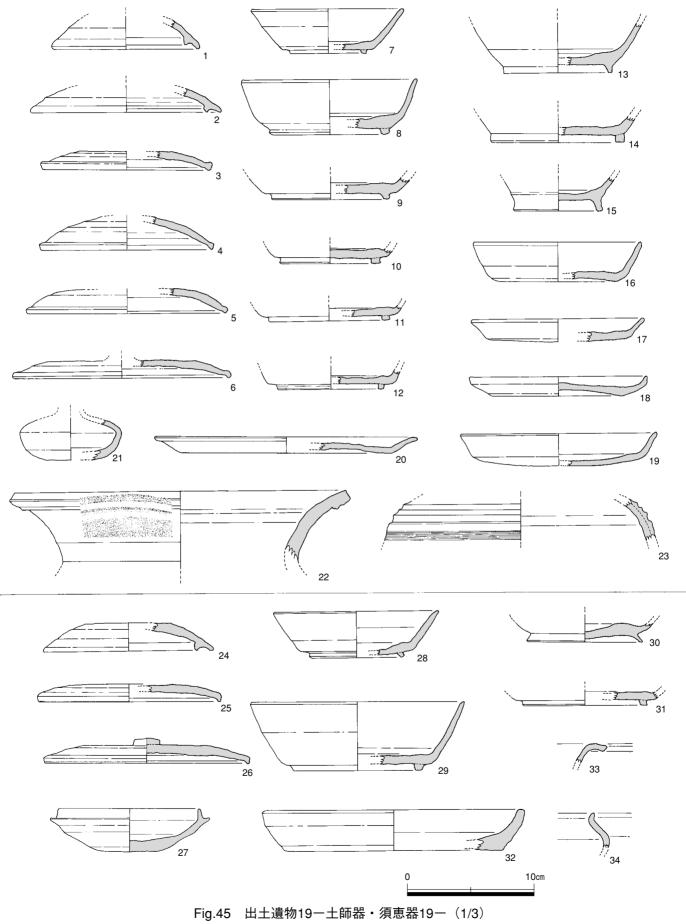


Fig.44 出土遺物18-土師器・須恵器18- (1/3)



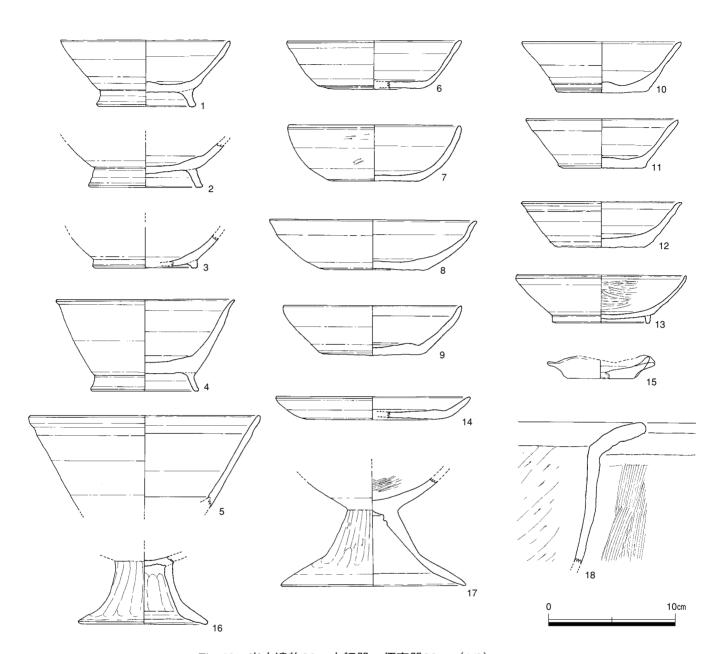


Fig.46 出土遺物20-土師器・須恵器20- (1/3)

~6は坏蓋、7~16は坏身、17~20は皿、21·23は壺、22は甕である。須恵器坏類で見ると複数型式が 混ざり、7世紀第3四半期から8世紀第4四半期まで及ぶ。

Fig.45 - 24~34は基壇状施設中位10~30cmの深さで出土した。2 層に対応する。全て須恵器であり、24~26は坏蓋、27~31は坏身、32は皿、33・34は壺である。須恵器坏類で見ると複数型式が混ざり、7世紀第1四半期から8世紀第3四半期に及ぶ。

Fig.46は基壇状施設西側の上部包含層である黒色土中出土である。全て土師器で、1~12は坏身、13~15は皿、16・17は高坏、18は甕である。このうち15は「耳皿」である。9世紀前半期とみられる。

Fig.47、48は基壇状施設西側の下部包含層である暗褐色土中出土である。このうちFig.47は、より包含層の下半部を主とするが、Fig.48はやや上位の遺物まで含んでいるおそれがある。Fig.47は1~14・

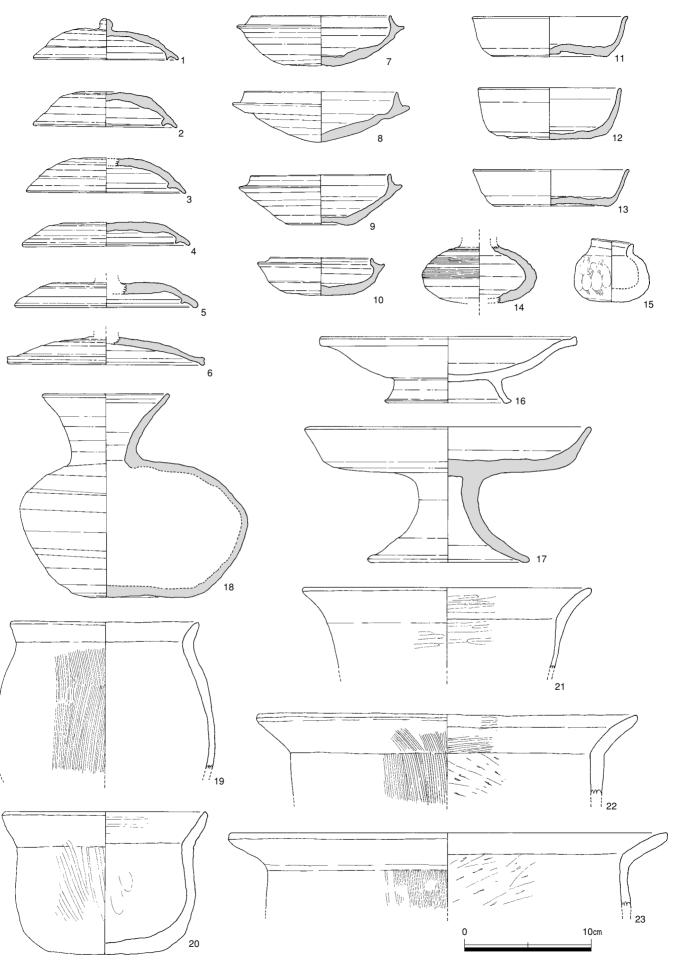


Fig.47 出土遺物21-土師器・須恵器21- (1/3)

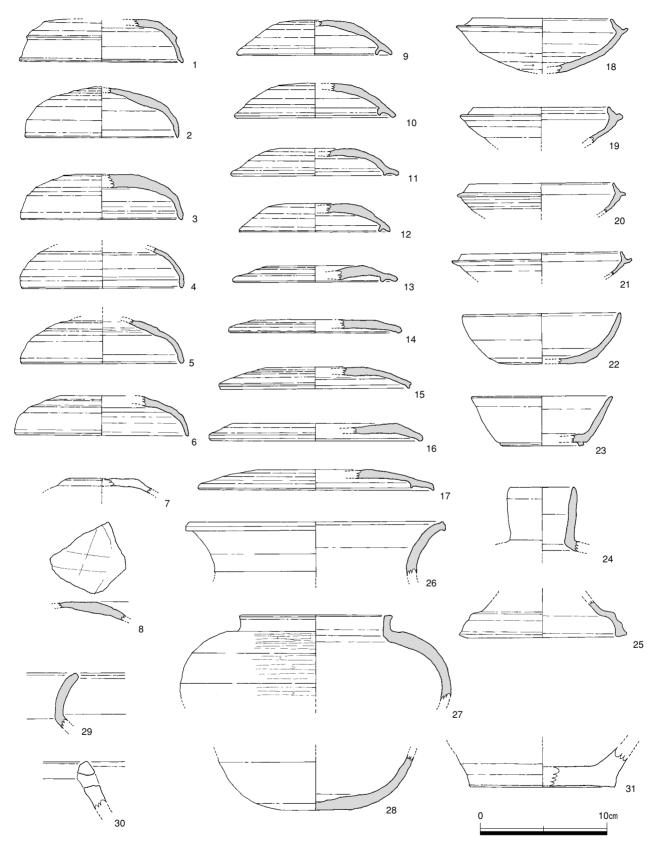


Fig.48 出土遺物22-土師器・須恵器22- (1/3)

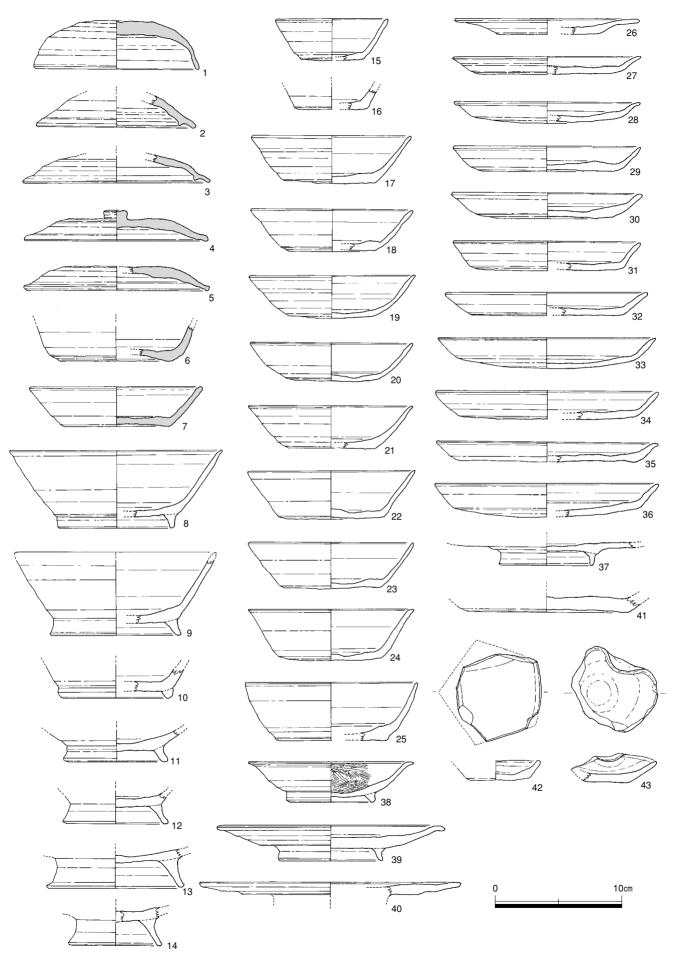


Fig.49 出土遺物23-土師器・須恵器23- (1/3)

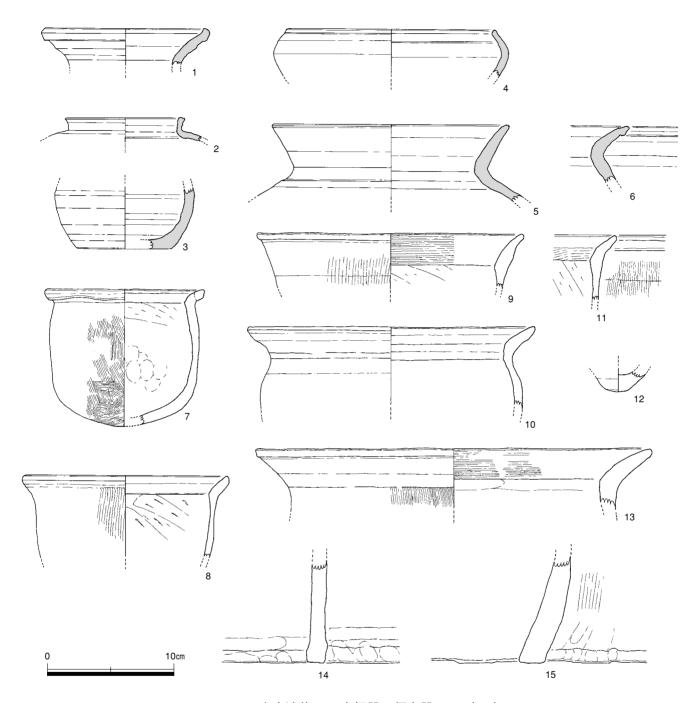


Fig.50 出土遺物24-土師器・須恵器24- (1/3)

17・18が須恵器、その他は土師器である。須恵器は1~6が坏蓋、7~13が坏身、14が小型壺、17が高坏、18は平瓶である。土師器は15が手づくね壺、16は皿、19~23が甕である。20が小型甕である。Fig.48は30・31が土師器であり、その他は全て須恵器である。1~17が坏蓋、18~23が坏身、24~28が壺、25は台坏壺が脚部、30・31が鉢であろう。1の坏蓋は今調査区で最も古い形態的特徴を持つ。須恵器坏類で見ると複数型式が混ざり、6世紀第2四半期から8世紀第1四半期まで及ぶ。より単純な組成とみられるFig.47の遺物は7世紀第4四半期である。

Fig.49・50は基壇状施設南側の敷石遺構とその下部の包含層出土である。Fig.49は1~7が須恵器で、他は土師器である。須恵器は1~5が坏蓋、6・7が坏身である。土師器は8~25が坏、38~43が皿である。

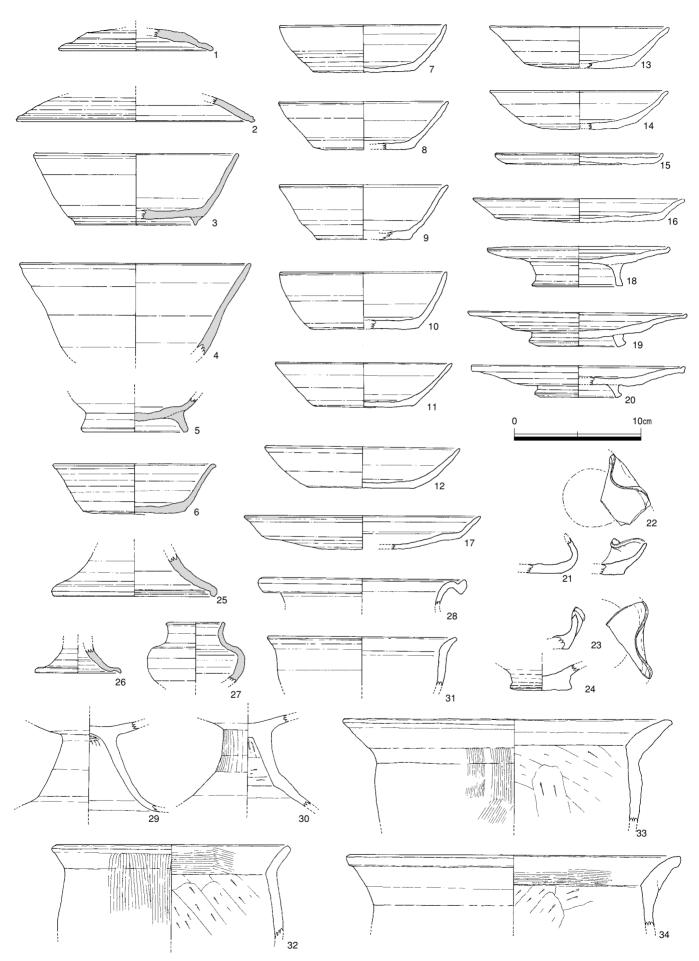


Fig.51 出土遺物25-土師器・須恵器25- (1/3)

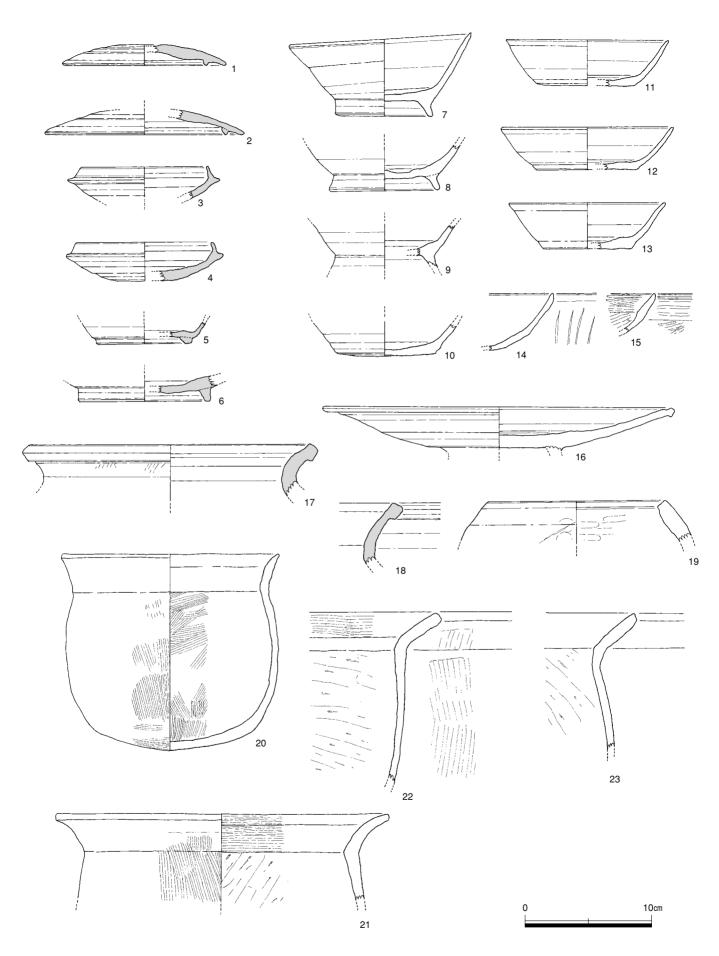


Fig.52 出土遺物26-土師器・須恵器26- (1/3)

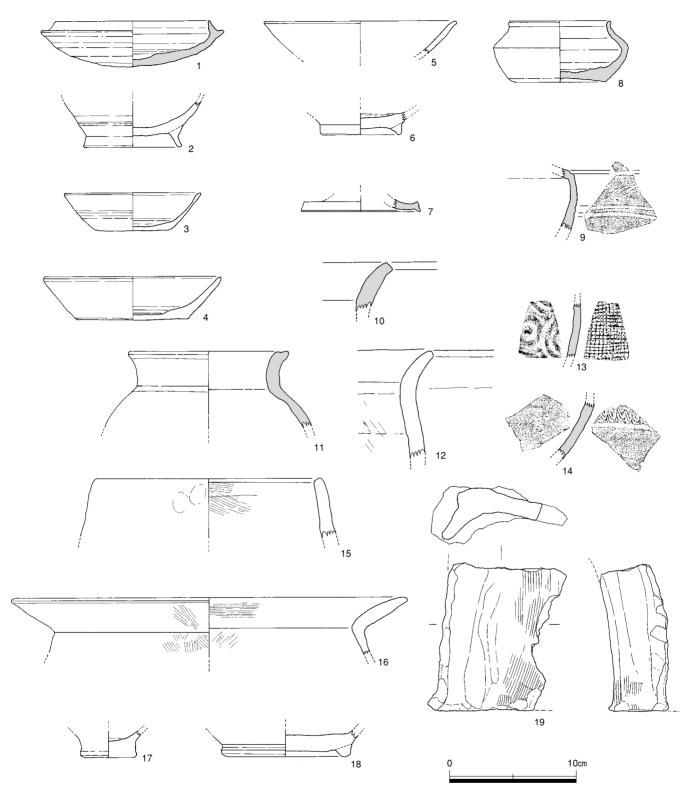


Fig.53 出土遺物27-土師器・須恵器27- (1/3)

このうち42・43は「耳皿」である。Fig.50は1~6が須恵器、他は土師器である。須恵器のうち1~3は 壺。4は鉢、5・6は甕である。土師器は7~13が甕、14・15が移動式竈底部である。13の小型甕は丁寧 な作りである。坏類で見ると複数型式が混ざり、7世紀第1四半期から9世紀後半期に及ぶ。

Fig.51は基壇状施設北側の包含層出土である。1~6・25~27が須恵器で、他は土師器である。須恵器は1・2が坏蓋、3~6が坏身、25・26が高坏、27が壺である。土師器は7~14が坏身、15~23が皿、24

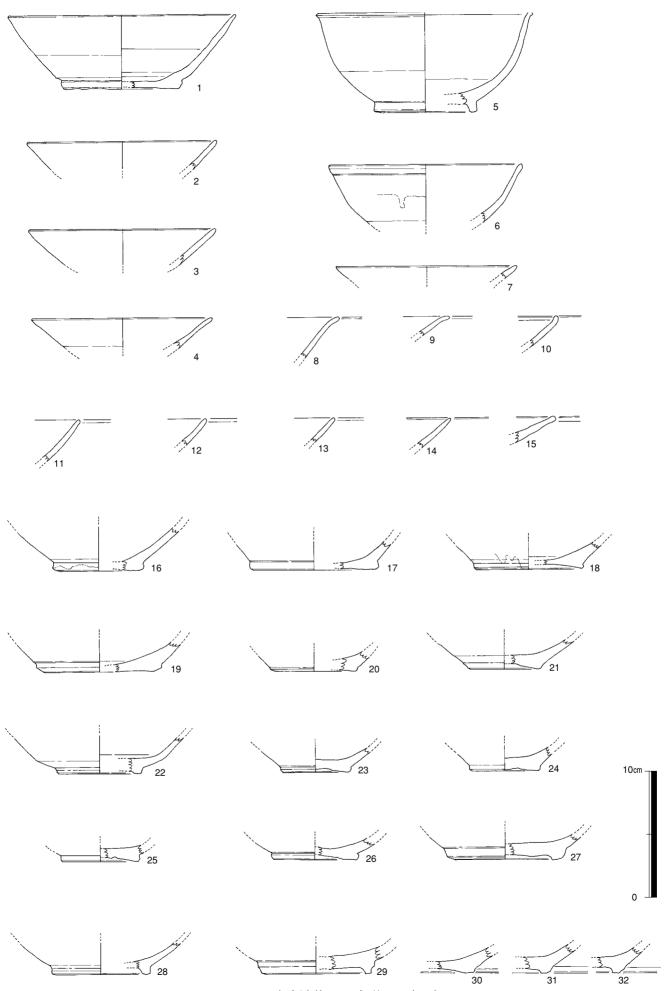


Fig.54 出土遺物28-青磁1-(1/3)

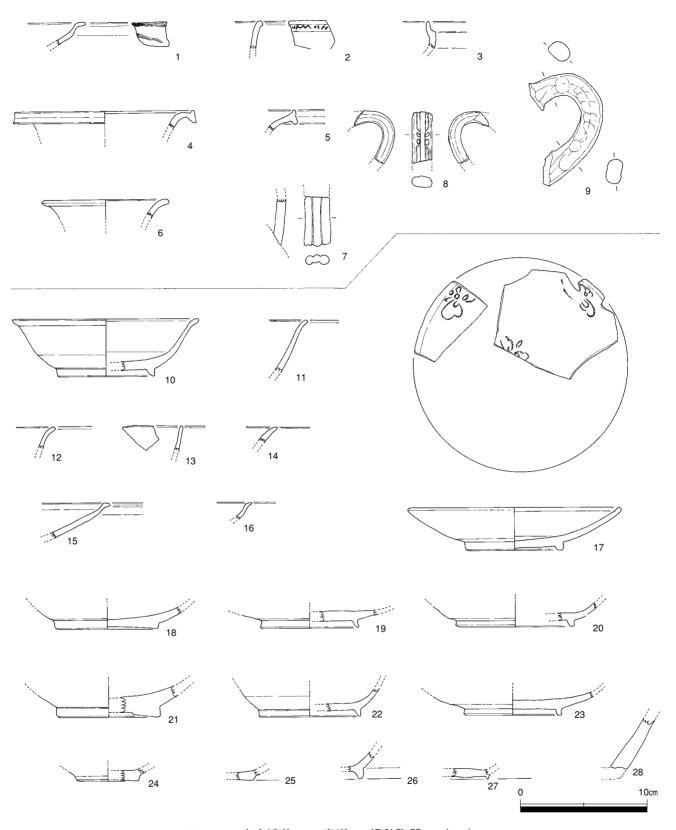


Fig.55 出土遺物29-青磁2・緑釉陶器- (1/3)

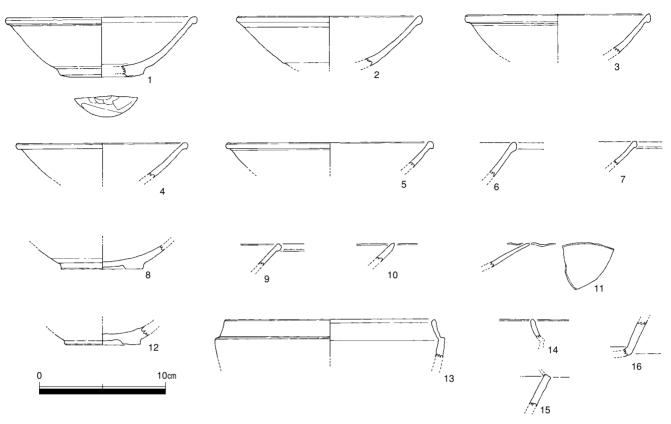


Fig.56 出土遺物30一白磁一(1/3)

が鉢、28が壺、29・30が高坏、31~34が甕である。21~23は「耳皿」である。坏類で見ると7世紀第4 四半期から9世紀前半期に及ぶ。

Fig.52はその他の包含層やトレンチ出土である。1~6・17・18は須恵器、その他は土師器である。 須恵器は1・2が坏蓋、3~6が坏身、17・18が甕である。土師器は7~14が坏身、15・16が皿、19が鉢、20~23が甕である。

Fig.53は重機による表土除去時や表面採集資料である。1 は須恵器坏身、2~6・18は土師器坏、7 は 須恵器高坏、8・9・11・14は須恵器壺、10・13は須恵器甕、12・16は土師器甕、15・17は土師器鉢、 19は土師質の移動式竈焚き口脚部である。

2.青磁

Fig.54・55 - 1~9は本調査区出土の青磁である。青磁は小破片を入れると50点以上が出土した。ほとんどが越州窯系青磁である。Fig.54 - 1~32は椀、Fig.55 - 1は輪花皿、2は鉢、3は合子、4~9は壺(水注)である。7・8は水注の耳、9は取手である。2の口唇部と8の背面には装飾が施されている。青磁の出土は第1面SD01(11・19・31)、SD02(26)、SD05(18・29)、SD06(22)と第2面新段階のSX03(1・5・8・9・12~15・23・30)である。

3. 緑釉陶器

Fig.55 - 10~28は緑釉陶器である。本調査区で小破片を含め30点ほどが出土した。10~13、18~27は椀、14~17は皿、28は壺である。17は緑釉緑彩皿で内面に緑彩と細線による花文が描かれる。緑釉陶器の出土は第1面SD01(3、14、18)と第2面新段階のSX03(4、5、8、11、12、20)、SX04(23)である。

4. 白磁

Fig.56は白磁である。本調査区で20点弱が出土した。精良緻密な胎土、小さな玉縁、蛇目高台など

が特徴であり、白磁椀 類が多い。Fig.56 - 1はSX03礎石上面に貼り付いて出土した椀である。2~ 7・9・10は椀口縁部、8・12は底部、11は輪花縁皿である。13~16は合子身であり、同一個体の可能性 がある。類例の少ない貴重な資料である。白磁の出土はSD01(11・13) SD05(7) SX03(1・6・ 8・12・15) などであり、 第2面新段階の基壇状施設と第1面溝SD01への混入とみられる。

5.硯

Fig.57は硯である。本調査区では2点の硯が出土した。1は溝SD01出土の須恵器円面硯である。透 かしは9カ所に復元されるが、脚部以下を欠損する。2は基壇状遺構西側3層出土の軟質須恵器の風 字硯の破片である。これらは形態から8~9世紀に位置付けられ、SD01へは遊離・混入したものと見 られる。

6. 金属器類

Fig.58~60は鉄器である。5区からは比較的多くの金属類が出土した。取り上げ、図化出来たものは 鉄器53点、青銅器3点である。鉄器(Fig.58・59 - 1~28・32~56)は多種であり、武器類(刀・鏃) 農工具類(刀子・鋤先・斧・錐・釘)、馬具類(轡・鉸具)、その他があり、青銅器には板状製品 (Fig.59 - 29・30)と融滴状塊(Fig.59 - 31)がある。

Fig.58 - 1~5は鉄鏃であり、1は雁又型、2~5は平根式圭頭型である。また不明確であるが、 Fig.60 - 54・54は鏃軸部の可能性がある。11は刀基部と見られる。6~10・12は刀子破片である。19~ 22は鋤先である。19は検出時に原型を保っていたが、保存状況が悪く、取り上げ時に崩壊した。20~ 22は同一個体と見られるが、接合しない。18は袋状鉄斧であり、完形で保存状況は良い。形態から弥 生時代の可能性もある。52は断面方形で両端が尖っている。釘の可能性もあるが、錐と考えた。32~ 48は釘である。頭部を逆L型に整形したもの(32~34)と、未整形のもの(35·36)がある。32·34 には木質が残り、34は厚さ3~4cmと約5cm厚さの二種の木材を固定している。26は馬具である。崩壊し ているがハミ、鏡板、引き手が関連する部分であるが、癒着、錆化が著しい。27・28は_具の断片であ る。その他として23~25は同一個体の鋳物製の容器と見られる。胴部に屈曲部があり、鍋状の器形と 推定される。胴部最大径は40cm前後と推定できるが、類例がなく復元は避けた。14・15は鉄鏃かと思 われるが、錆化が著しく不明である。13・16・17は板状品、49~51・55・56は棒状品であり、性格は 不明である。18は鉄素材か。これらの鉄器は多くが第2面出土であり、特にSX03(4・28・34)、SB30 (26) SD32(19) SD33(10·23)など第2面新段階の基壇状遺構上面に出土し、共伴するものと見 られた。

7. 石器

5区では少量の石器類も出土した(Fig.61~64)。石器には剥片石器類と礫石器類がある。石器の特 徴や共伴する土器類から、ほとんどが縄文時代晩期前葉と推定できる。ただし当該期の遺構や包含層

は存在せず、後世遺構への混入品 として出土した。剥片石器は総数 で95点有り、石材は89点が黒曜石、 6点がサヌカイトである。組成は 石器 8 点、剥片・砕片79点、石核 8点である。サヌカイトのうち5

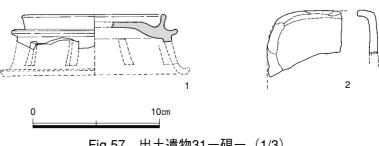
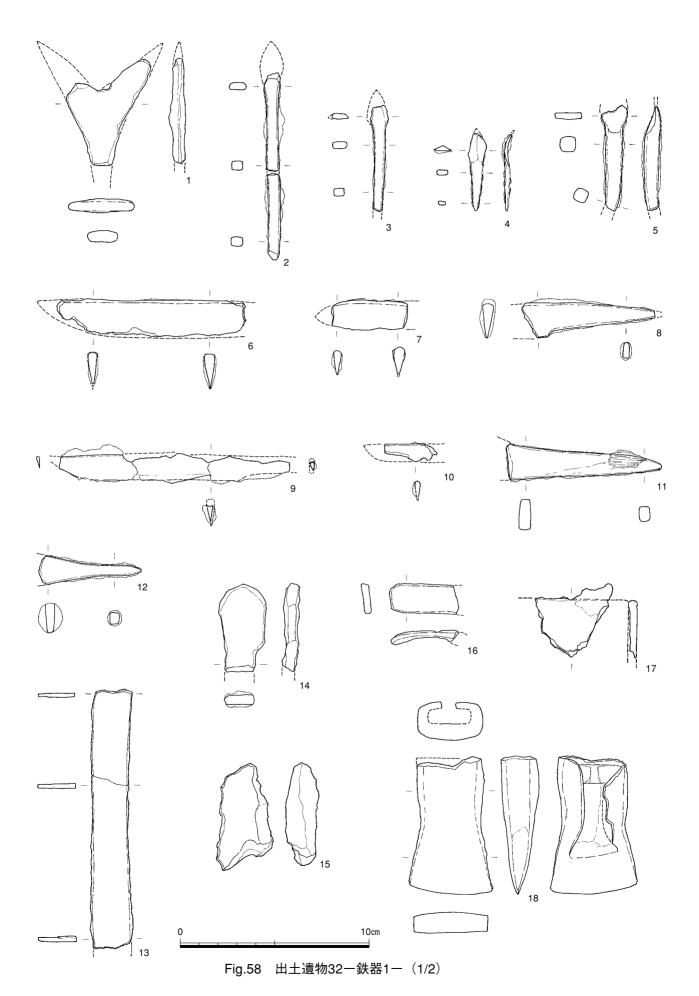


Fig.57 出土遺物31一硯一(1/3)



- 75 -

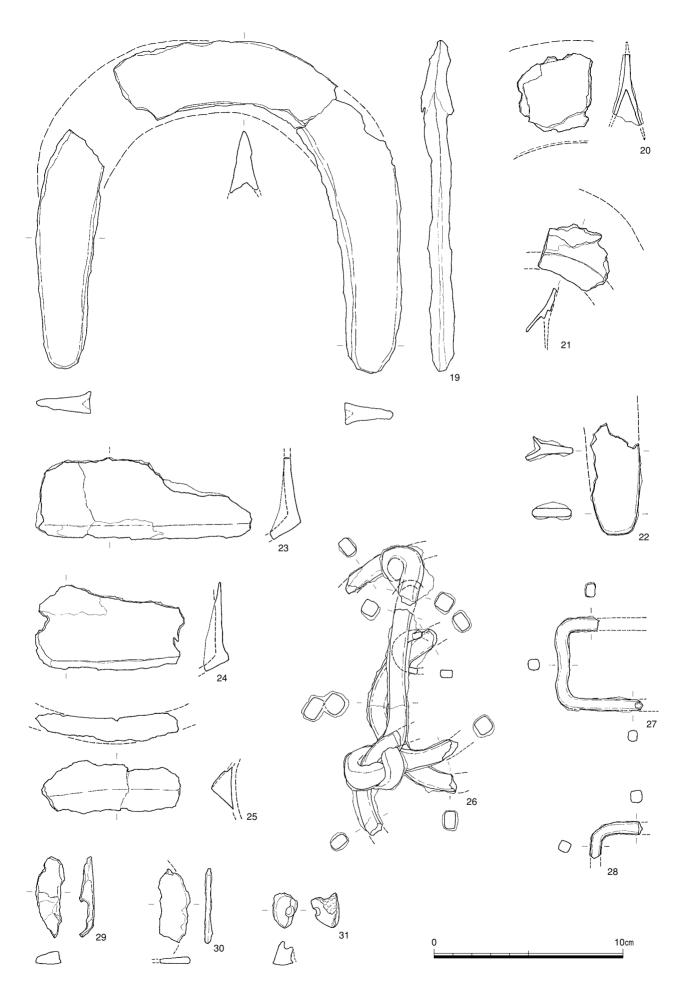


Fig.59 出土遺物33-鉄器2- (1/2)

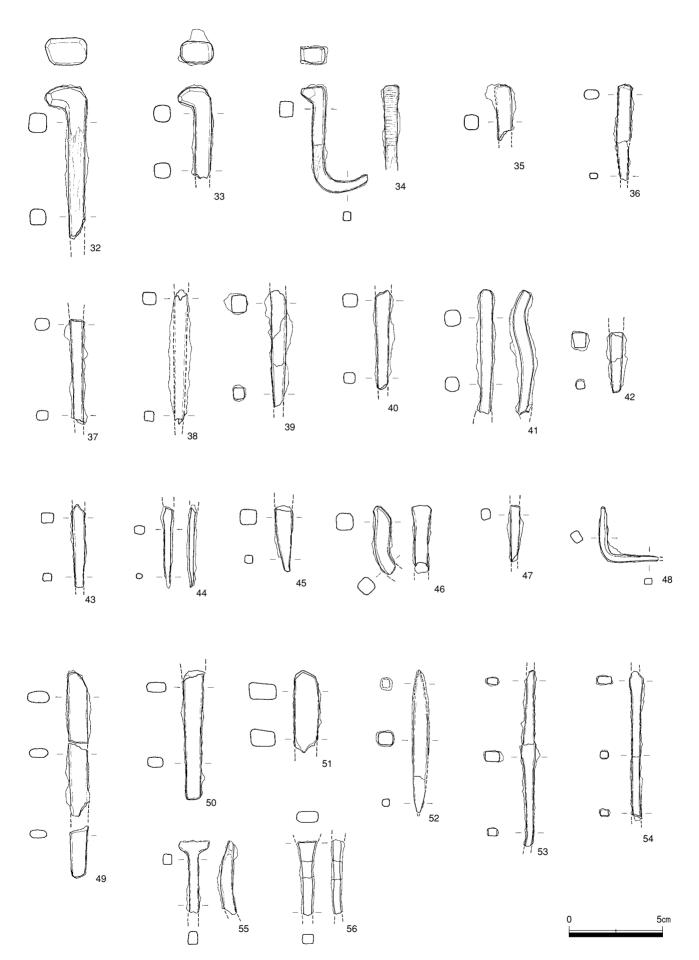


Fig.60 出土遺物34一鉄器3一(1/2)

点は石器や二次調整、微細剥離がある剥片などで、大型剥片素材を含んでいる。残り1点のサヌカイトは剥片であり、石核は存在しない。以上のサヌカイトは全て製品での搬入とみられる。また黒曜石のほとんどは腰岳産出と推定される。これらの石材の表面風化は進んでいない。1・2は黒曜石製の石鏃である。2は先端整形、背面に自然面を残し、未製品とみられる。3はサヌカイト製の石匙である。4は黒曜石製の石錐、5~9は刃縁に二次調整や微細剥離のある剥片である。鈴桶技法ではないが、縦長剥片が多い。10・11はサヌカイト製の微細剥離のある剥片である。横長の不定形剥片の刃縁に刃こぼれ状の剥離が見られた。12は黒曜石製の石核であり、打面調整は不十分で多くが自然面打面から縦長剥片を剥離している。最終剥離が階段状に終わり剥離作業を中止している。

礫石器には磨製石器、打製石斧、砥石がある。磨製石器には扁平片刃石斧、太形蛤刃石斧、石製穂 摘具(石包丁)がある。13の片刃石斧は頁岩で刃部欠損、14の蛤刃石斧は今山産玄武岩製で基部破片、 15の穂摘具は立岩産で端部破片である。これらは弥生時代中期中~後葉に比定される。打製石斧はい わゆる「扁平打製石斧」である。16~18は今山産玄武岩製であり、16・17は分銅型、18は短冊型を呈 する。こうした形態から剥片石器類と同時期の縄文時代晩期前葉と推定できる。砥石には小型柱状の 19~22、小型板状の27~29、自然礫利用の23~26・30がある。前二者は細目砥、仕上げ砥であり、後 者は中目砥や荒目砥である。その時期は組成からみて鉄器出現以降と見られるが、ほとんどは共伴時 期を明確にできなかった。その中で26は第2面溝SD32内からの出土であり、古代に所属することも考 えられる。

8. 石製品

石製品には紡錘車、石鍋等がある(Fig. 64)。いずれも滑石を石材としている。31~35は紡錘車であり、31が扁平、他は断面台形を呈する。32を除いて全て破断品であり、無文である。37~39は石鍋破片である。37・38は口縁部、39は底部である。37には片口部の削出が見られる。内外面の調整は荒く鑿痕跡が多く残されている。36は滑石製の棒状製品である。一端は平坦に仕上げられ、もう一端は折損している。外面は細かな削りで仕上げられている。

9. 土製品

土製品には土錘、鞴羽口、壁材、土製円盤などがある(Fig. 65~67)。Fig.65·66-1~60は土錘である。全て中央縦穿孔で菱形~棒状の形態をなす。24~26には側面に縦方向の沈線が認められるが、他は全て指押さえ、ナデ調整で仕上げられている。法量から長さ3cm前後のもの(1~26)4cm前後のもの(27~42)5cm前後のもの(43~57)6cm以上(58~60)に四区分されるが、その差異は漸位的であり、用途や機能差に関連するかは疑問である。ほとんどの土錘は基壇状施設上面で出土しており、第2面新段階に所属する。漁網錘とすれば室見川の中流域に近い遺跡立地から、内水面漁業に関わるものと考えられる。Fig.67-1~4は鞴羽口である。1·2は基部欠損、3·4は両端欠損している。形態は僅かに先細りの円筒形であり、径7~8cm、送風孔は円形で2.5~3cmである。1·2の先端は溶解し、鉄錆やガラス質成分が付着している。第2面出土である。5は壁材と見られる。イネ科と見られる植物質の混入痕があり、外面は平坦にナデ仕上げ、内面は崩壊している。一次焼成を受けているが、機能は不明である。第2面出土である。6は土製円盤で、径約5cm、厚さ約2cmを測り、手掌で押し潰した状態の荒い造りである。第2面出土である。

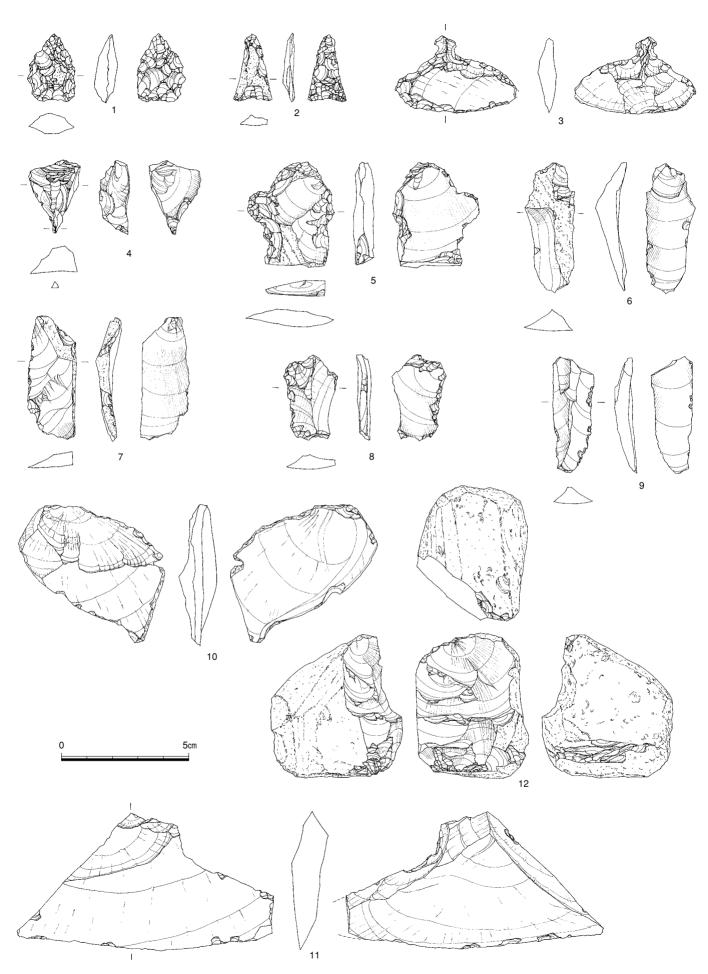


Fig.61 出土遺物35-石器1-(2/3)

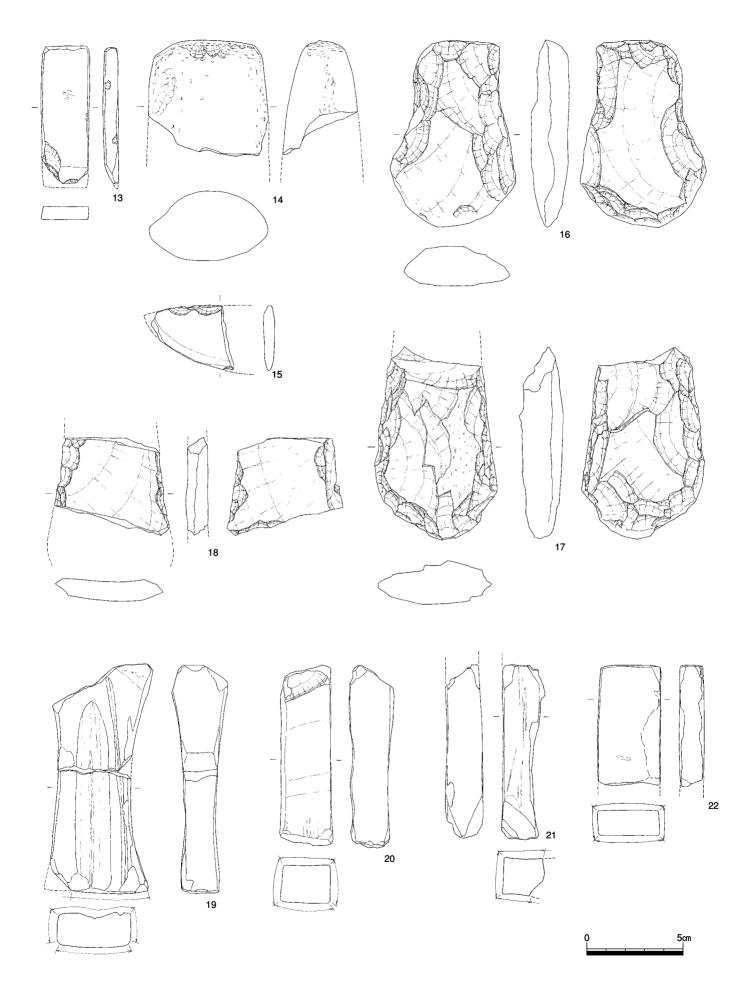


Fig.62 出土遺物36一石器2一(1/2)

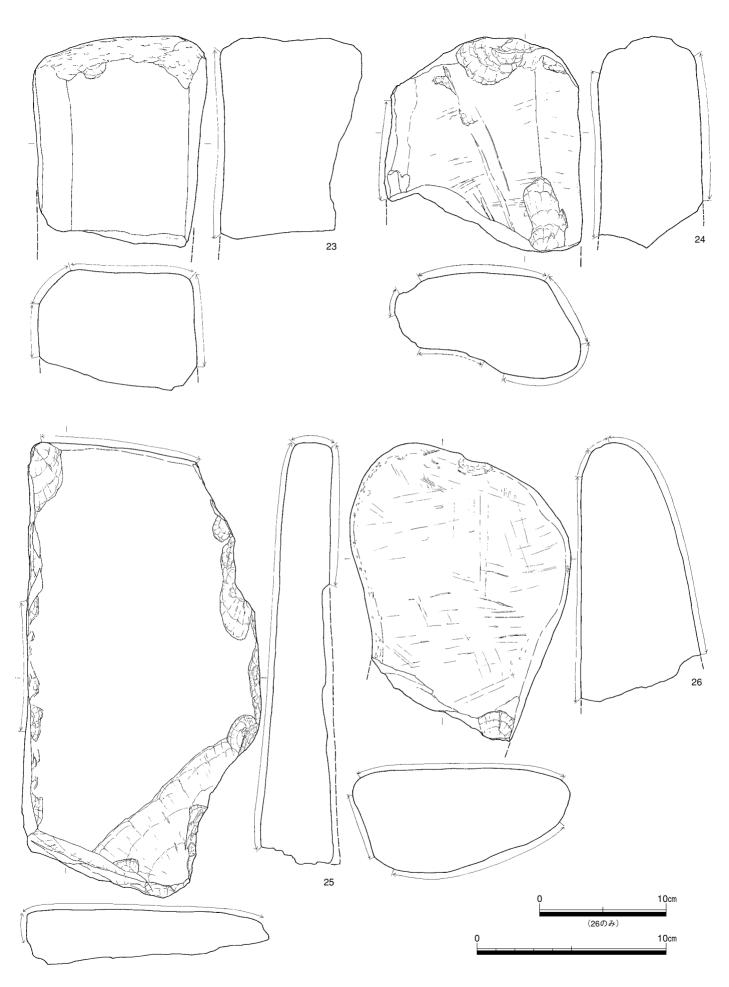


Fig.63 出土遺物37-石器3- (1/2・1/3)

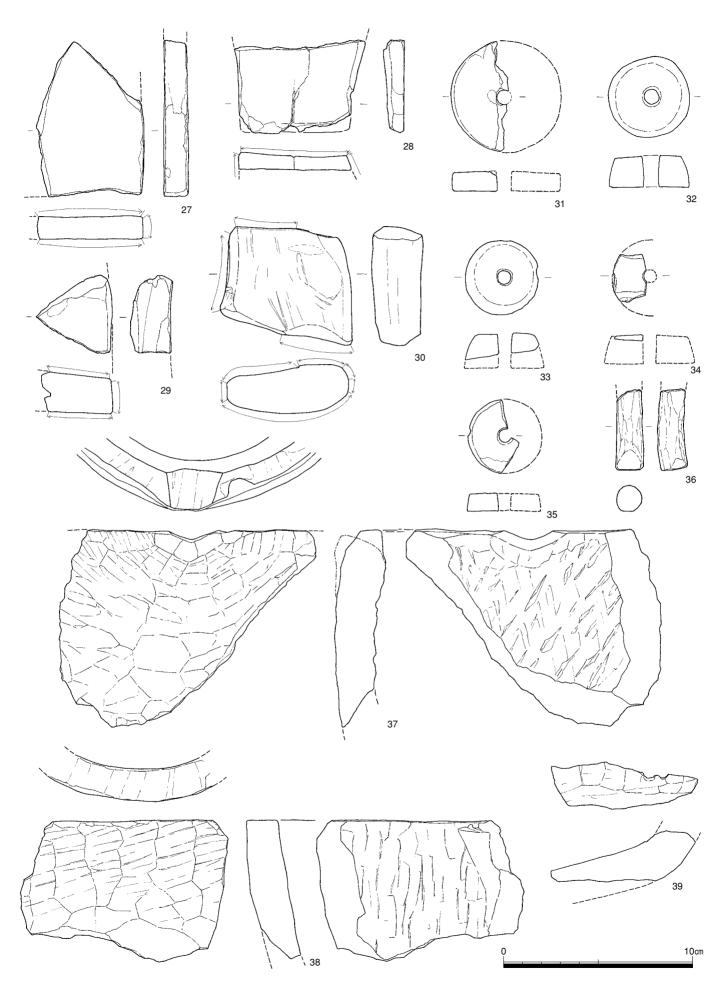


Fig.64 出土遺物38-石器4·石製品-(1/2)

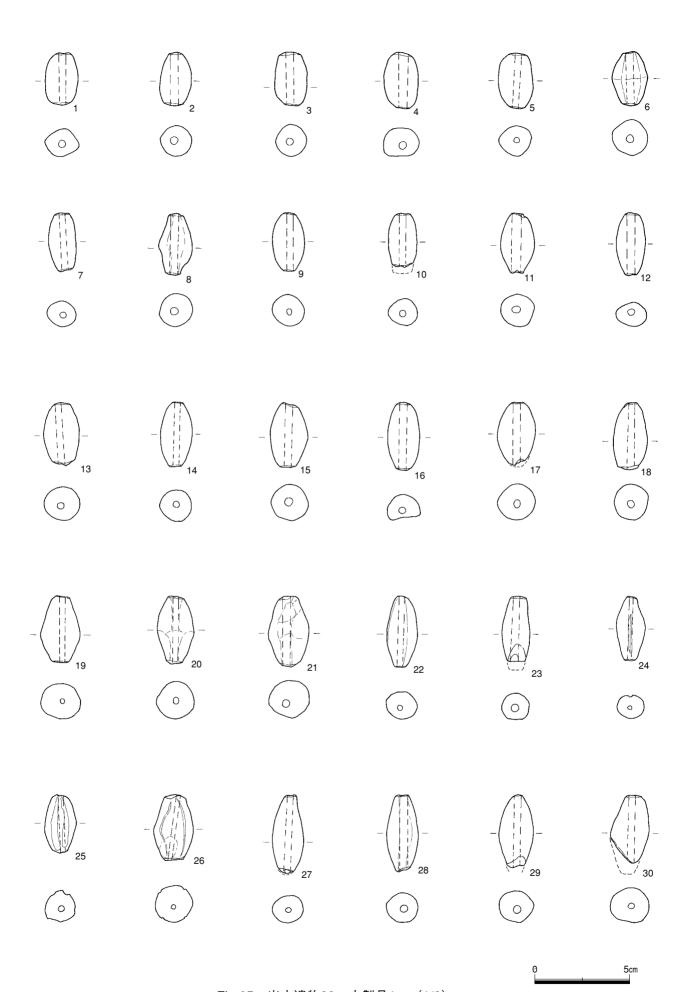


Fig.65 出土遺物39一土製品1一(1/2)

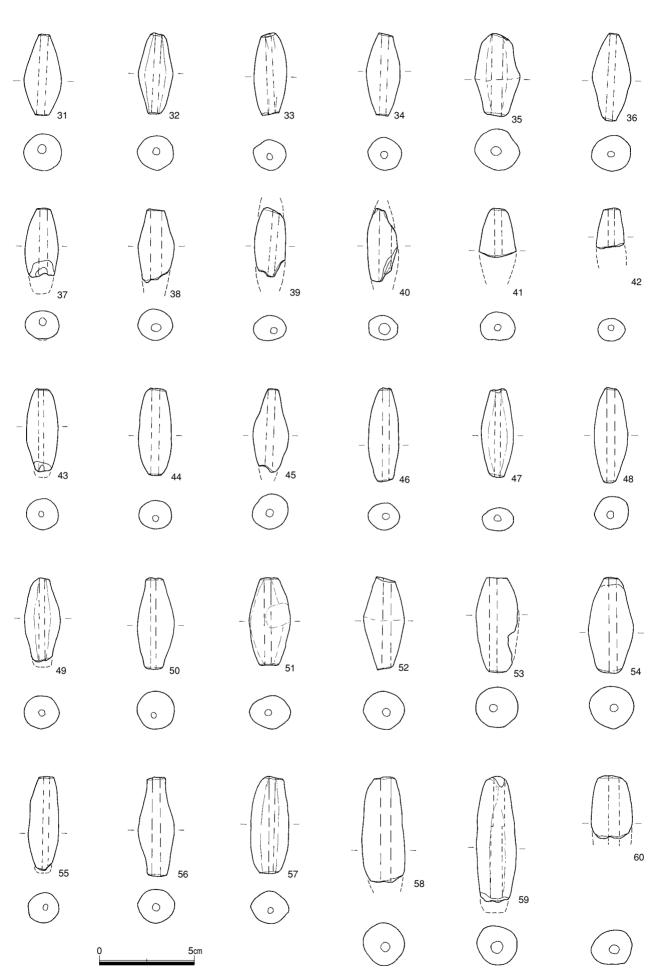


Fig.66 出土遺物40一土製品2一(1/2)

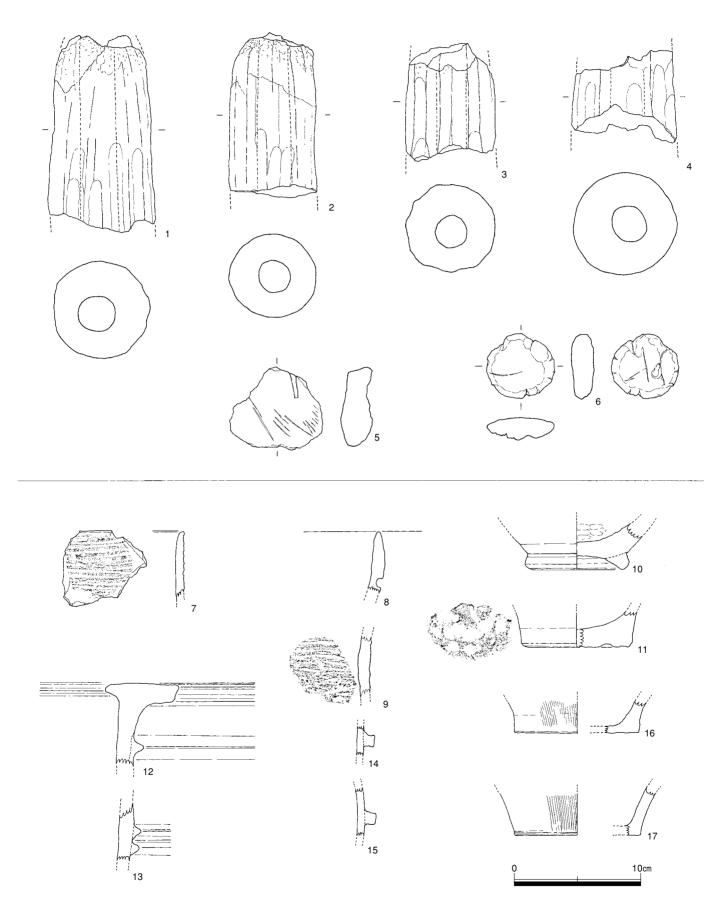


Fig.67 出土遺物41ーその他一(1/3)

1期(6世紀~7世紀前半) 2期(7世紀後半~8世紀前半) 3期(8世紀後半~9世紀前半) 4期(9世紀後半~10世紀初)

Fig.68 5区の古代官衙遺構変遷(1/800)

10. 縄文時代土器類

5区では主体となる古墳時代後期~古代以前の遺物も少量出土している。石器同様後の開発により本来の遺構や包含層から遊離したものである。Fig.67 - 7~11は縄文時代土器片である。いずれも粗製深鉢であり、7・8は口縁部、9は胴部である。内外面は貝殻腹縁による調整が見られる。10・11は底部である。10は上げ底、11は底面に圧痕が見られる。いずれも粗製で小破片のために時期の特定は困難であるが、縄文時代晩期前葉と見られる。

11. 弥生時代土器類

5区からは少量の弥生時代遺物が出土している。Fig.67 - 12・13は中型甕の口縁部、胴部片である。14・15は壺胴部片、16・17は甕底部片である。いずれも須玖 式に含まれ、弥生中期後半期に所属する。

(7) 小結

5 区は1800㎡強の調査範囲、一部 4 面に及ぶ複雑で濃密な遺構群との格闘であった。単年度完結の圃場整備という状況で、与えられた5ヶ月という期間は短く、調査は困難を極めた。個別遺構の記録や、堆積状況の把握に際して残念ながら十分な作業ができたとは言い難い。それでも調査を通じて古墳時代から古代にかけての集落の変貌のなかに、古代地域社会の展開を探る重要な問題を幾つか見出すことができた。以下では、その点について若干ふれてまとめとしたい。

1)5 区の遺構変遷と官衙施設の性格につい て

5区の調査に際しては堆積状況と検出可能な面を考慮し、最小で1面、最大4面の遺構検出面を設定した。改めて資料の検討を通じた時期区分から見直すと五期に区分できる。最終の5期は10世紀前半頃に造営、その後埋没した水路群であり、この一帯が広範囲に灌漑による水田化を実現した段階と考えられる。この時期以降、現代まで水田としての土地利

用が続いたと推定される。こうした古代以降の水田開発の推移の検討は重要であるが、この点については別にふれるとして、ここでは、集落が存在した4期以前の様相について検討したい。

検出遺構はおおまかな時期区分を行い、主要遺構の分布から勘案して次の4期に区分した。

1期:6世紀末~7世紀前葉

竪穴式住居、掘立柱建物、土坑などを主とする。遺構密度は低く、規模も小さい。西側の6、7区を中心とする古墳時代集落の縁辺部的様相を示す。

2期:7世紀中葉~8世紀前葉

掘立柱建物だけで構成され、3間6間の東西棟SB66を中心に北側と東西に建物があり「コ」字形配置をなす。周辺地域で最も早い段階に官衙的特徴を有する。ただし全体の規模は東西40m、南北30mの範囲に留まる。遺物の中に新羅系印花文土器(Fig.27 - 26)がある。

3期:8世紀後葉~9世紀前半

2期の建物構成形態を踏襲するが、全体に建物規模がやや大型化する。また、この時期に「コ」字形配置の中央空間部に、特殊な総柱建物SB30が建造される。これについては後述する。なお、この時期の遺物のなかに円面硯や墨書土器などが存在することから官衙的性格を強めていると言えよう。

4期:9世紀後半~10世紀初頭

北側の東西棟は建て替えられるが、東西に配置されていた南北棟は失われ、縮小する。この段階ま

でSB30が存続するのかは不明であるが、礎石SX03上部には10世紀初頭の遺物が多く出土し、何らかの特殊施設が存在した可能性がある。

さて、5区における建物群の変遷から2期から4期に何らかの官衙的施設が存在したことが判明した。本地区周辺を見渡すと類似した遺構群を複数認めることができる。

Fig.69では本地域で7世紀から9世紀の間に「コ」字形配置の認められる建物群や大型建物が集中する遺跡を示した。1は本調査区、2は隣接する6区SB01と5区調査区SB23で囲まれた本区の南側の地域である。9世紀以降の「コ」字形配置建物群になる可能性がある。3は5区の南100~200mの位置に展開する8・9区調査区である。8世紀前半から9世紀前半にL字形に配置した大型建物群がある。4は

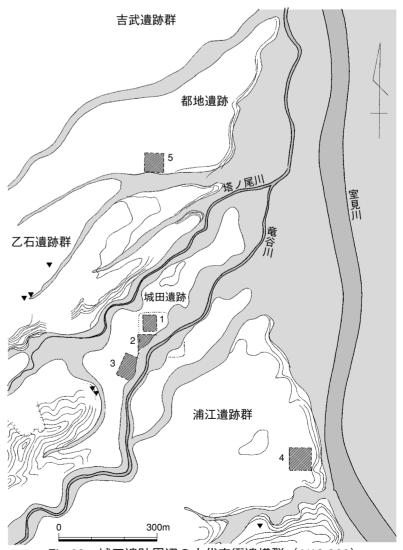


Fig.69 城田遺跡周辺の古代官衙遺構群(1/12,000)

浦江遺跡5次17・18区調査区であり、5区の南東550mに位置する。7世紀中頃~後半の大型建物群がある。5 は都地遺跡6次B1区であり、5区の真北450mに位置する。8世紀代とみられる「コ」字形配置建物群がある。このように径約1kmの範囲内に7世紀~9世紀の「コ」字形配置建物群もしくは大型建物群が複数存在している。ただしこうした建物群の消長、特に同時期に「コ」字形配置建物群が複数存在したかは、各群施設の継続と断絶をより細かく検討する必要がある。何れの規模も建物群は一辺約50mの範囲内に展開し、有田遺跡群で発見された早良郡衙(649集)の領域に対してはるかに小規模である。このような、地域において郡衙の下位レベルで「コ」字形配置をとる建物群は、近年各地で確認されている。ある種の生産活動や、「郷」「里」経営に関わる官衙施設か、居館などとの関連について検討の余地があろう。金武地域では古墳時代~古代の製鉄生産跡が集中し周辺でも多数発見されている(Fig.69の 印)。今次調査で多数出土した新羅土器や大壁建物も注目される。こうした点を含め今後の課題としたい。

2) 小規模基壇・囲郭建物について - 古代の地方「神社」成立と祭祀空間 -

本調査において検出された掘立柱建物SB30は、基壇状施設と、二重の溝、礫敷、柵に囲まれた小規模な総柱建物である(Fig.70)。建物は棟持柱を伴う点から切妻形式であると推定される。建物周囲の礫敷はタイル状に貼られ、南側が広い空間となっている(A区)。また二重目の溝(SD33)が途切れる南側には大きめの礫を集中・積み上げた範囲がある(B区)。建物群の造られた時期の限定は共伴遺物が少なく困難であるが、基壇内遺物や周辺遺構との関連でおおよそ9世紀前半頃と推定している。

建物と重複して礎石SX03が設けられるが、掘 方内遺物から建物より後出すると見られるこ と以外、用途などは不明である。

さてこの建物の周囲には鉄器、陶磁器、石 製品、土製品など特殊遺物が多く分布し、ま た南側のB区に埋納土器が複数検出された。こ の施設は10世紀前半代の水田化以前の短期間 で失われている。この建物は一般住居や倉庫 とは異なる祭祀に関わる施設と考えた。前面 部の礫集中部に祭祀に利用した品を埋め込む 行為は古墳時代から古代に展開する磐座祭祀 との繋がりを想起させた。こうした点から囲 郭された建物を古代「神社」神殿、南側前面 のA区を拝所と推定した。本遺跡については延 喜式など文献上での記録は見出せず、その規 模や存続期間から見て地方村落に関わる古代 「神社」と考えたが、調査当時古代に遡る神社 遺構の調査例はなく、その比較検討は困難で あった。近年、奈良県丹生川上遺跡や島根県 青木遺跡などで神社遺跡が調査報告されてい る。今後、その比較検討とともに、成立と背 景の検討を課題としたい。

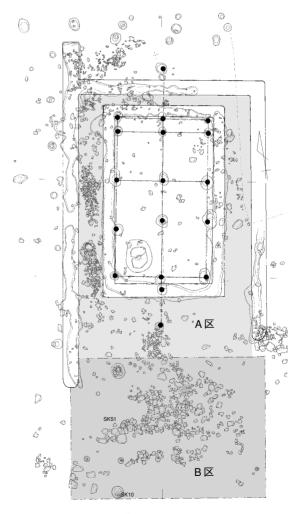
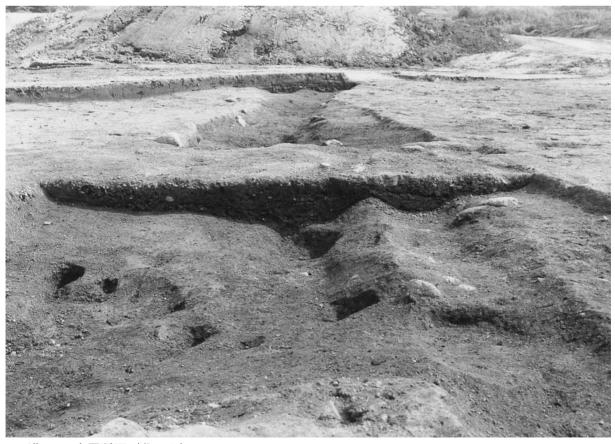


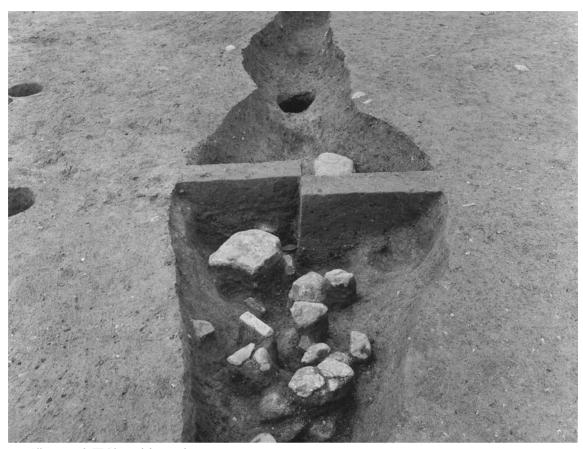
Fig.70 5区古代「神社」遺構復元図(1/500)



1. 第 1 遺構完掘状況(南から)



2. 溝SD01土層断面(北から)



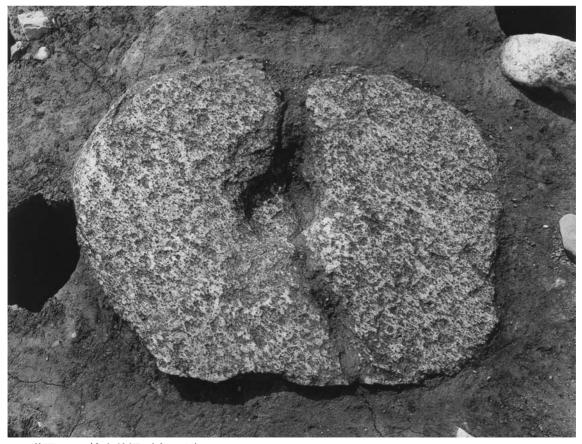
1. 溝SD02土層断面(東から)



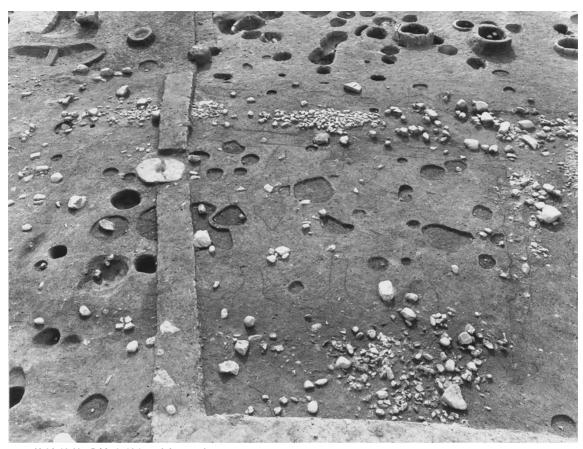
2. 溝SD16完掘状況(北から)



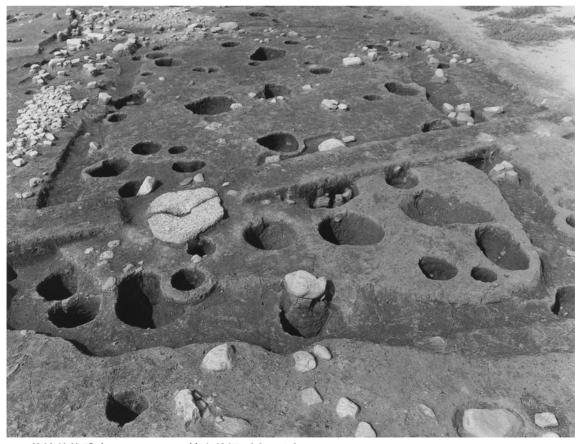
1. 第2面遺構完掘状況(西から)



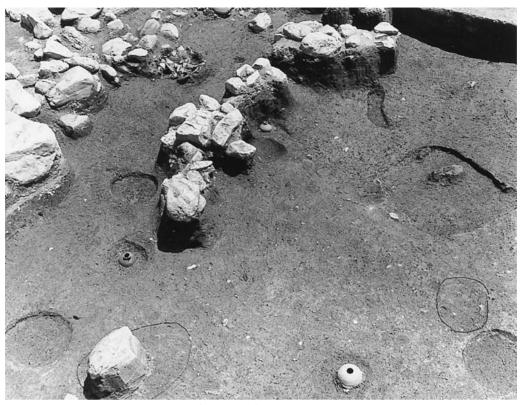
2. 礎石SX03検出状況(東から)



1. 基壇状施設検出状況(東から)



2. 基壇状施設内SB30、SD32検出状況(南から)



1. 敷石遺構内土器埋納遺構群(南西から)



2. SK10 (東から)



4. SK12 (西から)



6. SK40 (西から)



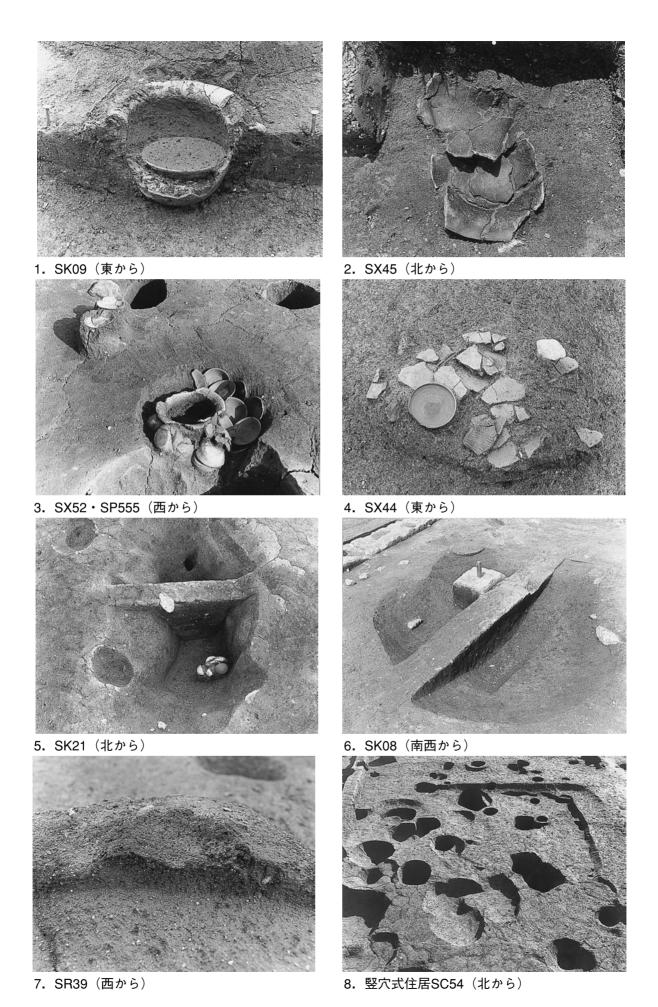
3. SK11 (東から)

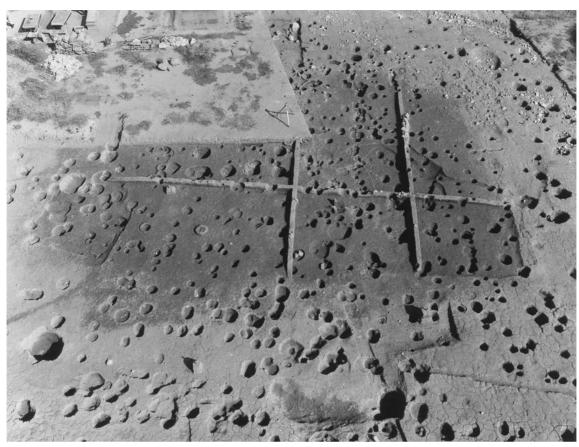


5. SK13 (西から)



7. SK51 (西から)





1. 第3・4面遺構完掘状況(西から)



2. 掘立柱建物SB66検出状況(西から)



1. 第5区拡張区(I・J-17~19グリッド)調査状況(南から)



2. 金武公民館に移築された礎石

18区の調査

1)調査に至る経過と概要

18区は、城田遺跡第2次調査地の南部に位置し、10区と13区の間に位置する調査区である。平成16年1月に埋蔵文化財課は農林水産局農地整備課から設計変更の連絡を受け、それを受けて埋文課は遺構面が工事の影響を受ける部分について要調査とし、1月7日に現地協議を実施し追加調査区を決定した。18区は追加要調査部分のうち水路部分にあたり、南北方向に狭長な形状である。

18区で検出した遺構は、竪穴住居2軒・溝2条・ピット多数である。ほかに竪穴住居の可能性がある遺構が1基検出されているが主柱穴・竈等住居としての要件を満たさないので、住居址として認定しなかった。また第2次調査全体図で掘立柱建物が10区との境界部分に見られるが、図面からは判別し得なかったため建物として認定しなかった。

2)遺構と遺物

a. 竪穴住居(SC)

SC28 (Fig.72)調査区北部にて検出した。東西隅角部が調査区外となるが、南北4.4m、東西3.7m以上を測る方形の住居址である。 周壁高さは5~15cm程度で残りは悪い。

主柱穴は他の柱穴の配列から4本柱と推測される。南西隅の柱穴は調査区外となるため検出できなかった。南東の柱穴からテラス部に石が据え置かれた状況で出土し、根石と推測される。柱間は東西3.8m、南北1.8mを測る。柱穴は不整円形で長径40~60cm、深さ10~20cmを測る。壁溝は検出されず貼り床は見られない。掘り方の底面はほぼフラットである。南壁中央付近で竈を検出した。遺存状況は悪く、壁体を構成していた粘土が不整楕円形状に分布する状況で竈の原形はとどめていない。

出土遺物 (Fig.73) 1 は竈から出土した須恵器である。高台付き 坏の小片で、高台は丸みを帯びた断面形である。その他土師器の 小片が出土したが、器形のわかるものはない。SC28の時期は8世 紀頃か。

SC30 (Fig.72)調査区北部で検出した。西側が調査区外に伸びるが、東西2.6m以上、南北3.5mを測る方形の住居址と推測される。周壁高さは10cm程度で残りは悪い。主柱穴は調査範囲では検出できなかった。貼り床は検出できなかった。掘り方の底面は北側に15cmほど落ち込むが、微少な凹凸はない。竈は調査範囲では検出できなかった。遺物は土師器・弥生土器の小片が出土したが、器形のわかるものはない。SC30の時期は古代か。

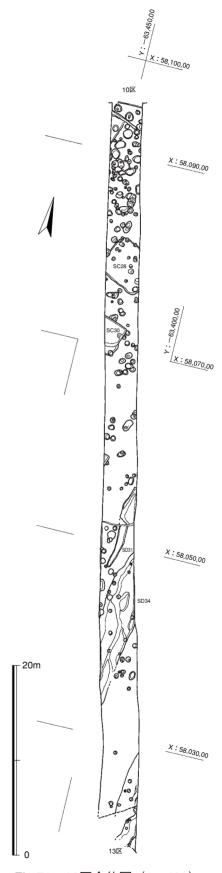


Fig.71 18区全体図(1:400)

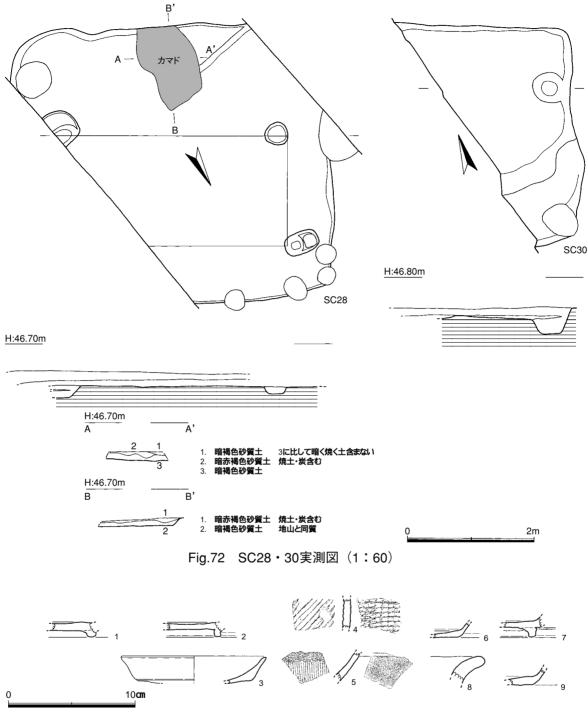


Fig.73 竪穴住居・溝出土遺物実測図(1:3)

b.溝(SD)

SD31 (Fig.71)調査区南部にて検出した溝である。ほぼ座標北方向に主軸を有する溝で、調査範囲の内で延長9.6mを測る。底面は南から北に向かって標高を下げ、テラスを有する部分があるが概ねフラットである。深さは深いところで20cm前後で、残りは悪い。

出土遺物 (Fig.73) 2 は須恵器である。高台付き坏の小片。3 は土師器皿である。小片で口径11.4cm に復元される。その他土師器・弥生土器が出土するが、器形のわかるものはない。

SD34 (Fig.74)調査区南 部にて検出した。ほぼ座 標北方向に主軸を有する 溝で、東岸は地形に規制 されたためか50cm前後西 岸に比し低くなる。調査 範囲の内では幅3.6m、深 さは東岸から底面まで深 い地点で70cm前後を測 る。底面には複数のテラ スを有し平坦ではなく、 南から北に向かって標高 を下げる。埋土の状況は 土層断面図の通りである。 2層に分層でき下層は砂 礫で構成され構築当初は 流水していたと推測され る。上層は泥質で耕作土 の可能性を有し廃絶後の 堆積と推測される。出土 遺物 (Fig.73) 2・7・9 は 須恵器である。2は高台 付き坏である。底部の小 片で、器壁は灰白色を呈 し焼成はやや不良である。 7は須恵器である。高台 付き坏の小片。9は坏で ある。底部の小片。6・8 は土師器である。6は土 師皿である。

外底面には回転糸切り 痕がみられ、内面は橙色 を呈し赤色顔料を塗布し ていると推測される。8 は甕である。胴部の小片 は甕である。胴部の小片し で、内面は暗赤色を捏測される。外面は格子目タワ キ、内面は平行な当て具

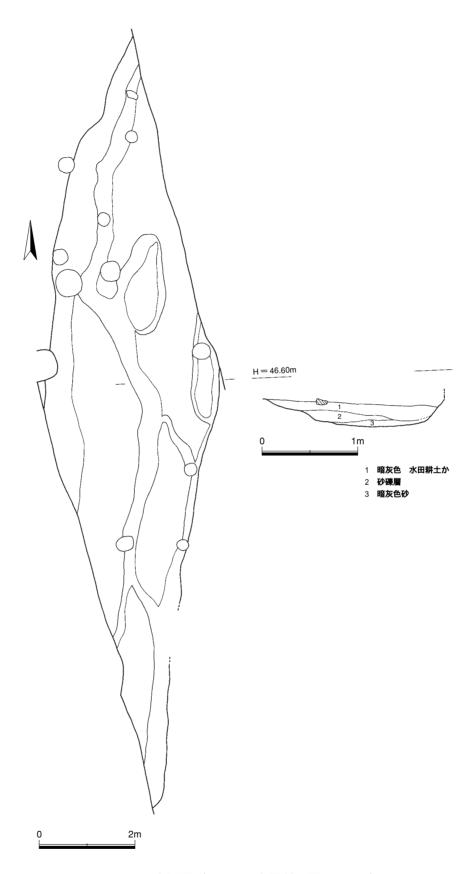


Fig.74 SD34実測図(1:80・土層断面図は1:40)

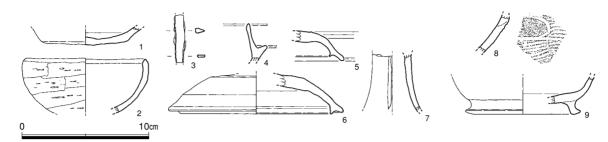


Fig.75 その他の遺物実測図(1:3)

痕を有する。胎土は精良堅緻で、新羅・高麗陶器の可能性がある。5は備前擂鉢である。胴部の小片。 c.その他の遺物

Fig.75に図示した。1・2は土師器である。1 は坏である。底部の小片で底径6.8cmに復元される。2は小形の鉢の小片である。口径9.4cmに復元される。4~7・9は須恵器である。4は坏身の小片。かえりは高く立ち上がるが口唇部内面の段は不明瞭。5・6は蓋である。6 は口径11.8cmに復元される。7は高坏の脚部である。透かし穴が見られ2段になると推測される。9 は碗である。底部の小片で底径7.8cmに復元される。3 は鉄製品である。刀子か。鋒と茎を欠損する。8 は縄文土器である。

3) 小結

18区で検出された遺構は竪穴住居2軒・溝2条・ピットである。竪穴住居の遺存状況を見る限り調査地周辺は調査以前に大きく削平されたことが窺える。ピットは北の10区付近に多く検出され、掘立柱建物を構成する柱穴もあると推測されるが、調査区が狭長であり確認できなかった。遺構の時期は遺物量とその残存状況から決定が困難だが、強いていえば竪穴住居が8世紀代を含む古代、溝は中世後半、室町から戦国期頃となろうか。調査地周辺には当該期の遺構が広く分布していると推測される。

補遺 城田遺跡第2次調査3区SO01主体部内出土の鉄製品

SO01とは既刊『金武2』(市報866集)で報告済みの細線式獣帯鏡が出土している古墳で、平成18年4月に未報告の鉄製品の存在が判明したため末尾ではあるがここで報告する。いずれも石室内出土。1・2は刀子。1は刃部、2は木質が遺存する茎である。3~5は鉇で接合はしないが同一個体か。3は刃部、4は刃部の先端か。5は茎。茎後端と刃部先端を欠損する。6~8は鏃である。6・7は茎部で7には木質が遺存している。8は茎部から刃部にかけての破片で上部は関の可能性もある。市報866集本

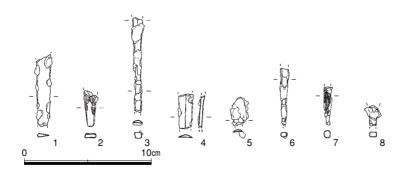


Fig.76 3区SO01出土鉄製品実測図(1:3)

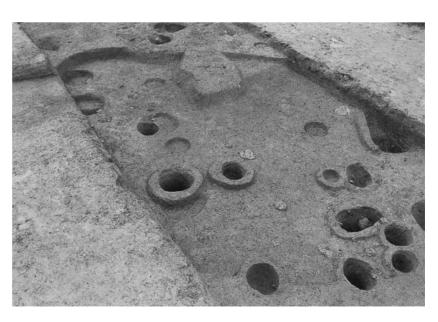
文中で鉄製品は釧・刀子のみと報告したが、これに鉄鏃・鉇が新た に加わることとなった。



1.18区全景(北より)



2.18区調査状況(南より)



3 . 竪穴住居SC28 (東より)



1 . 竪穴住居SC28竈 (西より)



2 . 竪穴住居SC30 (西より)



3.溝SD34 (北東より)

第3章 都地泉水遺跡 1次調査

第3章都地泉水遺跡1次調査の記録

1.調査の概要

都地泉水遺跡は都地遺跡の西側に位置する。西端を飯盛山塊およびその麓を流れる日向川によって画される。遺跡内には小河川、小谷が数条走っており、これらによる開析と堆積によって形成された微高地上に遺跡が立地する。東の都地遺跡、南の乙石遺跡とはやはり比較的大きな谷によって画される。遺構面は扇状地性のシルト、礫またはその混淆層上であるが、製鉄遺構周辺では整地が見られる部分がある。今回調査で検出した遺構、遺物は大きく2時期に分かれる。第1期は古墳時代後期から古代であるが、この間に断絶があるかもしれない。古墳時代としては竪穴住居が主たる遺構で、古代は製鉄遺構が特徴的である。掘立柱建物の多くもこの時期であろう。第2期は中世前半期で、墓と土壙が主である。なお各時期にわたって遺物はきわめて少ない。詳細は各説の項に譲り、3年にわたる調査の経緯を、作業日誌を基に略述しておく。

都地泉水遺跡は平成16 (2004)年10月21日より試掘調査を開始し、遺跡の範囲、および工事によって破壊を免れずに本調査を要する範囲を確定し、11月25日より本調査を開始した。試掘の際対象地を地形や現道などを基準に6区に分割し、西から時計回りにA~F区とした。本調査時にもこれを生かしたが、工事による破壊が及ばず調査を要しない部分によって調査区が分断される場合には、A1区、B2区などに細分することとした。またこれまでの調査に引き続き国土座標(旧測地系)による基準点を配置し、国土座標軸に従って記録を行った。また重機の進入路などの関係上南端のE区から調査を行い、遺構番号を検出順に附したため、遺構番号と区名順が整然と対応しない。報告はA区から行っているので、以下の記述が煩雑になっているが、諒とされたい。また対象地の西端飛び地をG区、大部分が区画整理対象地となる東端の地区をH区としている。各年度の大略の調査順は以下の通りである。

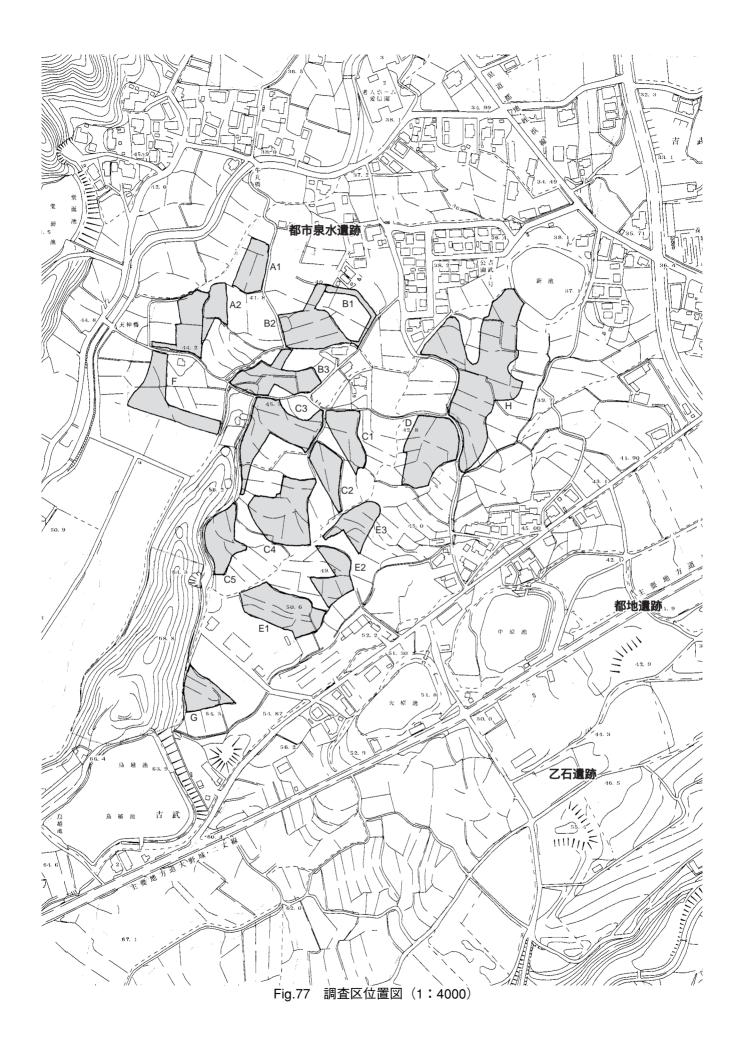
16年度: E区 C2区 C1区 C3区 C4区 D区(E区は終了)

17年度: D区 B2区1面 C5区 B1区 A2区 A1区 F区 B2区2面 B3区 G区 H区(A~G区は終了)

18年度: H区(終了)

平成17年度は調査面積が27,000㎡と広大で、担当者が期間を通じてほとんど一人という状況であった。また試掘成果および前年度の結果より、遺構の分布密度が粗く散在しており、空中写真測量に適した状況であると判断されたため、これにより1/50の全体図を作成し、効率化を図ることとした。但し、重要と判断した遺構あるいは遺構群については1/10あるいは1/20で個別に実測した。従って今回報告する個別遺構はほとんど人力で実測した遺構である。なお全体図を空中写真測量で作成した調査区は、A1、2区、B2区2面、B3区、C1~5区、F区の各区であり、D区、B2区1面については遣り方測量を行った。また16年度終了したE区も当然遣り方測量で全体図を作成している。

平成17年11月14日にG区を終了し、工事工程の関係上、都地遺跡 6 次調査(A区)に移行した。これを11月末日に終了した後、H区の調査に入った。H区は圃場整備部分と区画整理部分に分かれる。当然遺跡が分割できるわけではないが、工事が先行する圃場整備部分を先行調査し引き渡した。H区は年度を超えて継続調査し、4 月末にはほぼ調査が収束していたが、年度初めの業務繁忙期に当たり空中写真撮影の発注が大きくずれ込み、最終的には7月31日にすべての調査を終了した。



2.調査の記録

記録の方法

都地泉水遺跡の調査においては下記の要領で遺構の記録を行った。

検出遺構については、調査時には遺構を示す記号Mを附し、区割りに関係なくM1,M2のように 検出順に通し番号を附した。本章の報告ではこの番号からMを除き、遺構の性格を表す用語を附して 土壙1,溝2のように記述する。またピットについては区名およびピットのイニシャルPを附して各区 ごとにAP1,BP1のように通し番号を附した。これについては報告においてもこのまま記述する。ま た掘立柱建物については、確認されたものを調査後整理し、ほぼ調査時の確認順に掘立柱建物1,掘 立柱建物2のように通し番号を附した。

(1)A**区の調査**

A区は調査区北西端に位置する調査区で、西側は日向川の氾濫源に隣接する。北側をA1区、南側をA2区に分割した。A1区は褐色の粘質土が遺構面で、A2区は黄褐色の砂質のシルトが主として遺構面となる。以下、各区ごとに概要と主な遺構について述べる。

A 1 区の概要 (Fig.79)

A1区は褐色の地山面の上に包含層が見られ、その上面で石積遺構80を検出したが、その他の遺構は検出が困難であったため、重機で包含層を除去し地山面で遺構検出を行った。石積遺構80が島状に残存した状況になっているのはそのためである。地山面は北東に向かって緩やかに傾斜している。西側も氾濫源に向かって崖状を呈しているので、東西を河川と谷に挟まれた舌状を呈するものと考えられる。A1区東側のB1,B2区では包含層の上下で遺構面が2面確認できたが、A1区と同様な成因で形成された包含層であろう。B2区では、包含層上が中世、地山上が古代と考えられるので、A1区も同様であろう。実際包含層上で検出した唯一の遺構である石積遺構80は中世前半期に位置づけられる。A1区では後述する石積遺構80、住居跡91、土壙墓81,82のほかピット、浅い土壙、短い溝状遺構などが検出された。建物としてまとまるものは確認できていない。

住居跡91(Fig.80)

A1区北端で検出した。方形の竪穴住居である。北側は調査区外に出る。1辺6.5mほどに復原される。検出面からの深さは20~30cmである。壁溝は巡っていない。東辺中央に円棒状の礫が直立し、その周囲に焼土、粘土が散布する個所がある。この個所が破砕されたカマド跡と考えられる。原形はとどめないが立てられた礫は支脚として使用されたものと思われ、ほぼ現位置であろう。このカマド跡や支脚の位置(深さ)から見て、貼り床の存在が推定できるが、土層観察や平面観察では確認できなかった。検出面に近いレベル(もしくは検出面より高いレベル)にあったとも考えられるが、その場合は掘方底面まで20~30cmとなる。貼り床としてはやや厚すぎるのではないかと思われるが、可能性としては考えておくべきであろう。この問題は主柱の位置とも関わる。主柱は4本の柱を方形に立てたものと考えられるが、南側には主柱の候補となりそうな柱穴が2組検出されている。一応北側の2基を主柱と考えているが、平面的には南側の方がバランスがよい。南側の2基のうち西側の柱穴は、他の3基が掘方底面で検出されたのに対し、これのみが検出面、すなわち堀方底面より上位で検出されており、主柱の構造から考えればこの方が自然である。ただし深さが堀方底面付近までしか達しない。こ

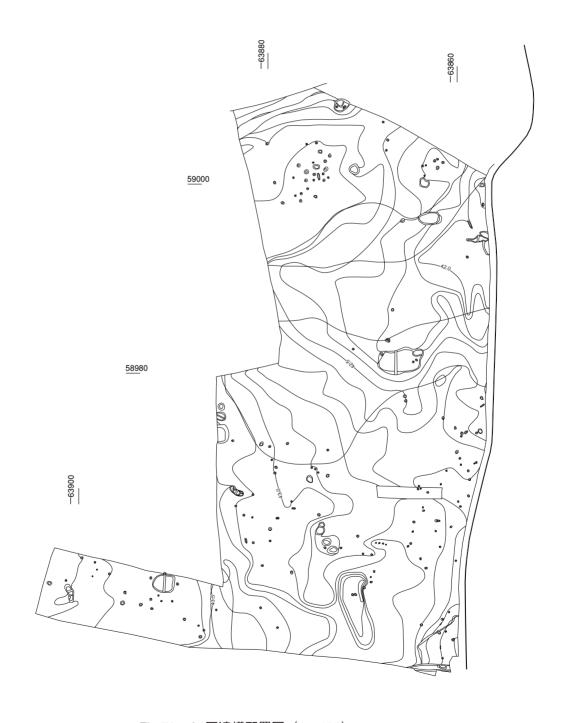


Fig.78 A2区遺構配置図(1:400)



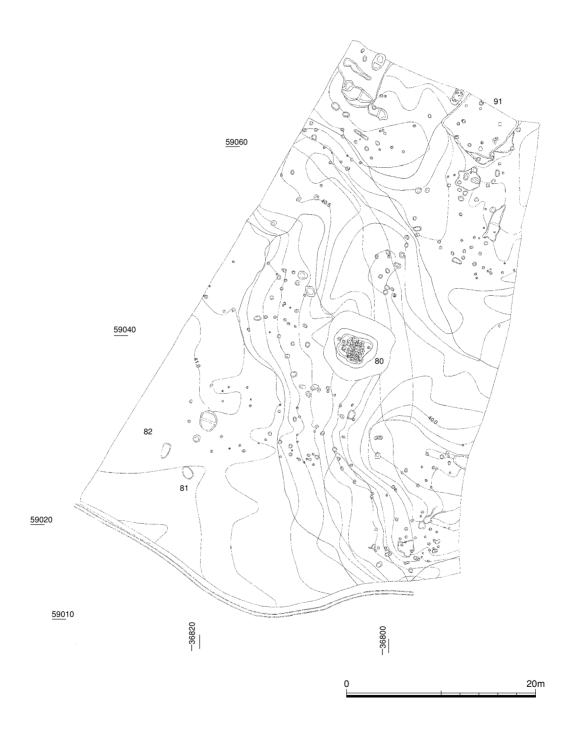


Fig.79 A 1 区遺構配置図(1:400)

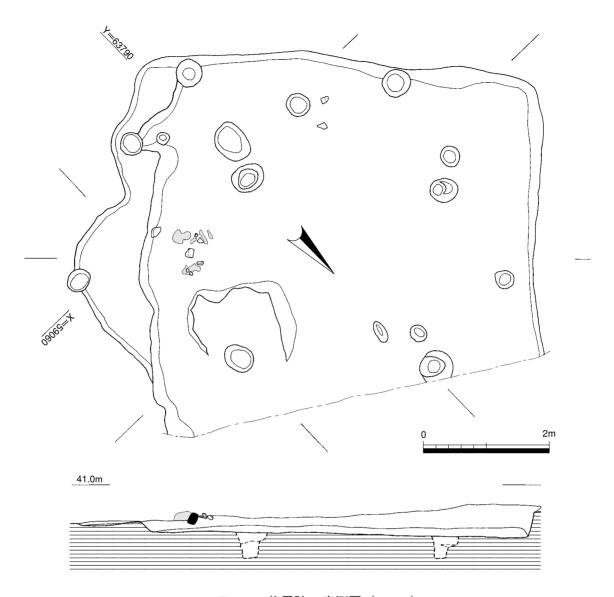


Fig.80 住居跡91実測図(1:60)

のため主柱候補からははずして考えたのであるが、貼り床が相当厚いものであったとすれば。主柱と して機能した可能性も否定できないかもしれない。

Fig.80では省略しているが、住居跡91は焼土壙115,116に切られている。他地区の例から焼土壙は古代と考えられ、これよりさかのぼる。また出土遺物(Fig.81)からも住居跡91の時期は古墳時代後期と考えられる。

出土遺物 (Fig.81)

1は須恵器蓋である。口縁端部に段を持ち、口縁から強く屈曲して天井部にいたる。胎土は粗く砂粒を多く含むため、回転ヘラ削りの跡が明瞭に残る。灰黒色を呈する。2は須恵器坏身。口縁部はほぼ直立する。残存部は全面回転ナデ。胎土は砂粒を多く含む。小片のため法量的には疑問もある。3は瓶の口縁部である。平瓶、提瓶の類であろう。端部はやや内湾しすぼまり気味になる。胎土には砂粒を多く含む。内外とも回転ナデを施す。4は脚部である。下半部で大きく屈曲する。端部で外側に張

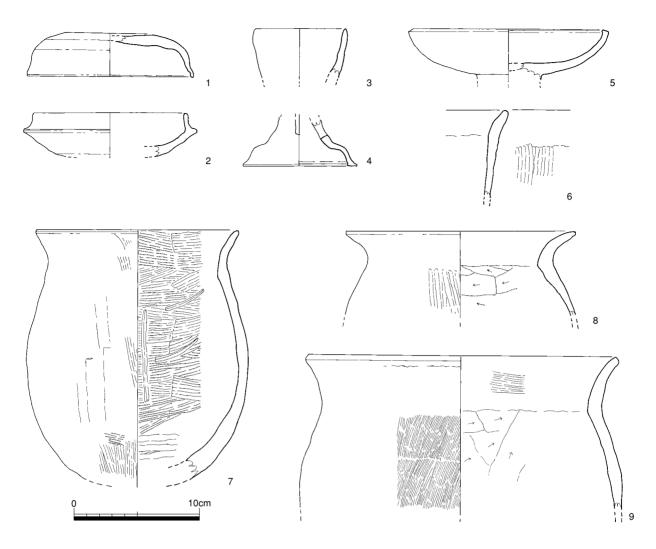


Fig.81 住居跡91出土遺物実測図(1:3)

り出し平坦面を作る。透孔痕が観察されるが、小片のため形状や個数は不明である。図では方形に復原しているが確定できない。内外面回転ナデ。1~3に比べて胎土は精良である。

5 は土師器高坏の坏部であろうか。浅い皿状を呈する。端部は強い横ナデにより坦面を作り出す。胎土は精良で、調整も丁寧である。内外面とも磨きに近い丁寧な横ナデを施す。外面は黒色を呈する。6は土師器甑の口縁部片である。わずかに外反する。内面はケズリの後ナデを施す。外面には目の粗いハケメを施している。7~9 は土師器甕である。7 は肩が張らず、最大径がほぼ中位にくる。口縁は肩部から緩やかに外反し、その境界は不明瞭である。口径は胴部径より小さい。調整は内外とも基本的にはハケメであるが、外面は部分的に条線が見られず、板ナデ状になる。その単位が明瞭であり、また器面の観察からもハケメの摩滅とは考えがたい。また内面にはハケメ原体の角部のような個所でひっかいたような、2 条程度の条線が縦横に見られる。内底部のケズリは幅の狭い棒状もしくはヘラ状の工具を用いたと思われる。8 は口縁部が強く屈曲しながら外反する。胴部径は口径を上回る。外面では肩部と口縁の境は不明瞭であるが、内面ではケズリによって稜線がたつ。外面は縦方向の平行タタキを施す。9 は口縁が緩やかに外反し、肩部との境は不明瞭である。口縁端部は丸く収め、部分的に胎土の折り返し痕が見られる。外面に目の細かいハケメを施す。内面は口縁部に横方向のハケメ、胴部はケズリ。

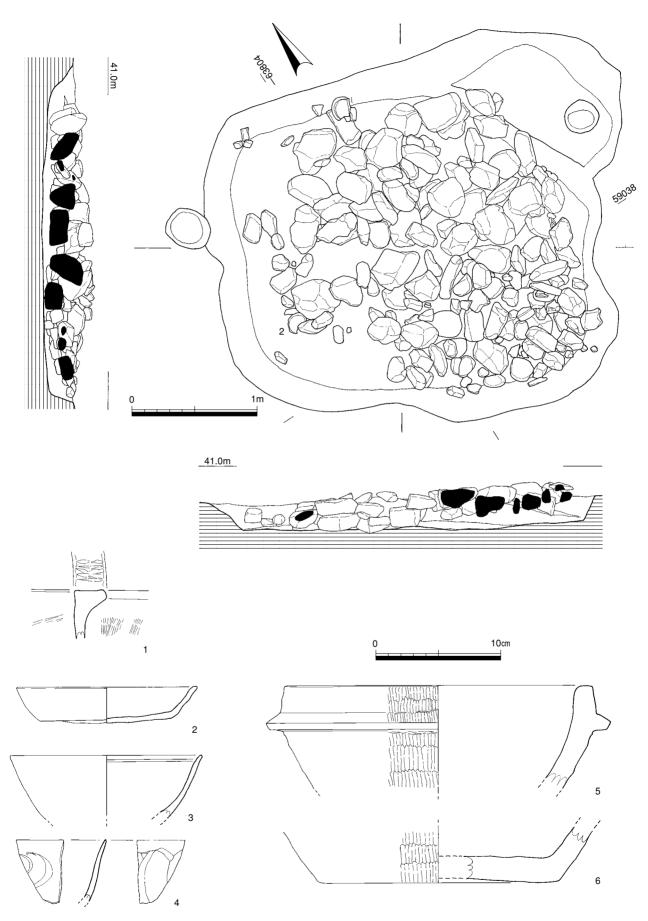


Fig.82 石積遺構80 (1:30) 出土遺物 (1:3) 実測図

石積遺構80 (Fig.82)

A 1 区中央で検出した。前述したように石積遺構80の周辺には包含層が残っており、この遺構のみ 比較的容易に検出されたが、他の遺構ははっきりせず、石積遺構80を残して重機によって掘り下げた。

石積遺構80は浅い凹みに礫を雑然と投棄したような状態である。掘方は南北、東西ともほぼ6mを測る。形態はやや隅丸方形に近い不定形である。礫は拳大から人頭大をやや上回るものまで見られる。北側に比較的大きい石が多く、南東側に小さい石が集中している。石は人為的に積まれたような状態ではないようで、集石遺構とする方がよいかもしれない。石を除去した下部には埋葬遺構などの施設は全く検出されなかった。掘方の深さは検出面から20cmほどである。

出土遺物 (Fig.82)

出土遺物は比較的少ない。少なくとも石とともに廃棄したような状況はうかがえない。遺物では石 鍋片が目立ち、図示したほかにも数点見られる。

1は土鍋の口縁部片である。鋤先状を呈し上面がやや凹む。内外面ハケメで、口縁部付近はナデ消されている。上面は蓆状の圧痕が見られる。2は土師器坏である。口径は14.2cmを測る。底部は糸切りで、板目圧痕が見られる。3は青磁碗。くすんだ緑色を呈する。内面の口縁直下に一条の圏線を巡らす。4は龍泉窯系青磁碗。外面に蓮弁、内面にも劃花文らしき文様が見られる。5,6は石鍋である。5は上半部。把手が巡り、その下部にはススが付着している。外面には成形時のはつり痕が明瞭に見られる。6は底部である。外面は底部までススが付着している。外面にははつり痕が明瞭である。

土壙墓81 (Fig.83)

A1区南西端付近、石積遺構80の南西側で検出した。南北1.65m、東西0.85mを測る。平面形は北側がやや広がる卵形を呈する。北側に副葬品が集中し、こちらが頭位である。深さは検出面から約20cmである。北側には人頭大の礫が2個ある。遺構が掘り込まれたのは礫の多い地山であるが、この2個は人為的に据えられた可能性がある。この上位の壁際にやや浮いて青磁碗が副葬されている。また頭部の底面近くには短刀と思われる鉄製品が副葬されていた。木棺の痕跡や釘等は確認されなかったが、頭部の礫は棺台の可能性もある。

出土遺物 (Fig.83)

1 は短刀と思われる鉄製品である。銹化が著しく形態の詳細は不明である。茎も変形しているものと見られる。関には両面ともに木質の付着が見られる。鞘と考えられる。2 は龍泉窯系青磁碗である。くすんだ緑色の釉調で、内面に片切彫りで劃花文を刻む。

土壙墓82 (Fig.83)

土壙墓81から南東に3mほど離れて位置する。南北1.3m、東西0.75ほどを測る。検出面からの深さは約20cmである。平面形は北側がわずかに広がる長楕円形を呈する。礫の多い地山に掘り込まれているが、人為的におかれたものはないようである。北西隅の壁際に接した状態で副葬品が集中し、こちらが頭位であろう。木棺の痕跡や釘などは検出されなかった。

出土遺物 (Fig.83)

 $3\sim6$ は土師器小皿である。底部はいずれも糸切り。3, 6 には板目が見られる。口径は3 が9.1cm、4 が9.0cm、5が8.9cm、6が9.0cmである。出土位置は、3が青磁碗より北側、4 は青磁碗の下部、5は青磁碗の南側、6 は5 の南側で、6 のみ破砕された状態で出土し、完形に復原されなかった。

7は龍泉窯系青磁碗である。畳附きと外底以外施釉する。内面は片切彫りで5区に分割し、各区に

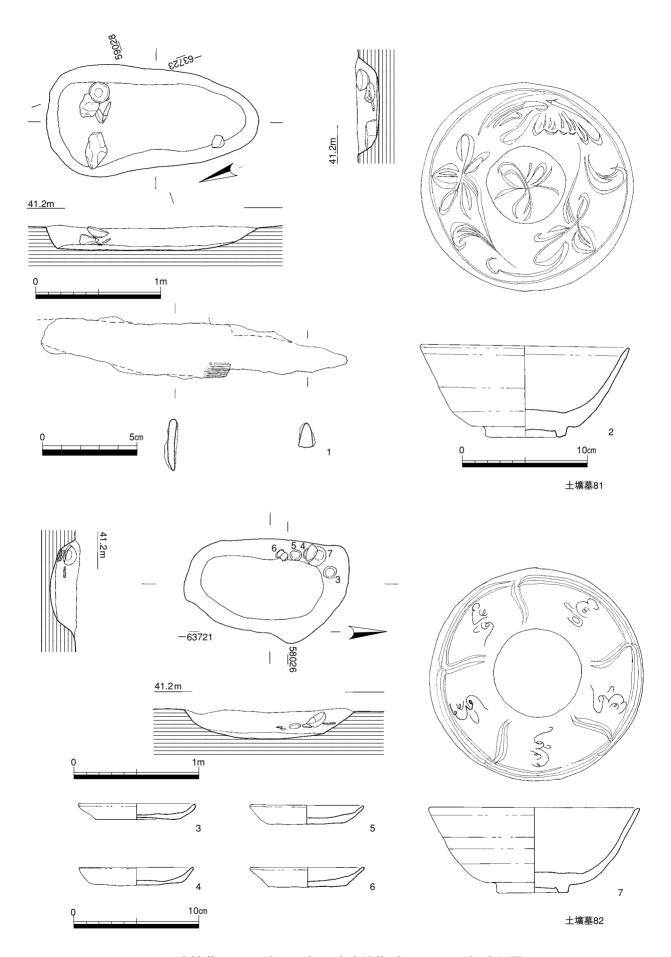


Fig.83 土壙墓81、82(1:30) 出土遺物(1:3、1:2)実測図

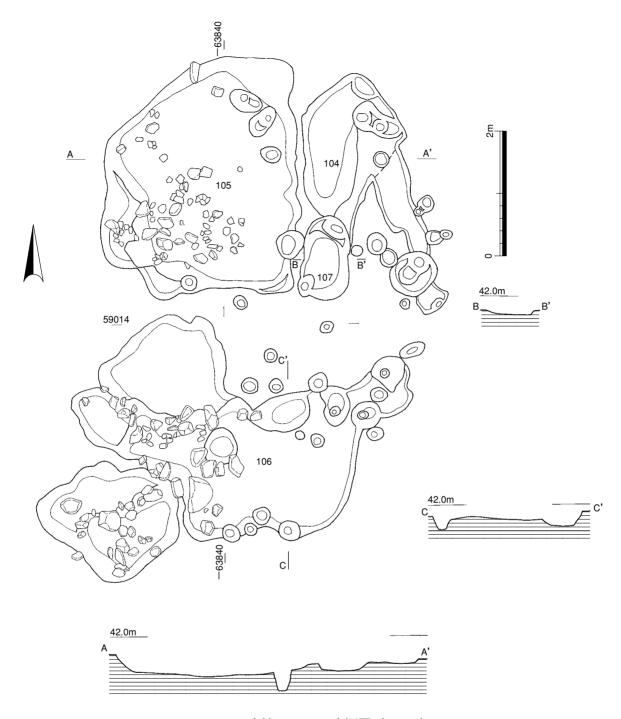


Fig.84 土壙104~107実測図(1:60)

渦文を描く。渦文は区画線に比べてきわめて細い。

A 2 **区の概要** (Fig.78)

A 2 区は水路を挟んで東西に分かれる。東側は北端で緩やかに傾斜するほかはほぼ平坦である。検 出遺構は北側に集中する。ピット、土壌、溝などが検出された。後述する土壌104~107のほかには目 立った遺構はない。西側は小ピットや浅い土壌が散漫に分布するのみである。南端はそのままF区に つながっていくと考えられるが、F区の北端部が比較的遺構の密度が濃いのに比べると、かなり様相 を異にするといわざるを得ない。

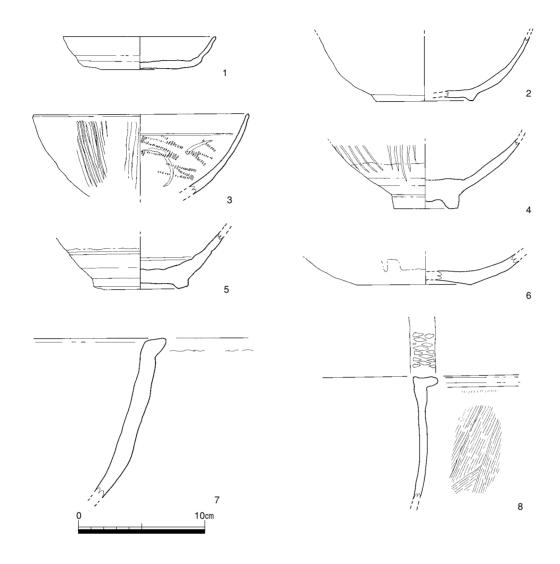


Fig.85 土壙104~106出土遺物実測図(1:3)

遺構104~107 (Fig.84)

A 2 区の北端付近で検出した。この付近はA 2 区の中では比較的遺構が密に分布する部分である。 遺構104~105は浅い凹み状の土壙群である。大まかな形状を基に区別して番号を附しているが、それ ぞれ切り合い等は判明せず、別の遺構となるかどうかも疑問である。さらには全体が人為的な掘り込 みかどうかも疑問があるが、少なくとも遺構105は深さや壁面の状況から人為的なものと考えている。 また図示した礫はほとんどが地山に包含されているもので、人為的に投棄したものではない。

以下比較的明確な掘り込みを持つ遺構105について略述しておく。平面形は不定の四辺形を呈し、南北3.7m、東西3mほどを測る。103,104とは細い土手部で画されている。深さは検出面から30cmほどである。底面の礫はほとんど地山から露出してきたものと考えられるが、その中に土器など遺物も混じっている。底面や壁は段や凹凸が多い。

出土遺物 (Fig.85)

1は土師器坏である。底部は糸切りで板目が見られる。約1/3ほどの残存であるが、口径12cmほどに復原される。2は瓦器碗である。外底部に断面三角形の低い高台が貼り付けられる。内外面とも黒

灰色を呈する。3 は同安窯系青磁碗である。ややくすんだ緑色の釉調で、遺存部は全面に施釉されている。外面に櫛描文、内面には櫛描きと片切彫りで文様を施す。4 も同安窯系の青磁碗。釉調は透明感に欠ける緑灰色である。外面体部下半から底部にかけて露胎である。外面には平行線文を施すが、内面は無文である。5 は体部の立ち上がりの角度や厚みから壺ではないかと考えられる。白磁である。外底部は露胎で、高台は低く厚い。見込みに圏線を巡らせる。6 は褐釉の陶器である。外底部は露胎である。7 は土鍋である。かなり大形で、口径は40㎝を越えるものと考えられる。器壁も厚い。口縁は短く屈曲して外反する。内面にはケズリを施す。外面は板状の工具で強くなでたような調整である。8 も土鍋である。口径は40㎝ほどに達する大形品と思われるが、器壁は7に比べて薄い。口縁部は鋤先状を呈し、上面は凹む。外面はハケメを施す。上面には蓆のような網目状の圧痕が見られる。

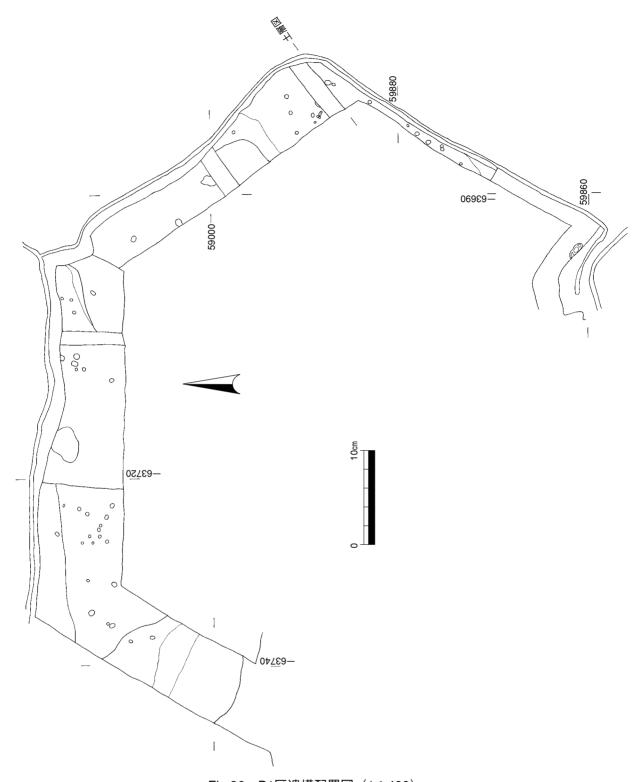


Fig.86 B1区遺構配置図(1:400)

(2)B区の調査

B区はA区の東側で、A区と同様遺跡の北端に位置する。A区とB区は北端部で浅い谷を挟んで 画されている。B区の南端は里道でC区と画されているが、地形的には舌状丘陵の東斜面であるC3 区に連続していくものであろう。B区はB3区の北端から包含層が形成され、B2区の東半部で厚さを 増し、B1区では厚さ60cmに達する部分もある。またB2区、B1区では包含層の上面でも遺構が検出 された。以下各区ごとに報告する。

B1区の概要(Fig.86)

B1区は調査区北端に位置する。水路部分のみの調査で幅が狭い上に、協議上の手違いでいったん 除去した既存水路を土嚢で復旧したために、さらに調査区が狭くなってしまった。B1区はほとんど 包含層の調査である。B2区の状況からは包含層の上面にも遺構の存在も予想できたが、調査期間の 関係上、また表土剥ぎ段階から相当量の遺物の包含が見られたこと、また前述のように調査面積が狭 小であることから包含層上面の遺構検出は行わず、直ちに掘り下げを行った。掘り下げ後セクション ベルトの観察から包含層上面にもやはり遺構の存在が確認された(Fig.88)。包含層除去後、下面で遺 構検出を行ったところ、東側は黄褐色のシルトが地山面となり、この面でピットなどが検出された。 西側は地山が砂礫層であり、包含層も薄い。ピットが若干検出されたが、上面から掘り込まれた可能 性もある。

B 1 区包含層 (Fig.88)

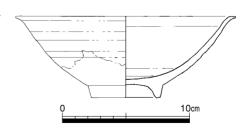
B1区の包含層は、図示した北東端付近がもっとも厚く、検出面から60cmほどを測る。ここから西 側、南側に行くに従って厚さを減じていく。南東端と西端にはほとんど堆積していない。遺物は各層 から出土しているが、量が多いのは1~3層である。遺物は土師器、須恵器など土器のほか、鉄滓が 多量に出土している。土器は比較的大きな破片も多量に含み、また摩滅も少ないものが多い。またあ る程度集中する個所も見られ、一種廃棄場として機能していた個所もあるようである。B1区の北は 緩やかに谷部へ落ちていくものと考えられる。出土遺物は土師器、須恵器などの土器類がコンテナ7箱、 鉄滓が25箱である。

出土遺物 (Fig.88)

出土遺物のうちごく一部を図示した。1 は須恵器蓋である。天井部に円形の剥離痕があり、つまみ があったことが知られる。口縁端は折れ曲がり嘴状を呈する。体部は回転へラ削りを施し、下半部を 回転ナデによりケズリ痕を消す。淡灰色を呈し、胎土も精良である。2 は須恵器坏身。ほぼ完形に復 原される。口縁部は外反しつつ内傾する。受け部と口縁部の境には、内外面ともに明瞭な段が巡る。 外面は焼成時のものと思われる付着物に覆われているが、天井部にヘラ削りを施すものと見られる。3

は須恵器の高台附坏の底部である。高台の復原径11cmを測 る。外底部は回転ヘラ削り、他の部分は回転ナデを施す。4 は須恵器高坏の脚部である。脚端は強く反り返る。脚柱部 に方形の透孔を対称する位置に 2 孔あける。破片の最上位 には沈線が1条見られ、長脚2段透孔の高坏脚部と見られる。 内面に絞り痕が見られる。

5 は土師器高坏である。脚端部を欠く。坏部は屈曲部が付 け根近くにあり、口縁部が外反しつつ大きく開く。端部は薄 Fig.87 土壙67出土遺物実測図(1:3)



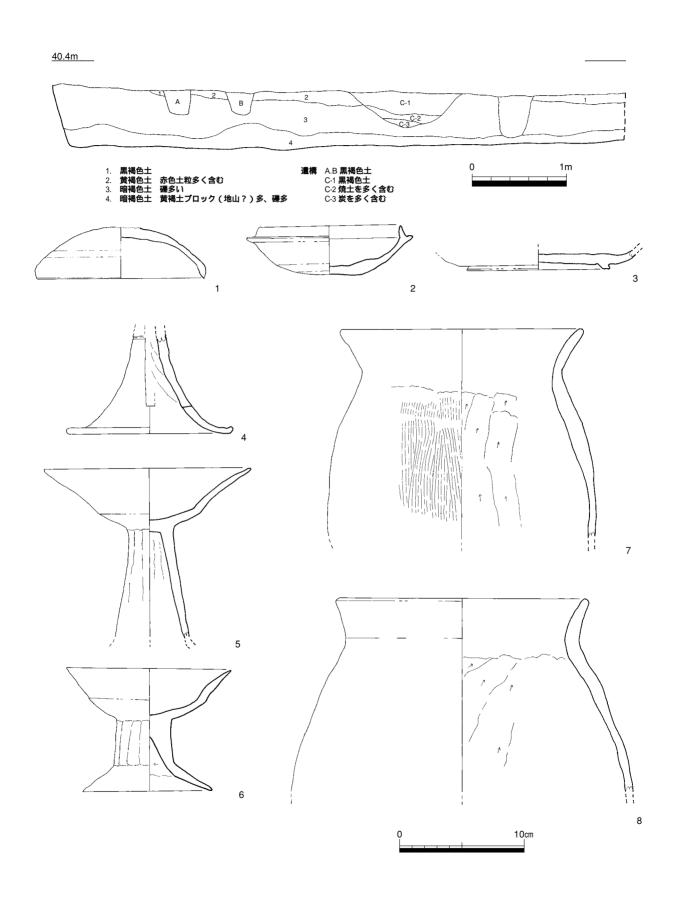


Fig.88 B1区包合層土層図(1:40) 出土遺物(1:3)実測図



Fig.89 B 2 区 1 面遺構配置図(1:400)

く仕上げる。脚柱部は長い円柱状を呈する。坏部は器面が荒れるがほぼ全面ナデであろう。脚柱部は外面へラナデ、内面には絞り痕が見られる。濃赤褐色を呈する。6 は短脚の土師器高坏。坏部は中位に屈曲部を持ち外反しながら開く。口縁端部は薄く仕上げる。短い円柱状の脚柱部から裾部は大きく広がる。裾部端も薄く仕上げる。淡褐色を呈する。脚柱部内面は横方向のケズリ、外面は縦方向のヘラナデを施す。7,8は土師器甕である。7 は口縁部が緩やかに屈曲して開く。胴部内面はケズリを施すが、それでも器壁はかなり厚い。胴はあまり張らないが、それでも口径を上回る。胴部外面は目の粗いハケメ。8 は口縁部がわずかに開く。肩は張らないが、口縁との境に緩い段がたつ。外面はナデ調整される。

図示したものを含め出土遺物を概観すると、量的には古墳時代に属する遺物が多い。しかし3のような古代に属する遺物も確実に包含しており、層位的に分かれる状況にもない。B2区の下面遺構面は古代を下限とすると考えられるので、古墳時代~古代にかけて、土器や鉄滓の廃棄を伴いながら堆積し、形成されたものと考えておく。

B2区1面の概要(Fig.89)

B2区は包含層上面と地山面の2面で調査を行った。1面は暗褐色の包含層上面で検出された遺構を主としているが、西端部をはじめ部分的に包含層の薄い範囲、あるいは包含層が残っていない範囲では下面遺構を調査している場合もある。後述する鍛冶遺構83などがそうである。こうした遺構を含むため、1面で検出された遺構は古代~中世にわたる。ピットや焼土壙、土壙を主とする。

1 面ではピットのほかは楕円形、不定形の土壙、溝等がある。土壙67は比較的大きなもので、東西、南北とも3 mほどである。深さは10cmほどの浅いものであるが、陶磁器片、土師器片、瓦器片などが比較的多く出土した。Fig.87は土壙67出土の白磁である。口縁端部は端反り。体部外面下半から底部にかけて露胎。見込みに圏線を1条巡らせる。土壙68も67と規模、形態の類似した土壙である。ただし出土遺物を見る限り68の方が古く、古代にさかのぼるものと考えられる。後述する土壙70や72と規模、形態が類似する土壙はほかに土壙71があげられる。床面には凹凸が多い。出土遺物からは古代以前に比定できる。また南東端で検出した溝64はほぼ直線的にのびる溝で、覆土から青磁、白磁、須恵器片などが出土している。中世遺構であろう。以下、1 面の主な遺構について個別に述べていく。

遺構83とその周辺遺構 (Fig.90)

1面の西端で検出した。鍛冶関連の廃滓土壙群と考えられる。西端に大規模な遺構83があり、その東側に円形、楕円形の浅い土壙群が分布する。Fig.90 には図示していないが、遺構83の北東15mほどのところにある土壙214,215も同様な性格の遺構と考えてよい。

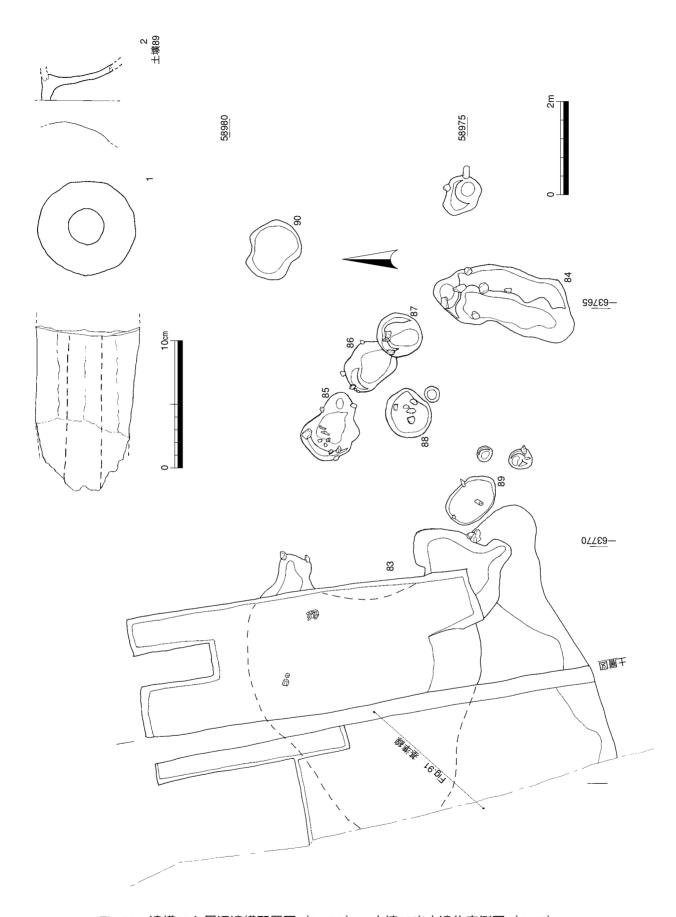


Fig.90 遺構83と周辺遺構配置図(1:80) 土壙89出土遺物実測図(1:3)

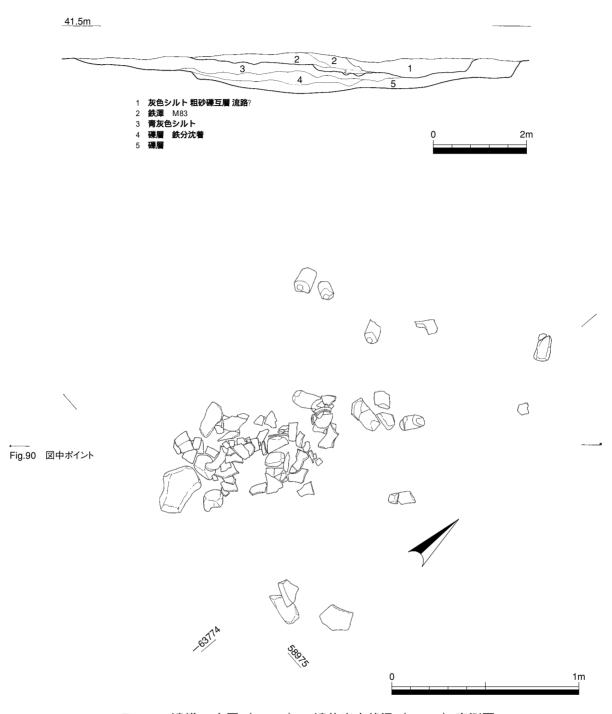


Fig.91 遺構83土層(1:80) 遺物出土状況(1:20)実測図

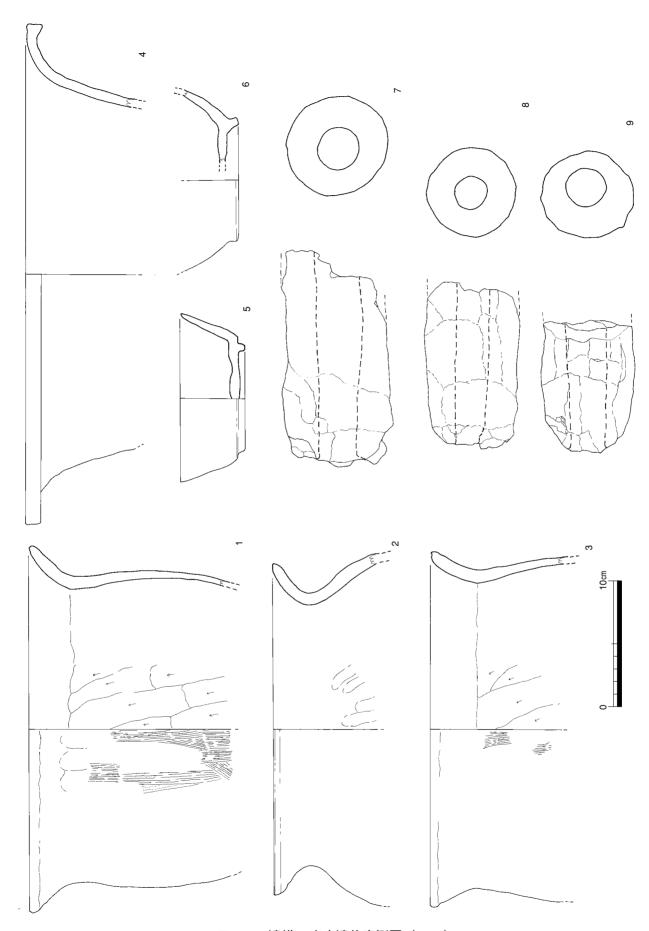


Fig.92 遺構83出土遺物実測図(1:3)

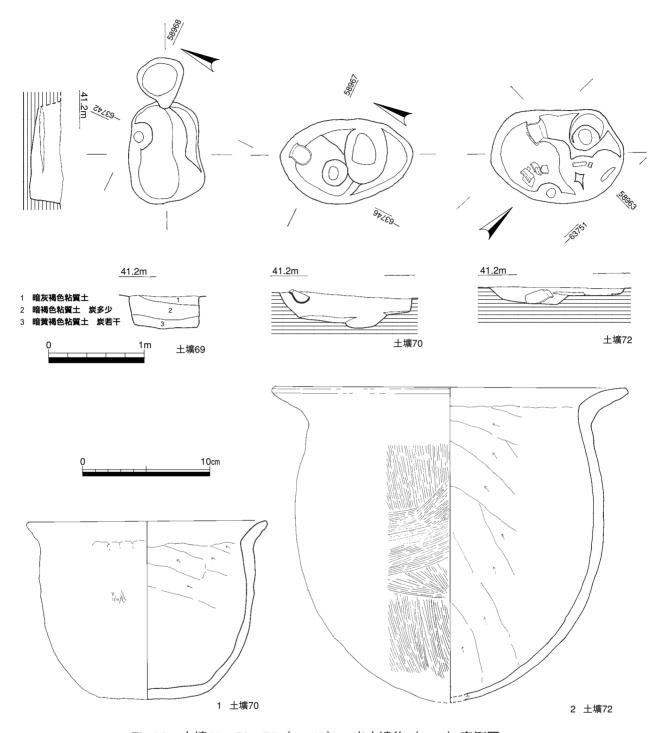


Fig.93 土壙69、70、72(1:40) 出土遺物(1:3)実測図

お3~5層は地山の青灰色シルトや砂礫層で、4層まで鉄分の沈着が見られ、5層にいたってなくなる。 また1層はシルトや砂礫の互層で、遺構83を切る流路があったようである。

遺構83の東側には大小の廃滓坑がある。平面円からやや楕円形を呈するものが多い(土壙85,86,87,88,89)が、長楕円形でやや大形のものもある(土壙84)。いずれも検出面からの深さ10~20cmの浅い凹み状を呈する。内部に鉄滓や鞴羽口などが廃棄されているものが多い。この他前述した土壙214,215も楕円形を呈する土壙である。検出面からの深さ15~20cmで覆土に鉄滓を含む。

これらの廃滓坑群の状況から至近の場所に鍛冶炉があったことが容易に推定される。しかし調査区では検出されていない。西側調査区外にあるのか、あるいは鍛冶炉の構造上、すでに削平されて消滅したかのいずれかの可能性が考えられる。

出土遺物 (Fig.92)

遺構83ではコンテナ2箱ほどの比較的多くの遺物が出土した。特にベルトの西側に集中した部分があり、Fig.91に別途図示している。目立つのは鞴の羽口であるが、須恵器の大甕なども廃棄されている。1~3は土師器甕である。1は胴部が張らず最大径か口縁部にくる。口縁は強く開き端部は丸く収める。外面はハケメで、頸部付け根に指で押さえたような圧痕が見られる。また外面にはススが付着している。2は胴部が強く張る。口縁端部はとがらせて比較的明瞭な稜がたつ。内外面ともナデで、比較的丁寧な調整である。3は胴部があまり張らず、口縁もあまり開かない。外面のハケメは粗くナデ消されている。4は須恵器甕の口縁部である。口縁部は大きく外反する。端部は坦面を作り出しわずかに凹ませる。器壁は厚い。復原口径29.5㎝ほどの大型品である。この他にも須恵器の大甕の破片は相当量見られるが、接合せず、図化するにいたらなかった。1個体ではないようである。5は須恵器の高台附坏である。高台は底部端からやや内側につく。断面方形の華奢な高台である。6は土師器の高台附坏である。高台は外側へ踏ん張る。器面がかなり荒れているが、回転ナデを施すようにも見える。ただし焼成は土師器と全く変わりない。

7~9は鞴羽口である。端部を残すもののみ図示した。いずれも棒状のものに粘土を巻き付け、ヘラ状の工具で表面をなでつけて成形している。鍛冶炉での使用によるものか非常にもろい。

Fig.90には土壙89の出土遺物を図示した。1は鞴羽口である。端部を残す。やはり棒状の芯に巻き付けた粘土をなでつけて成形している。2は高坏脚部である。短脚で裾部が緩やかに広がる。

焼土壙69 (Fig.93)

調査区中央付近で検出した。平面形楕円形の焼土壙である。底面には段やくぼみが多いが、壁はほぼ直に近い。東西1.1m、南北0.7mほどを測る。深さは検出面から30cmほどである。覆土中には多量の炭を含み、特に2層(暗褐色土)中に集中している。壁も上半部が四周にわたって被熱、赤変している。出土遺物は小片のみであるが、古代に属する高台附坏の破片などが見られ、該期のものと考えられる。

土壙70 (Fig.93)

焼土壙69のやや3mほど西側で検出した。平面楕円形の土壙である。南北1.5m、東西0.9mを測る。 底面には凹凸が多い。検出面からの深さは約20cmほどである。遺構の北端に検出面近くに浮いた状態 で、土師器甕が出土した。

出土遺物 (Fig.93)

1は土師器の小形甕である。検出面近くで出土したため、約1/2を欠く。口縁は短く屈曲して開き、 胴はほとんど張らない。最大径が口径となり、19cmほどに復原される。器高は14cmである。底部は平 底気味になる。外面には頸部付け根に原体らしき圧痕が見られるのと、わずかに条線が見られること からハケメを施した後ナデ消したものと考えられる。内面はケズリを施すが、底部付近はナデ消して いる。

土壙72 (Fig.93)

土壙70から南西へ8m付近で検出した。平面楕円形の土壙である。南北1.4m、東西1mを測る。底面には凹凸が多い。検出面からの深さは20cmほどである。底面付近に土師器甕が散乱した状態で出土した。

出土遺物 (Fig.93)

2 は土師器甕である。截頭倒卵形の胴部から口縁部が強く屈曲して開く。胴部は張らず、最大径は口径で28cmほどに復原される。器高は24.6cmを測る。外面にはハケメ、内面はケズリを施す。ハケメの単位は短く、胴部中位では横方向に短く連続的に施す。

B2区2面の概要(Fig.94)

2面は深いところで30cmほど包含層を掘り下げた地山面で検出した。地山は礫の多い暗黄褐色シルトから西端付近は砂礫層になる。2面で検出された遺構は古代のものを主とする。ただしこの面で確認した中世遺構もあり(土壙119)、上面で見逃した中世遺構を含む。この面で検出した遺構はピットと不定形の土壙が主である。以下2面検出の主な遺構について述べるが、個別に述べる遺構以外で、特徴的なものについて略述しておく。

2 面ではピットのほかは不定形の土壙が目立つ。土壙124~126、129~130、132,133などがこれに当たる。いずれも深さ10~20cmの浅い凹み状である。出土遺物はほとんどが古墳時代後期の須恵器、土師器で、129にはわずかに古代の遺物をまじえる。また土壙121,131は平面楕円形の比較的深い土壙である。検出面からの深さ40~50cmを測る。131は古墳時代後期の須恵器、土師器が出土している。121はごくわずかの土師器片のみで、時期を明らかにしがたい。

土壙119 (Fig.95)

2 面の南西側で検出した。1面下の包含層を除去中に鏡が出土したことにより確認した遺構で、本来1面から掘り込まれた遺構であろう。1 面とすれば、土壙72のすぐ北側に当たる位置である。平面形は東側に突出するホームベース型の五角形を呈する。規模は南北1.75m、東西1.85mほどを測る。底面は中央に向かって緩やかに凹み、もっとも深いところで検出面から25cmほど、壁際で10cmほどを測る。壁際に東西各3個の小柱穴が並んでいる。西側壁際に湖州鏡などが出土している。この出土遺物の状況から見ると、後述のように個人遺愛の道具を副葬したようにも思われ、遺構の性格としても墓が考えられるのであるが、都地泉水遺跡のほかの中世墓とは形態が著しく異なる。また壁際の小ピットの存在からは何か上屋があった可能性もある。このような土壙の類例は最近博多遺跡や箱崎遺跡で検出されているとのことで、類例の増加を待って今後の検討課題としたい。

出土遺物 (Fig.95)

土壙119の西壁際から注目すべき遺物が出土している。出土状況はまず白磁の上半部片が最上位にあり、その直下に湖州鏡が出土した。白磁は鏡の上に内面を下にして伏せたような状況で出土している。白磁と湖州鏡の間隙には白色の顔料のかたまりが詰められていた。これは埋蔵文化財センターにおいて分析した結果、鉛を主成分とするものと判明した。従って白粉など化粧用の顔料である可能性もある。さらに湖州鏡を除去すると竹を1cm程の幅に割ったものを南北方向に並べたものが検出された。遺存していたのは鏡の下に当たる部分のみだったので、組んだり編んだりしたものなのか構造は明らかではない。竹の下位には布が検出された。これも埋蔵文化財センターでの分析により、麻であることが判明している。この布と竹は鏡を収納していた容器の可能性があろう。また白磁片は白粉を溶く



Fig.94 B 2 区 2 面遺構配置図(1:400)

化粧道具に転用された可能性がある。従ってこれらは鏡を含め化粧道具を容器に収めて埋納した可能性が高い。

1 は湖州鏡の上面で出土した白磁である。口縁部は端反り。口縁部で全周の1/6程度の破片である。遺存部は全面施釉である。釉は灰味が強く、嵌入が多く見られる。2 は湖州鏡である。裏面を上にして埋納されていた。そのせいか裏面は銹化がすすみ濃緑色~暗緑色を呈するが、表面は部分的に緑青がふくものの、概ね銀灰色を呈し、光沢もある。直径は10.8cmほどを測る。鏡縁は断面カマボコ状を呈し、すぐ内側は匕面をなしている。鈕は付け根のみが残存しているが、小さく扁平な鈕である。図上左側に二重の長方形を中央で分割した区画を鋳だし、内部に銘文を鋳出しているが、判読しがたい。摩滅のせいではなく、湯回りが悪いようである。区画右側の2字目と3字目は「古(湖の略?)」「州」と読めなくもない。各行4~5字が鋳出されているようである。興味深いのは鋳出し銘文と鈕を挟んで対称する位置に、きわめて細い線刻が見られることである。鋳出の区画と同じく二重の外郭と中央の分割線を持つ。大きさは若干小さく、横1.5cm、縦2.5cmである(図では任意の倍率で拡大し、模式的に表示している)。埋蔵文化財センターで顕微鏡写真により判読したところ、図のような文字が認められた。雑な殴り書きのような文字で不明の部分もあるが、左側は「四五六」、右側は「六七八 (六?)九十」と、漢数字を順に羅列したものと考えられる。いかなる意味があるのかは不明である。

土壙120 (Fig.95)

土壙119から7mほど北東側で検出した。1面の土壙70のすぐ西側に当たる。平面形は方形を呈する。 規模は南北1.55m、東西1.5mほどを測る。底面は中央部に向かって緩やかに凹んでいる。中央部で検 出面からに深さ35cmほどを測る。底面西側には底面からの深さ20cmほどの掘り込みがある。また壁際 にはいくつか小ピットが掘り込まれている。規模、形態の特徴からは土壙119と類似した点も多いが、 出土遺物から見る限り、土壙119より古く、古代に属するものと考えられる。

出土遺物 (Fig.95)

3 は土師器甕である。土壙120の西側で出土した。底面からはかなり浮いており、検出面近くからの出土である。口縁部は強く外反しながら開く。胴部はほとんど張らず底部にいたる。底部は凸レンズ状に近い。最大径は口縁部に当たり、径29cmほどに復原される。外面はハケメをナデ消している。内面は頸部付け根から下位にケズリを施し、器壁の厚さをかなり減じている。

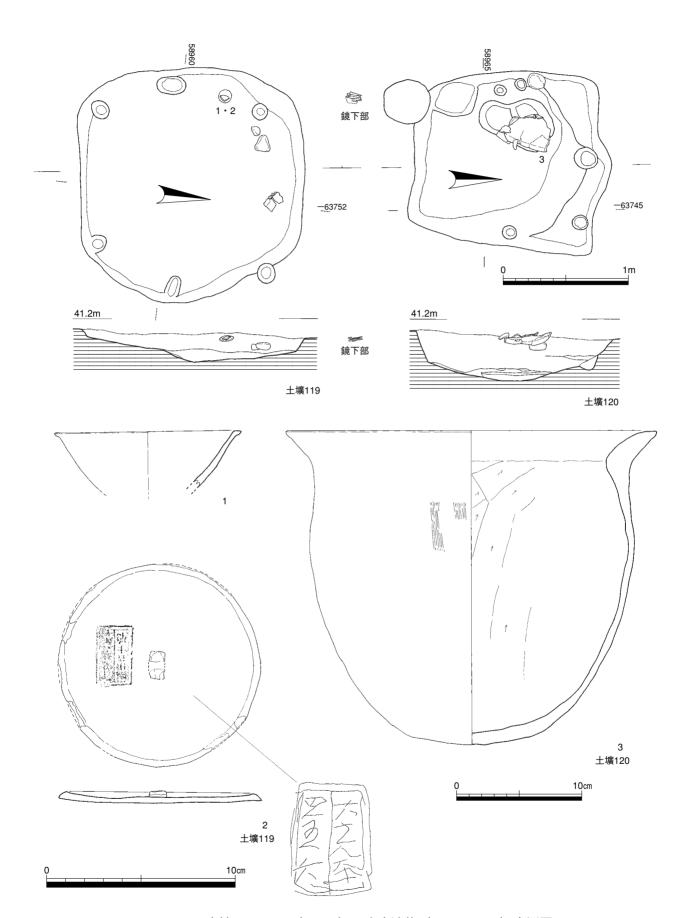


Fig.95 土壙119、120(1:30) 出土遺物(1:3、1:2)実測図



Ph. 湖州鏡刻書

B3**区の概要** (Fig.96)

B3区は黄褐色のシルト面や砂礫層で遺構を検出した。北端のB2区に連続する個所で、部分的に包含層を形成し、B2区につながっていく。南端は里道を隔ててC3区に連続する。

C3区で検出した遺構は土壙、ピットである。ピットのうち2棟分は掘立柱建物を確認した。この他特徴的な遺構として南端部で検出した円形土壙群がある。調査区内では17基検出され、配置は不規則である。覆土は黒褐色ないしは暗褐色の砂質土で、検出面からの深さは10cm程度のもが多く、現状ではきわめて浅い。後述するC3区で検出された土壙群と類似している。C3区と同様出土遺物は全くなく、時期や性格は不明である。

掘立柱建物2(Fig.97)

調査区のほぼ中央で検出した。 $2 ext{ ll } \times 2 ext{ ll } の総柱建物である。柱穴の規模は<math>40 ext{ cm} \sim 80 ext{ cm}$ 医面の柱痕跡調査による柱の規模は、 $2 ext{ ll } \times 2 ext{ ll } \times 2$

掘立柱建物3(Fig.97)

調査区の西端近くで検出した。2間×2間の総柱建物である。柱穴の規模は60cm~80cmほどで、掘立柱建物2より若干大形といえよう。主軸真北から17°ほど東へ向ける。北端の柱穴2基を溝状の攪乱で欠いている。建物規模は南北4.3m、東西4mほどを測り、これより床面積は17㎡ほどと推測される。柱間は南北2.0~2.3mで、2.2m程を測るものが最も多い。東西は2.2mほどで、中心の柱とその東側が1.8mとやや短い。。柱穴からの出土遺物はないが、規模や主軸の類似点から掘立柱建物2とほぼ同時期と考えている。

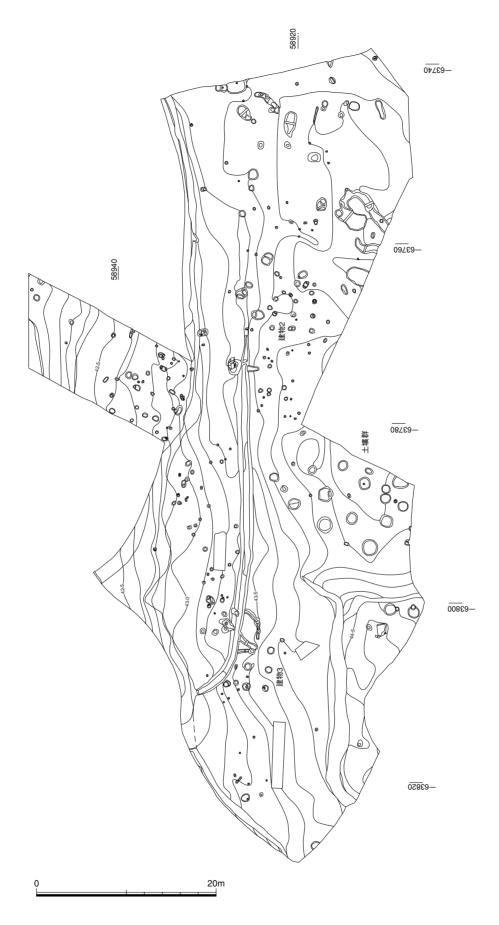


Fig.96 B 3 区遺構配置図(1:400)

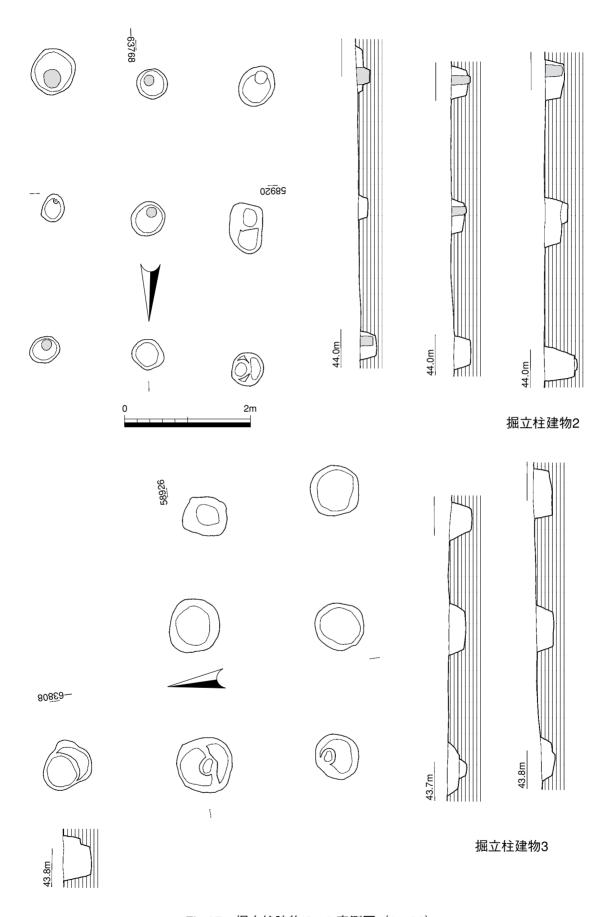


Fig.97 掘立柱建物 2、3 実測図(1:60)

(3)C**区の調査**

C区は、対象地中央を南北に画する里道の南側部分のうち、地形や要調査状況によって画されたE区、D区を除く範囲全域について附した。結果今回調査で最も広い調査区となり、分区も1~5区と細かくなっている。ただし遺跡としては全域が一連というわけでもなく、たとえばC3区の中央には谷部の無遺構地帯があり、大きく2つに分割している。

C1区の概要 (Fig.98)

C1区はC区東端に設定した調査区である。黄褐色の粘質シルト面で遺構が検出された。遺構は北に行くほど密になるような状況がうかがわれる。C1区で検出した遺構はピットと土壙がほとんどである。ピットのうち2棟分掘立柱建物を確認した。南側は遺構、遺物とも希薄であるが、南端に近い位置で流れ込みによる包含層が形成された個所もある。土壙は円形から楕円形で遺物を全く含まない土壙38~40のようなものと、小形の焼土壙である焼土壙41や49のようなものがある。前者はB3区やC2区で検出された土壙群と類似したものと考えられる。また大形の不定形土壙として土壙42、50がある。土壙42は西端で検出したもので、地山下層の礫層まで掘り込んでいる。出土遺物は須恵器、土師器の細片のみであるが、焼土壙43に切られており、古墳時代後期と考えられる。土壙50は長楕円形を呈する土壙で、北側は調査区外に出るが現状で長5m、幅2,8mほどを測る。断面は船底型を呈し、深さは検出面から30㎝ほどである。出土遺物は土師器、須恵器の細片のみであるが、古墳時代後期と考えられる。

掘立柱建物 4 (Fig99)

調査区の北端中央近くで検出した2間×2間の建物である。土壙50を切る。南北にわずかに長い。主軸は真北から20°ほど東へ振る。柱穴の規模は径50~60cm程である。断面で柱痕跡を確認した柱穴は2基にとどまるが、柱の規模は径20cmほどである。建物規模は南北3.5m、東西2.8mほどを測り、これより床面積は10㎡弱と推測される。柱間は南北1.7~1.9m、東西は1.2~1.5mほどで、1.4mほどのものが多い。柱穴からは須恵器、土師器の細片が出土しており、古墳時代後期~古代と考えられる。

掘立柱建物 5 (Fig.99)

調査区の北東端近くで検出した3間×4間の南北方向の建物である。主軸は真北から6°ほど東へ振る。柱穴の規模は径30~40cm程である。断面の柱痕跡調査による柱の規模は、径15cm~20cmほどである。建物規模は南北5m、東西3.8mほどを測り、これより床面積は20㎡弱と推測される。柱間は南北1.1~1.3mほどで、1.1m程を測るものが多い。東側の北端とその南側の2基は柱間1.5mで、やや広くなっている。東西は1.2~1.4mほどで、各辺の中央がやや広い。掘立柱建物4の北側にほぼ同規模の柱列が4間分ある。軸も掘立柱建物4よりわずかに東に振るが、類似した方向である。ただし対応する梁行の柱、また平行する桁行きの柱列も見られず、建物として確認できなかった。柵列の可能性を考えておきたい。

出土遺物 (Fig.99)

1 は須恵器蓋の細片である。北東隅の柱穴CP21から出土した。口縁端部は坦面を作り若干凹ませる。

土壙38 (Fig.99)

調査区中央やや北側で検出した。円形ないし隅丸方形を呈する大形の土壙である。径2.2mを測る。 検出面からの深さは65cmほどを測り、かなり深い。遺物は土師器細片のみであるが、内面にケズリの

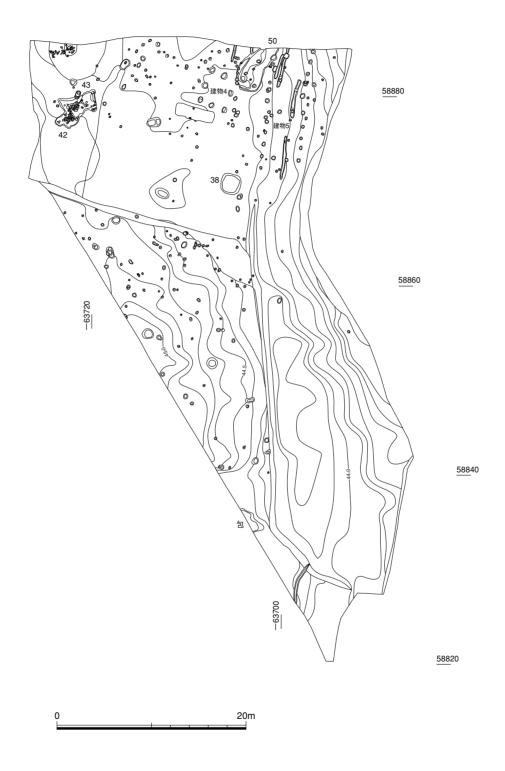


Fig.98 C1区遺構配置図(1:400)

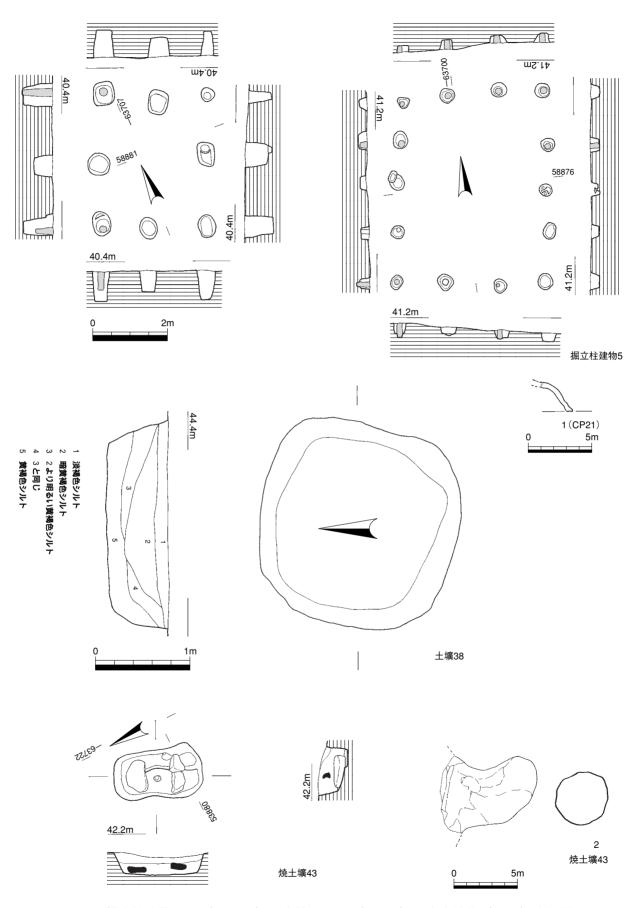


Fig.99 掘立柱建物4、5(1:100) 土壙38、43(1:40) 出土遺物(1:3)実測図



Fig.100 C2区遺構配置図(1:400)

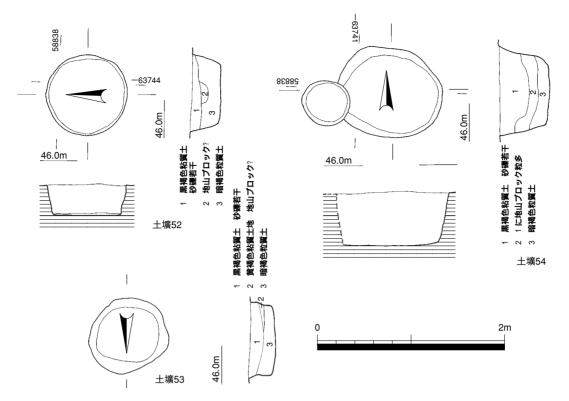


Fig.101 土壙52、53、54実測図(1:40)

ある甕胴部片らしい破片を含み、古墳時代後期~古代と考えておく。

焼土壙43 (Fig.99)

調査区西端で検出した。土壙42を切る。長1m、幅50cmの長楕円形を呈する。検出面からの深さは20cmほどである。底面には平たい板石が据えたような状態でおかれている。覆土からは多量の焼けた骨片が出土した。これについてはまだ同定等諸分析を行っていないので、機会を改めて報告したい。

出土遺物 (Fig.99)

1は土師器の把手である。上方に緩やかに屈曲する。胎土には砂粒を多く含んでいる。

C2**区の概要** (Fig.100)

C2区はC1区の南西側に設定した調査区である。北西端でC3区と接する。C3区東側部分はC2区から連続する遺構面であろう。また調査区東側で緩やかに落ちていき、谷部となる。この斜面上で2ヶ所包含層が形成されている。北側の包含層2はC1区へ連なるものであろう。この谷はC1区南東部へ続き、北東側へ抜ける。D区との境界を画する谷である。C2区で検出した主な遺構もピットと土壙である。ピットは調査区北側から中央部にかけて比較的密に分布する。北端では比較的大型のピットが目立ち、径70cmほどの円形のものや長1m幅70cmに達する楕円形のものがある。また中央部には比較的小形で径40~50cmのピットが主に分布する。これらの中には柱痕跡が確認できたものも多く、建物の存在も考えられたが、建物としてまとめ切れていない。特に北側の大形ピット群はほぼ方形に分布する状況が見られるが、整然さにかけており、今は判断を保留しておく。

土壙52 (Fig.101)

調査区北西端の土壙群のうちのひとつである。径85cmほどの均整のとれた円形を呈する。検出面からの深さは30cmほどである。壁は直に近く、底面はほぼ平坦である。出土遺物は皆無である。

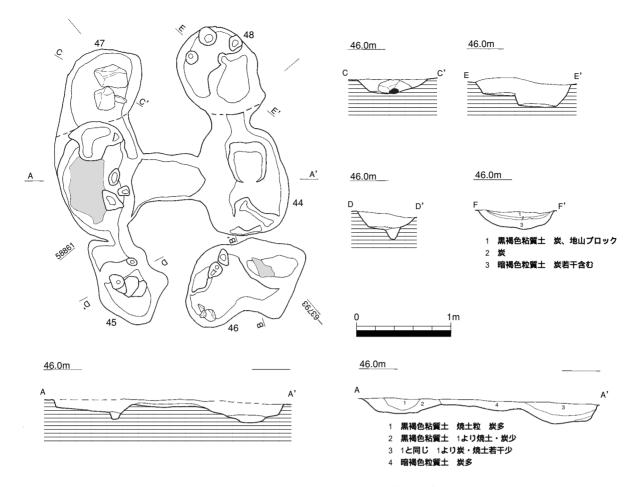


Fig.102 製鉄遺構44~48実測図(1:40)

土壙53 (Fig.101)

土壙52の南側に位置する。径80cmほどの円形を呈する。検出面からの深さは25cmほどである。壁は 直に近く、底面はほぼ平坦である。出土遺物は皆無である。

土壙54 (Fig.101)

土壙52の東側に位置する。長軸110cm、短軸90cmほどの楕円形を呈する。検出面からの深さは55cmほどを測る。壁は直に近く、底面はほぼ平坦である。出土遺物は皆無である。

C2区ではこのような土壙が、ピットと紛らわしいものもあるが、少なくとも9基検出された。いずれも壁がたち、底が平坦な円筒状に掘り下げているのが特徴である。また遺物が全くと言っていいほど出土しないのも特徴的である。時期や用途については不明である。

C3区の概要(Fig.104)

C3区はC1,C2区の西側に設定した調査区である。東側には、装飾古墳である吉武熊山古墳をはじめとする金武古墳群吉武K群が乗る舌状丘陵があり、F区との間を画している。調査区の中央には谷部が南北に通っており、約40m幅の無遺構部分がある。東側部分はC2区から続く遺構面で、C2区と同様黄褐色のシルト層上面で遺構が検出された。また西側部分は丘陵の裾部に当たり、砂礫を多く含む暗褐色の粘質土が地山となっている。東側部分では南端部の段上にC2区からの土壙群の続きがあり、3基の土壙が検出された。このほかピットも比較的密に検出されている。その北側は削平されたものか、ピットが散漫に分布するのみである。西側部分は比較的遺構が密に検出されている。中央

から北側へかけて、丘陵に沿うように溝58がある。広いところでも幅2.5mほどで、深さは現状で15~20cm程度である。底面で礫を投棄した土壙57が検出された。ここからは高台附きの須恵器坏の細片などが出土している。溝58からは遺物は出土していない。丘陵からの流水を流す排水溝の可能性がある。

製鉄遺構44~48(Fig.102)

東側部分の中央付近で検出した。製鉄炉44と4基の廃滓坑からなる遺構群である。製鉄炉44は鉄亜 鈴形を呈する製鉄炉である。主軸は斜面の傾斜に沿う。炉は掘方のみ残存しており、本体は残っていない。炉から東廃滓坑へかけて同一層が堆積しており、破壊されて埋め戻された可能性が高い。掘方の幅は50cm、長さは75cmを測る。両側に廃滓坑を持つ。西側は一部底面が赤変している。この他にも周囲に廃滓坑がある。土壙47は44より先行し、土壙48は44の東廃滓坑を切る。いずれも径60~100cm不定円形ないし楕円形を呈し、検出面からの深さ10~20cmを測る。出土遺物は製鉄炉44と土壙46から土師器細片が数点出土しているのみである。また炉壁らしい焼成粘土塊の細片も含んでいる。時期を明らかにしがたいが、他の例より古代と考えておく。

土壙59 (Fig.103)

東側部分の西端、谷の落ち際近くで検出した。径65cmほどの円形土壙の北側に段を設けたような形態である。検出面からの深さは15cmほどである。壁はあまりたたないが、底面はほぼ平坦である。底面近くで青磁碗が出土した。性格は不明である。

出土遺物 (Fig.103)

1 は青磁碗である。体部の器壁はかなり薄い。釉調はくすんだ淡灰緑色である。畳附のみ露胎でほかは全面施釉である。畳附と見込みに各4ヶ所目痕が見られる。

C4**区の概要**(Fig.105)

C4区はC2区の南西、C5区の東側に設定した調査区である。検出面は黄褐色のシルトであるが、砂礫が露出して遺構が見られない範囲が大部分である。西北端に比較的ピットや小溝が密に分布する個所があるが、ほかはピットや浅い土壙が散漫に散布するのみである。西側はC3区から連なる谷部へ落ちていきC5区と画されている。

C5**区の概要**(Fig.109)

C4区と谷を挟んで西側、C3区の南側に位置する。C3区西側部分と同じく舌状丘陵の東側裾部斜

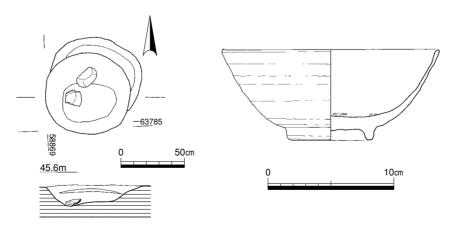


Fig.103 土壙59(1:30) 出土遺物(1:3)実測図



Fig.104 C3区遺構配置図(1:400)





Fig.105 C4区遺構配置図(1:400)

面に当たる。地山は暗褐色の粘質土層である。比較的遺構、遺物がまとまって出土している。主な遺構は住居跡、溝、ピットなどである。ピットのうち掘立柱建物としてまとまるもの3棟を確認した。住居跡、建物については後述することとし、溝について略述しておく。調査区北半部では遺構が特に密に分布するが、その中央部で溝60が検出された。幅3m、長さ15mほどの長方形に、いくつか張り出し部がついたような平面形である。検出面からの深さは10cmほどで浅い。溝というより整地のような状況である。検出段階で礫が集中する個所も見られたので、中世墓などの存在も想定して調査したが、底面からはピットは多数検出されたものの、埋葬遺構などは見つかっていない。出土遺物は土師器、須恵器の細片がほとんどであるが、ほぼ古墳時代後期と考えられる。また遺物の中には比較的遺存がよく、ローリングも受けていないものがある。Fig.106は溝60出土の土師器甕である。口縁は緩く屈曲して開く。外面はハケメをナデ消しており、頸部にハケメ原体の小口痕が残っている。内面はヘラ削りを施す。

この他南半部には溝63,211など幅20~30cmの溝が見られる。遺物は少ないが、住居や溝60とほぼ方向を同じくしており、同時期の可能性が考えられる。

住居跡61 (Fig.107)

調査区のほぼ中央で検出した。ほぼ主軸を東西に向ける長方形を呈する。貼り床は確認できなかったが、東壁際の検出面から5~10cm程のところに焼土が集中しており、これがカマドの痕跡と考えられることから、このレベル付近に床があった可能性が高い。東西3.8m、南北3.2mを測る。掘方の深さは検出面から30cmほどである。掘方の西壁際に不定形の掘り込みがある。主柱穴は特定できない。図化可能な出土遺物は下記の通りで、古代に属するが、C5区の遺構の状況や遺跡全体の竪穴住居の動向から見て、古墳時代後期から幅を持たせて考えておきたい。

出土遺物 (Fig.107)

1は須恵器蓋の口縁部片である。端部を嘴状に屈曲させる。古代に属するものである。

住居跡62 (Fig.107)

住居跡61の南側で検出した。61よりやや大きい。東西4.5m、南北5mを測る。検出面から10cm程のレベルで貼り床を確認した。北側の壁際には浅い掘り込みがあり、粘土や焼土、土器破片の散布が見られる。カマド跡と考えられる。主柱穴は若干いびつではあるが4本と考えられる。床面は10cmほどの厚さで張られている。掘方底面は検出面からの深さ20~30cm程で、わずかに壁際に向かって深くなるが、ほぼ平坦である。住居跡61と同様古墳時代後期~古代と考えられる。

出土遺物 (Fig.107)

2 は土師器甕の口縁部である。口縁部はわずかに開く。端部は薄くとがらせる。内面はケズリ、外面はハケメのナデ消しか。

掘立柱建物8 (Fig.108)

住居跡62の東側で検出した建物である。2間×2間と想定して精査したが、北東隅の柱穴は確認できなかった。1間×2間に軒か縁がとりつくのか、あるいは東端もしくは南端の2基が建物と関

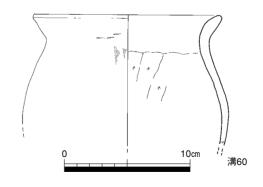


Fig.106 溝60出土遺物実測図(1:3)

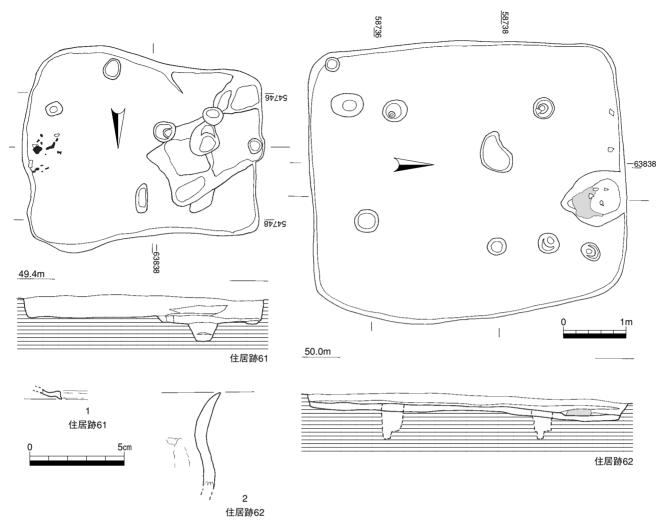


Fig.107 住居跡61、62(1:60) 出土遺物(1:3)実測図

係なく、残りの柱穴で 1 間 \times 2 間になるのかよくわからない。主軸は真北から4°ほど西へ振る。柱穴の規模は径50~60cm程であるが、中央の 1 基は径40cmとやや小さい。柱痕跡は径20cmほどである。柱間は南北1.3~1.5m、東西は1.5~1.8mほどである。柱穴からは遺物の出土がないが、住居跡とほぼ軸をそろえており、古墳時代後期~古代と考えられる。

掘立柱建物9 (Fig.108)

掘立柱建物10の北、住居跡61の北東で検出した2間×2間の建物である。南北にわずかに長い。主軸は真北から24°ほど西へ振る。柱穴の規模は径40~50cm程であるが、東列と西列には25~30cmほどの小さいものもある。建物規模は南北3m、東西2.5mほどを測り、これより床面積は7.5㎡程度と推測される。柱間は南北1.6m、東西は1.1~1.3mほどである。柱穴からは遺物の出土はないが、ほかの建物と同様古墳時代後期~古代と考えておく。

掘立柱建物10 (Fig.108)

調査区のほぼ中央で検出した。2間×2間の総柱建物である。柱穴の規模は40cm~50cmほどである。断面の柱痕跡調査による柱の規模は径15cmほどである。主軸をほぼ南北に向ける。建物規模は南北3m、東西3.3mほどを測り、これより床面積は10㎡程度と推測される。柱間は南北1.5m、東西は1.6~1.7mほどである。柱穴からは遺物の出土はないが、住居跡61,62,掘立柱建物8と軸をそろえており、古墳時代後期~古代と考えておく。

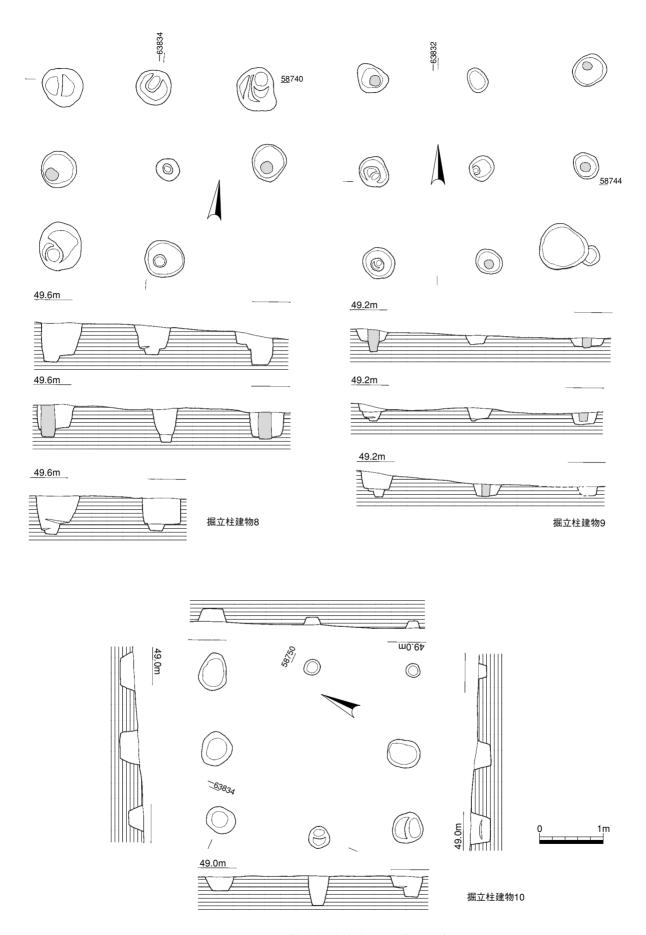


Fig.108 C5区掘立柱建物実測図(1:60)



Fig.109 C5区遺構配置図(1:400)

(4) D**区の調査**

D区は圃場整備対象地の東端に設定した調査区である。区画整理対象地まで含めた都地泉水遺跡調査対象地全体で見ればほぼ中央に位置する。北西側は谷部がありC区と画されている。南東側にも谷部がある。この谷はE区南側やG区南側で確認された谷部と一連のものと考えられる。現時点での試掘、調査成果からは南側に位置する乙石遺跡、南東側の都地遺跡との境界を画す谷と考えられる。ただし、現在の旧県道大野二丈線とその周辺の集落部分の状況が明らかでないので、都地泉水遺跡の南限についてはまだ確定したとはいえない。また東側は里道を挟んでH区へと連なっていく。西側はE区との間に礫層が露出した無遺構部分があり、またE区とは地形的にも画されている。しかしこれは水田造成時の削平によるもので、本来E区の舌状丘陵から続く微高地に立地する可能性が高いものと考えている。

D区では散漫ではあるが、遺構は比較的多く検出されている。主な遺構はピット、土壙、焼土壙、 溝などである。ピットは建物としてまとまるものも見られ、個別に報告したもののほか、調査区中央 部でも小形のもの2棟が確認できる。北端にもL字に並ぶ柱列がある。焼土壙も2基検出された。や や小形の焼土壙である。溝は細いものであるが、土壙33の北側にほぼ等間隔で4条並ぶものも見られ る。この溝は古墳時代後期の土壙である土壙33を切る。

土壙33 (Fig.111)

調査区北端付近で検出した。平面形は楕円形を呈し、長7m、幅5mほどを測る。西側に張り出し 状の部分や、独立した楕円形土壙が見られるが、覆土の状況や遺物の散布状況から土壙33の一部分と 考えられる。検出面からの深さは30cmほどである。中央部にかけて緩やかに深くなる皿状を呈してい る。覆土より多数の土器片や礫等の遺物が出土している。土層断面を見ると、炭や焼土が集中する層 (2層)が現況のほぼ中位に見られる。遺物はその上層(1層)に集中する。炭、焼土層の下位は地山 埋め戻しによって底面を整えているものと考えられる。遺物は特に集中する個所を見せず、土壙全体 に散漫に分布する。

出土遺物(Fig.112)

1 は須恵器蓋である。口縁部と天井部の境は強く屈曲して段を持つ。口径は16cmほどに復原される。段から上位の天井部は回転へラ削りを施す。口縁部から内面は回転ナデを施すが、外面のナデは天井の一部まで及んでいる。胎土には砂粒が多く、径 2 mm以上の砂礫まで含む。2 も須恵器蓋である。口縁部と天井部の境は曖昧で丸みを持つが、頂部で平坦になる。口縁から1/3程度のところに沈線を巡らす。沈線から上位をヘラケズリし、口縁部の回転ナデは沈線のやや上位に及ぶ。口径は13.2 cmに復原される。砂粒や砂礫の多い粗い胎土である。3 ~ 5 は須恵器坏身である。3 は小片で口径12cmほどに復原される。口縁部は外反気味に直立する。受け部も上方へ突出し、口縁部との境は溝状になる。遺存部は内外面回転ナデを施す。4 も小片で、11cmほどに復原される。口縁部は直線的に内傾する。口縁の内面端部に段を持つ。受け部はほぼ水平に外側へ突出する。遺存部の外面下端に回転へラ削り痕が見られる。5 は13cmに復原される。口縁部は低く薄い。外反しながら内傾する。受け部はほぼ水平に外側へ突出する。底部は平坦である。体部下半から外底部にかけて回転へラ削り。

6,7は土師器甕である。6は口径15cm程の小形の甕である。口縁部は直線的に外反する。外面はハケメをナデ消したものと考えられ、また頸部との境付近には指で押さえたような凹凸が多い。内面は幅狭の原体で横方向に削ったような痕跡が見られる。7は口径18cmほどに復原される。口縁は緩やかに屈曲しながら外反し、胴部との境は不明瞭である。口縁部は厚さがほとんど変わらず、端部は丸く

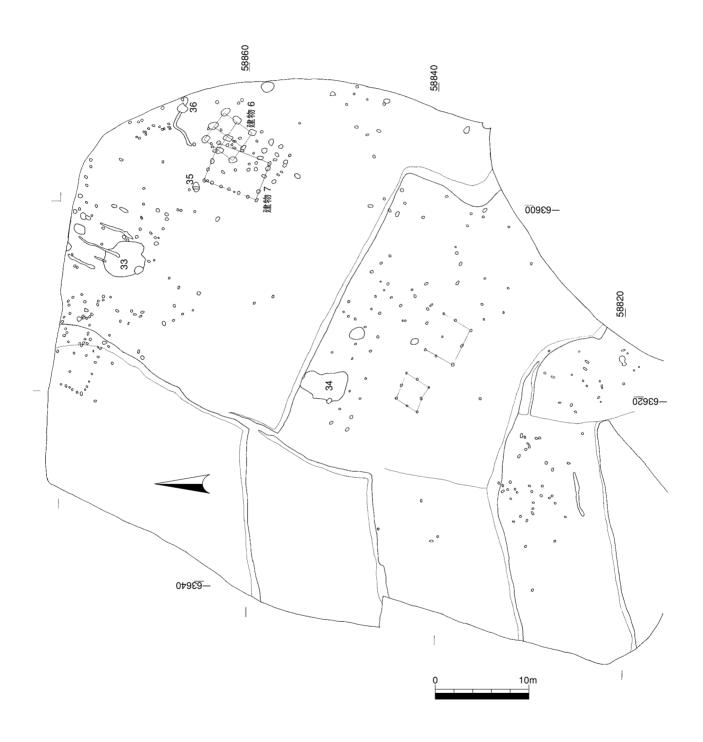


Fig.110 D区遺構配置図(1:400)

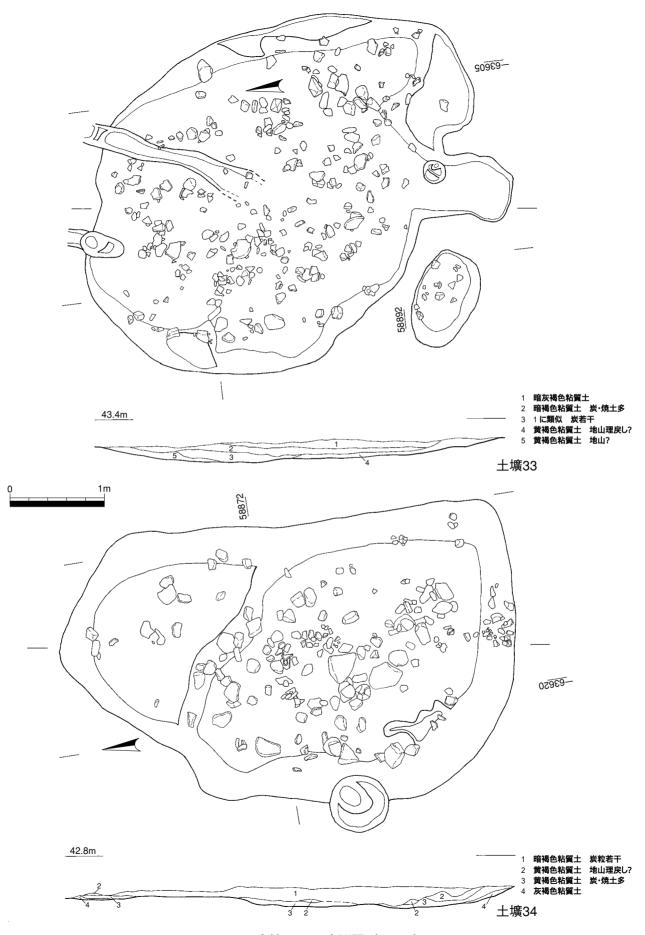


Fig.111 土壙33、34実測図(1:40)

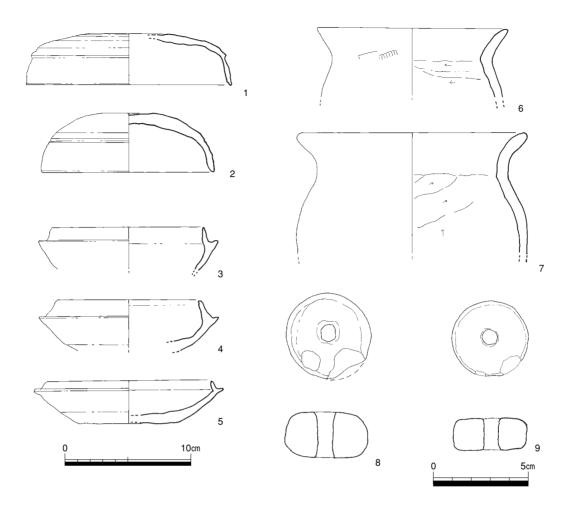


Fig.112 土壙33出土遺物(1:3 1:2)

収める。胴はあまり張らない。胴部内面はヘラ削り、外面はナデを施している。

8 は土製の紡錘車である。径4.5cm、厚さ2.5cmを測る。角が丸く、断面繭型を呈する。部分的に赤変している。9 は滑石製の紡錘車である。径4cm、厚さ1.7cmで厚い円盤形を呈する。

以上の出土遺物から土壙33の時期は古墳時代後期と考えられる。この他弥生時代に属する太型蛤刃石斧が出土している。他の古墳時代遺物と同じ状況で出土しており、該期に再廃棄されたものと考えられる。遺物の詳細については後の石器の項で述べる。

土壙34 (Fig.111)

調査区のほぼ中央で出土した。平面形は楕円形を呈し、長7.2m、幅4.5mほどを測る。検出面からの深さは30cmほどである。北側に段状の部分を持ち、段部の底面は平坦である。段下の南側は中央部にかけて緩やかに深くなる皿状を呈している。土壙33と同様覆土より多数の土器片や礫等の遺物が出土している。やはり炭や焼土が集中する層(3層)が見られるが、この層は底面の直上まで堆積しているのが土壙33とは若干異なる。遺物はその上層(1層)に集中する。遺物は特に集中する個所を見せず、土壙全体に散漫に分布する。また人頭大の礫が多く散布している。

土壙33,34は覆土に焼土、炭を多量に含み、また包含される遺物も細片が多いことから、土器焼成 関連遺構の可能性を考え、覆土の大半を持ち帰りふるいにかけた。しかし、炉壁の存在を示す粘土塊 や焼成失敗の破裂細片など、焼成遺構の存在を直接示すものは検出されなかった。

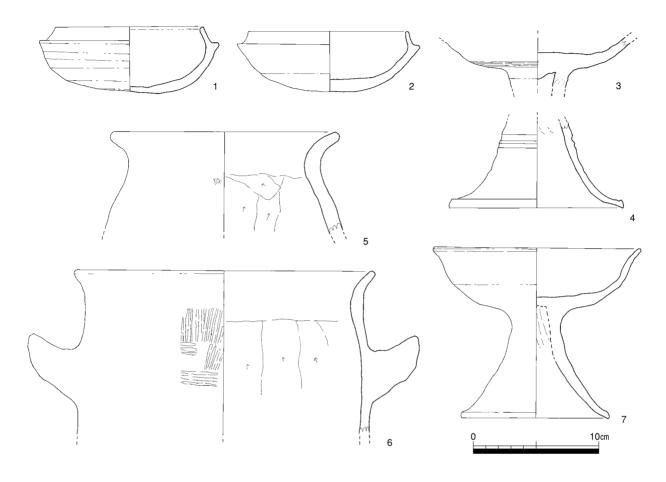


Fig.113 土壙34出土遺物実測図(1:3)

出土遺物 (Fig.113)

1,2は須恵器坏身である。いずれもほぼ完形に近く復原される。1は口縁部を1/4ほど欠く。口径14 cmを測る。口縁部は直線的に内傾し、厚さを減じず、端部に坦面をなす。受け部は短く外方へ突出する。受け部直下から回転へラ削りを施し、回転ナデが受け部のやや下位まで及ぶ。内底部に同心円文らしき当て具痕が見られる。2は焼成が悪く灰白色を呈する。口縁部は直線的に内傾し、端部は薄くとがらせる。口径14.5cmを測る。器面荒れが著しいが、外底部には回転へラ削り痕が見られ、受け部の下位 1/3 程度まで回転ナデが及ぶか。3 は須恵器高坏坏部片である。底部は平坦である。外面にはカキ目を施す。4 も須恵器高坏脚部である。脚柱部は緩やかに広がる円錐状を呈し、裾部にいたる。脚部中位に浅く幅広の沈線を二条巡らせる。裾部は端部を拡張して坦面を作り出す。内外面回転ナデされるが、脚柱部内面には絞り痕が見られる。

5 は土師器甕である。全周の1/6ほどの小片であるが、外面は黒変している。口径が18cmほどに復原されるやや小形の甕である。口縁部は強く屈曲し、外反しながら開く。端部は丸く収める。内面はヘラ削りを施すものの、器壁は比較的厚い。外面はハケメをナデ消しか。6 は土師器甑である。口径は24cmほどに復原される。口縁部は短く屈曲して開く。胴部は張らず、円筒形を呈する。把手は屈曲しながら上方へ伸びる。胴部外面には平行タタキを施している。内面には縦方向のヘラ削りを施す。7は土師器高坏である。坏部の口縁 2/3 ほどを欠くが、ほぼ全形を復原できる。坏部径16.5cmほどであろ

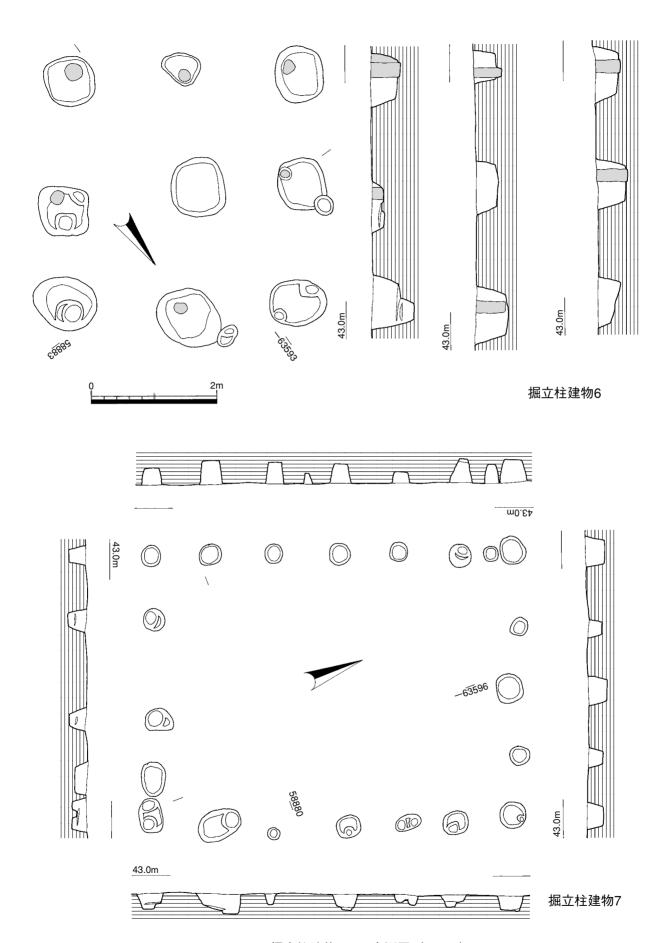


Fig.114 掘立柱建物 6、7 実測図(1:60)

う。坏部は平坦な底部から屈曲し、口縁端部付近でわずかに外反しながら開いている。底部と口縁部の境は段などは持たず、曖昧である。脚部も緩やかに開く円錐状を呈し、脚柱部と裾部の境は不明瞭である。脚端部は下方へわずかに突出し、坦面を作り出す。器面はかなり荒れるが、坏部の外底部に痕跡的ではあるが、脚部を中心にした同心円状の条線がわずかに観察でき、カキ目を施したものと考えられる。また脚部付け根近くの内面には絞り痕が見られる。その他はナデもしくは回転ナデであろう。このように焼成や全体的な器形は土師器であるが、調整や脚端部の形状などには須恵器的な特徴が見られる。

以上のような出土遺物より、土壙34も33とほぼ同時期の、古墳時代後期に位置づけられよう。

掘立柱建物 6 (Fig.114)

調査区の東端で検出した2間×2間の総柱建物である。ほぼ方形を呈する。主軸は真北から35°ほど東へ振る。柱穴は一辺70~80cm程の隅丸長方形を呈するものが多い。掘立柱建物7を構成するピットに切られる柱穴があり、掘立柱建物7より古い。建物規模は南北3.7m、東西3.5mほどを測り、これより床面積は13㎡程度と推測される。柱間は東西、南北とも1.6~1.7mを測る。柱穴出土の遺物は須恵器、土師器の細片のみであり、古墳時代後期~古代の幅で考えておく。

掘立柱建物 7 (Fig.114)

掘立柱建物6の南西側で検出した。概ね 4 間× 6 間の建物状を呈するが、柱間の幅が一定でなく、また極端に小さいピットがあるなど、ほかの建物に比べて整然さにかける。主軸は真北から21°ほど東へ振る。柱穴は径30cm程の円形を呈するものが多い。建物規模は南北5.8m、東西4.3mほどを測り、これより床面積は25㎡程度と推測される。柱間は、東西は 1 mのものが最も多く、最大1.5m、最小0.7mである。南北は0.9~ 1 mのものが最も多く、最大1.3、最小0.7mを測る。柱穴出土の遺物は須恵器、土師器の細片のみであり、時期を明らかにしがたいが、遺物の幅は古墳時代~古代と考えられる。

以上のように掘立柱建物 7 は他の建物に比べて柱の配置が雑である。柱間はやや離れているが大壁建物になる可能性、また掘立柱建物 6 を切り、これより新しいという点を積極的に評価して、柱穴が小型化し、配置が雑になる中世建物の可能性なども考慮する必要があろう。

(5)E**区の調査**

E区は平成16年度に調査した地区である。調査区の南東端に位置する。北西および南東を谷部で画される。北西側の谷は狭小で、C区とE区、およびC区とD区を画する谷となる。南東側はD区の項で述べたように乙石遺跡との境界を画する谷の可能性が高い。E区の南西側にはG区があるが、市指定遺跡吉武熊山古墳が乗る舌状丘陵から、南東へ延びる舌状の段丘上に乗る一連の遺跡である。この段丘は現状ではE区の北端で崖状に落ち、D区との間を画しているが、前述のように本来D区、H区へと連なっていくものと考えられる。E区は工事計画上調査を要しない部分により、大きく3区に分けられる。南から1~3区とした。遺構検出面は砂礫の多い黄褐色の粘質土である。後項で個別に説明する遺構以外で、主な遺構について略述する。

E区では竪穴住居、製鉄遺構、焼土壙、土壙、溝、ピットなどが検出された。焼土壙は他の地区に比べて目立つ。代表的なものは後述するが、それも含めて14基検出した。形態は楕円形ないしは隅丸長方形を呈するものが多い。焼土壙は1区から3区まで偏りなく分布する。土壙は不定形のものが多い。ピットは1区から2区にかけて特に密である。今回は掘立柱建物1棟しか報告できなかったが、詳細に見れば建物はまだあるだろう。1区のほぼ中央に溝8が南北に通っている。幅20~30cm、深さ10cmほどの小規模な溝であるが、延長27mにわたって延びている。遺物はきわめて少ないが、奈良時代須恵器の破片があり、該期の遺構と考えられる。

住居跡24 (Fig.118)

E3区北端で検出した。北側を削平されているが、ほぼ方形に復原できよう。貼り床は確認できなかった。焼土が南壁の中央付近から南方へ張り出し気味に集中しており、これがカマドの痕跡と考えられる。東西4.5m、現状で南北4.2mを測る。検出面からの深さは10~20cmほどである。床面には多数ピットが検出されたが、主柱穴は特定できない。

出土遺物 (Fig.118)

1,2は土師器甕である。1は小片であるが、口径17cmほどに復原される。口縁は緩やかに屈曲した後直線的に開く。端部は丸く収める。頸部と胴部の境は不明瞭である。肩はあまり張らない。外面はハケメを施すが、ナデ消しているようである。胴部内面はケズリか?胎土には砂粒を多量に含み、粗い。2は口径20cmほどである。口縁部は口径に比して小振りでやや薄く仕上げる。端部は坦面をなす。頸部から緩やかに外反しながら開く。胴部と頸部の境は不明瞭である。肩がわずかに張り、胴部径が口径を上回る。外面はハケメ、内面は遺存がよくないが、ケズリであろう。

以上の出土遺物より住居跡24は古墳時代後期に属するものと考えられる。

製鉄遺構14、15(Fig.119、120)

E2区の南端で検出した。E区南側の谷に面した斜面上に位置している。製鉄炉14とそれに付随する 廃滓溝15で構成される製鉄遺構である。

製鉄炉14は空豆のようないびつな偏楕円形を呈する。基本的には中央に炉を持ち、その両側に廃滓坑を持つ鉄亜鈴形の変種である。全長4.2m、最大幅は西廃滓坑部分で2.5mほどを測る。東廃滓坑は幅1.2m程である。E区南側の谷に面し、谷に対して直交して営まれている。炉の部分は遺存部の長90cm、幅60cmほどである。復原すると長90cm~1 m、幅70cmほどと考えられる。炉は破砕されており、下部構造のみわずかに遺存している。Fig.120に示した堆積状況を見ると、皿状に掘り凹めた地山の上に砂を敷き詰め(3 層)、その上に炭を敷いている(2 層)。さらにその上に砂を敷く(1 層)。最上層の1



Fig.115 E1区遺構配置図(1:400)

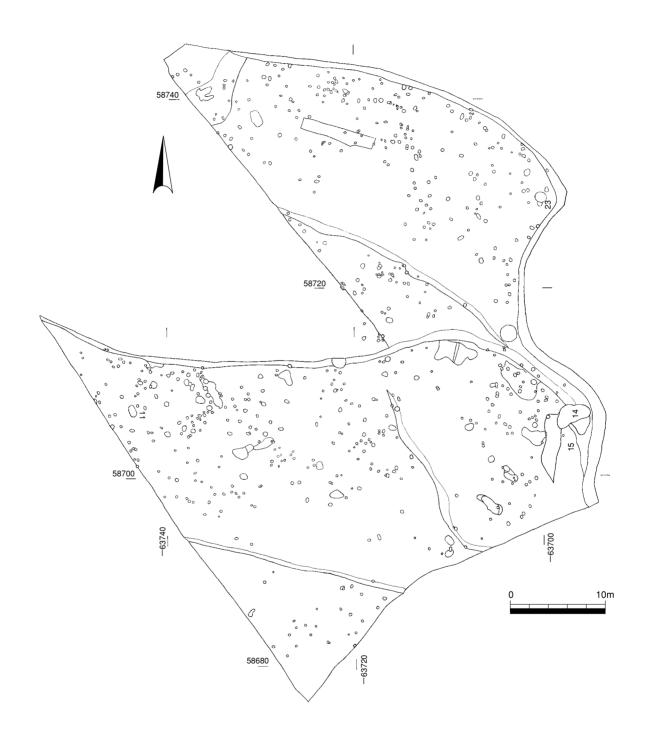


Fig.116 E 2 区遺構配置図(1:400)

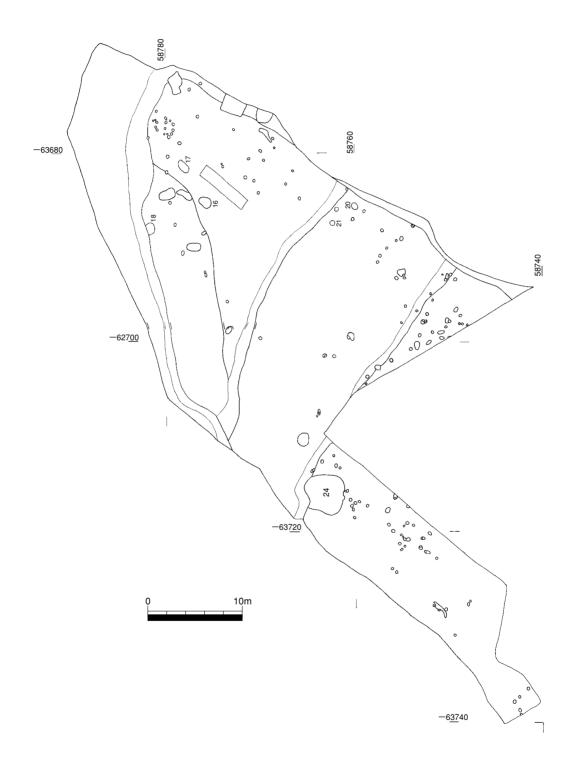


Fig.117 E3区遺構配置図(1:400)

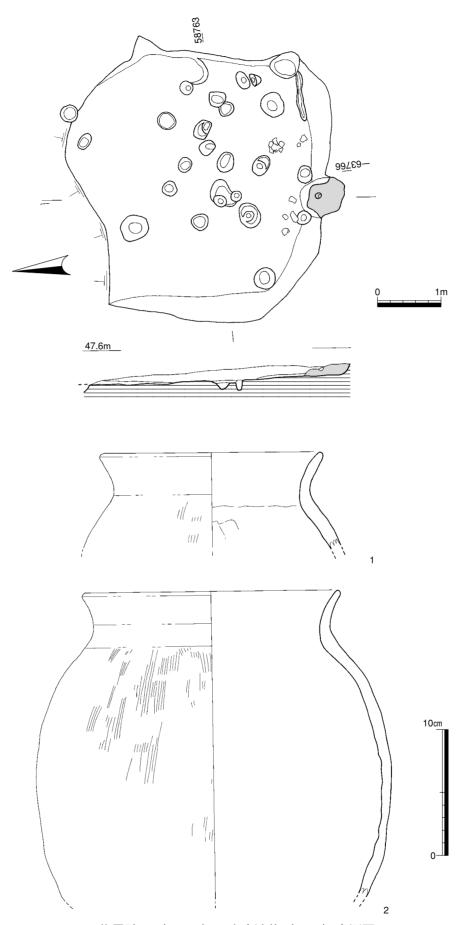


Fig.118 住居跡24(1:60) 出土遺物(1:3)実測図

層中には黄褐色のブロックを含んでおり、これが炉底の破片かもしれない。そうであれば1層上に炉が設けられたものか。炉の両側に廃滓坑が設けられるが、谷に面した東廃滓坑はきわめて規模が小さい。炉からほとんどそのまま谷部へ鉄滓を掻き出したものと考えられる。西廃滓坑は、南側に張り出した楕円形を呈しており、張り出し部に溝15がとりつくような構造になる。

溝15は製鉄炉14の南側に位置する。延長7m、幅4.3m程を測る。製鉄炉14の西側、谷に面していない方の廃滓坑から谷に向かって鉄滓を掻き出し、廃棄する施設である。断面は浅く広く、中央部分が若干V字形に深くなる。土層は比較的単純で黒色~褐色の粘質土が堆積している。特に1,2層から鉄滓や炉壁片と見られる焼けた粘土塊が多く出土している。

出土遺物 (Fig.119、120)

製鉄炉14、廃滓溝15とも遺物は少なく、また細片が多い。操業の時期を窺わせる遺物について下記に述べる。Fig.120には製鉄炉14から出土した遺物を掲げた。1 は須恵器の口縁部細片である。傾きから見て小形の甕と考えられる。口縁端部は拡張されて玉縁状を呈する。内外面回転ナデを施す。2は須恵器口縁部である。平瓶、提瓶などの瓶類の口縁であろう。緩やかに開きながら、端部近くで内湾する。その屈曲部近くに2条の沈線を巡らせる。内外面回転ナデ。3 は高台附坏の口縁部から体部片である。口径15㎝ほどに復原される。体部はやや外反しながら開き、口縁部にいたる。口縁端部は薄くとがらせている。4 は須恵器坏蓋片である。口縁端部が屈曲し、下方へ突出する。端部外面はわずかに凹ませる。内外面回転ナデを施す。5 は須恵器口縁部片である。細片ではあるが、かえりの高さに比して径がかなり大きくなり、蓋と考えられる。かえりの端部は受け部より下方へ出るようである。6は高台附坏の底部片である。高台径9㎝ほどに復原される。高台はわずかに外方へ踏ん張る。端部はわずかに丸みを帯びる。外面は回転ナデ、内面はナデを施す。この土器は赤褐色を呈し、また黒変部が見られる。すなわち焼成状態は土師器と見ることができる。高台端部の作りに須恵器としては違和感もないではないが、細片のため全体的な器形、成形、調整の詳細を知り得ないので、判断は保留しておく。7 は須恵器高台附坏の底部片である。高台は低く、外方へ踏ん張る。端部は坦面をなす。外面は回転ナデ、内面はナデを施す。

Fig.119には溝15出土遺物を掲げた。いずれも細片である。1 は須恵器蓋である。かえりはわずかに受け部より下に出る。受け部端は丸く仕上げる。2 は須恵器底部片である。高台附坏である。高台は低く、内傾する。外側は底部と高台部の境が不明瞭になっている。外面は回転ナデ、内面はナデを施す。3 はFig.120 - 6と類似した、土師質焼成の土器である。器形は須恵器の高台附の坏である。高台部は低く、外方へ踏ん張る。製鉄炉14出土例よりさらに摩滅が進み、調整の詳細はよくわからない。

以上製鉄炉14,廃滓溝15出土の遺物より、両遺構は古代に属するものと考えられる。

掘立柱建物1(Fig.121)

E1区の南西端近くで検出した。3間×2間以上の建物である。主軸は真北から21°ほど東へ振る。柱穴の規模は径40~50cm程である。断面で確認した柱痕跡から見て、柱の規模は径15cmほどである。建物規模は南北5.3m、東西3.5m以上を測り、これより床面積は20㎡以上と推測される。柱間は南北1.5m、東西は1.5~2.2mほどで、やや不揃いである。柱穴からは遺物が出土しておらず、時期は不明であるが、遺跡全体の動向から見て古墳時代~古代の可能性が高いと考えられる。

焼土壙6 (Fig.122)

焼土壙はE区全体で14基検出した。規模は若干差異があるが、形態や覆土は類似しており、ここで

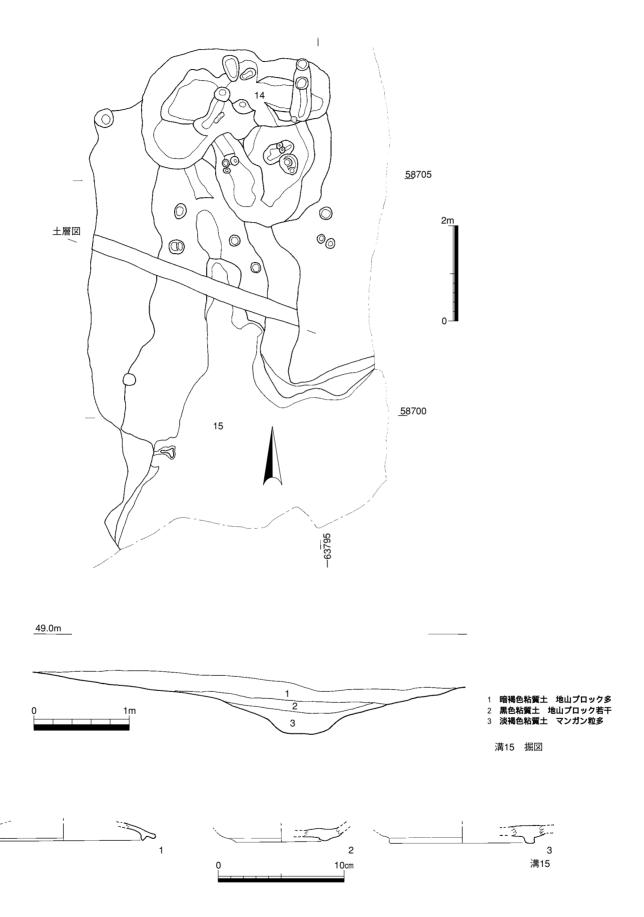
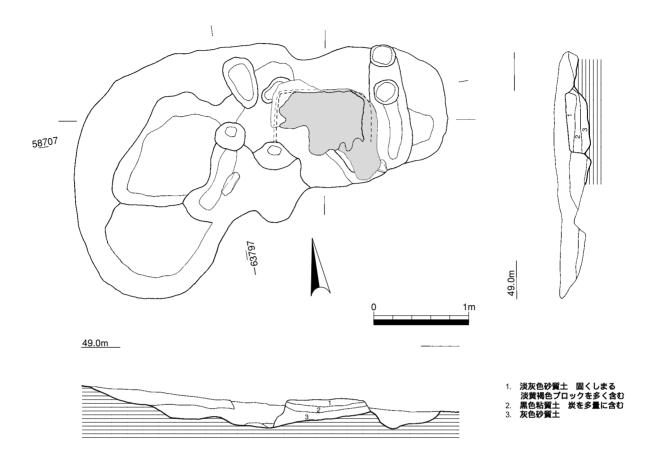


Fig.119 製鉄遺構14 溝15(1:80) 溝15土層(1:40) 溝15出土遺物(1:3)実測図



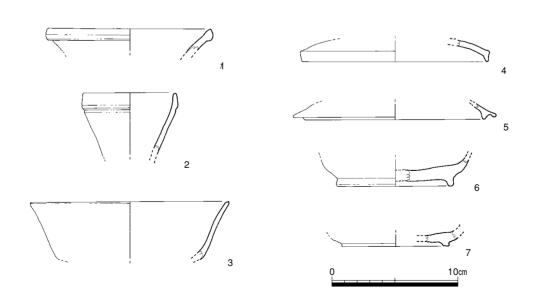


Fig.120 製鉄遺構14(1:40) 出土遺物(1:3)実測図

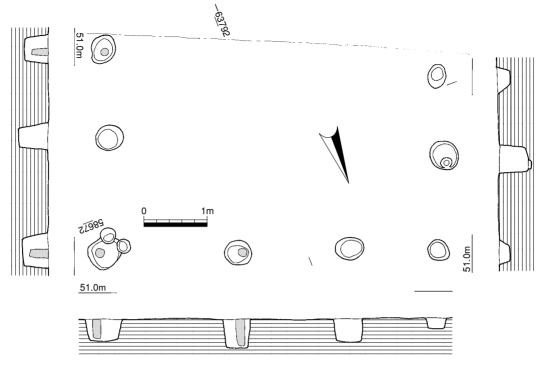


Fig.121 掘立柱建物 1 実測図(1:60)

は代表的なものについて報告する。

焼土壙6はE1区の中央付近で検出した。平面形は南側が広くなる卵形を呈する。南北2m、東西1.4mを測る。検出面からの深さは20~30cm程である。壁はよく焼けており、検出面から底部のやや上位まで赤変部が及んでいる。覆土中には焼土を多量に含む。特に底部直上には厚さ5cmに及ぶ炭の単純層が見られる。底面には小穴が多数見られるが、多くは地山埋め戻し土によって埋め戻されている。遺物は出土していない。

焼土壙7 (Fig.122)

焼土壙7はE1区で検出した。焼土壙6の南西10m程のところに位置する。焼土壙6とほぼ同形同大である。平面形は南側が広くなる卵形を呈する。南北1.8m、東西1.3mを測る。検出面からの深さは45cm程である。壁はよく焼けており、検出面から底部の10cm程度上位まで赤変部が及んでいる。覆土も焼土壙6とよく似ており、焼土を多量に含む層の下、底部直上には炭の単純層が堆積している。遺物は出土していない。

焼土壙11 (Fig.122)

焼土壙7はE2区の西端付近で検出した。平面形は隅丸長方形を呈する。南北1.25m、東西0.75mを 測る。検出面からの深さは40cm程である。壁は焼けて一部赤変している。覆土には焼土壙6,7のよう な特徴的な炭の堆積などは見られず、褐色系の粘質土が主体である。ただし各層にわたって炭や焼土 が多く含まれている。出土遺物は僅少で、土師器片がわずかに出土している。

焼土壙16 (Fig.122)

焼土壙16はE3区の北東端付近で検出した。E3区は焼土壙が集中している個所で、焼土壙16,17を

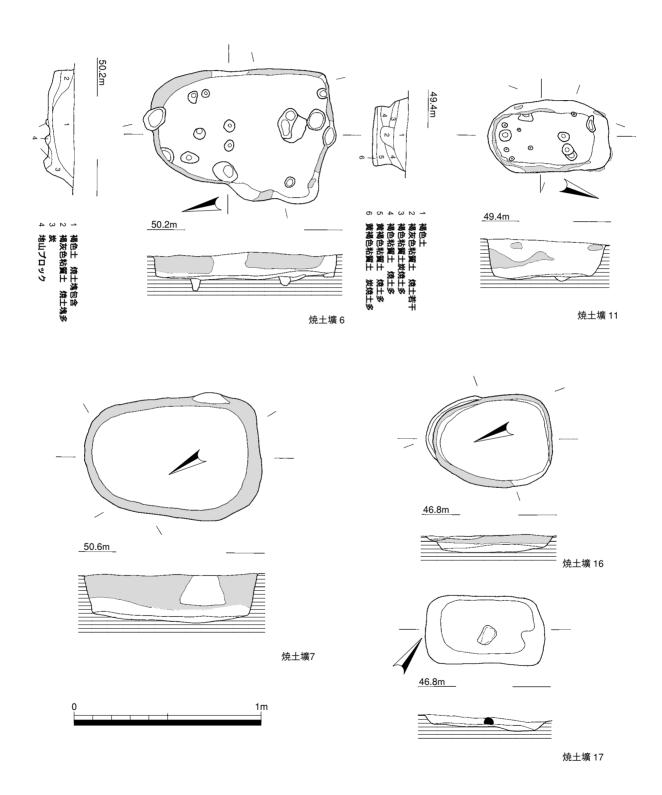


Fig.122 焼土壙6、7、11、16、17実測図(1:40)

含め全部で6基検出されている。焼土壙16は焼土壙6や7を小形にしたような土壙で、平面形は南側が広くなる卵形を呈する。南北1.3m、東西1.0mを測る。検出面からの深さは20cm程である。壁はよく焼けており、検出面から底部のやや上位まで赤変部が及んでいる。覆土中には焼土含むが、底面直上の炭堆積などは見られない。底面は比較的平坦である。遺物は出土していない。

焼土壙17 (Fig.122)

焼土壙17もE3区の北東端付近で検出した。焼土壙16の北東5m程のところに位置する。焼土壙17は焼土壙11のような隅丸長方形を呈する。東西1.25m、南北0.7mを測る。検出面からの深さは10cm程で浅い。底面は比較的平坦で、礫が据えられたような状態で出土している。こうした点や平面形はC1区焼土壙43に類似している。焼けた粘土塊が出土している。

焼土壙の機能については簡易な木炭窯が想定されているが、焼土壙 6,7 のような炭の厚い堆積はこれを補強する材料になろう。ただ焼土壙にもバリエーションがあり、これらの分類、分析については 今後検討される必要があろう。

(6)F**区の調査**

F区はA区とともに調査区の西端に位置する。北側はA区へと連続し、東側は舌状丘陵でC区と画される。西側は日向川の氾濫源に面し、都地泉水遺跡全体の西限となっている。調査区内には既存の家屋があり、これにより西側部分と南側部分に分けられる。これを仮に西区、南区とすると、遺構面は西区が黄褐色の粘質土、南区は黄褐色の砂質土である。西区でも南に行くにつれて砂質が強くなる。F区の南側ではかつて古墳などが調査されており、本来もっと安定した地山であったと考えられる。削平により下層の砂が露出したものであろうか。

F区で検出した主な遺構はピット、土壙、溝などである。遺構はほとんど西区北半に集中している。西区南半、南区にもピットや溝は見られるが、分布は希薄で、遺物もほとんど包含していない。これに対し西区北半部は土壙、ピットを問わず比較的豊富な遺物が包含されている。またF区では中世遺物の出土が目立ち、A区とともに都地泉水遺跡の中世遺構の分布域を構成している。

木棺墓73 (Fig.124)

F区西区北半の、遺構が集中する区域の南端近くで検出した。掘方は南北2m、東西1mほどの隅丸長方形を呈する。内部には鉄釘が原位置をとどめた状況で出土し、木棺がおかれたことがわかる。釘の位置から復原される木棺の規模は1.5m×50cmである。小口と側板の止め方は、北東隅と南西隅は小口側から側板へ、南東隅は側板から小口へ打ち込まれている(北西もおそらくそうであろう)。頭位は北枕で、枕元の棺外に副葬品がおかれている。棺内からは漆の塗膜が出土し、その位置から烏帽子と考えられる。墓は元々礫の多い層に掘り込まれているが、足下の礫は人為的におかれたものかもしれない。副葬品は青磁碗と土師皿で、土師皿のうち一つは青磁碗の中に伏せられていた。土師皿の内部には銭貨などの遺物は全く遺存していなかった。

出土遺物 (Fig.124)

1 は龍泉窯系青磁碗である。口縁は 6 弁の輪花で、切り込みから 2 条のS字状線を下ろして6区に区画し、各区画に渦文を施す。見込みにも劃花文を施す。釉調は緑灰色で、畳附から外底にかけて露胎である。外底に3本の線を交差させた記号の墨書がある。 $2 \sim 9$ は土師器皿である。口径は 2 が 9 cm、3 が 10 cm、4 は 8.8 cm、5 は 9.6 cm、6 は 8.6 cm、7 は 9.4 cm、8 は 9.4 cm、9 が 9 cm である。 6 能部は 10 である。 10 以外は外底部に板目圧痕が見られる。

10~17は鉄釘である。釘は全部で8本出土した。そのうち遺存のよいもの4本を図示した。完形は12のみで長7cmを測る。断面は一方が広い台形で、頭部がやや太くなり、頂部は平坦である。

土壙93 (Fig.126)

F区西区の中央付近で検出した。平面形は東側が広い卵形を呈する。南北1.3m、東西1.8mを測る。 検出面からの深さは10cmほどときわめて浅い。

出土遺物 (Fig.126)

1は土師器坏である。1/3程度の破片であるが、口径14cm、底径9.4cm、器高3cmほどに復原される。 体部は回転ナデによる凹凸が著しい。底部は糸切りで、板目圧痕が見られる。

土壙95 (Fig.125)

土壙95~98は、西区北半部の遺構集中部で検出した土壙群である。まず個別に報告した後、総括的に考えてみたい。



Fig.123 F区遺構配置図(1:400)

土壙95はF区西区の東端で検出した。不定形の浅い土壙である。南北3m、東西2.5mを測る。検出面からの深さは10cm~20cm程度と浅いが、東側に向かって緩やかに深くなる。遺物は小片であるが、土師皿、土師質土器、白磁片などが出土している。

土壙96 (Fig.125)

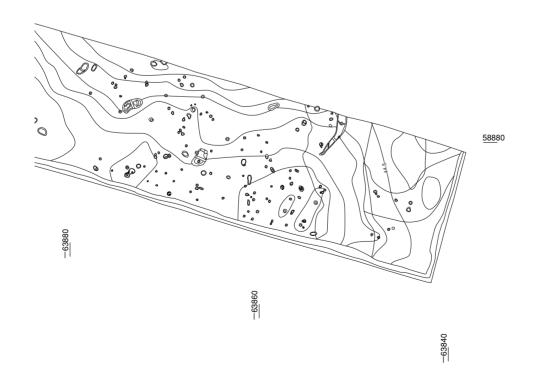
土壙95の西側に位置する。土壙97に切られ、土壙98を切る。平面形は楕円形を呈する。南北2.1m、東西1.5mを測る。検出面からの深さは30cmほどである。底面はほぼ平坦であるが、若干南側に向かって深くなる。また底面には礫が多く散布している。遺物は図示したもののほか土師皿、土師質土器、同安窯系青磁碗の破片などがある。

出土遺物 (Fig.125)

3は白磁碗である。胎土、釉ともに灰味の強い色調である。外面下半から底部にかけて露胎である。 4も白磁碗である。胎土、釉ともに灰味の強い色調である。畳附から外底部にかけて露胎である。内面には細い線彫りの文様と、櫛描文を施す。

土壙97 (Fig.125)

土壙96の北側に位置する。土壙96を切る。平面形は細長い楕円形を呈する。南北1.5m、東西4.7m程を測る。検出面からの深さは20cmほどである。底面はほぼ平坦であるが、東西に低い段を持つ。底面のピットは土壙に伴うものかどうか不明である。覆土より青磁、白磁片、土師皿、土師質土器片などが出土している。



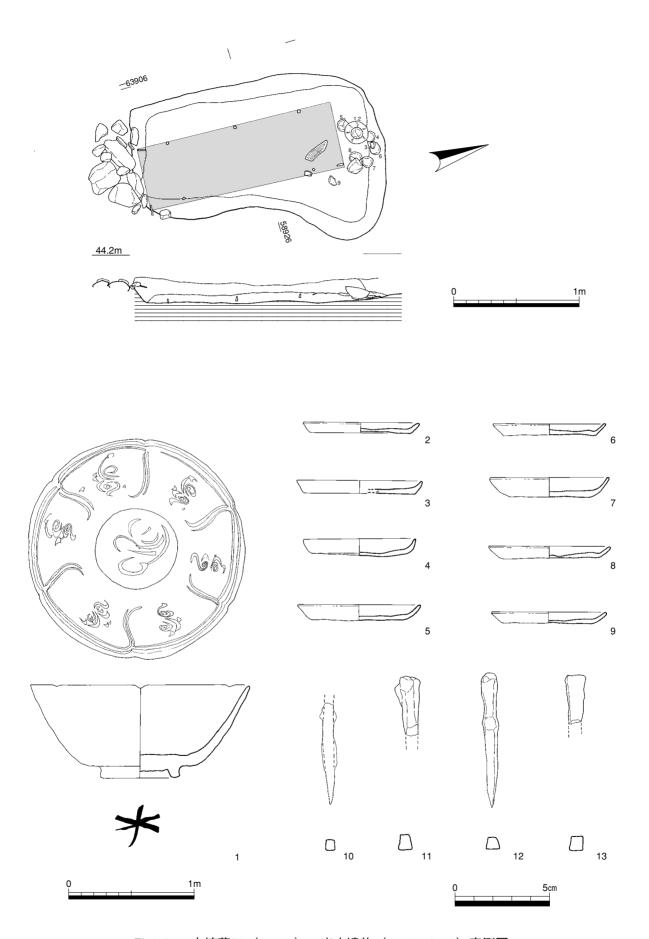


Fig.124 木棺墓73(1:30) 出土遺物(1:3、1:2)実測図

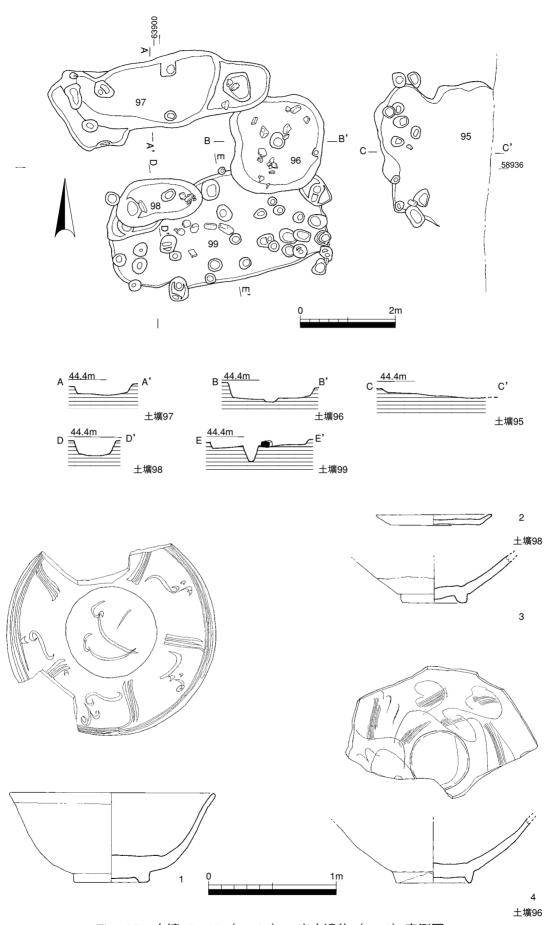


Fig.125 土壙95~99(1:80) 出土遺物(1:3)実測図

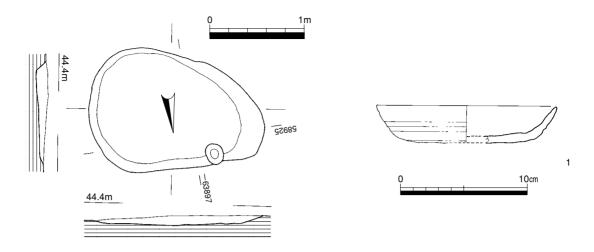


Fig.126 土壙93(1:40)出土遺物(1:3)実測図

土壙98 (Fig.125)

土壙97の南側に位置する。平面形は長楕円形を呈する。他の土壙に比べると小形の土壙である。土壙99を切る。南北1m、東西1.8mを測る。検出面からの深さは30㎝ほどである。底面はほぼ平坦である。覆土より、図示したもののほか、土師皿片や白磁片も出土している。

出土遺物 (Fig.125)

1は龍泉窯系青磁碗である。口縁の一部を欠く。端部がやや肥厚し、端部下に段を持つ。底部は厚く、高台も太い。釉調は緑灰色を呈する。畳附から底部にかけて露胎である。内面は3条の片切彫りの曲線によって5区に分割し、各区画に片切彫りで崩れた渦文を施す。見込みにも片切彫りで簡単な文様を描く。2は土師皿である。口径9 cm、底径7 cm、器高1 cmを測る。口縁部は回転ナデ、内底部は不定方向のナデ、底面は糸切りで、板目圧痕が見られる。

土壙99 (Fig.125)

土壙98,96の南側に位置する。平面形は長方形を呈する。南北2.3m、東西4.3mを測る。検出面からの深さは10cm程度と浅い。底面はほぼ平坦であるが、礫の散布やピットの掘り込みが多い。底面のピットは覆土がよく似ており、土壙99との先後関係は不明である。覆土から土師皿、土師質土器片、青磁、白磁片が出土している。

以上に報告した土壙群は西区北半の遺構が集中する範囲に位置する。ここにはピットも非常に高い密度で集中しており、覆土は土壙と類似している。ピットから出土する遺物にも土壙と共通性が見られ、ほぼ同時期のピットが多いと思われる。遺構は東側に向かって密度を濃くする傾向があり、既存建物の下に延びていくものと考えられる。このあたりを中心に中世の建物群、すなわち屋敷地があった可能性が高い。土壙は建物に伴う廃棄土壙であろう。前述したように西側は日向川の氾濫源に画されるため、廃棄土壙群はほぼ屋敷地の周縁部に設けられたものと考えられる。

(7)G**区の調査**

G区は調査区の南西端に位置する。E区とは既存の事業所建物を隔てて画されているが、同一の台地 状に乗っている。南側はE区から続く遺跡南限を画す谷に面している。北側は舌状丘陵で、現況では 丘陵との間に水路がある。この付近に湧水点があり、E区とC区を画す谷の谷頭になっているものと考 えられる、

G区の主な遺構は製鉄遺構(鍛冶遺構) 焼土壙、土壙、溝、ピットなどである。後項で個別に報告する遺構以外について概略を述べておく。

G区で目立つのは溝である。砂を覆土とする溝が4条検出された(溝159,161,162,163)。この溝は重複する遺構すべてを切り、もっとも新しい遺構である。Fig.132に溝159出土遺物を掲げた。6は丸瓦である。作りは薄手で、黒灰色に燻されている。外面はケズリを施し、内面は布目圧痕が見られる。内面の端部は斜めに削り落とされている。7は土師器小皿である。口径10cm程に復原される。底面はヘラ切りである。8は土師器坏である。口径14cmに復原される。底部と体部の境が不明瞭である。底面はヘラ切りである。これらの遺物は古代後期に属する。この時期の遺構は都地遺跡6次、乙石遺跡3次調査でもわずかに確認されており、製鉄遺構に代表される奈良時代集落の廃絶後も小規模な集落が営まれていたことが推測される。

鍛冶炉140 (Fig.129)

調査区の北端付近で検出した。この周辺は鍛冶炉140を中心に廃滓坑や焼土壙が集中して分布している。まず個別に報告した後、総括することとする。

鍛冶炉140は平面円形を呈し、径は70cmほどである。地面を半円形に掘り凹め、深さは20cmほどである。底面はよく焼けており、厚い赤変層をなしている。西側に砂礫層、炭・焼土を多量に含む層、粘土層が互層になる部分がある。砂礫と粘土で何度か補修されたものであろうか。南北に廃滓坑が附設されている。

土壙141 (Fig.129)

鍛冶炉140の北側に位置する廃滓坑である。楕円形を呈し、南北1.2m、東西0.7mを測る。検出面からの深さは10cmほどである。

土壙143 (Fig.129)

土壙141と同様、鍛冶炉140に附設された廃滓坑で、140の南側に位置する。平面形は円形で、径60cm ほどを測る。検出面からの深さは20cmである。

土壙143 (Fig.129)

同じく鍛冶炉140の南側に位置する廃滓坑で、土壙143に切られる。平面形は楕円形を呈する。南北1.2m、東西0.9m程を測る。検出面からの深さは20cm程度である。

土壙142 (Fig.129)

鍛冶炉140の北側、土壙141の西側に位置する。平面形は円形を呈し、径65cm程を測る。西側に段を持つ。検出面からの深さは30cm程を測る。内部から礫などとともに鞴羽口が複数出土しており、こうしたものの廃棄のための土壙と考えられる。



Fig.127 G区遺構配置図(1:400)

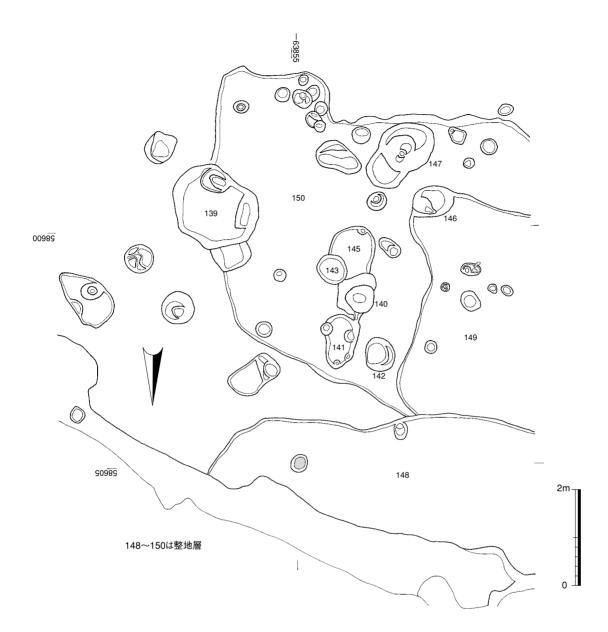


Fig.128 G区鍛冶関連遺構群(1:80)

出土遺物 (Fig.132)

5 は鞴羽口の端部である。棒状のものに粘土を巻き付け、ヘラ状の工具で表面をなでつけて成形している。焼成は比較的堅緻である。

土壙147 (Fig.129)

鍛冶炉140の3m程南側に焼土が集中する遺構があり、炉の可能性を考えて断ち割った。その結果焼土は最上層付近で見られるのみで、その下に相当深い掘り込みがあることが判明した。

土壙147の平面形は杏仁形を呈する。長径1.5m、短径1.2m程を測る。中央が深く掘り込まれ、検出面からの深さ70cmを測る。土層観察からは大きく2層に分かれ、柱穴状の遺構が埋められた後に、浅く掘り込まれて焼土などが廃棄されたということも考えられる。

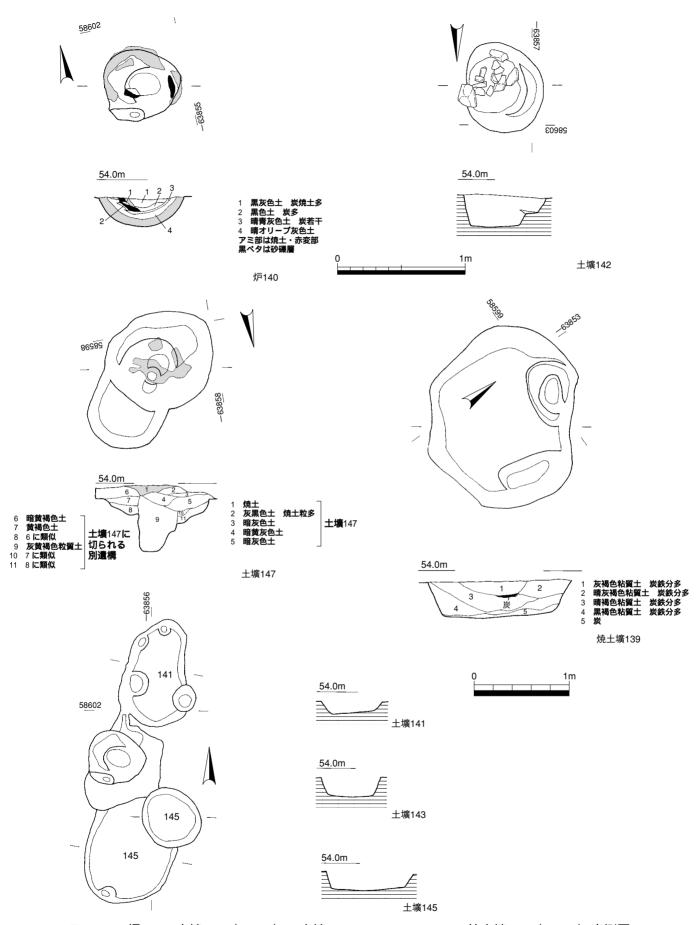


Fig.129 炉140、土壙142(1:30) 土壙141、143、145、147 焼土壙139(1:40)実測図

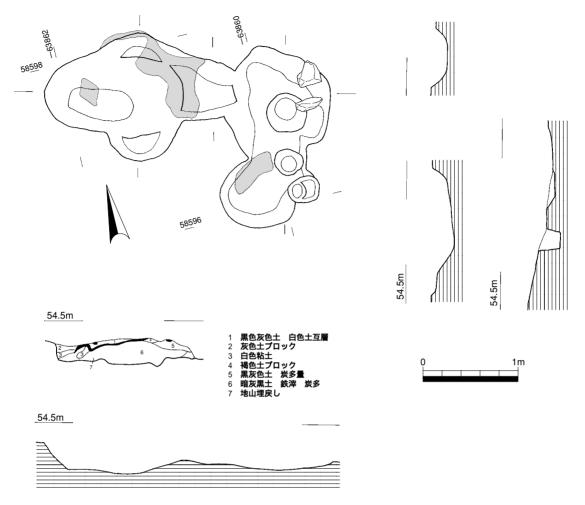


Fig.130 製鉄遺構169実測図(1:40)

焼土壙139 (Fig.129)

鍛冶炉140の東4m程のところに位置する。一連の製鉄関連遺構群の東端に位置する。平面形は楕円形を呈し、長1.9m、幅1.5mを測る。検出面からの深さは40cmである。底面は壁際に浅い凹みがある。 覆土は各層にわたって炭や鉄分が多く含まれるが、特に底面直上には5cm程の炭の堆積が見られる。

出土遺物 (Fig.132)

1 は土師器甕の口縁部である。口縁部は厚く、胴部内面に削りを施す。2 は須恵器高台附坏の口縁部である。内外面回転ナデを施す。3は須恵器高台部である。高台は比較的高く、外方へ踏ん張る。4は須恵器坏の蓋である。端部はわずかに嘴状に突出する。

以上の遺構群は東西、南北各10m程の範囲に集中するが、この範囲には整地が施されている。整地にはいくつかの単位が見られる。また整地層の厚さは10~15cm程である。この整地の範囲内に鍛冶炉、焼土壙、廃滓坑、廃棄坑が設けられ、全体として鍛冶炉140を中心とした遺構群を形成している。

製鉄炉169 (Fig.130)

溝161と163に切られた部分に焼土、鉄滓が集中する個所が認められた。溝の調査後、土層を確認しながら掘り下げたが、最終的には覆土を全部除去した後、平面形が鉄亜鈴型を呈する製鉄炉であることが判明した。炉は掘方しか残っておらず、長60cm、幅60cmほどを測る。検出面からの深さ15cmほど

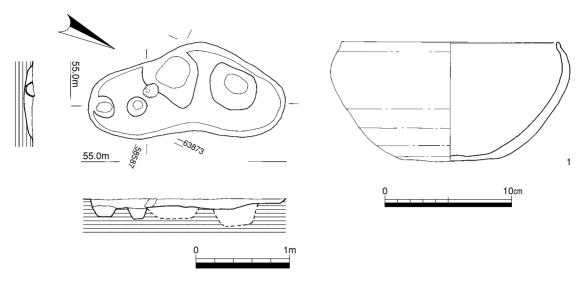


Fig.131 土壙165(1:40) 出土遺物実測図(1:3)

である。両側に廃滓坑を持つ。東廃滓坑は両側に張り出しを持つ楕円形を呈する。長1.5m、幅1.3mを測る。検出面からの深さは30cm程である。西廃滓坑は北側に張り出しを持つ円形を呈する。南北1.9m、東西1.1m程を測る。検出面からの深さは10cmほどである。覆土の状況は東廃滓坑の部分しか記録しえなかったが、基本的には同様で鉄滓、粘土、焼土のブロックを多量に含んでいる。人為的に破壊され、埋め戻されたものと考えられる。

土壙165 (Fig.131)

調査区南西端付近で検出した。長楕円形を呈する土壙である。長2.1m、幅0.8mを測る。検出面からの深さは10cm程度である。底面には深さ10cmほどの凹みが多く見られる。中央よりやや南側の底面より須恵器鉢が出土した。

出土遺物 (Fig.131)

1 は須恵器鉢である。肩部から緩やかにすぼまり、口縁部は短く屈曲して直立する。底部は平底である。器面かなり荒れるが、外面下半は回転ヘラ削りを施すものと考えられる。

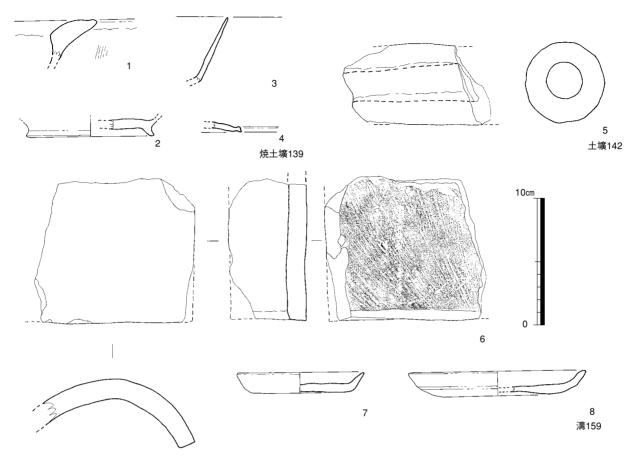


Fig.132 G区出土遺物実測図(1:3)

(8)H**区の調査**

H区は調査区の東端に位置し、都地泉水遺跡の東端でもある。H区は大部分区画整理地区(田園居住区)にあたり、区画整理事業に当たっては、遺跡の範囲は全域本調査という方針があり、結果的に最も広い調査区となった。H区は両側を谷に挟まれた舌状の微高地上に立地している。この台地はG区、H区、D区とつながってくるものである。北西側は谷を隔ててC,B区に面し、南東側は谷を隔てて都地遺跡に面している。遺構面は砂礫を多く含む。南側は褐色粘質土、北半部や、谷に面する部分は黄褐色の砂質土を呈する個所が多い。

H区で目立つ遺構は製鉄関連遺構と掘立柱建物であるが、その他にも土壙、ピット等が多数検出されている。下記に報告したもののほかに製鉄に関連したと思われる遺構があり、概略を述べておく。Fig.133の西端に位置する遺構208からは鉄滓が出土しており、平面形も鉄亜鈴型に近い。ただし非常に浅く、製鉄炉と断定するにいたらなかった。遺構208の西5m程のところには焼土壙209がある。またFig.135の南東端に位置する191~193からも鉄滓が出土している。またこれらの遺構の周辺には整地が認められる。鉄滓は鍛冶滓と考えられ、周辺に削平された鍛冶炉があった可能性が高い。191~193はこれに伴う廃滓坑と考えられる。

掘立柱建物についても確実なもの7棟について報告したが、検討すればさらに増えるものと考えられる。調査中に検討を試みた建物は20棟以上に及ぶが、下記に報告した建物が極めてわかりやすく整然と配置されているのに比べると、建物と認めるのに躊躇したものが多かった。

製鉄遺構171 (Fig.136)

調査区南端に位置し、F区東側の谷に面した斜面上に位置する。谷に対して平行に作られている。 平面鉄亜鈴形を呈し、長4m程と考えられる。北側の張り出し部は別の遺構を切っていると考えられる。 覆土には各層に焼土、炭を含んでいる。平面形や覆土の特徴から製鉄炉と考えられる。炉部分は掘方 の長1m程度、幅40cm程に復元される。南側の廃滓坑との境界付近が深くなっており、別のピットに 切られているものであろう。ただし、この部分のみ壁が赤変している。

廃滓坑は南北両方に築かれており、双方ともほぼ円形を呈する。径はいずれも1.5mを測る。検出面からの深さは、南側が10~15cm程、北側が20cm程を測る。出土遺物は、須恵器、土師器の小片のみであるが、他の製鉄遺構と同様、古代と考えて矛盾ない。

製鉄遺構178 (Fig.138)

Fig.133の中央部東端付近に製鉄遺構の集中する箇所がある。まず製鉄炉について個別に報告した後、 総括的に考えてみたい。

製鉄遺構178は一連の製鉄遺構群の南端に位置する。主軸を東西方向に取り、谷に対して直交して築かれた炉である。中央に炉を持ち、その両側に廃滓坑を持つ鉄亜鈴形を呈する。全長3m程を測る。炉の部分は遺存部の長80cm、幅70cmほどである。下部構造の一部が遺存している。土層観察により床面を赤変するほど焼いた後、砂質土を突き固めているものと考えられる。東西両側に廃滓坑を持つ。東廃滓坑は長1.4m、幅1.9m程である。検出面からの深さは30cm程である。底面は凹凸が多い。西廃滓坑は長90cm、幅1.4m程を測る。検出面からの深さは40cm程である。

出土遺物 (Fig.140)

Fig.140の3は西廃滓坑から出土した須恵器横瓶の体部片である。端部は若干くぼむ。内面には平行線文の当て具痕が見られる。したがって外面は叩きの後回転ヘラ削りを施したものであろう。

製鉄遺構179 (Fig.138)

製鉄遺構179は製鉄炉178の2.5m程北側に位置する。主軸を東西方向に取り、製鉄遺構178と同様谷に対して直交して築かれた炉である。中央に炉を持ち、その両側に廃滓坑を持つ鉄亜鈴形を呈する。全長3.7m程を測る。炉の部分は長75cm、幅70cmほどである。下部構造の一部が遺存している。土層観察により床面を赤変するほど焼いた後、砂質土を何層にも突き固めている。東西両側に廃滓坑を持つ。東廃滓坑は長1.5m、幅は両端を別遺構に切られるが1.7m程であろう。検出面からの深さは30cm~40cm程である。底面は凹凸が多い。西廃滓坑は長90cm、幅1.4m程を測る。検出面からの深さは40cm程である。

出土遺物 (Fig.140)

2 は須恵質の高台部である。端部は短く折り返されている。体部外面は回転ナデを施す。外底部は 櫛状工具で多条の沈線をめぐらした後高台を貼り付ける。内面はヘラ状工具によるナデを施す。色調 は外面黒灰色、内面暗紫灰色を呈する。以上のように調整、器形、色調ともに須恵器とは異なってい る。高台の特徴から新羅土器の可能性を考えている。また1は製鉄遺構178,179,廃滓坑180を検出す る際に出土した遺物のうちの一つである。須恵器の底部である。径8 cm程に復原される。



Fig.133 H区遺構配置図1(1:400)

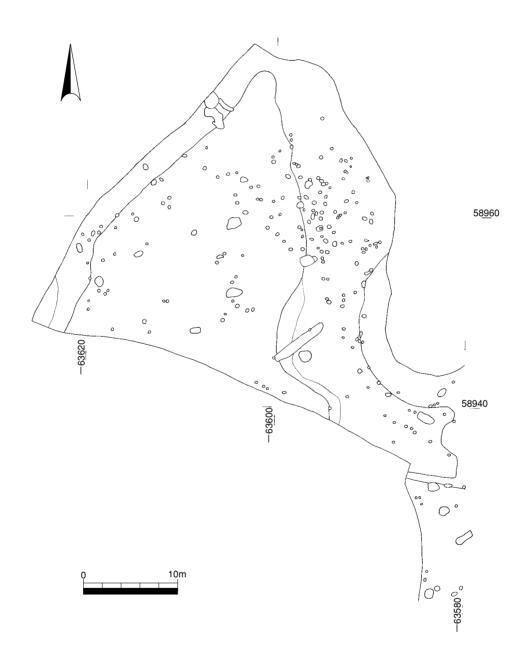


Fig.134 H区遺構配置図2(1:400)

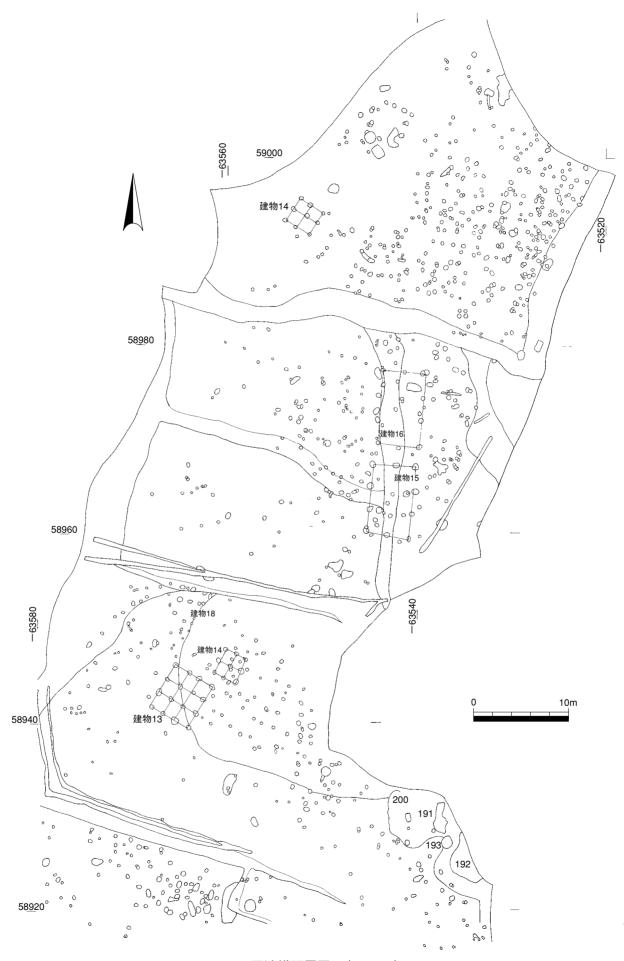


Fig.135 H区遺構配置図3(1:400)

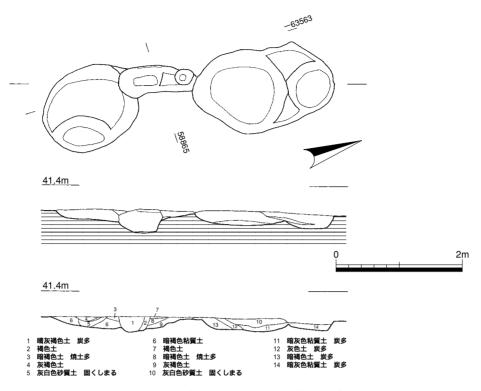


Fig.136 製鉄遺構171実測図(1:60)

製鉄遺構181 (Fig.139)

製鉄遺構181は一連の製鉄遺構群の北端に位置する。主軸を北西 南東方向に取り、谷に対して直交して築かれた炉である。中央に炉を持ち、その両側に廃滓坑を持つ鉄亜鈴形を呈する。全長3.3m程を測る。炉の部分は長60cm、幅65cmほどである。下部構造の一部が遺存している。床面を焼き、黒色、灰褐色砂質土を突き固めている。東西両側に廃滓坑を持つ。西廃滓坑は南側へ張り出しを持つ円形を呈する。径1.4m、張り出しを含めた幅は2.5m程を測る。検出面からの深さは25cm程である。東廃滓坑は南北に張り出しを持つ円形を呈する。径1.5m、張り出しを含めた幅は2.2m程を測る。検出面からの深さは30cm程である。底面は凹凸が多い。焼土壙189を切る。

製鉄遺構182 (Fig.139)

製鉄遺構182は製鉄遺構181の東側3 m程のところに位置する。主軸を東西方向に取り、谷に対して直交して築かれた炉である。中央に炉を持ち、その両側に廃滓坑を持つ鉄亜鈴形を呈する。全長4 m程を測る。検出時には炉との認識がなく、廃滓坑として掘り下げた。完掘後形態が鉄亜鈴型になり、また壁が赤変していることから、製鉄炉と判明したものである。炉の部分は下部構造も確認できず、掘方のみ遺存している。長、幅とも1mほどである。東西両側に廃滓坑を持つ。西廃滓坑は南北に長い精円形を呈する。南北2.8m、東西1.5m程を測る。検出面からの深さは30cm~40cm程である。東廃滓坑は不定形で、そのまま谷へと連続するものと考えられる。製鉄遺構182は後述するように製鉄遺構181の廃滓坑として再利用されたものと考えられる。

出土遺物 (Fig.140)

4 は須恵器坏蓋である。天井部に平たい擬宝珠形つまみを持つ。口縁端は短く屈曲し、下方へ突出する。屈曲部の直上に段を持つ。天井部は回転へラ削り、体部は回転ナデを施す。5 は土師器甕の口

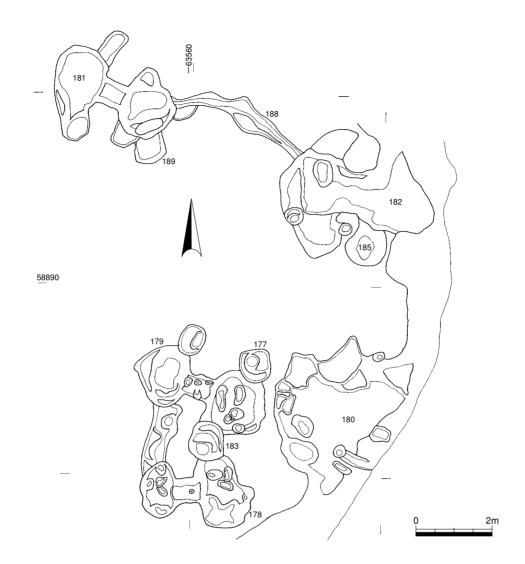


Fig.137 H区製鉄遺構群(1:100)

縁部片である。口縁は直線的に開く。口縁内面と胴部外面には目の細かいハケメを施す。胴内面はケズリ。6も土師器甕。口縁部はわずかに外反しながら開く。

これらの製鉄遺構群は少なくとも2時期に分かれる。それは製鉄遺構181と182の関係から見て取ることができる。この2基はまず182が谷近くに築かれ、操業された。製鉄遺構181に切られる焼土坑189は182に伴う炭窯であろう。182が廃棄された後、製鉄遺構181が築かれ、182は廃滓坑として利用された。181と182は溝188によって連接された。また製鉄遺構177、178の周囲にも関連する遺構が見られる。土坑180は179に伴う廃滓坑と考えられるし、また炉の周りには焼土や鉄滓を包含する土壙177、183、186、溝184などが分布する。

土壙172 (Fig.141)

製鉄遺構171の北側に位置する。南北に長い楕円形を呈する。長1.2m、幅70cm程を測る。検出面からの深さは20cm程である。底面に段や凹みが見られる。

図示していないが、土壙172の検出面近くからは須恵器甕の胴部片が出土している。厚さ 1 cm、外面 に平行タタキ、内面に同心円文当て具痕が見られる。かなり大型の製品である。

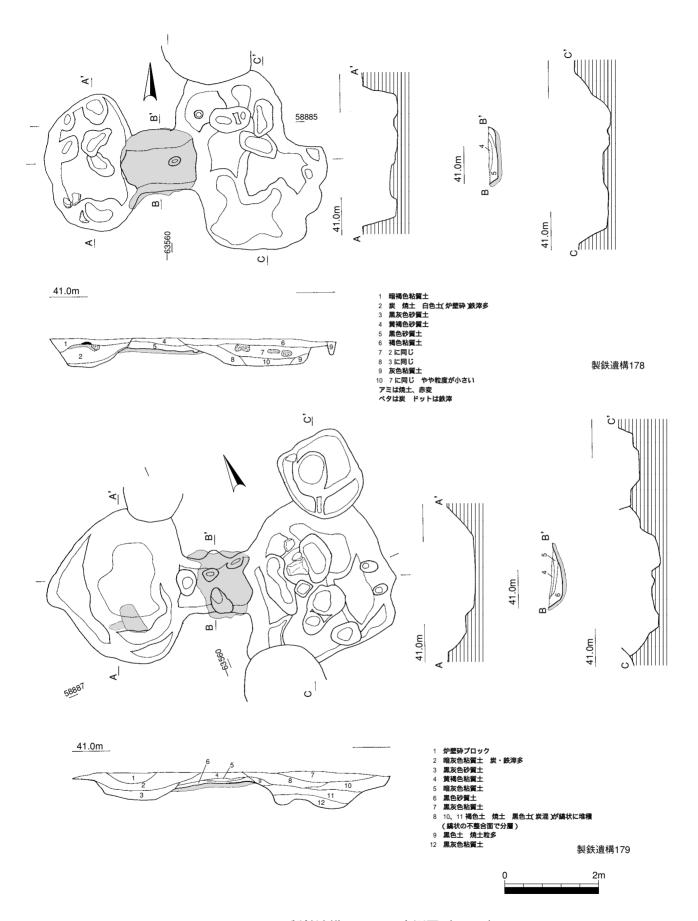


Fig.138 製鉄遺構178、179実測図(1:40)

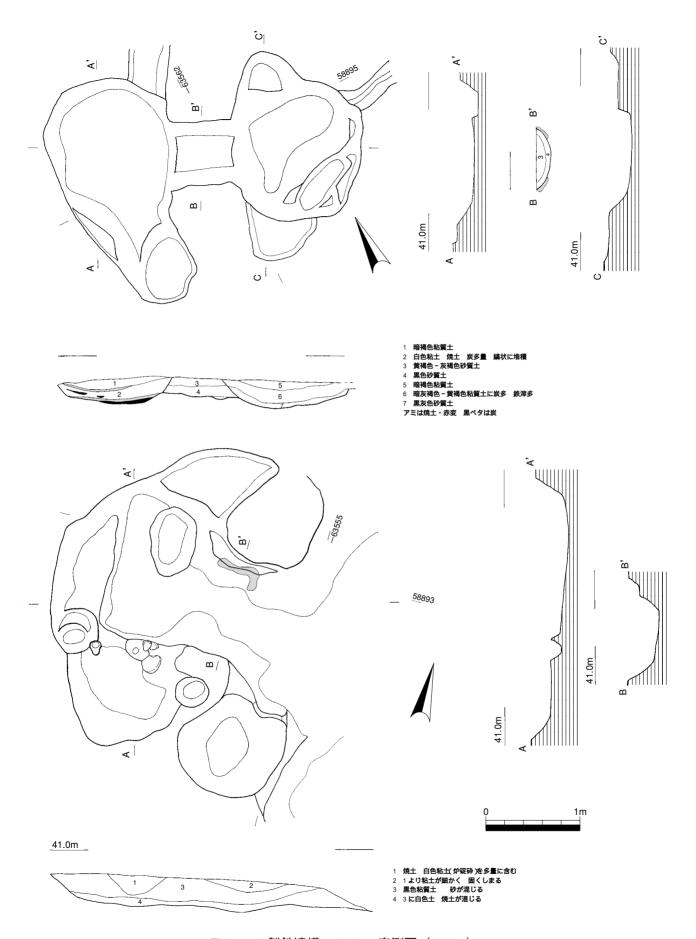


Fig.139 製鉄遺構181、182実測図(1:40)

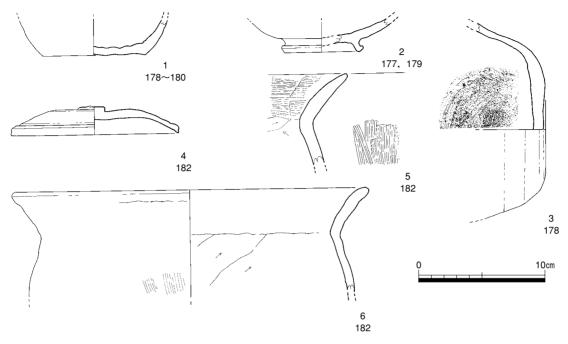


Fig.140 製鉄遺構178~182実測図(1:3)

土壙173 (Fig.141)

製鉄遺構171の南西約10mの場所に位置する。南北に長い洋梨形を呈する。長1.2m、幅90cm程を測る。 検出面からの深さは10cm程度である。北端から土師器甕、皿が出土した。底面はほぼ平坦である。土 壙172と173は規模、形態、遺物の出土状況が類似する。また覆土に炭を多く含む層が見られることも 類似する。

出土遺物 (Fig.141)

1は土師器皿である。口径18cm程に復原される。口縁部は大きく開き、器高は低い。底部と口縁部の境には軽い稜がたつ。外面は底部ヘラ切りの後回転ナデ。内底部はナデを施す。2は土師器甕である。口縁部は外反しながら開く。内面にはヘラ削りを施す。外面はナデか。

土壙198 (Fig.142)

Fig.133の北端で検出した。東側を造成によって削平されるが、平面形は楕円形であろう。長4m、幅1.5m以上を測る。検出面からの深さは20センチほどである。底面にはピットがいくつか見られるが、おおむね平坦である。他の遺構に比べて遺物が多い。古墳時代後期と考えられる。

出土遺物 ((Fig.142)

1 は須恵器坏蓋である。口縁部は内湾し、端部は丸く収める。口径12cm程に復原される。天井部に回転へラ削りを施す。2は坏身である。口径11.5cm、受け部径13.6cmを測る。かえりは断面三角形で内傾する。体部は受け部直下まで回転へラ削りを施した後、1/2程度を回転ナデで消す。底部に×形のへラ記号がある。3 は須恵器の口縁部である。口縁部は坦面を持ち、凹線を巡らせる。4 はタタキを持つ土師器甕である。口縁は薄く、端部に坦面を持つ。外面には擬格子タタキを施す。内面は平行線のような当て具痕跡が認められる。古墳時代後期の長垂東西山麓の遺跡によく見られる赤焼土器であり、玄界灘式製塩土器の祖形とされる例である。4 も土師器甕。やはり口縁部に坦面を持ち、3 と同様な特

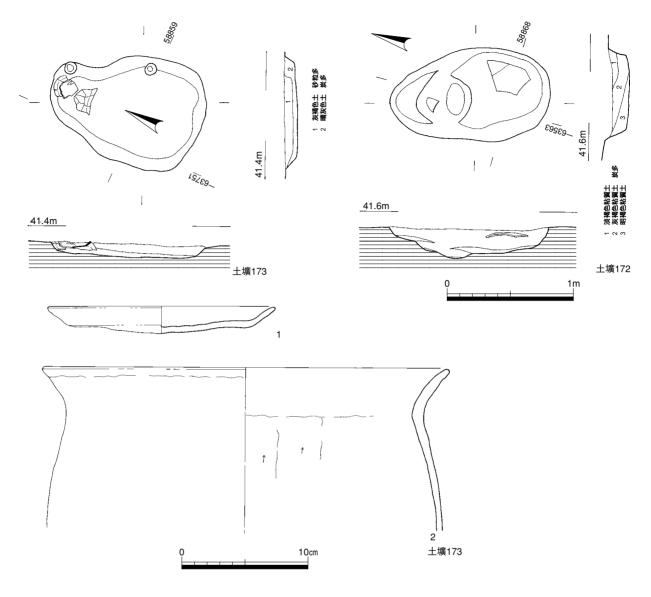


Fig.141 土壙172、173(1:30) 出土遺物(1:3)実測図

徴を持つ土器の可能性が高い。ただし現況では器面荒れが著しく、叩き目は観察できない。

掘立柱建物12 (Fig.143)

Fig.133の北西隅で検出した。西側が調査区外に出るが、 2×2 間の総柱建物と考えられる。主軸は真北から16 。ほど東へ振る。柱穴の規模は径 $40 \sim 50$ cm程である。建物規模は東西、南北とも3.5 mほどを測り、これより床面積は12.3 m²程度と推測される。柱間は南北1.7 m、東西は $1.7 \sim 2.2$ mとやや不揃いである。柱穴より須恵器甕の胴部片などが出土しており、古墳時代後期~古代と考えておく。

掘立柱建物17 (Fig.143)

調査区の北端付近で検出した。小形の2間×2間の総柱建物である。主軸は真北から36°ほど東へ振る。柱穴の規模は径40cm程である。柱痕跡が確認できた柱穴は1基であるが、これから推定できる柱の規模は径10cm程である。建物規模は東西3m、南北2.9mほどを測り、これより床面積は9㎡程度と推測

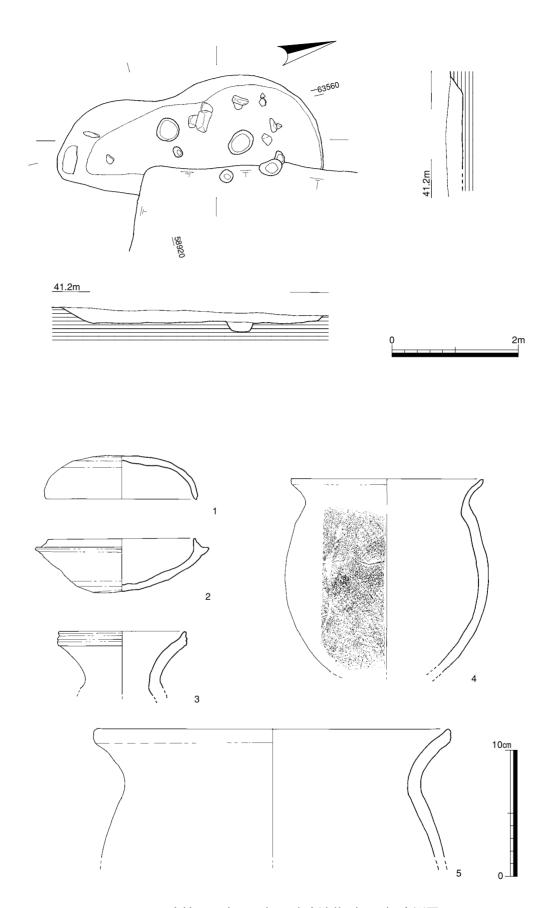


Fig.142 土壙198(1:60) 出土遺物(1:3)実測図

される。柱間は南北1.2~1.5mで、北側2列の間隔がやや狭い。東西は1.3~1.6mで、1.5m間隔が主である。遺物は出土していないが、古墳時代後期~古代と考えておく。

掘立柱建物18 (Fig.143)

Fig.135の中央付近で検出した。北側が削平されている。現況では1間×2間分検出されている。主軸は真北から18°ほど東へ振る。柱穴の規模は径30~50cm程である。建物規模は東西2.6m、南北1.3m以上を測り、これより床面積は4㎡以上である。柱間は東西、南北とも1.3mで、遺物は出土していないが、古墳時代後期~古代と考えておく。

掘立柱建物13 (Fig.144)

調査区のほぼ中央付近で検出した。4間×4間の総柱建物である。主軸は真北から30°ほど東へ振る。 柱穴の規模は径50~70cm程である。建物規模は東西4.5m、南北5.2mを測り、これより床面積は23㎡程 である。総柱建物としては都地泉水遺跡全体の中でも最大級の建物である。柱間は、東西はほぼ1.5m で、北端の列にやや間隔の短い部分もある。南北は1.6~1.7mである。遺物は細片のみであるが、比較 的多くの柱穴から土師器、須恵器片が出土しており、古墳時代後期~古代と考えられる。

掘立柱建物14(Fig.144)

掘立柱建物13の北東側で検出した。掘立柱建物13とほぼ主軸を同じくする。3間×3間の総柱建物である。主軸は真北から27°ほど東へ振る。柱穴の規模は径40~60cm程である。建物規模は東西2.6m、南北2.7mを測り、これより床面積は7㎡程である。柱間は、東西、南北とも1.3m程を測る。遺物は細片のみであるが、図示したもののほかにも須恵器、土師器の細片が出土している。古墳時代後期~古代と考えられる。

出土遺物 (Fig.146)

Fig.146の 4 はHP354出土の須恵器坏身片である。内外面回転ナデ。

掘立柱建物15 (Fig.145)

Fig.135の中央東端付近で検出した。2間×4間の側柱建物である。主軸は真北から4°ほど東へ振る。柱穴の規模は径50~60cm程である。建物規模は東西4.5m、南北7.5mを測り、これより床面積は34㎡程である。柱材がそのまま遺存している柱穴が5基あり、これより柱は20cm程度と推定できる。柱間は、東西2.1m、南北2.5m程を測る。遺物は細片のみであるが、図示したもののほかにも須恵器、土師器の細片が出土している。古墳時代後期~古代と考えられる。

出土遺物 (Fig.146)

Fig.146の1はHP174出土の須恵器坏蓋片である。端部は短く屈曲する。内外面回転ナデ。2 も須恵器蓋である。端部はわずかに外反する。

掘立柱建物16(Fig.145)

掘立柱建物15の北側で検出した。2間×4間の側柱建物である。主軸は真北から4°ほど東へ振り、掘立柱建物15とほぼ軸を同じくする。柱穴の規模は径50~60cm程である。建物規模は東西4.5m、南北7.3mを測り、これより床面積は33㎡程である。掘立柱建物15よりわずかに桁行が短い。柱材がそのまま遺存している柱穴が3基有り、これより柱は20cm程度と推定できる。柱間は、東西2.3m、南北2.5m

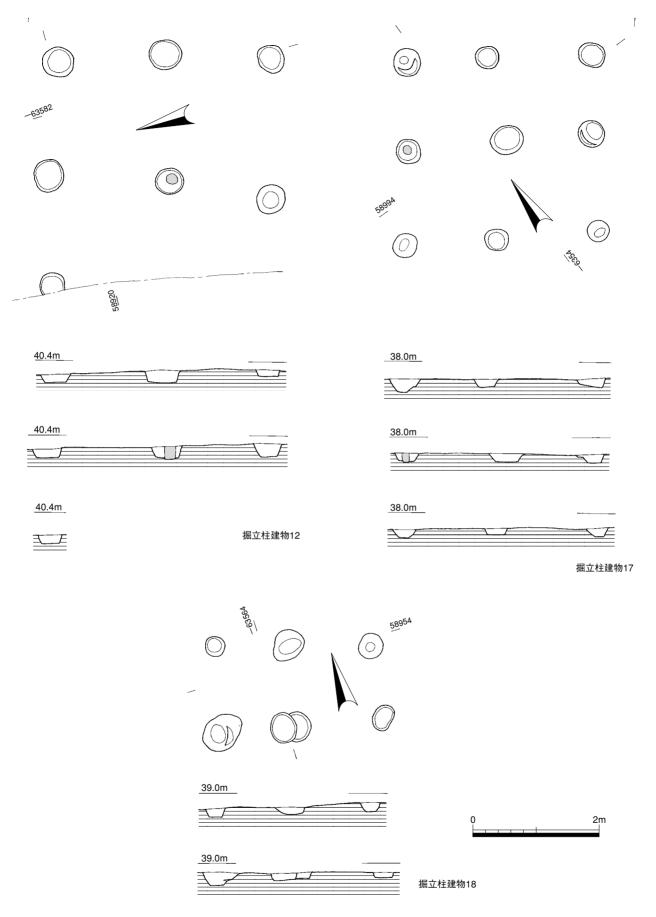


Fig.143 掘立柱建物12、17、18実測図(1:60)

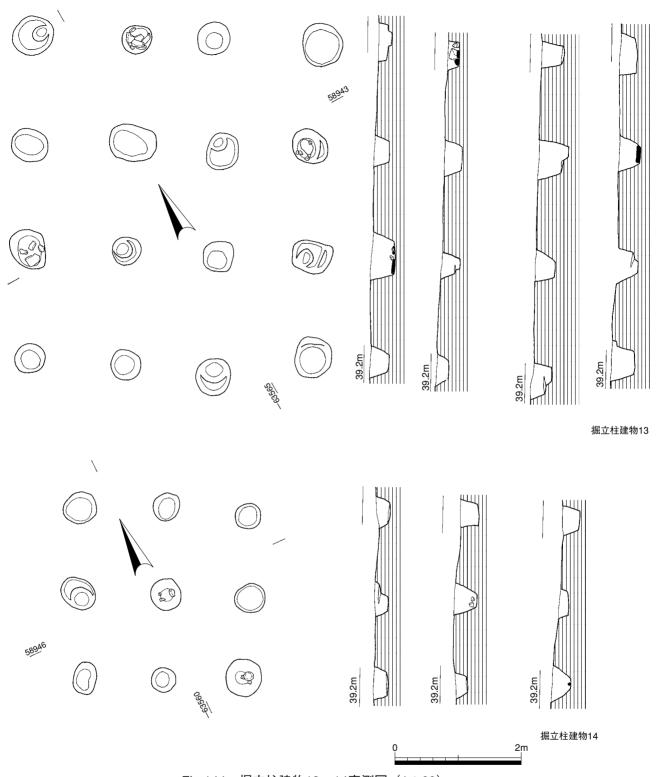


Fig.144 掘立柱建物13、14実測図(1:60)

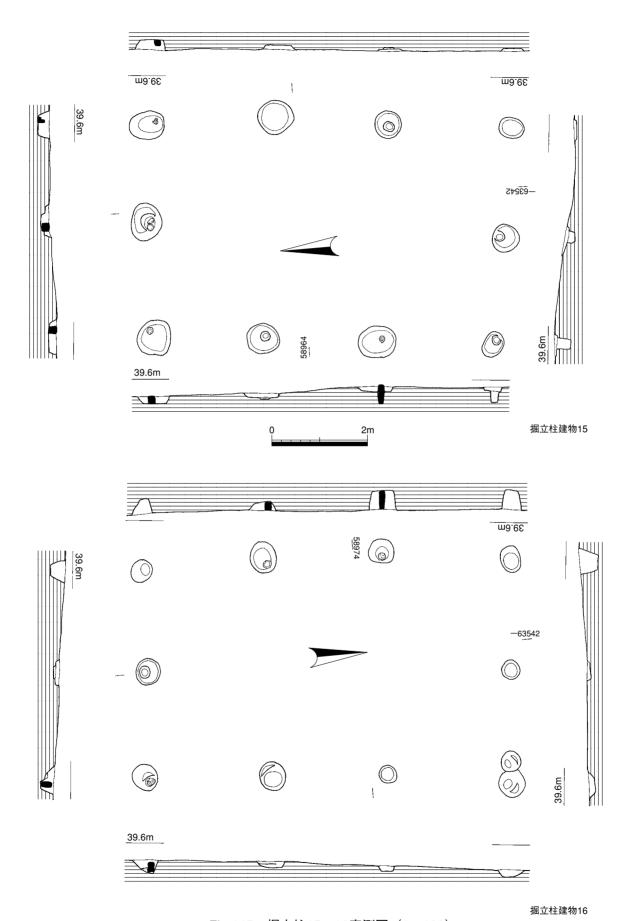


Fig.145 掘立柱15、16実測図(1:100)

程を測る。遺物は細片のみであるが、図示したもの のほかにも須恵器、土師器の細片が出土している。 古墳時代後期~古代と考えられる。

出土遺物 (Fig.146)

Fig.146の3は須恵器甕口縁部である。端部に突帯 風の段を持つ。内外面回転ナデ。

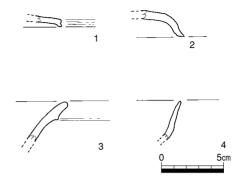


Fig.146 H区掘立柱建物出土遺物実測図(1:3)

(9)その他の出土遺物

以上、主な遺構、遺物について報告してきたが、このほかに相当量の遺物が出土している。ここではその他の遺構、包含層などから出土した注目すべき土器と、土製品、石製品、金属製品について述べ、また調査区内出土の旧石器時代、縄文時代、弥生時代石器についてまとめて報告する。

土器

Fig.147の1はB2区2面検出のピット(BP139)から出土した須恵器長頸壺である。算盤玉形の胴部を持ち、屈曲部には内外面とも明瞭な稜がたつ。頸部中位には浅い沈線を一条巡らせる。胴部は内外面とも回転ナデ。頸部は内外面とも絞り痕が見られる。2はD区検出のピット(DP21)出土の土師器碗である。胴部は直立し、口縁部はわずかに外側に屈曲する。底部はやや平坦になり、胴部と区別できる。外面はナデ。内面はケズリを施す。

3はH区の北西端、谷に面した部分で、試掘時に出土した。須恵器甕口縁部片である。厚さと口縁部の屈曲度から見てかなりの大型品と考えられる。口縁下に断面M字状の突帯を巡らせる。内面に横方向に刻書を持つ。「郡」「乎」の二字は明瞭に判読できる。郡の上の字は「可」の一部と考えられる。従って「郡」字から上を律令制下の郡名と考えた場合「那珂郡」と書かれていた可能性が強い。問題は最も下の字であるが、那珂郡下の郷名と考えた場合、「乎(読みはヲ)」に続く郷名として「曰佐郷」が想定できる。従って最下の字は「佐」の異体字である可能性が高い。従って刻書全体は「(那)珂郡 乎佐」と判読できる。しかし都地泉水遺跡は那珂郡ではなく早良郡に属し、なぜ那珂郡と記された土器が出土したかについては今後の検討課題である。なお刻書の判読については九州大学大学院坂上康俊教授の教示を得た。記して感謝申し上げる。

土製品

Fig.147の 4 ~ 7 は土錘である。4,5 はA 2 区の、中世に属する土壙105の出土である。紡錘形を呈する。6 はA1区焼土壙116出土。焼土壙116は古墳時代住居跡91を切る遺構で、古代と考えられる。7 はG区のピット (GP33) 出土である。8~11はH区の焼土壙209出土の土玉である。中央部に穿孔を施す。

金属器

Fig.147の9はB2区包含層出土の耳環である。銅芯部のみの遺存である。

石製品

Fig.148の1は砥石である。断面五角形を呈する。石材は砂岩質か。B1区ピット(BP14)出土。2は提砥であろう。縦方向に二ヶ所に穿孔するが、下側は貫通しない。横断面方形を呈する。H区のピット(HP232)出土。3、4は滑石製紡錘車である。いずれもB2区包含層出土。3は断面台形で厚手である。4は円盤形を呈する。5、6は石鍋の口縁部片である。5は断面山形の突帯が巡る。突帯下の抉り状の破損部は故意に穿孔した痕跡かもしれない。6は断面台形の突帯が巡り、突帯の下部に煤が付着している。

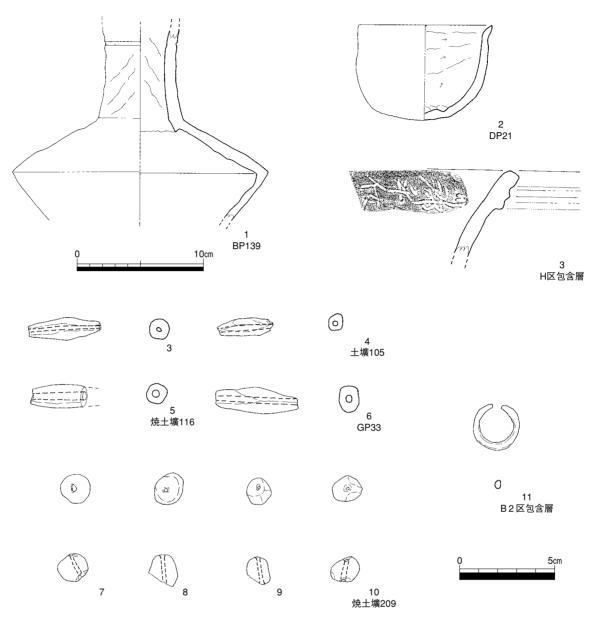


Fig.147 その他の遺構出土土器(1:3) 土製品・金属器(1:2)実測図

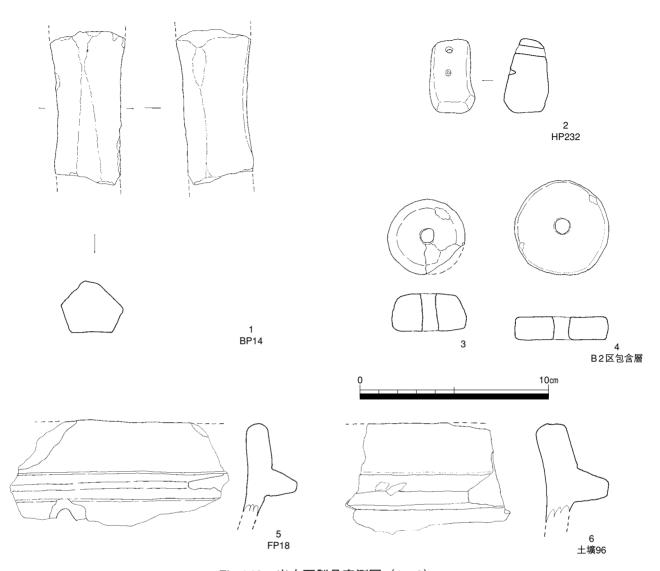


Fig.148 出土石製品実測図(1:2)

剥片石器

1.概要

都地泉水遺跡群第1次発掘調査では計199点の剥片石器類が出土した。出土状況は表土、攪乱土中や後世の包含層や遺構内、また遺構検出時に出土したものが多く、安定した出土状況を示すものはほとんどない。しかし、地点ごとにみると石器類の特徴や風化状況などに類似性があり、本来同地点に存在していたであろう石器文化の時期や一括性を示しているようにみられた。以下では主要石器の報告と併せて、地点ごとの概要を示す。

2. 地点ごとの内容

A 区試掘17トレンチ

試掘溝の礫層中から5点出土し、剥片3、砕片2がある。全て黒曜石製であり、やや風化が進んでいる。縄文時代早期の所属とみられる。

A 1 🗵

10点出土し、石鏃1(21) 二次調整剥片1、剥片5、砕片1、石核2などがある。全て黒曜石製であり表面の風化が浅いものが多い。石鏃形態や風化からおそらく縄文時代後期~同晩期の時期に所属するとみられる。

B 1 🗵

6点出土し、石鏃 2、二次調整剥片 1(42)、石核 1、砕片 2がある。全て黒曜石製である。石鏃は古段階の鍬形鏃(15)と三角鏃(31)であり、早水台式など縄文時代早期中葉(押型文土器古段階)の共伴が主体の石器類とみられる。

B 2 🗵

12点出土し、ナイフ形石器1、石鏃1(12)、二次調整剥片1、剥片5、石核2(41)、砕片2がある。石鏃と砕片1点がサヌカイト、時期不明の石核が水晶であり、他は黒曜石製である。ナイフ形石器(1)は縦長剥片の先端にブランティングを施す。長さ4.5cm、幅1.4cm、厚さ0.5cmを測る。二次調整剥片(2)は縦長剥片を折断後、僅かに調整を施す。台形石器と見るべきか。これらは後期旧石器時代後葉である。他に縄文時代後期を主に少量の縄文時代早期後葉(押型文土器新段階)の資料が含まれるようだ。

B 2 - 2 区

5点出土し、石鏃未製品 1、剥片 2、砕片 1、石核 1 がある。全て黒曜石製であり、風化はやや進んでいる。石鏃(38)は古式三角鏃の未製品であり、これらから縄文時代早期前葉~同中葉の時期(柏原式土器から大原式土器段階)と推定される。

B 3 🗵

58点出土し、石鏃4、尖頭状石器 (大型石鏃)1(40) 二次調整剥片2、剥片25、砕片17、石核9がある。石核2,剥片1、砕片1がサヌカイト製の他は黒曜石製である。石鏃は縄文時代早期前葉~中葉の時期(柏原式~大原段階)(11・28)と縄文時代早期後葉(押型文土器新段階~塞ノ神式土器段階)(17・19)頃に比定される。したがって、多くの石器類も両時期に所属する可能性が高い。なお、BP273~BP285付近に風化の少ない石核、剥片、砕片類が集中し、縄文時代後期~同晩期の時期があるとみられる。

B 4 🗵

黒曜石製の砕片1点の出土であり、詳細は不明である。

C 1 区

7点出土し、石鏃2(25・36) 尖頭状石器(未製品か)1(37) 剥片2、砕片1、石核1がある。石鏃1点(25)がサヌカイト、他は黒曜石製である。全体に風化が進み、石鏃形式から縄文時代早期前葉(松木田式土器段階)頃に比定される。

C 2 🗵

10点出土し、二次調整剥片 1、剥片 7、砕片 1、石核1がある。剥片1点がサヌカイトの他は黒曜石であり、時期の特定は困難だが、風化具合から縄文時代早期と同後期~晩期の資料が混在しているとみられる。

C 3 🗵

7点出土し、石鏃 2、剥片 3、砕片 2 がある。すべて黒曜石であり、石鏃は古段階の鍬形鏃 (14) と 三角鏃 (32) であり、早水台式など縄文時代早期中葉 (押型文土器古段階)の共伴が主体の石器類と みられる。

C 4 🗵

10点出土し、石鏃3(16・24・30) 剥片3、砕片3、石核1がある。砕片1点がサヌカイト製の他は 黒曜石製である。石鏃形態から縄文時代早期後葉(押型文土器新段階~塞ノ神式土器段階)頃に比定 される。

C 5 🗵

32点出土し、台形様石器 1、削器 2、石鏃 5、二次調整剥片 4、剥片 9、砕片 9 がある。石鏃 3 と二次調整剥片 1、剥片 1 点がサヌカイト製で、他は黒曜石製である。このうちCP187~215、M62・80付近で出土した台形様石器 1、削器 1、二次調整剥片 4、剥片 1、砕片 1 などは風化状況や剥離面構成などから後期旧石器時代中葉に比定される。台形様石器 (3) は母核とした盤状剥片のポジバルブを取り込む不整形剥片を素材とし、側縁に面的調整を施す。長さ3.2cm、幅2.2cm、厚さ0.8cmを測る。削器 (4) は自然面を残す厚手の縦長剥片を素材とし、基部折断後に一側縁に刃部を成形している。二次調整剥片 (5~7) は不定形剥片の側縁に抉状の刃部を2~3ヶ所設けている。コンケイブスクレイパーと考える。二次調整剥片 (8) はくさび形石器の側縁に微細剥離が認められる。石鏃などは縄文時代早期前葉~中葉(柏原式~押型文土器古段階)(13・18・35)から同早期後葉(押型文土器新段階~塞ノ神式土器段階)(27・29)頃に比定される。したがって、他の石器類はこの時期に所属する可能性が高い。

D 🗵

6点出土し、石鏃1(22) 二次調整剥片1、剥片4がある。全て黒曜石製である。石鏃形態から縄文時代早期後葉(押型文土器新段階~塞ノ神式土器段階)頃に比定される。したがって、他の石器類はこの時期に所属する可能性が高い。

E 1区

サヌカイト製の剥片1点の出土であり、詳細は不明である。

E 2 🗵

4点出土し、二次調整剥片1(39)剥片3が出土した。すべて黒曜石製である。風化面は浅く、縄文時代後期以降に所属すると推定される。

E 3 区

6点出土し、石鏃1(33) 剥片 4、砕片 1がある。石鏃がサヌカイト製の他は黒曜石製である。このうち剥片2点は打面調整や風化状況から後期旧石器時代に所属するとみられる。縦長剥片(9)は折れてガジリが多いが、背面に先行剥離がある幅広、厚手の剥片である。その他の剥片類は時期不明である。

F区

4点出土し、石鏃2(23・26) 剥片 1、石核 1 がある。全て黒曜石製である。石鏃形態から縄文時代 早期後葉(押型文土器新段階~塞ノ神式土器段階)頃に比定される。

G**⊠**

3点出土し、石鏃1(34) 剥片1、砕片1がある。全て黒曜石製である。石鏃形態から縄文時代早期前葉~同中葉の時期(柏原式土器~大原式土器段階)と推定される。

HX

11点出土し、二次調整剥片 1(43) 剥片 5、砕片 2、石核 2(44・45)がある。二次調整剥片1がサヌカイト製の他は黒曜石製である。このうち剥片(10)は打面調整と作業面調整を施す縦長剥片である。後期旧石器時代に比定される。ほかの石器類は比定が困難だが、多くが後期旧石器~縄文時代早期の範疇と推定される。

その他

出土地点不明であるが、C区の排土より1点の黒曜石製の石鏃(20)が採集された。石鏃形態から縄文時代早期前葉(松木田式土器段階)頃に比定される。

3.まとめ

以上、都地泉水遺跡では19地点から剥片石器類が出土した。もっとも古い段階は後期旧石器時代であり、B2、C5、E3、H区の4地点で出土した。このうちC5区は確実に8点の石器類があり、小規模な遺物集中分布域が存在していたと推定される。またその時期は厳密ではないが、いずれも後期旧石器時代中~後葉にあり、C5区は中葉、B2区は後葉である。なお、隣接する乙石遺跡群と同様に細石刃石器群が認められない。

次に縄文時代の石器群があり、同早期は13地点、同後~晩期は4地点で出土した。早期の石器群のうち石鏃型式などからある程度時期が推定できたのは11地点あり、早期前葉~中葉が7地点、同後葉が6地点ある。何れの地点もまとまった石器群はないが、全体の中で石鏃の比率が高く、遺跡の性格を示していると言えよう。また後~晩期の時期は石鏃が少なく、石核、剥片類が多い。また、鈴桶型石刃技法は認められず、より後出する時期か、異なる性格を考慮する必要があろう。

都地泉水遺跡群は日向川右岸に広がる扇状地の中で扇頂~扇央部に位置し、更新世期の古扇状地が埋没せずに残されている地域にあたる。浸食を受けた扇状地面には樹枝状の浅谷が無数に形成され、まさに泉水からの少量の沢水が室見川方面に流走している。このような地形は南側の浦江、乙石遺跡群と共通し、室見川西岸の飯盛山~西山山麓に広い台地を形成している。福岡地域の花粉分析などからこうした台地上は、後期旧石器時代から縄文時代早期までの後氷期から完新世初期には、低灌木が点在したススキ、ササ類主体の草原であり、やがて縄文時代前期以降になると次第に照葉樹林帯に変化したと推定される。旧石器時代後期から縄文時代早期にはこうした平原が狩猟地として利用されていたと推定されよう。また、縄文時代後期以降の石器群は、この台地上で再び活発な人類活動が始められたことを示しているといえる。

礫石器

礫石器は3点出土している。46は凹石である。結晶片岩製で、背面を欠損する。C2区M55出土。47は今山産玄武岩製の太型蛤刃石斧である。刃部を欠損する。D区M33出土。48は結晶片岩製の磨製石斧である。基部と刃部を欠損する。C区CP20出土。



Fig.149 旧石器時代の石器実測図(1:1)

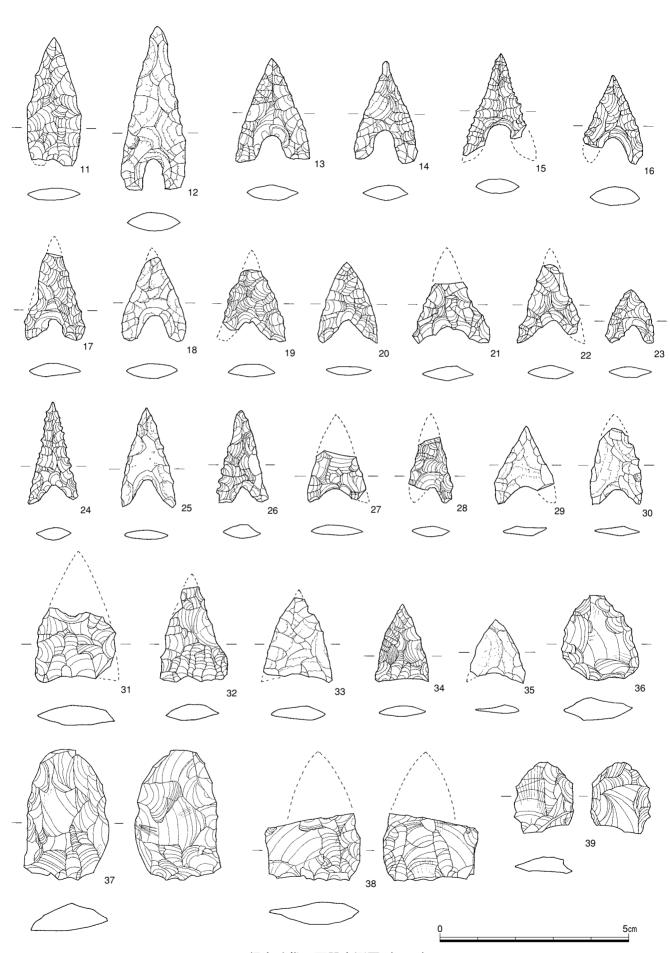


Fig.150 縄文時代の石器実測図(1:1)

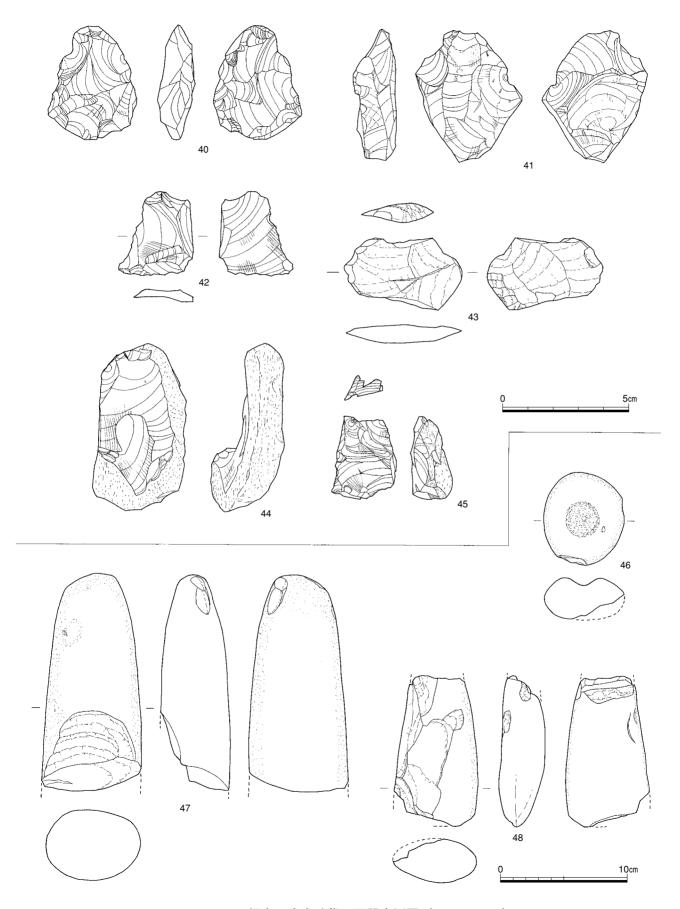


Fig.151 縄文~弥生時代の石器実測図(2:3・1:3)

都地泉水遺跡第1次調査出土剥片石器類一覧表

番号	地区	出土遺構	グリット・地点	出土層位	器種	型式・特徴	石材	風化・表面状況	残存状況	推定時期	実測番号
1	A区	武掘17Tr	フララド・地州		剥片	至八、村政	黒曜石	やや風化	完存	旧石器~縄文早期	大州田与
2	AIX AIX	試掘1/Tr 試掘17Tr		、	剥片 剥片			やや風化	完存 完存	旧石奋~純又早期 旧石器~縄文早期	
3	A区	試掘17Tr		唯居中 際層中	剥片		黒曜石	やや風化	先端欠損	旧石器~縄文早期	
4	A区	武掘1711 試掘17Tr		<u>味度中</u> 礫層中	砕片		黒曜石	やや風化	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	不明	
5	A区	武掘1711 試掘17Tr			砕片			やや風化	破断品	不明	
6	A1区	M112		株信丁	剥片		黒曜石	風化少	先端欠損	縄文後期~弥生	
7	A1区	M91			剥片		黒曜石	風化少	基部欠損	縄文後期~弥生	
8	A1区	M91南	包含層	包含層	石核		黒曜石	風化少	完存	縄文後期	
9	A1区	NIO I ITS	包含層	包含層	石鏃	開脚	黒曜石	やや風化	先端欠損	縄文後期~弥生	21
10	A1区		包含層	包含層	剥片	171319-9	黒曜石	風化少	完存	縄文後期~弥生	
11	A1区		包含層	包含層	剥片		黒曜石	風化少	完存	縄文後期~弥生	
12	A1区		包含層	包含層	微砕片		黒曜石	風化少	破断品	縄文後期~弥生	
13	A1区		包含層2	包含層	石核		黒曜石	風化少	完存	縄文後期~弥生	
14	A1⊠		包含層2	包含層	二次調整剥片		黒曜石	やや風化	完存	縄文後期~弥生	
15	A1区		O LI / LI	検出面	剥片	縦長	黒曜石	風化少	完存	縄文後期	
16	B1⊠		包3		石鏃	三角	黒曜石	やや風化・ガジリ多		縄文早期か?	31
17	B1⊠		包3		石核		黒曜石	風化少・ガジリ多	ほぽ完存	縄文後期~弥生	
18	B1⊠		包3		二次調整剥片		黒曜石	やや風化	ほぽ完存	旧石器~縄文早期	42
19	B1⊠		包3		砕片		黒曜石	やや風化	完存	不明	
20	B1⊠		包4		石鏃	鋸歯・鍬形(古)	黒曜石	やや風化	両脚端欠損	縄文早期中葉	15
21	B1⊠		_	検出面	砕片		黒曜石	やや風化	完存	不明	
27	B2⊠	M64北			砕片		サヌカイト	風化強	ほぽ完存	不明	
28	B2⊠	M83西			剥片		黒曜石	やや風化	完存	縄文後期~弥生	
29	B2⊠	M119		2面	ナイフ形石器	F型	黒曜石	やや風化	ほぽ完存	旧石器	1
30	B2⊠	BP43			石核		水晶	不明	ほぽ完存	不明	
31	B2⊠		包含層	上面検出面	石核		黒曜石	やや風化	ほぽ完存	旧石器~縄文早期	41
32	B2⊠		包含層		砕片		黒曜石	風化少	完存	縄文後期~弥生	
33	B2⊠		包含層		二次調整剥片		黒曜石	やや風化	完存	旧石器	2
34	B2⊠		包含層		剥片		黒曜石	風化少	ほぽ完存	縄文後期~弥生	
35	B2⊠		包含層		剥片		黒曜石	風化少	完存	完存	
36	B2区		包含層		剥片		黒曜石	風化少	完存	縄文後期~弥生	
37	B2⊠		包含層		砕片		黒曜石	やや風化	ほぽ完存	縄文後期~弥生	+
22	B2-2⊠	M127西	20/8		石核		黒曜石	やや風化	ほぽ完存	縄文?	
23	B2-2⊠	BP166			石鏃未製品		黒曜石	やや風化	ほぽ完存	縄文早期前~中葉	38
24	B2-2⊠	BP166			剥片		黒曜石	やや風化	完存	旧石器~縄文早期	
25	B2-2⊠	BP182			剥片		黒曜石	風化少	ほぽ完存	縄文?	
26	B2-2⊠	BP195			砕片		黒曜石	風化少	ほぽ完存	不明	
38	B2⊠	200	包含層		石鏃	鍬形 (新)	サヌカイト	風化強	ほぽ完存	縄文早期後葉	12
39	B3⊠	M136	02/2		石鏃	鋸歯・長身	黒曜石	やや風化		縄文早期後葉~前期前葉	_
40	B3⊠	M136			二次調整剥片	36 m 20	黒曜石	やや風化	半欠損	旧石器~縄文早期	
41	B3⊠	M136			剥片		黒曜石	風化少	完存	縄文後期~弥生	
42	B3⊠	M136			微砕片		黒曜石	風化少	破断品	不明	
43	B3⊠	M137			剥片		黒曜石	風化強	両端欠損	旧石器~縄文早期	
44	B3⊠	M137			微砕片		黒曜石	風化少	破断品	不明	
45	B3⊠	M137			微砕片		黒曜石	風化少	破断品	不明	
46	B3⊠	M137			微砕片		黒曜石	風化少	破断品	不明	_
47	B3⊠	M137			剥片		サヌカイト	風化少	破断品	不明	_
48	B3⊠	BP250			剥片		黒曜石	風化強	ほぽ完存	不明	
49	B3⊠	BP253			微砕片		黒曜石	風化少	完存	不明	_
50	B3⊠	BP266			砕片		サヌカイト	風化強	ほぽ完存	不明	
51	B3⊠	BP268			微砕片		黒曜石	風化少	完存	不明	
52	B3⊠	BP269			石核		サヌカイト	風化強	破断品	縄文早期	_
53	B3⊠	BP269			砕片		黒曜石	風化強	完存	縄文早期	_
54	B3⊠	BP270			剥片		黒曜石	やや風化	ほぽ完存	旧石器~縄文早期	_
55	B3⊠	BP271			剥片		黒曜石	やや風化	完存	縄文後期~弥生	
56	B3⊠	BP272			尖頭状石器	大型石鏃	黒曜石	風化強	ほぽ完存	縄文早期中葉	40
57	B3⊠	BP272			剥片	八里石鏃	黒曜石	やや風化	ほぼ完存	旧石器~縄文早期	40
58	B3⊠	BP272			砕片		黒曜石	風化少	破断品	不明	
59	B3⊠	BP273			剥片			やや風化	ほぽ完存	旧石器~縄文早期	+
60	B3⊠	BP273			砕片		黒曜石	やや風化	ほぼ完存	旧石器~縄文早期	
61	B3⊠	BP273			微砕片		黒曜石	風化少	破断品	縄文後期~弥生	++
62	B3⊠	BP273			微砕片		黒曜石	風化少	破断品	縄文後期~弥生	
63	B3⊠	BP275			剥片			やや風化	先端欠損	縄文後期~弥生	++
64 65	B3⊠ B3⊠	BP276 BP278			剥片 剥片		黒曜石 黒曜石	やや風化 やや風化	完存 先端・基部欠損	縄文後期~弥生 旧石器~縄文早期	\vdash
	B3⊠	BP278 BP279			石核						\vdash
66 67	B3⊠ B3⊠	BP279 BP280			型位核 利片			風化少風化少	完存 完存	縄文後期~弥生 旧石器~縄文早期	\vdash
68	B3⊠	BP280 BP280			剥片		三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三	風化少	元行 ほぽ完存	間	
69	B3⊠	BP280			砂片		黒曜石	風化少	ほぼ完存	神文1変期~55王 不明	\vdash
70	B3⊠	BP280 BP282			石核		<u>悪唯句</u> 黒曜石	風化強・被熱	破断品	# # # # # # # # # # # # # #	_
71	B3⊠	BP283			剥片		黒曜石	風化少	先端欠損	縄文後期~弥生	
72	B3⊠	BP284			剥片			風化少	完存	縄文後期~弥生	_
73	B3⊠	BP284			剥片			風化少	破断品	縄文後期~弥生	_
74	B3⊠	BP285			石核		黒曜石	風化少	完存	縄文後期~弥生	_
75	B3⊠	BP269			石核		サヌカイト	風化中	ほぼ完存	縄文	+
76	B3⊠	BP269			中片 中片		黒曜石	風化強	ほぽ完存	旧石器~縄文早期	\vdash
77	B3区	-: LUJ	Tr1		剥片		黒曜石	やや風化	基部欠損	旧石器~縄文早期	\vdash
78	B3⊠		包含層		二次調整剥片		黒曜石	やや風化	ほぽ完存	縄文後期~弥生	
79	B3⊠		20/8	検出面	石鏃	鍬形 (新)	黒曜石	やや風化・ガジリ	先端欠損	縄文早期後葉	17
80	B3⊠			検出面	石鏃	鍬形 (新)	黒曜石	やや風化	先端・片脚欠損	縄文早期後葉	19
81	B3⊠			検出面	石鏃	五角形	黒曜石	やや風化	ほぽ完存	縄文早期前~中葉	11
82	B3⊠			検出面	石核		黒曜石	やや風化	ほぽ完存	旧石器~縄文早期	
83	B3区			検出面	石核		黒曜石	やや風化	ほぽ完存	旧石器~縄文早期	\vdash
84	B3⊠			検出面	石核		黒曜石	風化少	完存	縄文後期~弥生	
85	B3⊠			検出面	石核	くさび形	黒曜石	風化少	完存	縄文後期~弥生	\vdash
86	B3⊠			検出面	剥片	, , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	黒曜石	風化強	完存	旧石器~縄文早期	\vdash
87	B3⊠			検出面	剥片		黒曜石	風化強	完存	旧石器~縄文早期	+
88	B3⊠			検出面	剥片		黒曜石	風化強	完存	旧石器~縄文早期	\vdash
89	B3⊠			検出面	剥片		黒曜石	やや風化	ほぽ完存	旧石器~縄文早期	
90	B3⊠			快口回 検出面	剥片			風化少	破断品	間	+
91	B3⊠			検出面	剥片		黒曜石 黒曜石	風化少	完存 ほぼ空友	縄文後期~弥生	
92	B3⊠			検出面 検出面	剥片			風化少	ほぼ完存 失端を掲	縄文後期~弥生 旧石器~縄立見期	+
93	B3⊠			検出面	砕片		黒曜石	風化強	先端欠損	旧石器~縄文早期	+
94	B3⊠			検出面 ・	砕片		黒曜石	風化強	ほぽ完存	縄文後期~弥生	+
95	B3⊠			検出面	砕片		黒曜石	やや風化	ほぼ完存	縄文後期~弥生	\perp
96	B3⊠			検出面	微砕片		黒曜石	風化少	破断品	不明	+
97	B4⊠			検出面	砕片		黒曜石	やや風化	ほぼ完存	不明	
^-	C1区	M42			石鏃	未製品か・三角	黒曜石	やや風化	完存	縄文早期	36
98					- ·		p	Fig. 71 375	page a market and	ID 7-80 /m	
98 99 100	C1区 C1区	M42 M42			石核 剥片		黒曜石	風化強 やや風化・ガジリ	ほぽ完存 ほぽ完存	旧石器~縄文早期 旧石器~縄文早期	\vdash

番号	地区	出土遺構	グリット・地点	出土層位	器種	型式・特徴	石材	風化・表面状況	残存状況	推定時期	実測番号
101	C1⊠	M42			砕片		黒曜石	やや風化	ほぽ完存	旧石器~縄文早期	
102	C1⊠	M50			石鏃	鋸歯・V脚	サヌカイト	風化強	完存	縄文早期中葉	25
103	C1区 C1区		包1 包2		尖頭状石器 剥片	石鏃未製品か	黒曜石	風化強 やや風化・ガジリ	完存 ほぽ完存	縄文早期前~中葉 旧石器~縄文早期	37
105	C2区	M57	<u> </u>		砕片		黒曜石	やや風化	破断品	不明	
106	C2⊠	M58			剥片		黒曜石	やや風化	完存	旧石器~縄文早期	
107	C2区 C2区	CP106 CP225			剥片 二次調整剥片		サヌカイト	風化強や風化	完存 ほぽ完存	旧石器~縄文早期 旧石器~縄文早期	
109	C2区	UF223	包含層		-		黒曜石	風化少	完存	縄文後期~弥生	
110	C2区		包含層2北区	1層(暗灰色土)	剥片		黒曜石	風化少	先端欠損	縄文後期~弥生	
111	C2⊠		包含層2南区	1層(暗灰色土)	石核		黒曜石	やや風化	完存	旧石器~縄文早期	
112	C2区 C2区		包含層2南区 包含層2南区	1層(暗灰色土) 1層(暗灰色土)	剥片 剥片		黒曜石	ガジリ有り やや風化	ほぼ完存 完存	縄文後期~弥生 旧石器~縄文早期	
114	C2区		包含層2南区	1層(暗灰色土)	剥片		黒曜石	やや風化	完存	旧石器~縄文早期	
115	C3⊠	M48		,	石鏃	三角	黒曜石	風化強	ほぽ完存	縄文早期前~中葉	32
116	C3区	CP50			微砕片		黒曜石	風化強	破断品	旧石器~縄文早期	
117	C3⊠	CP179		検出面	微砕片 石鏃	鍬形 (古)	黒曜石	やや風化	完存 完存	不明 縄文早期中葉	14
119	C3⊠			地山直上	剥片	91X/12 (H/	黒曜石	やや風化	完存	旧石器~縄文早期	14
120	C3⊠			地山直上	剥片		黒曜石	やや風化	破断品	縄文?	
121	C3区	MEA		地山直上	剥片	纽	黒曜石	やや風化	破断品	縄文?	0.4
122	C4⊠ C4⊠	M51 M79			石鏃 砕片	鋸歯・長身	黒曜石 サヌカイト	やや風化	完存 ほぽ完存	縄文早期後葉~前期前葉 不明	24
124	C4区	CP2			砕片		黒曜石	やや風化	ほぽ完存	縄文後期~弥生	
125	C4⊠	CP124			石鏃	鋸歯	サヌカイト	やや風化	ほぽ完存	縄文早期後葉~前期前葉	30
126	C4区	CP132			剥片		黒曜石	やや風化	完存	旧石器~縄文早期	
127 128	C4区 C4区	CP138 CP141			砕片 石核	船野型?	黒曜石	風化少や風化	完存 完存	縄文後期~弥生 旧石器~縄文早期	
129	C4区	CP164			石鏃	鍬形 (新)	黒曜石	やや風化	片脚欠損	縄文早期後葉	16
130	C4⊠			検出面	剥片		黒曜石	風化少	完存	旧石器~縄文早期	
131	C4区	1400		検出面	剥片		黒曜石	やや風化	基部欠損	縄文後期~弥生	-
132	C5区 C5区	M60 M60			二次調整剥片 二次調整剥片		黒曜石 サヌカイト	風化強や風化	ほぽ完存 ほぽ完存	旧石器 不明	5
134	C5⊠	M604t			剥片		黒曜石	風化強・打面調整	完存	旧石器~縄文早期	
135	C5⊠	M60	石組み		剥片	ATI TEC. () .	サヌカイト	風化中	完存	不明	
136	C5区 C5区	M61 M62			石鏃 台形様石器	数形(古) 枝去木型	黒曜石	やや風化風化強	完存 完存	縄文早期中葉 旧石器(2b期)	13 3
138	C5区	M62			百形像石器 砕片	校太不至	黒曜石	やや風化	破断品	不明	3
139	C5⊠	M62			砕片		黒曜石	やや風化	破断品	不明	
140	C5⊠	M80			二次調整剥片		黒曜石	やや風化	ほぽ完存	縄文?	
141	C5区	M80			剥片 剥片		黒曜石	やや風化	ほぼ完存	縄文?	
142	C5区 C5区	M80 M82			剥片		黒曜石	やや風化	先端欠損 完存	旧石器 旧石器 旧石器 日石器 一	
144	C5⊠	M82			砕片		黒曜石	やや風化	完存	旧石器~縄文早期	
145	C5⊠	M82			石鏃	三角	サヌカイト	風化強	片脚先端欠損	縄文早期前葉	35
146	C5⊠	CP185			微砕片		黒曜石	やや風化	破断品	不明	7
147	C5⊠ C5⊠	CP187 CP197			二次調整剥片 砕片		黒曜石	風化強や風化	先端欠損 破断品	旧石器	
149	C5⊠	CP207(M62)			砕片		黒曜石	風化強・ガジリ多	完存	旧石器	
150	C5⊠	CP211			二次調整剥片		黒曜石	やや風化	完存	旧石器?	8
151	C5区	CP212			石鏃	鍬形	サヌカイト	風化強	先端欠損	縄文早期中葉	18
152 153	C5区 C5区	CP213 CP213			削器 微砕片		黒曜石	風化や風化	ほぽ完存 破断品	旧石器 不明	4
154	C5⊠	CP215			削器		黒曜石	風化強	基部・先端欠損	旧石器	6
155	C5⊠			検出面	石鏃		サヌカイト	風化強	片脚欠損	縄文早期後葉~前期前葉	29
156	C5⊠			検出面	石鏃		黒曜石	やや風化	先・片脚欠損	縄文早期後葉~前期前葉	27
157 158	C5⊠ C5⊠			検出面 検出面	剥片 剥片		黒曜石	やや風化	ほぽ完存 ほぽ完存	旧石器? 縄文?	
159	C5⊠			検出面	剥片		黒曜石	やや風化	ほぽ完存	縄文?	
160	C5⊠			検出面	剥片		黒曜石	やや風化	ほぽ完存	縄文?	
161 162	C5区 C5区			検出面 検出面	剥片 微砕片		黒曜石	やや風化	ほぽ完存 破断品	縄文?	
163	C5⊠			検出面	微砕片		黒曜石	やや風化	破断品	不明	
164	C区			排土採集	石鏃	V脚	黒曜石	風化強	完存	縄文早期中葉	20
165	D区	M33	3⊠		石鏃	鋸歯	黒曜石	風化少		縄文早期後葉~前期前葉	22
166 167	D区 D区	M34 M34	3⊠ 4⊠		剥片 二次調整剥片		黒曜石	やや風化	基部・先端欠損 完存	旧石器~縄文早期 旧石器~縄文早期	
168	D区	M34R19	4157		一人嗣瑩初月 剥片		黒曜石	やや風化	先端欠損	旧石器~縄文早期	
169	D区	DP-1			剥片		黒曜石	やや風化	ほぽ完存	旧石器~縄文早期	
170	D区	DP20	1 1+41×1m41		剥片		黒曜石(粗)	風化少	完存	縄文後期~弥生	
171 172	E1区 E2区	M4北 M15	土坑状撹乱	上層	剥片 二次調整剥片	石鏃未製品か	サヌカイト	風化強風化少	破断品 完存	旧石器~縄文早期 縄文後期~弥生	39
173	E2区	M15		上層	一人調整初月 剥片	日初へい女田小	黒曜石	やや風化・ガジリ有	破断品	旧石器~縄文早期	55
174	E2区	M26			剥片	横長	黒曜石	摩滅強	完存	縄文?	
175	E2区	1407	丰业	攪乱	剥片		黒曜石	風化少	完存	縄文~弥生	200
176 177	E3区	M24 M29	東半		石鏃 剥片		サヌカイト	風化強・ガジリ 風化強	先端欠損 基部・先端欠損	縄文早期前~中葉 旧石器	33 9
178	E3区	M29			剥片		黒曜石	調査時に破壊し主体紛失		旧石器	
179	E3区	EP144			剥片		黒曜石	やや風化	基部・先端欠損	旧石器~縄文早期	
180	E3区	EP151	VE0740-V00700	掛け寄し	砕片	404 EE	黒曜石	風化強	破片 其郊。 生神 欠場	旧石器~縄文早期	
181 182	E3区 F区	M97	X58743•Y63736	地山直上	剥片 剥片	縦長	黒曜石	ガジリ多し 風化	基部・先端欠損 基部のみの破断品	旧石器~縄文早期 旧石器~縄文早期	
183	F⊠	M99			石核		黒曜石(粗)	風化少	完存	縄文後期~弥生	
184	F区			検出面	石鏃	鋸歯・長身	黒曜石	風化少	ほぼ完存	縄文早期後葉~前期前葉	26
185 186	F区	M152		検出面	石鏃 砕片	鋸歯	黒曜石	風化少風化少	完存 基部欠損	縄文早期後葉~前期前葉 縄文?	23
186	G区 G区	M152 M161			剥片		黒曜石	風化少 摩滅	基部欠損基部欠損	縄文?	
188	G⊠			検出面	石鏃	三角	黒曜石	風化少	完存	縄文早期前~中葉	34
189	H区	M199			剥片	縦長	黒曜石	打面調整入念有	先端欠損	旧石器	10
190	H区	M200			砕片		黒曜石	やや風化	基部欠損	旧石器~縄文	
191 192	H区 H区	M200 HP115			砕片 剥片		黒曜石	風化少や風化	破断品 基部のみ	旧石器~縄文 旧石器~縄文早期	
193	H区	HP207			石核		黒曜石	やや風化	ガジリ・傷多し	旧石器~縄文早期	
194	H区			検出面	剥片		黒曜石	風化少	基部欠損	縄文?	
195	H区			検出面	石核		黒曜石	風化少	完存	旧石器~縄文	45
196 197	H区 H区			検出面 検出面	剥片 二次調整剥片		サヌカイト サヌカイト	風化強 風化強	完存 破断品	旧石器~縄文 旧石器~縄文	43
198	H区			排土採集	剥片		黒曜石	風化少	先端欠損	縄文後期~弥生	
199	H区			排土採集	石核		黒曜石	打面にガジリ	ほぽ完存	旧石器~縄文早期	44

3. 小結

以上、都地泉水遺跡1次調査で検出された遺構、出土遺物について報告を行ってきた。調査面積が広大である上、調査区が細かく分割されているため、報告も散漫になり、全容の把握はなかなか困難と思われる。そこで、最後に都地泉水遺跡について総括を行い、問題点をまとめることとしたい。

都地泉水遺跡の性格は、集落遺跡とすることができようが、この遺跡の特徴の一つとして、生活痕跡の希薄さがあげられる。43,000㎡に及ぶ調査面積に対して、出土遺物は80箱程度である(鉄滓を除く)。また遺構も若干集中する個所もあるものの、全体的に見ると散漫であるといえよう。しかし、人口密度が低いこの集落にも、確実に人々の暮らしや営みの跡を看取することができる。

都地泉水遺跡1次調査で検出された遺構は、大きく次の2時期に分かれる。

1期:古墳時代後期~古代(奈良時代)

2期:中世前期(12~13世紀頃)

1期はさらに古墳時代後期と奈良時代の間に断絶があるかもしれない。現在では確実に7世紀に属する遺構が確認できていないからである。しかし前述のように遺物が希薄な状況では断定するにいたらない。一応大きなくくりとして1期を設定しておくが、記述の都合上古墳時代と奈良時代に分けて述べる。

古墳時代の遺構としては竪穴住居があげられる。A区住居跡91、E区住居跡24がこの時期に属する。C5区住居跡61、62も出土遺物が少なく、また幅があるもののこの時期に属する可能性が高い。C5区掘立柱建物8、10は住居跡とほぼ軸を同じくしており、同時期の可能性もある。またB2区2面で検出した不定形の土壙群、C1区の土壙42、D区土壙33、34、H区土壙198等もこの時期に属する遺構である。住居跡、倉庫と廃棄土壙からなる小規模な集落を想定できる。この時期には飯盛山麓の古墳群では鉄滓供献が多く見られる。都地泉水の古墳時代集落もこうした古墳群の造営主体の一つである可能性もあるが、古墳時代にさかのぼる製鉄遺構は検出されなかった。ただし古代に広く展開する製鉄遺構群の技術的先駆として、その存在は十分予想される。今回調査発見の製鉄遺構にも時期の不明なものもあり、可能性が残されている。

古代(主に奈良時代)の主要遺構としては、製鉄関連遺構と掘立柱建物があげられよう。製鉄遺構はC3区で1基(製鉄遺構44) E区で1基(同13) G区で1基(同169) H区で5基(同171、178、179、181、182)と、計8基検出された。鍛冶関連遺構はB2区(遺構83他) G区(鍛冶炉140他)で検出された。製鉄遺構はいずれも谷に面した南東斜面に築かれている。付属する炭窯と考えられる焼土壙も、製鉄遺構よりは分布が広いが、概ね製鉄遺構を検出した調査区に集中する傾向は認めてよかろう。これら古代の製鉄関連遺構群は都地泉水遺跡で最も特徴的な遺構ではあるが、やはりその数や密度は散漫の感を免れない。G区、H区ではやや集中する傾向は看取できるが、その他の地区では1基づつの分布である。

また製鉄を行う工人の生活痕跡についても希薄である。古代に属する竪穴住居は確認されていないし、須恵器、土師器など生活遺物も多くはなく、きわめて生活感に乏しい。その中で製鉄遺構群に関連する遺構としては、前述の通り各地区に散在する掘立柱建物があげられる。比較的多くの掘立柱建物が確認されたH区を例にとると、H区では床面積15㎡以下の総柱建物、20㎡以上の比較的大形の総柱建物、30㎡を超える側柱建物が検出されている。この他の地区では20㎡以下の側柱建物、15㎡以下の総柱建物などが主流であり、大形側柱(30㎡以上)、小形側柱(25㎡以下)、小形総柱(15㎡以下)

大形総柱(20㎡以上)程度に分けることができる。強いてその性格を推定するならば、小形建物が工人の住居、大形総柱建物が工具、もしくは製品の倉庫、大形側柱建物が、やや公的な性格を持つ建物などに当てることも可能であろうか。隣接する都地遺跡ではこの上位に位置づけられる大形建物、官衙的配置の超大形建物も検出されており、製鉄工房管理のための建物の機能的分化が行われている可能性が高い。H区で出土した刻書土器は、郷名が記されたものであり、類例は牛頸窯跡群にある。出土した地域とは異なった地名が記されたこの土器も牛頸産とすれば、大宰府へ貢納されたものが再配布された可能性もある。都地遺跡の官衙については来年度詳細を報告するが、このような諸例から、金武地区周辺の製鉄には、背後に律令政権の関わりが見え隠れしている。この点については来年予定している最終年度報告書までにさらに検討を期したい。

2基は中世の遺構である。A区、F区に密に集中し、B区、C区にも遺構が見られる。主な遺構は墓、 土壙、ピットである。本文中でもふれたように中世遺構の中心はF区北半部から東側の既存建物の下 と考えられる。この範囲にはきわめて多くの柱穴が集中しており、何時期かにわたる建物群を形成し ていたものと考えられる。従って中世集落は日向川に面して営まれていたと考えられる。墓はA区とF 区で検出されているが、墓が営まれた地域は集落の縁辺部に当たる個所であろう。

以上各時代の遺構、遺物について簡単に総括してきた。圃場整備事業に関わる報告書は来年度が最終となる。圃場整備事業地内調査遺跡の総括や、周辺遺跡との関係等は来年を期したい。

図 版

Plates



1. 調査区全景



2. A区全景



1. B2区1面全景



2. B2区2面、B1区全景



1. C区全景



2. D区全景



1. E区全景



2. F区全景



1. G区全景



2. H区全景



1. A1区土壙墓81, 82(東から)

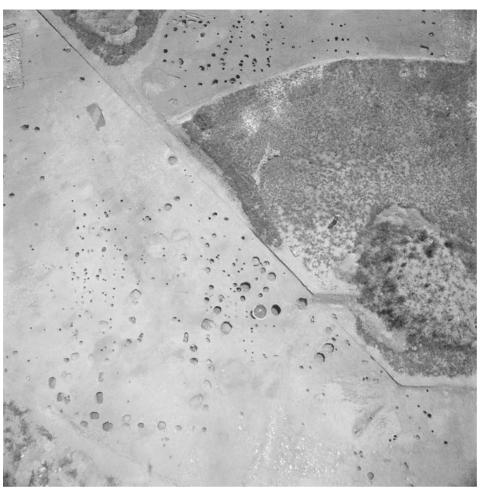


2. A1区石積遺構80(西から)



1. B2区1面 遺構83遺物出土状況(西から)

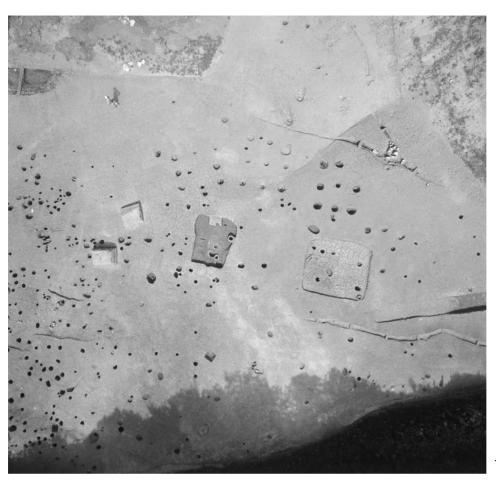




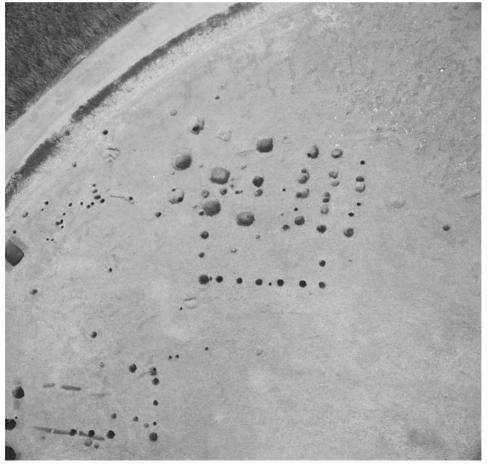
1. C2区土壙群



2. C3区製鉄遺構44(南から)



1. C5区住居跡・掘立柱建物

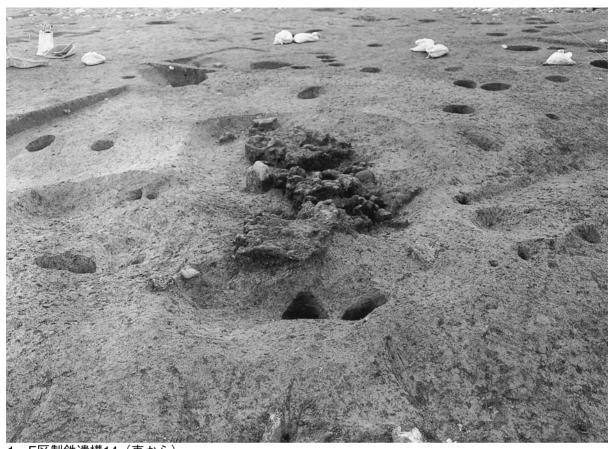


2. D区掘立柱建物



1. D区土壙33 (北から)





1. E区製鉄遺構14(東から)



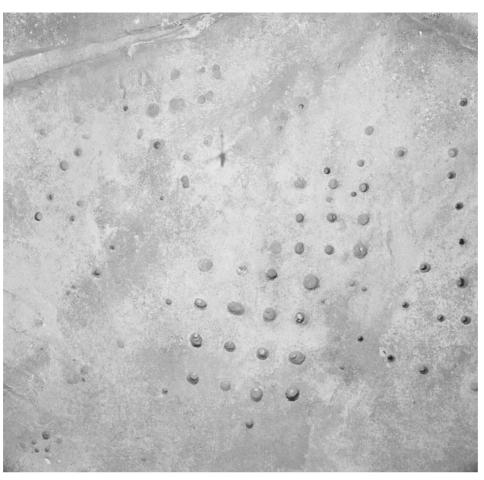
2. E区住居跡24 (東から)



1. G区鍛治遺構群(北から)



2. G区鍛治炉140断面(北から)



1. H区掘立柱建物13, 14



2. H区製鉄炉179(北から)



1. H区土壙173(南から)



2. H区出土刻書須恵器

報告書抄録

ふりがな	かなたけ										
書名	金武4 - 金武地区農村振興総合整備統合補助事業関係調査報告 -										
副書名	城田遺跡第2次調査 3·都地泉水遺跡第1次調査										
巻 次	4										
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財報告書										
シリーズ番号	927										
編著者	吉留秀敏、阿部泰之、宮井善朗、田上勇一郎										
編集機関	福岡市教育委員会										
所在地	福岡市中央区天神1 - 8 - 1										
発行年月日	2007年3月30日										
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経		· 本 # # # # # # # # # # # # # # # # # #	調査面積			
所収遺跡名	所在地	市町村	市町村 遺跡番号		0		調査期間	m²	調査原因		
じょうたいせき	にしく おお おざ かなたけ 西区大字金武 おざじょうた 字城田	40135	0443	33 °	130	0	2002 5 .08		圃場整備 圃場整備 区画整理		
城田遺跡				31	18		\$	16927 m²			
	3 7% 14			35	56	-	2004 .1 .31				
と じせんすい いせき	にしく まま まざょしたけ 西区大字吉武		0420	33 °	130	0	2004 .11 .25				
都地泉水遺跡		40135		31 53	18 40		2007 7 24	43000 m ²			
				<u> </u>		2007 .7 .31			<u> </u>		
所収遺跡名	種別	1	は時代	主な遺構		主な遺物			特記事項		
城田遺跡	散布地 + 集落 + 生 産遺跡 + 祭祀遺跡	縄文/弥生/古墳/古代/		竪穴住居 + 掘立柱 建物 + 製鉄遺構 + 神社跡 + 水路		石器+鉄器+縄文 土器+弥生土器+ 須恵器+土師器+ 陶磁器+鉄滓+新 羅土器			古代のコの字配列の 建物群、基壇を持つ 神社跡		
都地泉水遺跡	散布地 + 集落 + 生 産遺跡 + 墓地	縄文/古墳/古代 /中世		竪穴住居 + 掘立柱 建物 + 製鉄遺構 + 中世墓		師器	+ 須恵器 + 土 + 海磁器 + 鉄 湖州鏡		古代の製鉄遺構群と 付随する建物		

福岡市埋蔵文化財調査報告書第927集

金 武 4

金武地区農村振興総合整備統合補助事業関係調査報告 4 城田遺跡第 2 次調査 3・都地泉水遺跡第 1 次調査

平成19年3月30日

発行 福岡市教育委員会 福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷石橋印刷株式会社

福岡市博多区東比恵 3 丁目21番10号